



姨捨山

町役太郎

絶望

1

擦り切れ糸が見える畳の上を、焦げ茶色の平べったい虫が凄い速さで這いずっていく。カサカサと実際にはそんな音は聞こえないはずなのに、音が聞こえるように這いずっていくのが不思議に思えた。週刊誌を手に取り、その虫めがけ叩きつけようとした。すると虫の動きが一瞬止まった。まるで背中に目があるかのように此方を見た。いや見たような気がした。お願いだから殺さないでとでも訴えるように、虫の背中が何かを語りかけているような感じがした。なぜ虫ごときを殺すのに躊躇うのか。その考えを打ち消すように週刊誌を丸め力一杯叩きつけた。週刊誌を畳から持ち上げると、そこにはクリーム色の内臓が飛び出た虫の死骸があった。ふとそれが明日の我が身を見ているように感じた。

世の中には不必要なものが沢山ある。ゴキブリ、蠅、ダニ、所謂虫けら。そう自分は虫けらかもしれない。ゴミ溜めの中に生まれ、ゴミ溜めの中で死んでいく。それも一つの人生に違いない。

その日の朝はいつもと少しばかり違っていた。コンクリートの上にペンキだけ塗った白い壁には、結露でできたと思われる蛙のイボのような水滴が沢山付着していた。窓にはクリーム色のアクリル板が目隠しのため張ってあるので、外の様子を此方から窺うことができない。時計がないので正確には分からないが、いつもは起床の一時間前には自然に目が覚め、起床の放送が流れるまで、横になりながら薄暗い部屋の中で本を読むのを習慣としていた。しかし今日に限って、起床の放送が流れるまで目が覚めなかった。

昨日は屋外運動でいつになく激しい運動をしたおかげで、身体の節々が痛みその疲れもあり、起床まで熟睡できたのかとも思ったが、どうやら理由はそれだけではなさそうだ。部屋全体の空気の重さともいおうか、何か言い知れない胸騒ぎを覚えた。今日の朝はやはりいつもと何かが違う。畳の冷たさがもろに背中に伝わってくるような、薄い布団の上に横になっていた鬼頭正志は、ゆっくりと上体を起こし、布団の上に胡座をかいた。そのとき丁度通り掛かった夜間勤務の看守が、居室内の蛍光灯を小灯から大灯に切り替え（刑務所や拘置所などの行刑施設では、夜間被収容者の自殺や逃走を防止するため、夜間でも蛍光灯を点けている）ていった。

〈自分の頭の中に、大きな鷲がゆっくりと旋回しながら降りてきた〉

この狭い空間に閉じ込められ、今日で十三年と二五三日になる。

鬼頭は連続婦女暴行殺人の罪で、この関東拘置所に死刑囚として収監されていた。上告が棄却され死刑が確定すると、朝を迎えるのが非常に辛い。不治の病を抱えた患者よりも、死というものが確実に迫ってくる。死ぬことに対してまったく恐怖を感じないといえば嘘になるが、他人に恨まれて殺されるなら兎も角、国家によって自分の命が葬られることには承服しかねる。何の恨みも持っていない者に殺されたくはない。そんな思いで今日まで生きてきた。殺す方も職務とはいえ、何の恨みもない者を簡単に殺せるものではなかろう。せめて自分に対して恨みや憎しみをもってくれれば、死ぬほうとしても随分と気持ちが楽になるのだが。

外から僅かに入る朝日を浴びゆっくり立ち上がると、大きく伸びをし胸いっぱい冷たい外気を吸い込んだ。いつものように洗面を済ませ部屋の掃除をすると、朝食まで少し時間があるので本を

読むことにした。ここに来て何冊の本を読んだのだろう。本を読み始めると、果してこの本を最後まで読みきることができるのかとつい考えてしまう。なぜなら死刑囚は突然予告もなしに死の宣告を受けるからだ。

娑婆にいるときは、新聞でさえ読んだことがなかったのに。娑婆ではすべての情報をテレビだけに頼っていたが、ここは映画を観るためのモニターとしてのテレビはあるが、情報を得るための媒体としては、ラジオか新聞に頼るしかなかった。兎に角ここにいるとすることがない。毎日暇で一日がとても長く感じる。

同じ死刑囚の中には自分の裁判記録をすべて取り寄せ、隅から隅まで目を通す者も少なくない。しかし今更自分の犯した罪を見直したところで、屠殺場で食肉になる牛や豚のように、死刑判決が覆されることはありえないだろう。

第一審で死刑判決を受けると、日本に最初にやって来たパンダやコアラと一緒に、最初は物珍しさもあって、それこそ色々な人が自分に会いにやって来た。雑誌の記者、宗教家、支援団体、野次馬、その中に自分の知り合いは一人として来なかった。此方に移ってからは、母ですら一度も面会に来ていない。それでも面会に来る人たちは必ず本や、衣類などを差し入れてくれた。本は自分で買うこともできたが、殆どの場合差し入れ本で用が足りた。

本を読むことに集中していると点検の号令が掛かり、看守が一人一人称呼番号と顔を確認していく。その後舎房担当（行刑施設では刑務所の工場には工場担当。拘置所の舎房には舎房担当がいて、何れもベテランの刑務官が職務に当たっている）が台車を引き、願いごとを訊きにきた。拘置所は朝、舎房担当が一つ一つの居室を回り願いごとを訊く。願いごとの内容は診察、領置（自分が今持っている物を官に預けること）仮出し（官に預けている物を自分の手元に置くこと）宅下げ（自分が使用している物や官に預けている物を、親族や知人に家に持ち帰ってもらうこと）発信（手紙を出すこと）である。

「おはよう。何か願いごとはあるか？」

いつものように無愛想な担当が訊いてきた。

「今日はありません」

担当が行くと直ぐ舎房掃夫（舎房の掃除や配食などの雑用を行なう懲役受刑者）が朝食を持ってくる。朝食は美味くもなく、不味くもなく、ただ腹に納めるだけだった。食事を終わると再び本を読み始めた。僅か畳三枚のこの狭い空間が、鬼頭にとってすべての生活空間である。死ぬまでこの空間から抜け出すことができない。

ここは運動場に行っても、面会所に行っても、すべての空間が四角く切り取られ、自由に広がる空間はどこにも存在しない。行刑施設は殆どの場合高い塀で囲まれている。その塀は単に中にいる犯罪者を、外に逃がさないために存在しているのではない。中に収容されている者の夢と希望、外への未練をすべて遮断するために存在する。この中にいると喜び、苦しみ、悲しみ、そんな人が当然持ち合わせている感情でさえ無意味に思えてくる。しかしこの関東拘置所には従来あるはずの外塀が存在しなかった。クリーム色の高層建築物は一見すると、マンションかホテルにしか見えない。外塀のない建物は完全に街に溶け込んでいた。

本を読んでいるときだけ、ここが拘置所であることを忘れさせてくれる。架空の世界を彷徨って

いると、複数の靴音が耳に飛び込んできた。このようなところに何年も収監させられていると、靴音で人の判別がつくようになってくる。歩き方は人それぞれ特徴があり、靴音だけでその人の体格まで分かる。巡回方法も様々で、時間どおりきちっと巡回する者もあれば、ランダムで巡回する者もある。また靴の種類でも音が違ってくる。

鬼頭は慌てて聖書の背表紙に隠してある三角形の金属片を取り出し、ハンカチを巻いて右手に持った。この三角形の金属片は、購入品である缶詰の蓋を加工して作ったものだ。二枚重ねにし強度を持たせている。缶詰が廃止され、購入品がすべてレトルトに変更になったのは、つい最近のことである。

複数の靴音が聞こえてくると、いつも同じ行動をとってしまう。舎房担当の靴は運動靴、面会連行も運動靴。運動靴の足音は軽く静かだった。一方警備隊が履く靴は半長靴で重く硬い靴音とする。複数の靴音は死刑囚の神経を逆立てる重く硬い靴音だった。今日に間違いない。とうとうこの日が来た。朝重く硬い靴音を聞くと、何度となく聖書の中に隠してある金属片を取り出す。そして違っているとまた元に戻した。そんなことをもう三年以上も繰り返している。いつになったら自分のところに来るのか、見当がつかない分イライラが募った。遅かれ早かれ自分が死ぬのは間違いない。それは太陽が沈み、やがて夜が来る如く、絶対変わる事のない事実だが、しかしそれが自分の行った不正行為によって、自らの命を縮めなければならないことを、素直に受け止めることなどできそうもなかった。

靴音は自分の居室前で止まった。鍵と鍵が擦れあう金属の音を響かせ、看守が鍵穴に本錠（舎房居室の扉を開ける鍵で、普通の鍵より大きく重い）を差し込むと、ガチャンというロックが外れる音がした。内側に取手がないオフホワイトの鉄の扉が開かれると、扉の向こうに屈強な男が三人立っていた。帽子の鍔の下から鋭い眼光が此方を直視している。

「とうとうお出迎えですか？」

鬼頭は皮肉を込め看守に伺った。

「まあいい。出て来い」

一番手前の看守が無愛想に話を濁そうとしたが、今から執行するという事実を払拭することはできない。今日に間違いない。確信めいたものを感じた。それにしても人が最期を向えるときぐらい、どうしてもっと愛想よく対応できないものか。こいつらは何年経っても人間的優しさが無い。鬼頭は金属片を相手に見られないように右手を腰の後ろに隠し、居室備え付け便器の配管下に置いてある草履を持った。

掃夫によって綺麗に磨かれた廊下に草履を静かに置くと、右手に持っていた金属片を力任せに、一番前にいる看守の喉に突き刺した。金属片は何の抵抗もなく、吸い込まれるように喉に食い込んでいく。何年ぶりかに人を刺したときの、あの何ともいえない感触が蘇ってきた。喉に刺した金属片を強く横に引くと、金属片は肉を引きちぎり外に顔を出す。その瞬間噴水のように血が噴き出した。人の温もりがある血が、鬼頭の顔を赤く染めた。首を切られた看守が前のめりに倒れると、他の看守は今何が起きたのか理解できないように、そこに呆然と立ち尽くしている。時間にして一秒か二秒しか経っていないにも拘らず、鬼頭にはそれがとても長い時間のように感じられた。

隣の居室前にいた看守が慌てて非常ベル（行刑施設は被収容者の逃走、暴行、自殺が発生した

際に、職員が直ぐに駆けつけられるように、あらゆる場所に非常ベルが設置してある)を押した。首を切られた看守の後ろにいた看守が、すかさず鬼頭の前に歩み寄り、胸倉と右腕の袖を掴まえると、大外刈りで床に叩きつけた。受け身のとれない鬼頭は、後頭部を床に強打した。床がコンクリートでなく畳だったことは、鬼頭にとって幸運だったかもしれない。意識が朦朧としている中、うつ伏せにされ、後ろ手に手錠をかけられ、足も紐で縛られた。血糊でべとべとになった畳に、顔面を強く押さえつけられた。鼻に激痛が走り口の中に鉄錆の味が広がる。ふと自分が踏み潰したゴキブリの姿が頭を掠めた。そう自分は虫けらなんだ。虫けらには虫けららしい死に方がある。

「貴様」頭上から罵声を浴びせられ脇腹を蹴られた。後頭部を半長靴で踏まれていたので、唾を飲み込むことすらできない。そうこうしているうちに沢山の看守が飛び込んで来た。鬼頭は布団に簀巻きにされると、看守に担がれ、そのまま刑場へと運ばれて行った。

2

簀巻きにされた鬼頭は、警備隊に担がれエレベーターに乗せられた。古代人が神に生贄を捧げるように担がれた鬼頭は、意識があるのか芋虫のように身体をくねらせている。エレベーターはゆっくり降下し刑場のある地下三階で止まった。エレベーターの扉が開くと小さなホールがある。この場所には三基のエレベーターしか降りられないため、随分と狭いエレベーターホールだった。一年に一回使われるか使われないかの、このホールはすべてが重苦しく黴臭い。三基のエレベーターがある真中のエレベーター前に、大きな鉄の扉があり、そこは既に開けられていた。

担がれた鬼頭は仏壇や十字架が掲げている礼拝堂を通り抜け、木製扉の奥にある階段を上った。礼拝堂はどんな宗教でも対応できるように、祭壇の部分がスライド式になっている。階段を上りきるとアコーディオンカーテンがあり、そこを開けると天井から滑車を伝わり、太いロープが下がっている。床は羽目板になっており、真中から二つに割れ床が抜ける仕掛けになっていた。床下には棺桶が用意され正面はガラス張りになって、検事は既にそこに待機していた。水族館で行なわれる水中ショーでも観るように、一番前の席に陣取り、死刑囚が吊るされるのを今かと待ちわびている。鬼頭は最後の晩餐を過ごすこともなく、遺言を書くこともなく、そのまま刑場に運ばれた。

刑場には既にスーツ姿の所長が待機していた。通常であれば礼拝堂横にある通称お別れの間で、厳かに執行の言い渡しを受けるのだが、今朝鬼頭が暴れたため刑場で直接言い渡しを受けることになった。

所長の前で簀巻きを解かれると、鬼頭は後ろに手錠を掛けられたまま、警備隊に両脇を抱えられ強制的にその場に立たされた。顎の線が細くビー玉のような目をした鬼頭の顔は、返り血で赤鬼のような形相をしていたが、暴れることなく所長の目をじっと見据え、何か思い詰めたような表情をしていた。

「誠に残念ですが、今日で君とも御別れすることになりました。本日只今より刑を執行します。鬼頭君最後に何か言っておきたいこと、誰かに伝えたいことがありますか？」

所長はこれだけは職務といわんばかりに、事務的に執行の言い渡しを行った。

「所長さん、先にあの世に逝って、あんたの来るのを待っているよ」

鬼頭はそれだけを言うと不敵に笑った。所長は困惑顔を隠せず自分の仕事を済ませると、向きを変えそそくさと奥の扉へ消えていった。

一人の看守がポケットから白い布袋を取り出すと、それを鬼頭の頭に被せた。それはすべての終わりであり、すべての始まりでもあった。

弟

1

昭和五十年、二月になると西の姨捨山も、家のすぐ横にある東山も、雪が積もり真っ白になる。市の中心を流れる千曲川は、夏より狭い川幅になっていた。空は鉛色で雪もぱらぱら舞っていたが、子供にとってそれは家に留まる理由にはならない。鬼頭正志の家は東山の直ぐ麓にあり、雪が降ると必ず橇を引いて山に向かった。

信州でも新潟の県境と違い、更埴市は雪が降っても、膝が埋まる程度にしか雪は積もらない。大人にとって迷惑な雪も、子供にとっては掛け替えのない遊び道具だった。

小学校五年生の正志は学校から帰ると、スキー用のウェアに着替え、御勝手の冷蔵庫にあるチョコレート、ポケットにねじ込み家を出た。自分で作った橇を引き、直ぐ近くの東山に向かう。正志の家は二階建ての市営住宅で、県道と信越本線のちょうど中間に位置し、家の周りは田圃しかなかった。家の前から県道までは、朝早く母、多恵が雪掻きをしていたので、土と雪が混じり白い紙に線を引いたように黒い筋がついていた。

正志が小学校四年生まで住んでいた、温泉街に近い平屋建ての市営住宅には、正志の同窓生も何人が在住しており、隣には大工の父親を持つ同窓生が住んでいた。その家にはあらゆる大工道具が揃っていて、日曜日になると近くの建設現場から、木の切れ端を貰ってきては色々な物を作ってくれた。正志も見様見真似で色々な物を作った。その中に今使っている橇もある。友達のいない正志にとって、橇は冬の唯一の遊び道具だった。

自宅前の田圃を横切り線路を渡った頃、二つ年下の弟、忠志が母親に作ってもらった橇を引いて追い掛けてきた。正志が橇を作っているのを見た多恵が、忠志のも作ってくれるように頼んだが、正志は決して首を縦に振らなかった。多恵は仕方なく近所の農家から、と米が三十キロも入りそうな肥料袋を貰ってきて、子供時代自分が遊んだという、てるてる坊主のような形をした橇を作ってやった。これが見かけによらずよく滑る。忠志が乗るとバランスが悪く直ぐに引っ繰り返ってしまうのだが、正志が乗ると自分が精魂こめて作った橇よりも、早いのではないかと感じるほどよく滑った。

正志の橇は秋のお手伝い休み（この地方は田植えと稲刈りの季節に一週間ほど休みがある。昔この地方は農家が殆ど占めていたため、今でもその名残があった）丸二日かけて作った。それがビニール袋に藁を入れ、口を紐で縛っただけの橇が、こんなにも早いとは正直ビックリした。

忠志はコーデュロイのズボンに黄色の長靴を履き、ちゃんちゃんこを羽織り、家を飛び出してきた。兄に置いていかれるのを恐れたのか、帽子も被らず慌てて家を飛び出してきたようだ。

忠志はどこへ行くにも正志の後をついて来る。そんな弟を正志は少しも可愛いと思ったことがない。弟は自分が一番母親にあまえたいとき、この世に生を享けた。自分の一番大事なものを、一番大切な時間を奪ったのはこの小さな弟である。

山の麓にさしかかると、雪も本降りになってきた。東山は学校でも理科の時間や道德の時間に、クラス単位で散策に出ることがある。学校から山頂まで行って帰ってきても二時間の行程だ

った。正志は春にどこに蕨が生え、秋にどこに茸が生えるのか、山のあらゆるところを熟知していた。東山の東の部分は一部松茸山になっていて、立ち入り禁止のロープが張ってあるくらい、山菜には恵まれた山だった。三十分ほど山を登っていくと、雪は益々強く降ってきた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

最初のうちは黙って後ろからついて来た忠志も、不安なのかしきりに声を掛けてくる。登りの雪道は足が重く、幼い忠志にはかなりきつかったであろう。真冬にも拘らず三十分歩き詰めで、背中汗でびっしょり濡れていた。

「お兄ちゃん、もう滑ろうよ」

後ろから大きな声で忠志が叫んでいる。

「俺はまだ上まで行く。嫌ならお前一人で帰れ」兄は弟に冷たく言い放った。どんなに冷たく言い放っても、忠志が自分について来るのは分かっていた。山に入ったら頼れるのは兄である自分しかない。

今まではただひたすら山を登ってきたのだが、今度は山道を外れ林の中を歩いて行く。正志は忠志が自分から逸れないようにゆっくりと歩いて行った。それは決して兄としての優しさではなく、ある残酷な計画のためで。

雪は二人の足跡を消し、山の麓の線路を走る電車の音も、まったく聞こえなくなっていた。正志は足を止め後ろを振り返ると、忠志の帽子を被っていない頭に雪が積もり、唇は薄っすら紫色に変色していた。正志は今からこの小さな弟を、雪山に放置していこうとしている。何も知らない忠志は、澄んだ黒い瞳で此方を見ていた。その瞳の美しさに一瞬胸が痛くなった。

スキー用のウェアと帽子、スノーブーツを履いた正志に対して、忠志の出で立ちは手袋を嵌め、ちゃんちゃんここそ着ているものの、家からそのまま飛び出してきたような格好で、雪山を長時間歩ける格好ではなかった。

それからどのくらい歩いたのだろう。日が落ち、辺りはすっかり暗くなっていた。後ろには忠志の姿はもうない。東山は正志にとってたとえ雪が降っていても、どこを歩いてどう行けば家に帰れるか熟知していたが、忠志が自分独りで家に帰り着けないことは、正志が一番よく分かっていた。

正志は小島神社から將軍塚に抜ける山道の途中にある、小さな洞窟に雪と寒さを凌ぐために入った。洞窟は大人が三人入れるほどの広さで、穴の内側は城壁のように石が積み上げてあった。洞窟は古代の人が造ったのか、現代の人が造ったのか定かではないが、かなり堅牢に造ってあり、この近辺の子供たちの格好の遊び場になっている。子供たちが造るかまくらなどより奥行きがあり、吹雪を一晩やり過ごすには十分な広さであった。

正志は今日ここに来ることを、だいぶ前から計画していた。石垣の隙間には、鯛や焼き鳥の缶詰を予め隠しておいた。腹が減ったらこれを食べ、あとは朝まで待つて山を下りればいい。

正志にとって忠志は単に邪魔な存在というだけではなかった。自分でもよく分からないが、忠志にある種の嫉妬を感じていたのは間違いない。忠志はその素直な性格から、親はもとより周りのあらゆる人たちから好かれていた。少なくとも正志の目にはそのように映った。忠志はこの世からいなくなればいい。そして正志は吹雪の中に弟を置き去りにして今ここにいる。忠志はもうこ

の世にいないのかもしれない。いなくても一向に構わない。寧ろいなくなってくれたほうがいい。

洞窟の中で缶詰を食べながら朝が来るのを待った。家から持ってきた小型の懐中電灯は、朝方電池がなくなった。中は寒くなかったが、夜が明けても眠ることができなかった。洞窟の中まで陽射しが届くと正志は外に出てみた。昨日の吹雪が嘘のように、日差しが雪に反射して眩しいくらいだ。山の上から町を見下ろすと、真っ白な大地に大蛇が這うように千曲川が流れている。その千曲川の上に姨捨山が見えた。武士が被る烏帽子みたいな形をしたその山は、西山では一際目立っていた。この地方には不思議な伝説があり、姨捨山伝説も道德の教科書に掲載されていた。その物語は家族の愛情を知らない正志にとって、鬱陶しいだけの話しであったが、一度聞くと決して忘れない妙な話だった。

{昔々、領主が年寄りが嫌いだったため、還暦になった老婆は、山に捨てるようにという御触れを出した。領主の命令は絶対で、誰もがそれに従うしかなかった。その中であって、ある男が自分の母親を背負って山に捨てに行った。その山に行く途中母親は息子の背中で、帰り道息子が道に迷わないように木の枝を折って目印をつけていった。この母親の優しさに胸を打たれた息子は、母を連れ山を下りた。家の床下に穴を掘って母親をそこに匿った。

暫くして隣の領主が難題を吹っ掛けてきた。これに答えられないと戦を起し領土を奪ってしまうと脅された。先ず初めに出された問題は《灰で縄を結いなさい》というものだった。困り果てた領主は誰かこの問題を解ける知恵者はいないかと、御触れを出した。それを目にした男が、母親のところに行き相談すると《塩水に浸した縄を結って焼けばいい》と母親は教えてくれた。

男は母親に教えられたとおりに、灰の縄を作り領主に差し出した。しかし隣の領主は納得せずまたも難題を吹っ掛けてきた。それは《曲がりくねった細い筒に糸を通せ》というものだった。またも男は母親に相談した。母親は《一つの穴の端に蜜を置き、もう一つの穴から糸を付けた蟻を這わせなさい》と教えてくれた。それも領主に伝えた。しかし尚も隣の領主は難題を吹っ掛けてきた。今度は《叩かなくても鳴る太鼓》というものだった。それも男は母親に訊き、太鼓の中に蜂を入れ領主のところに行って行った。

隣の領主はこんな知恵者がいる国に攻めても勝算はないと思い、攻め込むのを諦めた。領主はたいそう喜び男を自分の下に呼びよせ、何でも望むものを褒美に取らずぞと言ったが、男は褒美は要りません。これを教えてくれたのは、おらの御袋です。と打ち明けた。領主は自らの行為を反省し、それからは年寄りを大切にするようになった}

自分を捨てにいかせるお触れを出した領主に、何でわざわざ知恵を授けたのか、正志には到底理解できるものではなかった。

洞窟の中を片付けるとゆっくり山を下りた。家の前まで行くと、市営住宅前にパトカーが一台止まっていた。おそらく多恵は子供たちが帰らないことを心配して、警察を呼んだに違いない。少しも悲しくなかったが、泣きながら家に入って行った。

昨夜のうちに地元の消防団が搜索したが、正志たちを見つけることができなかったようだ。警察官は正志から昨日の状況を訊きだすと、再び消防団と警察官を山に送った。その間正志は深い眠りに就いていた。

忠志は夕方、船のような櫓に乗せられ、冷たい身体で帰って来た。多恵は忠志の遺体にしがみつ

き泣き崩れた。そして何を思ったのか、忠志の服を脱がせ抱き上げると、熱い風呂に入れてあげた。「忠志寒かっただろう……」多恵は風呂桶の外から、物言わぬ我が子にひたすら話し掛けていた。

父は一年前に女を作り、家を出ていったきり二度と帰って来なかった。ここまで母一人で兄弟を育ててくれた。このとき初めて気丈だった多恵が、涙するのを正志は目にした。

忠志は完全に雪に埋もれていた。正志の助言がなければ、到底忠志を見つけ出すことはできなかったであろう。警察は正志に忠志と逸れてしまった状況を色々質問してきたが、弟を不幸な事故で亡くした兄ということで、少しも正志を疑うことはなかった。消防団も、学校の先生も、生徒も、忠志の死に疑いを持つものはいなかった。ただ一人多恵を除いては。

忠志が冷たい身体で帰って来た日、多恵は正志を忠志の遺体の前に座らせた。多恵が忠志の顔にかかっている白い布を取ると、正志の方に身体を向けた。

「正志、忠志の顔を見てやりなさい」

正志は本当のところ忠志の顔など見たくなかった。このような状況になることは予想していたものの、流石に忠志の顔を直視するのは怖かった。なぜ忠志を雪の中に置き去りにしてきたのか、多恵はすべてを知っている。そう正志は確信した。それでも多恵の疑いを取り除かなければならない。正志は忠志の顔を恐る恐る見た。正志の悪意で殺された忠志はそれでも、とても穏やかな顔をしていた。小さな身体が更に小さく見えた。背中に戦慄がはしり恐怖で身体が押し潰されそうになった。この後何人も人の命を奪ったが、心底不安に駆られたのはこのときが最初で最後である。

「穏やかな顔をしているでしょ。安らかに天国へ逝けるといいね。正志今夜は忠志の魂が天国へ逝くまで、ここでお母さんと一緒に見守ってあげましょう」

その日の夜は、正志の人生で最も長い夜となった。忠志の初七日が過ぎても、毎日一時間以上仏壇の前に座らされた。それが丸一年続いた。小さな仏壇の中にある、何やら難しい漢字の書かれた位牌を見ても何も感じなかった。弟はもうこの世にいないということを認識していたが、ただそれだけのことだった。普通の子供であれば、自分が殺した者が眠る仏壇を前にすれば、何かしらの恐怖を感じるものだが、正志にはそのような感情が欠落していた。それでも忠志の遺影を直視するのは苦痛だった。写真の中の忠志は微笑んでいたが、正志にはお前だけは絶対許さないと怒っているようで、まともに写真を見ることができなかった。もう引き返すことはできない。自分は悪魔に魂を売ったのだ。

忠志に対する償いの気持ちは一切持っていなかったが、多恵の言い付けに逆らうことはできなかった。多恵はすべてを知っていたはずだが、正志に対してそのことを直接責めることはしなかったのである。そんな多恵の存在が心底怖かった。多恵の気持ちを自分に繋ぎ止めようとしたことが、かえって多恵との距離を広げる結果となってしまった。

正志が忠志に対して、これほどまでに憎しみを持つようになったのは、いつからなのだろう。正志が物心ついた頃忠志は、いつも母親の腕に抱かれていた。自分もあの腕に抱かれたいと思い、母に抱きつくと「お兄ちゃんでしょう」といつも冷たくあしらわれ、抱擁してもらえなかった。しかしそれも先に生まれた者の宿命である。なぜ殺してしまいたいほど忠志に憎しみを持ったのか、今思い返してみるとそれは父親に対する憎しみが、忠志にすり替っただけなのかもしれ

ない。

あれは小学校三年生のときだった。正志の通っていた学校は、市街地から少し外れた田園地帯の一角にあり、ここら辺でも特に古い木造建築の校舎だった。学校帰り低学年は同じ地区同士、班ごと帰ることになっていた。正志の班は六人いて、その中に宮坂昇という子がいた。宮坂昇の家は大手自動車メーカー下請けの、そのまた下請けの、部品の砂型を作る小さな工場を営んでいた。その工場は昇の父親で社長でもある宮坂明の他に、工員が八人いた。そしてその中の一人に正志の父、雅夫もいた。

その日も正志たちは家へ帰るまでの道程を、鬼ごっこをしながら下校した。じゃんけんをして鬼になったのは昇だった。季節は冬だったので、何人かの子が毛糸のマフラーを首に巻いていた。鬼になった昇は顔にマフラーをぐるぐるに巻かれ、まったく前が見えない状態になった。その光景は包帯でぐるぐる巻きになったミイラ男が、若い女性を追いかける昔の映画に似ていた。

鬼でない他の子供たちは手を叩き「鬼さんこちら」と囃し立てた。昇は両手を前に出しゆっくりと音のする方へ歩いて行った。学校帰りの道は農業用道路で道沿いに、大人の身長ほど深さがある農業用水が流れている。用水と道路の境目には、ガードレールも何も設置されていなかった。冬は田畑も雪に覆われ車両はまったく通らない。

一人の男の子が用水と道路の境目に立ち「鬼さんこちら」と昇を誘った。それを見ていた周りの子供たちは、自分が「鬼さんこちら」というのを止めてしまう。このとき子供たちには、明らかに悪意があったと正志は感じた。昇は素直に用水の方に歩いて行った。そして男の子の前まで行き、その子を捕まえようとして前に飛び出した途端、用水と道路の境にいた男の子は横に避いた。捕まえるものが無くなったため、昇はそのまま用水に落ちていった。昇が視界から消えると、泣き声だけが耳に飛び込んできた。子供たちはこのようなことになることが予想できたにも拘らず、自分たちのとった行動が怖くなった。一番あわてたのは昇を用水に誘導した子である。幸い冬場だったので水嵩が少なく、泥が溜まっていたため昇は怪我もなく無事だった。正志はこのときただそこにいただけだった。その日正志の身には何も起きなかった。

翌朝学校に登校すると、昇は学校に登校して来なかった。昇が川に落ちたとき、一人の女の子が近所の農家に駆け込んだ。そこで昇は冷えた身体を温めるため、風呂に入れてもらったということだ。

いつもは友人同士お喋りしたり、ふざけあったりしていた昨日の五人は、何も喋らず下を向いたままおとなしくしていた。ただじっと何かが通り過ぎるのを、待っているようだった。

始業チャイムがなると同時に、担任の若林が教室に入って来た。若林は三十代前半のがっしりした体格の男だ。はち切れんばかりの背広を着た若林が教壇に立つと、学級委員が号令を掛けた。「起立」教壇は生徒たちの場所より二十センチほど高くなっていた。若林は生徒の顔を一通り見渡すと大きな声で挨拶した。「おはよう」生徒たちも「おはようございます」と元気よく答えると、学級委員の号令で皆着席した。

「昨日宮坂と一緒に帰ったものは前に出なさい」

五人の子供たちにとって一番恐れていたことが現実となった。このとき誰もが若林に叩かれるの

を覚悟していたに違いない。若林は暴力教師というほどではないが、生徒に対してかなり厳しかった。生徒を叱るとき、必ず拳を握り締め指をボキボキと鳴らす。これからお前たちを叩くから覚悟をしとけとでも威嚇するように。生徒は誰もがこの骨の擦れる音を恐れた。呼び出された生徒は教壇の前に立たされ、皆下を向いたまま動かなかった。

「幸い宮坂に怪我はなかったが、なぜ学校帰りに鬼ごっこなんかして帰ったんだ。まして目隠しなんかして鬼ごっこなんかしたら、こんなことになることは分かっていたら。誰が鬼ごっこをやるうなんて言い出した？」

若林は一段高い位置から生徒を見下ろすように威嚇した。それはまるで地獄の閻魔大王のように正志の目には映った。生徒たちは下を向き、各自が昨日の出来事を思い出そうとしている。誰が最初に言い出したのかと言われても、そんなこと分かるはずがない。いけないと分かっているけど、学校帰りは何らかの遊びをしながら帰るものなのだ。夏場は農道も耕耘機や軽トラックなどが通り、牛の糞が道端に落ちているので、目隠しをした鬼ごっこはできなかったが、それならそれで何か遊びを見つけ出すのが子供というものだ。昨日もごく自然の成り行きとして鬼ごっこが始まった。だから鬼ごっこをしようと言った本人は憶えているかもしれないが、他の者はそんなこと一々憶えているわけがない。正志は誰もが自分と同じ考えだと思っていた。そして昇が川に落ちた直接の原因を突き止めるのならいざ知らず、なぜ鬼ごっこを始めたのが、誰か突き止めることが重要なのか理解できなかった。昇が川に落ちたのは事実だし、悪い遊びをしたことで怒られるのは仕方ないと思う。おそらくこの後、皆若林に叩かれるに違いない。それもこの状況からすれば当然の結果だろう。そう考えていた。ところが突然一人の男子生徒が若林を見上げ、悪切れもなくはっきりとした口調で言った。

「正志君が、最初に鬼ごっこをしようと言いました」

皆が一斉に正志の方に顔を向けた。このとき初めて他人の白い目というものを実感した。正志から見たその目はどの目も皆黒い瞳がなかった。正志を名指ししたのは、昇が川に落ちる直接の原因をつくった山岸だった。山岸は自分で昇を川に誘導しておきながら、なぜそんなことを言ったのか。責任の追及を自分に向けられる前に、誰かを犠牲としなければならないと考えたからなのか。当時の正志には見当もつかなかった。ただ子供とは思えない山岸の悪意だけは感じる事ができた。

「鬼頭が皆を誘ったのか？」

その声は神の声の如く正志の身体を貫いた。若林は教壇の上から威圧的に皆を見回した。正志を除く四人が若林の目を見ず、下を向いたまま頷いた。若林は右手を握るとボキボキ指の関節を鳴らした。教壇から降りると正志の前に歩み寄り、いきなり正志の左頬を強く叩いた。正志は若林がいずれ自分たちを叩くだろうと覚悟していたものの、あまりにも理不尽な理由で、自分だけが叩かれるとは思ってもみなかった。他人の悪意を小さい身体で受け止め、必死に足を踏ん張ったが、大人の力は想像していたより強く、小学校三年生の正志は後退りして尻餅をついた。若林は更に尻餅をついた正志に対し、口の端に唾をため目を三角にして怒鳴った。

「お前のせいで宮坂は死にそうなんだぞ」

若林は正志を殴ったことにより、自分自身が興奮しているようだった。正志は（僕じゃない）と

反論しようと試みたが、言葉が声になって出てこない。山岸を見ると薄ら笑いを浮かべているように見えた。正志は起き上がると、真っ直ぐ山岸に飛び掛っていった。それは怒りなのか、自分の中から湧き起こる衝動を抑えることができなかった。正志にとって初めての経験である。山岸の髪の毛を鷲掴みにすると、自分の持っているすべての力を出し、思い切り前に引き倒した。山岸は顔面から前に倒れ「ぎゃあー」という声が教室中に響き渡った。若林は慌てて正志を羽交い絞めにすると、山岸から引き剥がした。

「山岸大丈夫か？」

若林は正志を羽交い絞めにしたまま山岸の様子を伺った。山岸は鼻を強く打ったため、鼻血が出たのか鼻を押さえ大きな声で泣いている。

「誰か、山岸を保健室に連れて行ってくれ」

一人の女の子が椅子から立ち上がると、山岸のところまで赴き「大丈夫？」と声を掛けた。女の子は山岸の手を取ると教室を出て行った。床にはインクのような血が付いていた。他の三人は正志が何で山岸に飛び掛ったのか知っていたが、誰もそれを口にしようとはしなかった。

自分でも分からないが、おそらくこのとき正志は他人の悪意というものを、自分自身に取り込んだ。白い紙に墨汁が染みていくように。今まで感じたこともない、心がどす黒く濁っていくのがはっきりと自覚できた。

正志は幼い頃から人前に出て、ものごとをすることをひどく苦手にしてきた。自分から他の者に話しかけることは殆どなく、友人の家に遊びに行くことすらなかった。だからこのとき同じ通学区の子供だけでなく、クラスの誰もが正志が率先して、自分から何かをやらうと言うはずがないことを知っていたはずだ。しかしそれを口に出して指摘するものは、このクラスにはいなかった。翌日宮坂昇が登校して来るまでは。

正志が若林に叩かれ、山岸が鼻血を出したその日、学校に正志の母、多恵が呼び出された。若林から報告を受けた教頭が、今日起こった一連の出来事を多恵に説明した。正志は多恵の横でただひたすら歯を食い縛り耐えていた。自分はまったく悪くない。ただの傍観者だ。交通事故を偶然見ていただけなのに、交通事故の当事者にさせられたようなものだ。あまりの理不尽さに腹が立ったが、幼い正志には反論することができなかった。

「幸いにして川に落ちた宮坂君は、怪我をしなかったようですし、正志君が髪を引っ張って倒した山岸君も、たいした怪我ではなく済んだのですが、あまり乱暴な行動は慎むように家で指導してやって下さい」

若林は教頭に自分の都合のいいことだけを報告し、なぜ正志が山岸に暴力を振るわなければならなかったのかという、一番大切なことを理解していなかったため、正志はただの暴力を振るう児童としてしか、教頭は認識していなかったようだ。

「申し訳ございません。家で強く言い聞かせます」

多恵は正志に非があると感じたのか、教頭にただひたすら頭を下げ謝罪した。それを若林は冷ややかな目で傍観していた。

正志と多恵が学校から帰ると、弟の忠志がつまらなそうにテレビを観ていた。多恵が夕食を作っていると暫らくして、雅夫も勤務先の工場からくたくたになって帰って来た。彼方此方油污れが付着した灰色の作業着を脱ごうとボタンに手を掛けたとき、多恵が今日学校で教頭に説明を受

けたことを報告すると、雅夫の顔はみるみる険しくなっていた。頬が痩け、窪んだ目が正志を睨み付けた。その顔はどことなく猛禽類に似ていた。

正志は雅夫に首根っこを掴まれ引きずられるように、今雅夫が帰ってきた道を再び引き返して行った。

多恵は教頭から受けた説明をそのまま雅夫に報告した。雅夫が働いている工場で社長は、自分の息子が学校帰り川に落ちたことは何も言わなかったと述べた。自分の息子が社長の大事な息子に大変なことを仕出かしたことで、どう対応したらいいのか分からず、狼狽える男の姿がそこにあった。

工場は社長の自宅と隣接している。工場の事務所に入ると社長はまだ事務所にいて、帳簿を眺めていた。

「うちのバカが昇君にとんでもないことをして、本当に申し訳ありません。お前も頭を下げろ」

正志は雅夫に頭を小突かれ渋々頭を下げた。幼いながらに父と社長の関係は分かっていた。しかしこの後雅夫は山岸の家に正志を連れて謝りに行こうとしたが、正志は頑として山岸の家に行くことを拒んだ。道路の真中に座り込み、頑なに拒否し続けた。本当だったら此方が謝ってほしいくらいだ。それなのに何であいつに頭を下げなければならない。そんなことは死んでも嫌だった。正志は道に座り込み大声を上げ、あらゆる抵抗を試みた。雅夫は正志を思い切り殴って自分の言うことを聞かせようとしたが、正志の意思は固く、どんなに雅夫に殴られても道端に座ったまま動こうとしなかった。今まで親に対して反抗などしたことがない正志の激しい抵抗だった。雅夫はなぜ正志がこれほど頑なに拒むのか理解しようとしなかったし、する気もなかったに違いない。自分の子供が仕出かした不始末が、自分の職をも奪いかねないのではないかと危惧したからだろう。雅夫は正志をそのまま担ぎ上げ歩き出した。そのまま山岸の家に連れて行かれると思ったが、雅夫は自分の家に戻ってきた。

「少し頭を冷やせ」

正志を自宅の庭に放り投げると、そそくさと自分だけ家の中に入っていった。正志は暫くの間地べたに座り込んでいた。そのうち尻が冷たくて座っていられなくなった。おそらく外は氷点下だろう。気持ちが落ち着いてくると寒さが身に染みてくる。立ち上がりガラス戸の前まで行き、障子の破れ目から家の中を覗くと、家族三人で楽しそうに食事をしている最中だった。座卓の上には大きな鍋があり、中にはおでんが半分ほど入っている。忠志は卵を箸で刺しそれにかぶりつく、飲み込めないのか口をもぐもぐさせていた。多恵と雅夫は顔をほころばせ何かを喋っているようだが、正志の耳までは届かない。忠志も時折楽しそうに頷いている。今まであのように楽しく食事をしていることがあったらどうか。正志がいるとき、雅夫は殆どテレビのニュースを見て、晩酌をしながら夕食を摂っていた。鍋を囲って家族団らんなんて、正志の記憶にはなかった。当て付けのように食事をしている三人が、まったく別の世界の住人に感じた。なぜだ。手足は寒さで痺みお腹も減っている。身体が中心が痛かった。身体は冷えて冷たかったのに目頭だけが熱い。直ぐそこに幸せがあるのに、シャボン玉みたいに捕まえようとするやうに消えてしまう。何で自分はここにいるのだろう。以前紙芝居で観たマッチ売りの少女の気持ちそのものだった。頼れる者は誰もいない。誰も信じてはいけない。幼いながらにこの思いを胸に刻んだ。それは生

涯正志の心から、払拭することができないように思われた。

先ほどまで鬼のような形相で正志を殴っていた雅夫が、忠志の前ではあんな穏やかな顔をしている。このとき身体のある中心にある何かが壊れた。

口の中を舌で回すと鉄錆の味がした。顔の痛さと寒さが雅夫と若林に対する憎しみに変わるのに、それほど時間は掛からなかった。雅夫に対する憎しみが、どうして忠志に転化していったのか、正志自身にもよく分からない。雅夫にも復讐しようと考えていたがこの後、雅夫は女を作って家を出て行った。雅夫は正志の手の届かないところに行ってしまった。

翌日昇が学校に登校し、自分が川に落ちたのは、山岸の声に誘導されて川に落ちたのだと、鬼ごっこをしようと言ったのは、自分だということを若林に申し出た。昨日自分が、川に落ちたのは正志のせいになっているということを、父親から聞かされたからだとクラスの人に説明していた。しかしそれを聞いても若林は、決して正志に謝罪しなかった。四年生に進級すると担任は替わったが、それ以来若林の方から正志に、声を掛けることはなかった。

3

若林には中学校に入ってから復讐した。小学校にいる間に復讐したのでは、自分が恨んでやったということがぼれてしまう。正志は六年待った。六年経っても若林に対する憎しみは、衣服にこびりついたガムのように消えることはなかった。若林の家は隣町の古い城下町にあった。住所は同級生から年賀状を出すと言って訊き出した。たとえば教員住宅やアパートに住んでいたとしたら、転勤と同時に引っ越してしまう。そうすると正志の復讐が困難になっていただろう。幸い同級生から訊いた住居から引っ越すことはなかった。中学三年生になった正志は、自分の足で若林の住んでいる家確かめに行った。若林の家まで正志の家から、自転車で一時間ほどかかる。家は旧日本軍、大本営洞窟がある場所の直ぐ近くにあり、周りは林檎畑で大きな農家だった。大本営の洞窟は迷路のように入り組んでおり、一部は地震研究所として使用されている。正志には何かと都合のいい洞窟だった。

正志の家から自転車で五分ほど走った山の裾野に、昔火葬場だった場所がある。現在は建物が完全に壊され、石垣だけが辛うじて残っていた。

雅夫が女を作って家を出た後、暫くして今住んでいる市営住宅に引っ越した。その同じ市営住宅に老人が一人で居住しており、その老人がよくここに来て、蝮を捕獲し農協に持っていくという噂を耳にしたことがある。本当か嘘かは定かでないものの「蝮は人間の髪の毛を焼いた臭いが好きで寄って来る。そしてこの石垣に住み着いた」と老人は語っていた。小学校のとき、正志が本当かと思い、怖いもの見たさもあり実際ここに来てみると、本当に石垣の間に蝮がいた。

中学校が夏休みに入り、この計画のため若林宅まで何度か足を運び、行動パターンと風呂の位置を確認した。何時に風呂に入るのか、このことがこの計画で最も大切なことだった。

若林には小学五・六年生の息子がいて、妻と若林の父親の四人で住んでいた。若林はこの時期、野球中継が終わってから風呂に入る。そういえば小学校のとき「昨日は長嶋がヒットを打った。王がホームランを打った」と嬉しそうに生徒に話しているのを思い出した。

家はかなり古く、何回か増改築を繰り返しているらしく、大きな母屋と隣接してトタンでできた物置があった。風呂場は北側に位置し、物置にはドラム缶が沢山置いてある。風呂の窓はすり硝子になっていて、特急列車のトイレにある外倒し窓のように、上の部分だけが開閉するつくり

になっていた。夏はいつも窓が開けっ放しになっている。ドラム缶に乗れば簡単に中の様子を伺うことができた。

夏休みも半ばにさしかかった暑い日、多恵がパート先から帰る前に、自転車に乗って家を出た。正志は中学に入ってから新聞配達をしていたが、この日は体調が悪いと夕刊の配達だけ休ませてもらった。もしものことを想定しジーパンとジージャンを羽織り、手には作業用の皮手袋を嵌めた。間違っても自分が蝮に噛まれるわけにはいかない。自転車に乗り火葬場跡に着くと、用意してきた麻袋を取り出した。麻袋は三重にしてあり、蝮が内側から噛んでも牙が外側に出ないようにになっている。蝮は石垣の間に一匹と畦道に一匹いた。蝮は飛び跳ねると聞いていたので、捕まえるのにかなり神経を使った。魚獲り用の網を改造した、たも網を持って蝮を捕獲する。畦道にいた蝮は比較的簡単に捕まえることができたが、石垣の隙間に隠れている蝮は捕まえるのが大変だった。小学校のときは弟を脅かそうと思い、シマヘビやアオダイショウを捕まえたことはあったが、蝮を捕まえるのは今回が初めてだった。山に行くとき蝮に出くわすことが稀にある。そのとき蝮はとぐろを巻き攻撃態勢をとるので、踵を返し違う道へ行くことにしていた。

石垣の隙間に木の枝を突っ込み、何とか二匹の蝮を捕獲することができた。蝮を麻袋の中に入れてしっかりと口を紐で縛った。蝮を二匹捕獲した頃には、もう日が傾きかけていた。捕獲した蝮を自転車の後部座席にある、折畳み式の籠に放り込むと、急いで若林の家に向かった。

若林の家に着いたときは、既に日が落ち辺りは真っ暗になっていたが、若林が風呂に入るまでは、更に一時間以上待たねばならないだろう。自転車を林の中に隠し、時間まで大本営の洞窟で時間を潰すことにした。何もない真っ暗な洞窟の中で、何もしないでただじっと待っているというものなかなか辛いものだ。持ってきたトランジスターラジオも、殆ど雑音しか聞こえなかったが、僅かな電波を感知し野球中継が八回の裏に差し掛かったとき、洞窟から抜け出し若林の家に向かった。周囲はすべて林檎畑で敷地内も沢山の植木が植わっている。周りは高い板塀で囲まれており、死角が多く泥棒が入るには打って付けの家かもしれない。取り敢えず母屋に隣接した物置小屋に忍び込んだ。物置小屋の中は暗くてよく分からないが、農機具が沢山置いてあったため、躓いて大きな音が出ては大変だと思うと、ペンライトを持つ手が汗ばんだ。

風呂場はまだ電気が点いていなかった。正志は沢山あるドラム缶の陰に隠れ、息を殺し若林が来るまでじっと待つことにした。四十分くらい待った頃、風呂場にオレンジ色の灯りが点った。風呂場に人の気配がしたので、すかさずドラム缶によじ登った。風呂場の窓の開口する部分が、ちょうど正志の目の高さで重なる。そつと中を覗くと若林が木製の浴槽から、洗面器で湯を汲み上げ、かけ湯をしているところだった。正志は若林に気づかれないように少し身体を屈め、相手から自分が見えないようにして少し待った。湯が浴槽から溢れ出る音がしたため、再び窓の開口部から中を覗くと、若林は湯船にどっぷり浸かり、口笛が出るほどリラックスしている。正志は小さい頃、多恵から「夜口笛を吹くと蛇が来るよ」と注意されたことを思い出しおかしくなった。

若林はずっと湯船に浸かりながら下を向いていたため、正志の存在には一切気づいていないようだ。今から起こるであろう、自らに降りかかる災難を若林は知る由もない。そんなこととも知らずにのん気に風呂に浸かり、口笛を吹いている若林がひどく滑稽に見えた。

小学校のときに受けたあの理不尽な暴力は、正志の身体よりも心に深い傷となって精神をも浸食していった。このときをどれほど待ったことか。一時としてあの日の出来事を忘れたことはない。自分と若林の関係が完全に切れるまで、ただひたすら待った。どんなに時間が経とうと、若林の顔を頭から払拭することはできなかった。あのような暴力教師を恨んでいるのは、自分だけではない筈だ。中学校に入ってから、気に入らない教師は沢山いた。しかしあのときのことを思い出せばすべてのことが許せた。

あのとき、昇が川に落ちたことは、正志に何の責任もないと分かっても、若林は謝罪しなかった。それどころか正志を無視するようになった。それなりの償いはしてもらおう。

正志は若林が浴槽から出ないうちに、持ってきた麻袋の口紐を解き、中の蝮を窓の隙間から若林の頭目がけて投げ込んだ。一匹の蝮は浴槽にそのまま落ち、体をくねらせ湯船を泳いでいる。もう一匹の蝮は頭に落ちバウンドして肩に引っかかった。「ぎゃー」という叫び声をあげ浴槽から飛び出した。若林の肩から二本の血筋がたれている。正志はそれを確認すると急いでドラム缶から飛び降り、一目散で自転車の置いてある場所まで走った。

同級生

1

それは中学三年生の二学期、期末試験のときだった。鬼頭は勉強がそれほど苦手だった訳ではないが、早く自立したいと考えていたため、中学を卒業したら定時制高校に行くことに決めていた。だからがむしゃらに受験勉強をすることはなかった。三者面談のとき担任の中山は、多恵に定時制ではない全日制の普通科を勧めた。

「正志君は定時制高校に行きたいと言っているのですが、正志君の成績ですと松代東ぐらいなら行けます。でも本人はどうしても定時制がいいと言っているのですが、お母さんはどうお考えですか？」

中山は多恵が自分の意見に賛同してくれるものと思ったに違いない。普通の親であれば、自分の息子がより良い学校に進学して欲しいと考えるのが当然であろう。

「正志の行きたいところに行かせてやって下さい」

しかし多恵の答えは中山の期待を裏切るものだった。弟が亡くなってから多恵は、小学校の卒業式以外鬼頭のことでも学校に来たことはなかった。今回三者面談に行くつもりはなかったようだが、中山がどうしてもお母さんに来てもらわなければ困ると、多恵に直接電話を掛けてきた。多恵もこれが最後と思い渋々学校に来たようだ。中山は何とか多恵を説得しようと試みたが、多恵のあまりにも無関心な態度に説得は無理だと悟ったのだろう。弟の死後多恵とは生活していく上で、最低限必要な言葉以外会話を交わさなかった。

鬼頭は学校での成績もそれほど悪いわけではなく、級友ともトラブルを起こすこともなかった。若林のことはニュースになるくらいの事件だったが、鬼頭に直接警察の手が伸びることはなかった。警察も若林と鬼頭の接点を見つけ出すことはできなかったようだ。

鬼頭は期末試験の日学校に登校すると、既に当番がストーブを点け教室は略暖かくなっていた。殆どの生徒は教科書を広げ、友人同士問題を出し合い試験に備えている。鬼頭の席は窓際の最後列にある。ストーブまでは距離があり窓の側ということもあって、例年であれば足元が多少冷えるのだが、今年は暖冬なのか殆ど寒さを感じなかった。試験が始まるまで何もせず、自分の席でぼーとしているのは鬼頭だけだった。

今日の試験科目は英語、技術家庭、数学である。一時限目の英語はあまり好きな科目ではなかった。問題の半分も解けず、途中で投げ出した。自分のテスト用紙を裏に返し、鉛筆と消しゴムを筆箱に仕舞った。静まり返った教室内に、紙と鉛筆の擦れる音だけが微かに耳に入ってくる。壁に掛けてある時計を見ると、まだ二十分以上残り時間があつた。上体を起こし周りを見ると、鬼頭以外は皆試験問題を必死になって解いていた。鬼頭の席は左側が窓になっていて、グラウンドと遥か彼方にある姨捨山が目飛び込んでくる。右側は本来女子の席があるのだが、このクラスは男子のほうが女子より二人多く、鬼頭がいる窓際最後尾と教室後ろ入り口、男子席の隣が空席になっていた。鬼頭の右隣は空席だったが、その空席の隣にはクラスで最も秀才とされている胡桃沢幸一郎が座っていた。胡桃沢は容姿が整っていて、中学生にしては高い身長もあり、バスケット部に所属しキャプテンをしていた。当然胡桃沢に思いを寄せる女子生徒は多く、バレン

タインデーにでもなれば、鞆に入りきれないほどチョコレートを貰っていた。本人自身も自分が女性に対して、魅力的に映るということを熟知しているように見受けられた。ただこの埴生南中学には付き合っている彼女はいないらしく、隣の屋代第一中学に彼女がいるという噂があった。

本来鬼頭は自分と正反対の胡桃沢に興味を持つことはなかったが、回答を書き終えあまりにも暇なので何気なく横に顔を向けた。そこには信じられない光景が目飛び込んできた。胡桃沢は机の下から教科書を半分出し、それを見ながらテスト用紙に書き込みをしている。そのとき教科担当の教師は、教壇で何かの書物を読んでいる最中だった。胡桃沢は草原で草を食べているシマウマのように、辺りを見回し誰も自分の方を見ていないと分かると、机下の教科書を見てはテスト用紙に書き込みを繰り返していた。教師のいる教壇からは胡桃沢の机を見ることはできない。直ぐ隣席にいる女子からも、注意して覗き込まない限り、胡桃沢が何をしているか分からないであろう。しかし机一つ空けた鬼頭の位置からは、胡桃沢が何をしているかはつきり分かった。

それまで容姿端麗、清廉潔白、スポーツ万能、それでいて秀才。鬼頭にとってまるで無縁のように思えた胡桃沢が、なんだか凄く身近な存在に感じたのが不思議だった。それから試験の間鬼頭は胡桃沢を観察した。胡桃沢はすべての教科をカンニングしていたわけではないが、数学以外は殆どカンニングをしていた。

二日目の試験の時間、鬼頭はおもちゃのカメラを、学生服の内ポケットに忍ばせていた。国語のテストの時間、またしても胡桃沢はカンニングをした。胡桃沢がカンニングをした瞬間、鬼頭は机の上にあった自分の筆箱を、故意に床に落とし胡桃沢の気を引いた。カンニングすることに神経を集中していた胡桃沢は、筆箱が床に落ちる音を聞いて、慌てて教科書を机の中に仕舞った。鬼頭は床に落とした筆箱を拾おうとして、胡桃沢と初めて目が合った。そこで鬼頭はすかさず、内ポケットからカメラの一部を出し胡桃沢に見せた。そのとき胡桃沢の身体が小刻みに震えるのを見逃さなかった。答案用紙を回収した後、鬼頭は胡桃沢のところまで行き耳元に囁いた。

「今日テストが終わったら学校裏の灯油倉庫に来い。待っているからな」

それだけ告げると直ぐに離れていった。

鬼頭は自分のテストもそこそこにして、引き続き胡桃沢を観察した。その後胡桃沢を見てると、殆ど鉛筆を動かしていなかった。残りの科目は理科と社会である。

学校の敷地内ではあるが、北側に大きな灯油の倉庫がある。下校前の掃除時間に当番が、ポリタンクを運び教室のストーブに補給する。一週間に一回業者が来て、ドラム缶に灯油を補充していく。後十五分もすれば灯油を入れに当番が、ポリタンクを取りに来るだろう。それまでに胡桃沢と話をつけなければならない。

鬼頭は先に来てドラム缶の上に腰掛けていると、五分も経たないうちに胡桃沢がやって来た。胡桃沢は気の毒なくらい蒼い顔をしていた。この男の成績が良いのは、すべてカンニングによるものなのか、或いは今回が初めてなのか、鬼頭にはどうでもいいことだった。

胡桃沢はドラム缶に座った鬼頭を見ると、何か言いたそうに口を開きかけた。しかし何を言ったらいいか分からず迷っているようだった。暫く鬼頭は胡桃沢を見ていた。誰が見てもいい男が、今ではすっかり怯え、いつもの自信に満ちた姿はすっかり影を潜め、それはまるで主人に仕える召使のようだった。

「君はお金が欲しいのかい？」

胡桃沢は沈黙が堪えきれず先に口を開いた。この男の父親はどこかの銀行のお偉いさんで、とても広い家に住んでいるという噂を耳にしたことがある。何かあると直ぐに、金で解決しようとするところは銀行員の父親譲りか。そう思うと何か無性におかしくなってきた。鬼頭にとって銀行員という人種は、何でも金で解決するように映った。

「はははは……」鬼頭は大声を出して笑った。

「お前はバカか。俺が金など要求するとでも思ったのか？中学生が用意できる金なんてせいぜい二、三万。そんなはした金で見逃してもらおうなんて虫が良すぎるぜ。何てったってお前の人生が掛かっているんだからな。進学校に行き、その後一流大学に行って一流企業に入る。こんなところでカンニングをしていたら、内申書は間違いなくマイナスだろうよ。優等生」

鬼頭はドラム缶に座ったまま、踵でドラム缶を蹴った。胡桃沢は身体をピクリと震わせた。目の前の男が、自分からすんなりカンニングを認めるとは思わなかった。もし僕はカンニングなんかしていないと白を切ったら、おもちゃのカメラで撮った写真があると言って脅しを掛けるつもりが、それも必要なくなった。おもちゃのカメラといっても一応フィルムが入っていて、写真が撮れるのだが、本当に写っているかは定かでない。

「仕方なかったんだ。僕の父は東大を出て七十三銀行に勤めた。本当は東京の都市銀行に入りたかったみたいだけど、父の母、僕の祖母だけ病気があったため長野の銀行を選んだと言っていた。だから僕に東大に行ってもらって、東京の銀行に入ってもらいたいんだ。だからどうしても悪い点が採れなかった……」

胡桃沢の声は震えていた。それでも七十三銀行は長野県内では一番大きな金融機関で、市町村には必ずある。本店は長野市にあり、この辺からだと車で三十分ほどの距離にあった。

「お前はカンニングをして東大に入るのか？」

胡桃沢の言い訳じみた身の上話など訊きたくなかった。此方の同情を引こうとしてそんなことを言ったのかは定かでないものの、この男がどこの大学に行こうと自分には関係ない。それでも自分の将来を父親が握っているというのは、父のいない鬼頭には所詮理解できるものではなかった。

「君は信用しないかもしれないが、カンニングをしたのは今回が初めてだったんだ。風邪を拗らせて、全然勉強ができなかったので仕方なかったんだ」

胡桃沢は教師にでも言い訳するように、鬼頭に自分が何でカンニングをしたのか説明した。カンニングしたのは今回初めてというのが、本当か嘘かは定かでないものの、風邪を引いて一週間休んでいたというのは事実だった。そう言われるまで胡桃沢が休んでいたことすら忘れていた。胡桃沢は風邪を引いたおかげでテスト勉強ができなく、カンニングをしてしまった。本人はそう述べている。それを偶然鬼頭が見てしまった。運命の悪戯か、胡桃沢にとってそれは悪夢だったに違いない。

「お前は全然分かってないな。俺にとってお前が初めてカンニングしたのか、何回もしているのか、そんなことはこの際どうでもいい。ただお前がカンニングをしたという事実だけあればそれでいいんだ」

「え……」

一生懸命言い訳を考えている胡桃沢が滑稽だった。今まで何の苦勞もせず、順風満帆に人生を送ってきたに違いない。このとき鬼頭は胡桃沢と自分が、今まで歩んできた人生を比較して、あまりにももの違いに愕然とした。自分の中にあるこのどす黒い血はどこから来たのか、自分の家庭環境がそのようにさせたのか、あるいは生まれ持った性格なのか、それは自分でもよく分からなかった。

この学校の生徒、教師合わせて四百人近くいるが、鬼頭を知らない者はそれこそ数えきれないほどいる。しかし胡桃沢を知らない者を探すのは難しいだろう。それほど胡桃沢はこの学校では目立つ存在だった。容姿も然ることながらこの男には華がある。どこから見ても完璧なのだ。異性は憧れを抱き、同性は嫉妬するほど存在感が斗出していた。それとは反対に鬼頭の存在は森の中にある木の如く、いるかいないか分からない、どうでもいい存在だった。胡桃沢自身同じクラスに、鬼頭みたいな男子がいたことすら忘れていたかもしれない。今まで自分の視界にすら入らなかった男が、いきなり自分の自由をも奪いかねない存在になって、かなり動揺しているように感じられた。

「お前の家は金持ちらしいが、そんなことはこの際どうでもいいことだ。お前にはやってもらいたいことがある。当然お前には断る権利があるが、しかしそれを断れば俺はお前の未来を潰す。これでな」

鬼頭は内ポケットからおもちゃのカメラを覗かせ、直ぐにポケットに仕舞った。

「僕はいったい何をすればいいんだ？」

今の胡桃沢は王手飛車取りに追い込まれた将棋指しの心境だろう。

「今日は俺が、お前のカンニングを見たということだけ、認識してもらえればそれでいい。何をやるかはまた来週になってから説明する」

楽しいことを先延ばしされてもそれほど苦にならない。しかし辛いことや心配なことを先延ばしされると、人は誰しも不安に駆られる。鬼頭は胡桃沢が何をするのか今教えるよりも、少し時間を置いた方が、計画を進行する上でうまくいくと考えた。

2

鬼頭は学校で部活動をするわけでもなく、不良グループに入って悪さをするわけでもなく、学校では目立たない存在だった。そんな生徒だったが、一度だけ皆を驚かせる出来事があった。

中学三年生の夏休みが終ったとき、鬼頭と同じクラスの水島省吾に恐喝された。水島は地元の暴走族信州連合クラッシュに所属していた。中学三年生ながらその方面では悪名高かった。学校には殆ど出て来なくて、たまに出てくると気の弱そうな生徒を呼び出し、恐喝を繰り返していた。鬼頭が毎日、新聞配達をしているのをどこかで見たのか、誰かに聞いたのか定かでないが、現金を持っているのを嗅ぎつけ、鬼頭に一万円持ってこいといきなり脅しを掛けてきた。そのとき鬼頭是水島がどういう性格で、中学生ながらに暴走族に入っていることも知っていたが、このような輩に金など払う気は更々なかったため、無視を決め込んだ。

翌日朝、授業が始まる前、教室の後ろに連れて行かれた。水島はポマードをべったり付けた髪をリーゼントにして、ぶかぶかのシャツにボンタンという不良お決まりの出で立ちだった。

「おい金持ってきたか？」

皆がいるにも拘らず、水島は堂々と脅しを掛けてきた。自分は腕力に絶対自信があり、脅しを掛

ければ誰もが水島の要求に従うと思ったに違いない。このとき鬼頭はなぜか非常に落ち着いていた。水島に対して不安も恐怖もまったく感じていなかった。ただミントの香りのするポマードと、必要以上にてかる髪が目障りだった。

「おいその臭い頭を俺に近づけるな」

「何・・・・・・・・」

一瞬水島の顔が凍りついた。

「金は持ってきてない。お前に金を払う気などない。そんなに金が欲しいなら自分で働いて稼げ」

鬼頭の口から発せられた言葉は、水島にとって予想外のものだったのだろう。クラスの誰もが見てみぬ振りを決め込んだ。このクラスにも水島に脅され、金を渡した生徒も何人かいたが、その者たちも自分の席に着きじっと下を向き、嵐が過ぎ去るのをひたすら待つしかなかった。

「お前なめているのか？」

少々興奮気味の水島は、教室に響き渡る大きな声で怒鳴った。他の生徒は誰もが鬼頭を気の毒だと思いつつ、助けてやることはできなかった。というよりも関わりあいたくないと思ったはずだ。皆この後起きる不幸な出来事を予想したに違いない。

水島は自分の右拳に力を込め、思い切り鬼頭に殴り掛った。しかし鬼頭は自分の頭を少しだけ右に傾けた。水島の拳は目標を失い、鬼頭の背後にある連絡用の黒板に強く打ちつけるかたちになった。鬼頭の耳には水島の拳の潰れる鈍い音がはっきりと聞こえた。それと同時に鬼頭は水島の鼻目がけて、自分の額を叩きつけた。「うぎゃー」という水島の唸り声が隣のクラスに届くくらい響いた。このとき誰もが、鬼頭は水島に殴られたと思ったことだろう。しかしその中ですべてを見ていた者がいた。鬼頭が頭を上げると、水島は自らの鼻を両手で押さえ床に蹲った。

暴力だけに頼って生きてきた者にとって、その暴力によって打ちのめされたときの惨めな姿は、傍目から見ていると滑稽にすら感じる。

鬼頭が前を向くと女子が一人此方をじっと見ていた。唐木由香里である。由香里は鬼頭が教室の後ろに連れて行かれるところからずっと見ていた。鬼頭も由香里の視線に最初から気がついていていた。

隣のクラスの者が呼んだのか、担任の中山が慌てて教室に飛び込んで来た。「何があった？」皆が恐る恐る後ろを振り向くと、そこには床に蹲る水島と、その前に呆然と立ち尽くす鬼頭がいた。鬼頭は腰を落とし、蹲る水島の耳元に顔を近づけ「今度ふざけたまねをしたら殺すぞ」と囁いた。

「先生、水島君が鬼頭君を恐喝しようとして殴りかかったら、鬼頭君が下を向いたので鬼頭君の頭に水島君の鼻がぶつかったんです」

突然由香里が言葉を発した。中山は水島のところまで駆け寄ると、水島の肩を抱え教室から出て行った。それをクラスの皆が呆然と眺めていた。水島やクラスの者は知らなかったが、悪党の器は鬼頭の方が一枚上手だった。

由香里が席から立ち上がると、鬼頭のところまで駆けて来て声を掛けた。

「君って強いんだね。あの不良を一発で倒すなんて、感心しちゃった」

由香里がまだ何か話そうとしたが、鬼頭は無言で自分の席に戻った。そして何ごともなかったように、鞆から教科書を取り出し机の中に仕舞った。後から中山が来て鬼頭に職員室に来るように声を掛けた。職員室には学年主任が待っていて、朝の出来事を事情聴取された。水島の鼻は折れ保健の先生が病院に連れて行ったこと。水島はうちの生徒だけでなく、他校の生徒をも恐喝していて、父兄からも相談を受け、学校でも手を拱いていたこと。先ほど警察の少年課に相談したことなどを教えてくれた。その後噂で水島は、鑑別所に送られたということだ。

ごく一部の者を除いて、鬼頭の実在は不気味に映ったに違いない。不良グループも鬼頭のところに来るとは、気安く声を掛けてきた。

「鬼頭凄いな。あいつを一発で仕留めたなんて格好良すぎるぜ」

羨望の眼差しで鬼頭を見たが、彼等に対して鬼頭は無視しを決め込んだ。あの恐喝事件の後も自分の力を誇示することなく、今までどおり普通に学校生活を送っていた。自分がクラスの皆からどのように思われていようと、そんなことはどうでもいい。喧嘩は好きでなかったが、自分に降りかかる火の粉を振り払うだけの力は欲しいと思い、小学校六年生のときから格闘技の通信教育を受講していた。この通信教育の最初に相手の動きをよく見て、それをかわすことが最も重要だ。そしていざ喧嘩となったら、絶対興奮してはならない。興奮して力を出し切れない相手を、冷静に観察できれば勝てる可能性が高くなる。ということが書かれてあった。しかしあのようによくかわせたのは、単なる偶然にすぎない。ただその偶然が鬼頭を助けたのも事実には違いなかった。

今年の冬はいつもの冬より暖かかった。雪が降っても暖冬のせいで直ぐ融けてしまう。こんな暖かい冬は初めてだ。カンニング事件から二週間経った日、再び胡桃沢をグランドのバックネット裏に呼び出した。鬼頭の期末試験は胡桃沢に気を取られていたため、散々な結果だったが、定時制に行くことに決めていた鬼頭にとって、試験はどうでもよかった。しかし胡桃沢の場合は深刻だった。カンニングが鬼頭に見つかった後のテストの点はあまりにも酷く、家のものまで呼ばれたということだ。今回は風邪が酷く、試験勉強ができなかったということで難を逃れたようだが、これからが大変なのは火を見るより明らかである。すべてのテストが返却された後、鬼頭はこの場所に胡桃沢から呼び出され、この経緯を聞かされた。

「僕にいったい何をさせたいんだ？」

胡桃沢は不安な顔をしながら、しつこく訊いてきた。「もう少し待て」そう答えるだけで何をしてくれるのか言わなかった。そのようなことがあり、今日ようやく胡桃沢にやってもらうことを説明するときがきたのだ。

あのことがあってからの胡桃沢は、誰が見ても元気がなかった。担任も家の人も風邪のせいで試験の結果が悪かったからだと思い、言葉を掛けるのにも気を遣っていた。クラスの者も胡桃沢が元気がないのは、試験の結果が悪かったからだろうと推測した。それは半分当たっていたが、半分は違っている。それは鬼頭のせいには違いない。鬼頭が自分に、とんでもないことをさせるのではないかという不安が、常にあったからに他ならない。

グランドにやって来た胡桃沢は憔悴しきっていた。これほどまで従順に、胡桃沢が自分に従うとは思ってもみなかった。計画は順調に進んでいる。鬼頭にとって胡桃沢はこの時点で元気であれば困るのだ。怯えていてこそ、この後の計画がスムーズに運ぶ。バックネットの金網に寄り掛かり胡桃沢が来るのを待った。胡桃沢が鬼頭の前まで来ると、何も言わずに鬼頭の方を向いて立ち止まった。主人に仕える犬はあまり吠えない方がいい。

「俺がお前にやってもらいたいことは、まず冬休みに入る前、ある人にラブレターを書いてもらう。そして冬休みにその相手をデートに誘いませたら、いくところまで行ってほしい」

このとき鬼頭は初めて計画を胡桃沢に打ち明けた。胡桃沢は目を大きく見開き鬼頭を直視した。

「何びっくりした顔をしている。お前まさか童貞じゃないだろう？お前が女とやっているところを見せてもらう」

「君はいったい何を考えているんだ。そんな強姦みたいなことできるわけないじゃないか」

「お前がやれば強姦にならない。お前は女子の間じゃナンバーワンだからな」

「僕はまだ女の子とそういう関係になったことなんかない。そんなにやりたけりゃ君が一人でやればいいじゃないか」

胡桃沢はこの日まで自分が何をさせられるのか、まったく知らされていなかった。今初めて何をさせられるか聞いて、戸惑っているのは当然のことだろう。鬼頭にしてみれば金など要求されるよりは、よほど簡単なことのように思えたが、本人にとってはどうもそんな単純なことではなか

ったようだ。

「俺が誘って、ひよこひよこ女が来れば、わざわざお前なんか頼みはしない。お前が学校で一番いい男だから、わざわざお前にやってもらうんじゃないか」

地球に引力があって物が下に落ちるように、この時期の少年は誰しも思うことは一緒で、女性の身体に対して非常に興味をもつ。マスターベーションを覚え、性欲がピークに達するのもこの時期である。その中であって鬼頭は、異常なまでに女性に対しての性的欲求が強かった。

ニュートンはりんごが落ちるのを見て、万有引力を発見したが、鬼頭も胡桃沢のカンニングを目にしたとき、由香里を強姦する筋書きを思いついた。灯油倉庫に呼び出したときには、略プロットは頭の中で組み立てられていた。

「その相手とはいったい誰なんだい？」

「同じクラスの唐木由香里だよ。まず彼女にラブレターを書いてもらう。文面は俺が考えてある。そして彼女を呼び出し、お前が一発決めた後俺が決める」

胡桃沢は今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「君は彼女のことが好きなのかい？」

胡桃沢のこの惚けた質問に、鬼頭は思わず笑ってしまった。

「別に好きとか嫌いとかじゃなく、あいつしかやってみたい女がいないだろう。お前だったら間違いない、由香里を落とせる。俺はそのお零れを貰うだけさ」

「そんな、僕は君が思っているほどプレーボーイじゃないよ」

鬼頭は水島のような不良とは違い、闇雲に金を要求し、できもしないことを無理強いするつもりはなかった。

由香里はこの学校で一番の美人だ。それは誰しも認めることだ。彼女に興味を持ったのは容姿だけではない。中学生にしては大人びた、あるいは覚めた少女だったからだ。幼い中学生の中であって、自分は特別な存在なのだと、周りの者に思わせる不思議な魅力があった。

水島に恐喝されたとき、教室の後ろに連れて行かれ「金を持ってきたか」と脅されている間、水島は自分に対して暴力を振るってくると感じ、水島の動きを注意深く観察していた。そんなとき、水島の後ろにある由香里の視線を感じた。他の者が皆、見て見ぬふりを決め込む中で、由香里だけが自分を見ているようだった。そして何より自分を庇ってくれた。それまでの、美人で高慢ちきな女というイメージが一気に崩れ、自分の気持ちが由香里に傾倒していくのに、それほど時間は掛からなかった。そんないい女なら抱いてみたいと、若い男なら誰でも感じるだろう。

「お前が誘えば、彼女は絶対来るし、お前だったら絶対嫌だとは言わない。お前はクラスでも、おそらく学校でも抱かれない男ナンバーワンなんだから」

普通女子は男子のいる前で、誰が好きだとか、誰々に抱かれないなんて、間違っても口にしないものだ。しかし夏の水泳の授業のとき、たまたま風邪を引いて教室に残っていると、なぜかその日は女子が半分近く休んでいた。男子は鬼頭だけだったが、女子生徒たちはまるで鬼頭がいないものとして、誰が好きだとか、誰が格好いいとか、抱かれるならあの人がいいとか、聞いているこちらが恥ずかしくなるようなことを平気で話していた。彼女たちにしてみたら鬼頭は、いてもいなくてもいい存在で、他の男子に自分たちの話した内容を絶対話さないと確信があったに違い

ない。鬼頭もそんなくだらない話を、他人に吹聴する気にはならなかったが、女子が胡桃沢に抱かれないと言ったことだけは頭に残った。男子が誰とエッチしたいと言っているのとまったく同じで、少々幻滅したことを覚えている。

「たとえ僕がうまくやっても、君が後からやったら、それは犯罪じゃないか。警察に捕まったら僕たち二人とも少年院送りになっちゃうよ。そんなやばいことするなら、進学校なんかに行かなくてもいい」

確かに胡桃沢の言うことは間違っていない。しかし由香里が警察に行かないようにする手筈は整えてある。この日のことを考え自分が働いている新聞屋の店主に頼んで、8mmカメラを貸してもらうことになっていた。それとは別に自分でも小遣いで、ポラロイドカメラを買った。

「彼女が警察に行かないように、8mmとポラロイドカメラで、お前がやっているところを撮る。それでお前が終わった後は、俺がやっているところをお前が撮る。だから彼女が警察に行くことは絶対にない。それに彼女は人一倍プライドが高いから、自分から男に強姦されましたなんておそろく言わないだろう。水島の一件以来俺はクラッシュから誘いを受けている。もしお前が断ればクラッシュに頼んで、お前の親父にすべてぶちまけたっていいんだぜ」

この中学校にも水島以外クラッシュのメンバーはいて、確かに族に入るよう誘われたこともあったが、暴走族に興味はなく直ぐ断った。しかしここでクラッシュの名前を出すことは、この計画で胡桃沢を参加させるには必要不可欠だと思えたのだ。クラッシュは悪い方面ではそれなりに名が通っている。水島の一件もあり、彼らに目をつけられたら何をされるか分からない。その恐怖は男子に限らず女子でさえも持っていたに違いない。だからクラッシュの名を出すことは、煮え切らない胡桃沢の背中を押すには、一番効果的だと思えた。

「君は水島なんかよりよっぽど悪い奴だよ。水島が日本のヤクザなら、君はアメリカのマフィアだ。僕は水島より君のほうが怖い。君の悪さは中学生の域を超えている」

胡桃沢の瞳は涙目になっていた。このとき胡桃沢は鬼頭の中に存在する、悪魔のような力を感じ取ったのかもしれない。

「それは褒め言葉として受け止めておく。俺は目的のためなら手段を選ばない。五条の橋の上の弁慶じゃないけど、水島は最初に俺のところにかつあげに来れば、鑑別所に行かなくて済んだのに。馬鹿な奴さ。上には上がいるということをあいつは分かっていた。暴力だけで相手を自分の思うようにさせるのは、原始時代の原人がやることさ。どんな奴でも必ず弱みがある。そのことをちゃんと調べておかなくちや、自分で自分の墓穴を掘ることになるからな」

鬼頭は不敵に笑った。

「結局僕は君の言うとおりにするしかないんだね。分かったよ。君の好きなようにしたらいいさ。でも彼女が嫌がって、君の思うようにことが運ばなかったら、それは僕のせいじゃないからね」

胡桃沢は観念したのか、諦めたのか、言葉が投げやりになっていた。

「そんなことは分かっている。そっちのほうは俺なりにちゃんと考えてある。お前が心配することじゃない」

この後、胡桃沢に何をするか簡潔に説明した。まず冬休み数日前に由香里の机か鞆にラブレターを入れ、冬休みになったら東山中腹にある小島神社に呼び出し、本殿の中で由香里を抱く。そ

して、その場面を8mmとポラロイドカメラで撮り、交替して今度は鬼頭が由香里を抱く。写真さえ撮ってしまえば、由香里は他人に自分が強姦されたとはよもや言うまい。

「お前噂では第一中学の女子と付き合っていると聞いたけど、その子とはもうエッチしたのか？」

これは男子生徒の間で噂になっていたことだが、真相はどうでもよかった。ただ胡桃沢がどう反応するか、からかい半分で訊いてみたかった。

「彼女とはたまに会っているけど、そんなことはしていないし、しようとも思わない」

「まあいいさ。お前が彼女とやっついようといまいと、この計画がうまくいけば、本来俺は他人のことには関心がない」

暖冬とはいえ、外での立ち話はやはり骨身にしみる。胡桃沢が納得しようとしまいと、ここまで来たらやるしかない。部活が始まる前のグラウンドは閑散としていた。もう少ししたら野球部の連中が来る。鬼頭は学生服のポケットから、一枚のレポート用紙を取り出し胡桃沢に渡した。

「すべてこの紙に書いてある。ラブレターの書き方から、会う日の日時、お前が当日やることを細かく書いてあるから、読んで頭の中に叩き込んでおけ。内容を覚えたら捨ててもらって構わない。詰めの打ち合わせはまたこっちから連絡する。期待しているからな。優等生」

鬼頭がグラウンドを離れても、胡桃沢は暫くバックネット裏に呆然と立ち尽くしていた。

4

鬼頭がいなくなっても、胡桃沢は暫くそこを離れなかった。鬼頭から渡された便箋を開いて内容を読んでみた。由香里を強姦する計画が細かく書かれている。

「頭に叩き込んでおけ。内容を覚えたら捨ててもらって構わない」

その言葉に小学校のとき、テレビで観たスパイ大作戦を思い出した。

「例によって君若しくは君のメンバーが捕らえられ殺されても、当局は一切関知しないのでそのつもりで」

スパイが指令を受けると、テープが自動で燃えてなくなる。

あいつには感情がない。というか心がない。同じバスケット部の山岸が言っていたのだが、小学校三年の下校時、男の子が川に落ちてしまった。翌日担任が班全員を皆の前に呼び出し、なぜ男の子が川に落ちたのか皆から訊いた。原因は山岸にあったらしいのだが、それが怖くて思わず鬼頭のせいにした。担任はそれをまともに受け取り、鬼頭を叩いた。鬼頭は頭にきて、山岸に飛び掛った。そのとき殺されるんじゃないかと思った。と山岸は自分に語った。それを耳にしたとき、胡桃沢にとって鬼頭はあまり目立たない存在で、感情を剥き出しにして怒りを露わにすることが信じられなかった。鬼頭について走るのが他の者より多少速いという印象以外、取り立てて目立ったところがないように感じた。勉強も運動も普通でクラスでも目立たない、どちらかというとおとなしい暗い印象の男子生徒だった。ただ皆と笑ったりふざけあったりしているところを見たことがない。いつも一人でいるという印象だった。

水島が恐喝相手に選ぶには、それなりの理由があると思う。胡桃沢が知っている範囲では、とてもおとなしい喧嘩なんか絶対しないような者ばかりだ。鬼頭も最初はそのようにしか見えなかった。水島もそれだから鬼頭を選んだのだと思う。直接目にしたわけではないものの、あれほど

暴力を誇示していた水島が、おとなしいと思っていた鬼頭に、いとも簡単に伸されてしまった。そのときはいい気味だと思ったと同時に、鬼頭という男はいったい何ものだと感じた。胡桃沢は水島が絶対自分のところには恐喝に来ないと確信している。水島の暴力は怖かったが、それを誇示するようなら先生に言うか、警察に訴えたいだろう。しかし今回は胡桃沢が、不正行為をしたという後ろめたさもあるがそれだけではない。何か言い知れない不安が付き纏った。鬼頭に対して君はマフィアみたいだと言ったが、鬼頭の言うことを聞かなければ、何をするか分からない怖さがある。夏休み、山岸や鬼頭の小学校時担任だった若林が、何者かの悪戯にあい風呂場で蝮に噛まれた。という記事が新聞に載っていたが、もしかしたらこれも鬼頭の仕業かもしれない。鬼頭にはそのように思わせる怖さがあった。自分は鬼頭に対してNOと言えない。鬼頭は信じてくれなかったが、カンニングをしたのはあれが初めてだった。カンニングしたのは鬼頭が言うように、進学校に行くため、内申書を気にしたからではない。それは父、高貴の存在があったからだ。東大を出ている高貴は息子も東大に入れようとしていた。高貴の勉強方法はとてもシンプルなものだった。まず学校の授業の復習、予習をきっちり行う。授業中は先生の話を中心して聞く。特に授業を集中して聞くことにより、試験に何が出題されるか自ずと分かってくる。というものだ。確かに高貴の言うように授業に集中していれば、特別な問題集を買ってやらなくても、自然と先生がどこを出すのか分かってくる。今までその予想が七割は当たっていた。高貴は授業さえしっかり聞いていれば、試験勉強なんてしなくても、ある程度点はとれるという考えだ。しかし今回は風邪を引いて数日休んでしまったこと。勉強に集中できなかったこともあり、高貴の顔がちらつき精神的に追詰められ、頭がパニックになってしまった。そして仕方なく教科書を見ていたところを、偶然鬼頭に見られたのだ。試験の結果はすべて高貴がチェックする。なぜそこを間違えたのか、理解するまで胡桃沢から離れない。この高貴の御陰で、小学校のときから成績が良かった。今回は鬼頭に不正行為を見られた後の成績は惨憺たるものだった。母は高貴に風邪を引いていたから仕方ないでしょと庇ってくれたが、高貴の考えは違っていた。

「幸一郎受験は戦争なんだ。風邪を引いたから成績が悪かったなんて、それは言い訳だ。試験の当日に風邪を引きました。次の日にして下さい。そんなこと言っても通らないだろう。健康管理には人一倍気をつけなければならない。スポーツ選手でもそうだろう。怪我をし病気になるれば、試合に出る回数も少なくなってしまう。風邪を引いたから成績が下がった。それはお前の単なる言い訳、逃げ道に他ならない。お前は緊張感が足りないのだ」

高貴は兎に角厳しかった。子供の頃からいつも高貴に怒られまいとびくびくしていた。大学も東大に入れるとは考えていない。取り敢えず東京の大学に進学し、早く高貴の下から離れたい。高貴から逃げたい。そればかり考えていた。高貴の存在は胡桃沢にとってはとても大きな存在だった。家の中では高貴が法律であり神だった。高貴が黒いと言えば白いものも黒になる。幼稚園のときから勉強に対しての嫉は厳しかったので、勉強すること事態は嫌いではない。いつも成績が良いのは当たり前になってしまって、成績が落ちるのがとても恐怖だった。母はとても美人で優しくだったが、高貴に反抗することはできない。高貴に怒られないようにカンニングをし点を取ろうとしたが、それを知った高貴は更に激怒するに違いない。そして自分はもうあの家に帰れない。高貴にとって自分はサーカスのライオンや、調教される競馬馬と一緒なのだ。

鬼頭がどのような性格なのか分からないが、もし彼の言うことに従わなければ、おそらくカン

ニングのことを高貴に言い付けるだろう。そうになったら自分はもう終わりだ。気がつくやうと野球部の連中が来てキャッチボールを始めていた。

鬼頭が言うように、その日の夜早速電話が掛かってきた。その電話の内容を胡桃沢はすべてメモにとった。由香里に出す手紙の文面は鬼頭の言われたとおりに書いた。そして冬休みが始まる前に、由香里の鞆に本人に気づかれないように、そっと手紙を入れておいた。

どうしても鬼頭の要求を拒否することができなかった。由香里を強姦する日まで自分は、高貴だけでなく、誰に対しても自己の考えを押し通すことができなかったのである。たとえそれが間違っていると分かっているとしても。

胡桃沢にとって由香里は、それほど魅力的な女性には見えなかった。確かに彼女は綺麗だが、だからといって魅力があるとは思えない。皆が騒げば騒ぐほど、その思いが強くなっていく。部活の部員からも何度となく言われたものだ。

「胡桃沢が声を掛ければ、絶対あの女お前についてくるぜ」

今付き合っている他校の彼女は単なる幼馴染に過ぎない。小学校高学年のとき、隣町に引っ越していった。胡桃沢にとって中学生は性の対象にならないのが本音である。セックスに対して多少興味はあった。しかし中学生、たとえ胡桃沢と同じ年であっても、セックスをしたいとは思わなかった。それはある種のマザコンかもしれない。胡桃沢の母は誰が見ても綺麗だと言う。高貴は母の中学時代の家庭教師で、母が短大卒業と同時に結婚した。二十歳そこそこで姉を産み、その後直ぐ胡桃沢も産まれた。今三十八歳だがとてもその年には見えない。一つ上の姉は高貴に似たのか、容姿はそれほど美しくなかった。母があまりにも美しすぎたため、胡桃沢の性的欲求は、他のこの歳の男子とは少し違っていた。

デートの当日鬼頭が、約束の二時間前には来ていると言ったのでその通りにした。家から自転車に乗り、自転車を山の麓にある石油タンク管理小屋の陰に隠した。これも鬼頭の指図だった。この日までとても憂鬱な気持ちだったが、なぜか今日は不思議と清々しい気分になっていた。これから罪を犯すというのに、後ろめたさがまったくないのは、自分でも不思議に思えた。

小島神社に着くと既に、鬼頭は胡桃沢が来るのを待っていた。

「自転車は例の所に置いてきたか？」

「うん」

「本殿を寒くないように暖めておいたからな」

胡桃沢は鬼頭が立っている本殿の前まで行き、格子の間から中を覗いた。中には火の点いた七厘が置いてある。どこから持ってきたのか、そこまですることに驚きを覚えた。本当にこんなところで由香里とセックスをするのだろうか。格子戸には鍵がついていない。鬼頭がこじ開けたのだろう。今まで頭の中だけで想像していたことが、実際この場所に来てよりリアルに感じる。

「本当にやるんだね」

「当たり前だろう。先ず彼女が来たらここに腰掛け、世間話でもする。その内容はお前に任せる。部活のことでもいいし、最近観た映画の話でもいい。ある程度気持ちが高ぶってきたら、彼女の肩を抱き寄せ優しくキスをする。それからはお前の好きなようにすればいい。俺はその隙間から8mmを回したり写真を撮ったりしているから」

本殿の壁には杉板が張ってあったが、胸の高さ辺りに、木の節目がきれいに円く切り取られていた。その穴は丁度8mmレンズの大きさだった。

「君はまるで映画監督みたいだね」

「ふん……」

鬼頭は小馬鹿にしたように鼻をならした。自分の筆おろしが、他人の演出によって行なわれることがとても悲しかった。本当に鬼頭の言うように警察に捕まらないのだろうか。自分も災難だが由香里はもっと気の毒だ。自分に抱かれるのは良いとしても、それを8mmに撮られ、その後鬼頭にまで強姦されるなんて。できることなら来ないで欲しい。ここに来るということは、多少自分に気があるのだろう。鬼頭の卑劣な行為によって、由香里は身も心もずたずたになるに違いない。そうなったらその後、彼女をまともに見ることができなくなってしまう。

「由香里が来るまでまだ時間がある。あっちの雑木林の中に隠れるぞ」

鬼頭はポケットから手袋を出しそれを嵌めた。本殿を暖めていた七厘の火を消し外に運び出すと、それを本殿裏の林の中に隠した。そして胡桃沢について来るように促すと、林の中に入って行った。例年だったら雪が積もり一面真白になっているはずが、今年は雪が降っても雪が残らない。胡桃沢は鬼頭の後を追いつ、落ち葉の積もった林の中をゆっくりと歩いて行った。鬼頭は背中にナップサックを背負い、黒いナイロンのジャンパーに茶色のコーデュロイのズボンを穿いている。

「君の家はこの近くにあるのかい？」

先を歩いている鬼頭に声を掛けた。

「ああ、直ぐそこだよ」

鬼頭が指差す方角を見ると林の隙間から、胡桃沢たちが通っていた小学校が見えた。胡桃沢たちが卒業すると同時に建て直したため、昔の木造校舎が、今は鉄筋コンクリート三階建てに変わっていた。

「小学校へ行く道と、線路の中間に細長い二階建てのクリーム色の建物があるだろう。その団地だよ」

なるほどここは鬼頭の庭みたいなところなのだろう。ここから鬼頭の家まで歩いてもさほど距離がないように見えた。それから暫く歩くと鬼頭は足を止めた。

「ここら辺で由香里の来るのを待とう」

ここからは市街地と向かいの姨捨山まで見渡せた。青い空は雲もなく姨捨山がなければ壮大な北アルプスが望めたはずだ。自分はいくら容姿が整っていても、あの姨捨山に隠れた北アルプスと一緒になのだ。この神社のある東山の麓を見ると、駅からこの小島神社に続く道がはっきりと確認できた。由香里が来るとすれば、この道を通ってくるに違いない。小学校の授業の時間何度かこの山に登ったが、こうして自分の住んでいる町を見下ろしたのは初めてのような気がする。

「あそこにD51があるだろ。由香里の家はその直ぐ近くにあるんだ」

鬼頭が指差した先には亀の形をした体育館があり、その横に黒い蒸気機関車が展示してある。鬼頭がそのことを知っているかどうかは分からなかったが、胡桃沢の家もそこからさほど距離のないところにあった。由香里は中学に入ってから越してきたのだ。

隣にいる男はいったい何を考え今日ここに来たのだろう。自分はすっかりこの男の僕と成り下がってしまった。高貴の存在は確かに怖い。それは必要以上に、胡桃沢の未来に期待していることに、はたして自分はそれに答えることができるかという不安が常にあったからだ。それは胡桃沢にとって生まれ持った宿命であり、胡桃沢の家に生まれてしまった以上避けられないことだった。しかし鬼頭の存在は交通事故のようなもので、それは胡桃沢さえ気をつけていれば防げたのだ。最初に毅然とした態度をとっていれば、鬼頭もこれほどまでに胡桃沢に付け込むことはなかったのでは。それはつまり自分が鬼頭に弱さを見せてしまった付けのような気がしてならない。鬼頭がやっていることは、水島のやっていることと何ら変わらない。水島の要求を拒否すれば暴力という制裁が待っている。だが鬼頭の要求を断れば高貴の信用を失ってしまう。それと同時にもっと大変なことになるような気がした。

二人は無言のまま暫くそこに佇んでいた。同じクラスにこれだけ鬼頭と話をした者がいたのだろうか。それからどのくらい時間が経ったのだろう。

「おいあれを見ろ。由香里が来たぞ」

鬼頭の指す方角を見ると、一人の女の子が自転車を漕ぎ、此方に向かっているところだった。「神社に戻ろうか」

二人は再び神社に向かって歩き出した。鬼頭は先ほどと違い歩くペースが早かった。鬼頭の足が速いのはこの山で鍛えられたのだろうか。神社の裏手まで来ると鬼頭は立ち止まった。それにつられて胡桃沢も足を止めた。

「由香里が来たらこう言え。僕は身体を鍛えるため、サーキットトレーニングでよくここに来るんだ。今日はこんなところで御免ね。今度は長野に映画でも観に行こう。とね。こんなところに呼び出されて、彼女もきっと不安になっているに違いないからな。後はお前のテクニックしだいだ」

ここまで来たら鬼頭の無責任な言動に従うしかない。小島神社は山の斜面に建っている。神社の裏手は傾斜して雑木林になっていた。二人は神社より高い位置に立ち、そこから由香里が坂を登ってくるのを待った。暫くすると白いコートを着た由香里が境内に入って来た。辺りを見回し時計を確認すると境内を歩き出した。由香里の位置からは、此方の二人のいる位置は、雑木林が邪魔になって見えないはずである。

「おい頑張れよ」

胡桃沢は鬼頭に肩を叩かれ、渋々と本殿の前まで歩いて行った。

6

夏休み学校のプールは、午前中に限り生徒なら誰でも利用することができた。午後からはこの学校の水泳部が使用することになっている。午前中の使用時間は十一時三十分までとなっていたため、使用時間が過ぎると生徒たちは一目散で家に帰る。しかし午後一時になると再び男子生徒だけプールにやって来る。目的は一つ人魚を見るため。午後一時になると水泳部の部活動が始まる。それほど多くない部員の中に一人だけ、とても美しい女子生徒が泳いでいた。水の中を人魚のように泳ぎ、プールから上がりプールサイドに腰掛ける。スイムキャップとゴーグルを外すと、長い髪がゆらりと肩に掛かる。大きなはっきりした目は、一際彼女を美しく見せていた。彼女の名は唐木由香里。プールサイドに座ったその姿は人魚のように美しかった。

夏休みが終り大会も終わってしまうと、由香里の水着姿は見られなくなってしまう。弱小の水泳部は市の大会に出ても次の大会に進むことはなく、一回戦で敗退していた。夏が終わり大会も終わると、選手たちも一斉に受験の準備に入る。由香里もその一人だった。

由香里は自分がこのように注目されることに喜びを覚え、いずれは芸能界に入りたいと願っていた。何度か東京にある芸能プロダクションの、オーディションを受けに行ったことがある。誰が見ても確かに綺麗なのだが、ただそれだけなのだ。歌番組のオーディションでは、歌唱力がなく、さりとしてダンスができるわけでもなく、合格するのはまだ先のように思えた。

由香里の容姿は整っているのだが、何かいま一つ特徴がない。由香里には個性がないのだ。それは由香里が何度となくオーディションに上京し、あらゆるジャンルから見向きもされず、芸能人というのはただ綺麗なだけではなれないということ、身をもって思い知らされた。どのオーディションに行っても、モデルなみの美人は沢山いる。その中に入ってしまうと、由香里の存在は目立たなくなってしまう。ちょうど赤いバラの中に赤いバラが紛れ込んだように。

由香里は歌手になりたいとか、女優になりたいとかいう目標があったわけではなく、ただ単に芸能界に入りテレビに出たかっただけなのだ。芸能界に入る門があまりにも狭く、自分を受入れてくれないことに腹立たしささえ覚えた。それは追えば追うほど逃げていく青い鳥のように、いつになっても捕まえられないような気がした。

由香里は学校のマドンナ的存在であったが、彼女に直接言い寄って来る男子は皆無だった。それはまだ中学生ということもあるが、彼らにとって由香里は高嶺の花だった。由香里自身もつま

らない男に言い寄られるより、中学生の間は愛だの恋だのと、男に振り回されるような尻軽女にはなりたくないと思っていた。由香里の父親はとてもハンサムな男で、彼女の容姿は父親譲りかもしれない。父より劣った男性とは付き合いたくなかった。

女子中学生では当たり前の如く、男性を選ぶ基準は第一に容姿である。由香里も当然男性を選ぶ基準として最も大切なのは、容姿であることはいうまでもない。自分と釣り合う男性はなかなかいないが、この学校で唯一自分と釣り合う男性は、同じクラスの胡桃沢意外に考えられなかった。そんな最中、三年生最後の冬休みが始まろうとするとき、胡桃沢から一通の手紙が届いた。

今まで、同じクラスで三年間一緒だったにも拘らず、胡桃沢とプライベートな話しをしたことがなかった。由香里は中学二年生のときから、彼氏にするなら胡桃沢と自分勝手に決めていた。しかし胡桃沢の方からモーションを掛けてくることはなかった。プライドの高い由香里にとって、自分のほうから声を掛けることはできない。だからてっきり自分に対して興味ないものと思っていた。そんな胡桃沢から手紙が来たことは、由香里にとって心躍る出来事に違いない。手紙は通学用の肩掛け鞆に入っていた。真白な長方形の封筒には、表も裏も何も書かれていない。このような手紙を貰うのは初めてだった。下校時に机の教科書を鞆に入れるとき気づいたのだが、最初は何の手紙か分からず、その場で開封するのが躊躇われた。家に帰り自分の部屋で鋏を使って開封した。中身はラブレターだった。

そこには次のことが書かれていた。

〈ゆかりさんへ、僕は以前からゆかりさんのことが好きでした。しかし僕たちは同じクラスということもあり、周りの目も気になって、僕のほうから気安く声を掛けることはできません。もう少ししたら御互い別々の高校に進学することになると思います。そうなるとゆかりさんに会える機会を失ってしまいます。最後の冬休みということで、ぜひ僕とデーとして下さい。もし僕のことを嫌いでなかったら、十二月二十七日の午後二時に東山にある小島神社で待っています。胡桃沢〉封筒の中は何の飾り気もないたった一枚便箋が入っているだけだった。今まで胡桃沢を外面でしか見ていなかったのも、あまりにも味気ない内容の手紙だったため少し拍子抜けした。彼が作文でもあまり上手な文章を書いた記憶もないし、いい男というのは、こうゆうつまらない文章を書くのかもしれないと思ったりもした。少女マンガのように、ヒロインが貰うラブレターはもう少しロマンチックなのに、現実はこのものなのか。

最初この手紙を貰ったときに気がつくべきだった。何か少し変に思ったものの、胡桃沢から貰った手紙ということで、つい有頂天になってしまった。考えてみればこんな真冬に、人が殆ど来ない山の中腹にある小島神社に、呼び出されること自体不自然だと思うべきだった。その手紙が自分の運命を決めてしまうくらい、意味のあるものになるとは、そのときの由香里には分かるはずもなかった。

手紙の内容はつまらないものだったが、胡桃沢が自分に好意を持っているということが凄く嬉しかった。断る理由などどこにもない。デートの日まで五日あったが、勉強も手に付かないくらい気持ちが高揚していた。由香里にとって初めてのデートだった。洋服箆笥から当日着ていく服を何着も出してはまた仕舞った。前日のお風呂はいつもの倍時間を掛け身体を洗った。

デート当日の朝はいつもより暖かかった。川の土手に残雪は残っていなかったし、道路のア

スファルトも乾いていた。由香里の家から小島神社まで多少距離があったので、自転車で行くことにした。

この町は各地区にその地の氏神様を祭る神社が一つある。春と秋の祭りのときは、子供の相撲大会を催したり、露店商が来て店を出したりする。このとき子供たちは親から小遣いを貰い露店商の周りを囲む。春と秋の子供たちの楽しみの一つだった。各地区の神社には宮司がいるわけでもなく、近所の子供たちがごく稀に鬼ごっこをやるくらいで、いつもは閑散としていた。他の神社が比較的住宅地に隣接しているのに対し、小島神社だけ山の中腹にあった。

屋代駅から千曲橋を抜け稲荷山温泉に行く道がある。由香里の家はその道沿いに走り千曲橋の手前を左に曲がった土手の近くに位置していた。

駅まで側道を走り、駅裏にある市営住宅に抜ける踏切を渡ると、線路沿いに大きな石油タンクがある。そこには石油会社のマークの付いた黒い貨車が何両も停まっていた。踏切を渡ると、団地に行く道と小島神社に行く道に分かれている。団地に行く道はタンクローリーが通れるほどの道幅があり舗装も施してあったが、小島神社に行く小道は舗装もしてなく道幅も狭かった。神社の登り口まで行くとまだ胡桃沢は来ていないのか、自転車はどこにも見当たらなかった。

由香里は手袋を嵌め、白いロングコートに黒いハーフブーツを履いて家を出て来たが、自転車を漕いだせいもあり身体が熱っていた。ここから小島神社まで歩いて坂道を登らなければならない。胡桃沢は何でこんな場所を初デートに選んだのだろう。神社までの参道は階段状になっていて、朝の霜柱が融けぬかるんでいた。坂をゆっくり登り神社に着くと、外は気温が低いにも拘らず、額に薄っすらと汗が滲み出てきた。手袋をはずしポシェットからハンカチとリップクリームを取り出し、汗を拭いて唇にかかるリップクリームを塗った。リップクリームはピンク色でラメが入っている。腕時計に目をやると約束の時間まで、まだ五分あった。とても狭い境内を一周すると、本殿の前にいつの間に来たのか胡桃沢が立っていた。

「今日はありがとう」

胡桃沢は由香里の方を向き微笑んだ。由香里は自分の方から近づいて行った。あれほどまでに望んでいたことなのに、いざそれが叶うと、何か虚しいものが心を覆う。あれほど彼が欲しいと願ったのに。

去年の夏休み家の車で旅行に行ったとき、カーラジオから流れていた井上陽水の『限りない欲望』という歌を思い出した。子供のとき、母にねだりやっとな手に入れた白い靴をいつも履いていた。ある日町に行くとき靴屋の前に素敵な青い靴が飾ってあった。というような内容の詩だったが、今の由香里にはその子の気持ちがよく分るような気がする。

由香里からすれば、学力も運動神経もすべてに於いて胡桃沢の方が勝っている。女子生徒からの人気も高い。あれほど待ち焦がれていた男子が目の前にいる。しかし純粋な恋心とは少し違った。胡桃沢は兎に角格好いい。目鼻立ちが整い日本人離れした顔をしている。でもわたしは、果たして胡桃沢に恋をしているのだろうか。周りに自分と釣り合う男性がいらないため、無理に胡桃沢を好きになり、それでプライドを保とうとしているのではないか。

「いつの間に来たの？全然気がつかなかった」

「僕は少し早く来すぎて、将軍塚の方まで行って来た。それでそろそろ時間かなと思い、戻って見たら君がいた」

気のせいかな胡桃沢の笑顔が凄く嫌味に感じた。

「ここは僕のサーキットトレーニング場なんだ。休みの日はここの階段を何往復もする。初めてデートするのにこんなところはどうかと思ったんだけど、あまり知り合いとかに会いたくもないし、色々考えたらここしか思いつかなかった。今日はこんなところにしちゃったけど、今度は長野に映画でも観に行こう」

デートに誘ってくれたのは嬉しいことに違いないが、付き合ってもいないのに、もう彼氏面している胡桃沢に、ナルシズムを感じずにはいられなかった。

胡桃沢はジーパンに黒の革ジャンというラフな格好だった。

「そうだったんだ。わたし何でデート場所を神社にしたのか、ちょっと不思議だったものだから。ここは胡桃沢君のトレーニング場だったんだ」

二人はこの後たわいない話をし、本殿の賽銭箱横に腰を下ろした。そして部活のことや由香里が芸能界に憧れていること、東京までオーディションを受けに行ったけど、なかなか合格できないことなどを話した。気がつくとなあという間に一時間が過ぎていた。外はかなり寒いはずなのにまったく寒さを感じない。これも好きな人と一緒にいるからだろうと勝手に解釈した。

「諦めちゃいけない。君ならきっと女優になれるよ。僕が保証する」

そんなことをいう胡桃沢の瞳こそ、俳優のように潤んで輝いていた。その瞳にじっと見詰められると、何か力が吸い取られるような気がしてくる。瞼が重くなり胡桃沢の顔が視界から消えていくと、暖かいミントの香りのする吐息が由香里の額に近づいた。それはとてもゆっくりだった。由香里を抱き寄せる手が肩にかかり、わずかに震えているように感じた。すべてを投げ出し胡桃沢に身を預けた。私はこのときを待っていた。胡桃沢は優しく由香里を受け止め、遠慮がちに自分の唇を由香里の唇にそっと重ねた。由香里にとっては何もかも初めての経験だった。やはりわたしの唇を捧げるのは胡桃沢しかいない。胡桃沢でなければだめなのだ。胡桃沢の厚い胸板に抱き寄せられ口付けを交わしたとき、全身に電気が流れたような感じがした。それは決して不快なものではなく、かといって心地好いものでもなかった。大人になるための扉を一つ開けたような達成感のようなものがあつた。このとき胡桃沢は由香里のことが好きで、わたしを抱きたいのだと何の疑いも持たなかった。寧ろ初めてのデートにも拘らず、早く彼と一つになりたいと願う自分がそこにいた。

わたしはこの男に抱かれない。そのときは心底そう願った。冷静に考えれば、中学生の二人が初めてのデートで、このようなかたちになることは極めて不自然だ。しかしそのときの由香里には、そのように考える心のゆとりがまったくなかった。

胡桃沢の口付けは凄く長かった。大人のようなディープなキスではなく、唇と唇を重なり合う単純なキスなのに、その後どうしたらいいのか、手を拱いているようで、すべてがスローモーションだった。まるで夢の中にいるような感じがした。深い眠りに落ちていくような感覚になりかけたとき、胡桃沢が本殿の格子戸を開けた。そして御互い上体を本殿の床に近づけていった。由香里が下になり胡桃沢が上になった。厚いコートを着ていても、床板の冷たさが背中まで伝わってくる。初めてなのに、一瞬色々なことが頭を駆け巡った。女性週刊誌で初体験は学校のトイレだったとか、体育館倉庫だったとか、彼の車の中とか、色々書いてあつたが、わたしは神社の本殿

の中。胡桃沢にバーズンを奪われるのはけっして嫌でないが、こんな場所で初体験を経験するのは、中学三年生の少女にとってあまりにも現実離れしているようで、ロマンチックに欠けている。しかしここで拒んでは胡桃沢に嫌われてしまう。わたしの初めての相手は胡桃沢以外に考えられない。このような素敵な男性とのチャンスを逃してしまったら、永遠にわたしはバーズンのままかもしれない。この際場所なんてどうでもいい。相手が胡桃沢であればたとえ体育館倉庫でも構わない。目を瞑っていると、由香里の乳房をぎこちなく弄っている胡桃沢の手の感触が伝わってきた。最初は服の上からだだったが、そのうちコートのボタンを外し、セーターを捲り上げ、ブラウスのボタンも外した。胡桃沢の唇が由香里の唇から離れると、由香里の首筋に直接荒い息づかいが伝わってきた。ブラウスのボタンがすべて外されると、薄いパールホワイトのブラジャーが露わになった。胡桃沢はブラジャーを外さず由香里の胸の谷間から乳房に手を忍ばせた。

「冷たい。お願い、優しくして」

胡桃沢は慌てて手を引っ込めた。

「御免」

酷く興奮し焦っているのが由香里にも伝わってきた。

「ちょっと待って、自分で脱ぐから胡桃沢君も脱いで」

不思議と恥ずかしさはなかった。

「分かった」

胡桃沢は由香里に覆い被さっていた身体を起こし、履いてきた黒のショートブーツを脱ぎ本殿の中に入った。本殿の格子戸に鍵はなく、中は板の間で三畳ほどの広さしかない。由香里も胡桃沢に続いて履いてきたブーツを脱ぎ本殿の中に入った。本殿の中は外とは違って寒くなかった。胡桃沢は自分の着ていた服をトランクスだけ残しすべて脱いだ。黒のトランクスを穿いており、股間は脹らみうっすらと濡れていた。

「トランクスも脱いで。そしたら私も脱ぐから」

自分で言うおいて自分で驚いた。いくら好きな人でも乱暴に服を剥ぎ取られるのは悲しい。これも女性週刊誌で読んだのだが、初めてのとき彼が興奮しすぎてブラジャーのホックが外れず、肩紐を引き千切ってしまったとか、パンティーを破かれ悲しかったというような体験が掲載されていた。自分のほうから彼を求めているみたいで、淫乱な女と思われたらどうしようと思ったが、以前観た映画『潮騒』の少女のように、勇気をだして言った。

胡桃沢はまったく恥らもなくトランクスを脱いだ。そこには濡れて赤紫に輝く男根が、臍に向かいそそり立っている。美しく整った顔とグロテスクなそれは、あまりにもアンバランスだった。胡桃沢の裸体に興味があったわけではないが、暫く裸体に見蕩れていた。それはまるでロダンの彫刻ダビデ像のように、均整がとれて美しかった。

「君も脱ぎなよ」

ほんの二時間前まで殆ど話しすらしたことがなかったのに、やっと自分の近くに来てくれたような気がして嬉しかった。初潮がきてまだそれほど年数が経っていないにも拘らず、思いを寄せていた人と結ばれる。こんなに順調にことが運んでしまっているのかとすら思えた。

「恥ずかしいから後ろを向いて」

胡桃沢が後ろを向くと、コートを脱ぎ服も脱いだ。そしてコートを肩に掛け、ブラジャーを外しパンティーも脱いだ。不思議と寒さはあまり感じなかった。素肌のままコートを羽織った。前を隠し胡桃沢の背中に抱きついた。身体は冷えていたが、それでも体温が由香里の身体に伝わってくるのが分かった。胡桃沢は由香里のほうに身体を向き直し、コートを羽織ったまま抱きしめた。そしてゆっくりと由香里を本殿の床に寝かせると、コートの前を開けた。コートの下には未発達だが形の良い乳房があった。肌の色は胡桃沢のほうが白い。由香里は水泳をやっていたので、水着の痕がうっすらと付いて、乳房と胸の谷間との間に綺麗なVラインをつくっていた。もう少ししたら日焼け痕もとれ、女性らしさがより際立つに違いない。

乳房を弄る胡桃沢の手が痛かった。もう少しでわたしはバージンでなくなる。太股に胡桃沢の男根が当たり、ラストバージンが刻一刻と迫ってくる。ここまで来たらもう引き返せない。彼といくところまでいくしかない。少しも怖くなかった。そんなとき目の前に何かが光った。目を閉じていても、光は瞼を透して由香里の目に飛び込んでくる。それが一度ならず何度も続いた。

「おい、そこまでだ」

小動物を踏んだような鈍い音がした後「うぎゃー」という胡桃沢の呻き声に瞼が自然に開いた。目の前にいる胡桃沢の顔は歪んでいる。痛さを必死に堪えている形相だった。それは白いハンカチが溝に落ち、あっという間に汚れが染み込んでいくように、あれほど綺麗だった胡桃沢の表情は、見るに耐えない顔に変貌していた。

胡桃沢の後ろに立っていたのは、同じクラスの鬼頭だった。何でこの男がここに。

「キヤー」

いったい何が起こったのか分からない。ただそれは、良いことではないことは確かに思えた。

7

自分の好きな女、或いはとてつもないいい女と、セックスしたいと思うのは男としては当然のことだろう。それでその女に自分の方に振り向いてもらおうと、あらゆる努力を惜しまないのも男だ。鬼頭も由香里とセックスしたいと思い、今日まで努力を重ねた。しかしそれは普通の若者がする努力とは大きく異なっていた。鬼頭は自分が好きになっても、相手に好きになってもらうとは考えなかった。鬼頭の心底には、どうせ自分なんかを好きになってくれる女性なんて現れるわけがないと、悲観的な考えを持っていた。それがもう少しであのいい女を自分のものにできる。そう思うと身体の芯が熱くなってきた。

神社の石段を登って来る女性特有の、石を蹴るヒールの音が鬼頭の股間を熱くさせた。

「おい頑張れよ」

胡桃沢の肩を軽く叩き見送った。釣り針につけた餌は、みてくれは良いが元気が今一つない。果たして釣れるのだろうか。

胡桃沢と由香里が本殿の前で立ち話しをしている間、鬼頭はナップサックから8mmカメラとポラロイドカメラを取り出した。ポラロイドカメラを首から掛け、8mmを手を持ち本殿の裏手に行き、予め穴を開けておいた場所に8mmのレンズを当てた。ファインダーを覗くと、格子の向こうに二人の姿が見えた。本殿の中なら隅に立たない限り、どこでも撮れる準備ができた。

二人は始めのうち賽銭箱の横に座り、くだらないことを永遠と話していた。こいつ本当にこの女とやる気あるのかと疑いたくなるほど、何もせず時間だけが悪戯に過ぎていった。

8mmを持っている手がだんだん痺れてきた。態勢を整え柔軟運動をしようとレンズを穴から外すと、二人の行為はゆっくりと始まった。もう一度レンズを穴に挿し込み録画スイッチを押す。格子越しに、それも後ろから撮っているので、何をしているのか分からない。やがて格子を開け二人が床に倒れ、胡桃沢が由香里の胸に手を入れた。真冬なのに8mmを持っている手が汗で湿っている。8mmを廻し続けていると、二人はブーツを脱ぎ本殿の中に入って来た。最初胡桃沢が服を脱ぎ裸になった。胡桃沢の男根は鬼頭のものよりひと回り大きい。スポーツで鍛え上げられた身体は顔に比例し、男の鬼頭が嫉妬を感じるほど均整が取れていた。

神を信じない鬼頭でも、どうして世の中はこうも不公平なのかと思わざるをえない。学校で一番の美男と美女。俺は決して自分の境遇を不幸だと思いたくないが、そんなけちな男にお前たちの幸せは壊されるのだ。

由香里も服を脱ぎ下着姿になると、再びコートを羽織り、下着を外した。そして二人は再び抱き合った。その間ずっと8mmを廻し続けた。胡桃沢が由香里の形のいい乳房を弄っているとき、鬼頭自身の股間が勃起しているのが自分でも分かった。鬼頭は一旦8mmを撮るのを止め、自分の足元に8mmをそっと置いた。そして首に掛けてあるポラロイドカメラを手を持ち、本殿の正面に回り込むと、二人が裸で抱き合っていた。ストロボを作動させ何回もポラロイドカメラのシャッターを押した。

男と女が裸で抱き合う姿を目の当たりにして、心臓の鼓動が早くなってきた。ポラロイドカメラを床に置き土足で本殿に上がった。そして今まさに胡桃沢と由香里が結合しようとしたとき、

胡桃沢の背後から思い切り股間を蹴り上げた。「うぎゃー」という胡桃沢の悲鳴の後「キヤー」という由香里の叫び声が耳を貫いた。胡桃沢は自分の股間を両手で押さえ、赤ん坊のように身体を丸め唸っている。由香里は白いコートを自分の裸体に掛けようとしたが、それを鬼頭が力づくで剥ぎ取り本殿の外へ放り投げた。

「お願いやめて。何をするつもりなの？」

蚊の鳴くような声で由香里は脅えきっている。

「何をするって、決まっているだろう。やることは一つセックスさ」

鬼頭は自分の穿いていたコーデュロイのズボンとトランクスを、靴を履いたまま脱いだ。男根から透明のねばねばした液体が本殿の床に滴り落ちた。それはエイリアンの口から滴り落ちる涎に似ていた。床に横たわって上体を起こそうとしていた由香里に、鬼頭は覆い被さり、両手首を自分の両手で押さえつけ、由香里の乳房にしゃぶりついた。由香里の身体からは、ほのかな石鹸の香りと、まるやかなコロンの臭いがした。由香里は身体を左右に揺らし、何とか逃れようと抵抗したが、それを押さえつける力は凄まじく、鬼頭の魔の手から逃れることはできない。鬼頭は赤ん坊のように由香里の乳首を吸った。右を吸い終わると今度は左を吸った。その後かるく乳首を噛んだ。

「痛い」

由香里は大声で叫んで、身体を大きく揺さぶった。鬼頭は押さええていた右手を離し、由香里の頬を強く叩いた。

「おい、それ以上暴れると乳首を噛み切るぞ」

脅しを掛けると、今まで大きく身体を左右に揺すっていたのを止めおとなしくなった。押さええていた左手をゆっくり離した。由香里の硬直していた身体は力が緩まり、糸が切れた操り人形のようにだらしなく手足を投げ出した。形のいい乳房を両手で弄った。それはこの世のものとは思えぬほど軟らかく気持ち良かった。乳首を指で挟んで転がしていると、徐々に乳首は硬くなった。

「おい、感じているのか乳首が立っているぜ」

由香里は顔を背け何も言わなかった。乳房を弄っていた手を今度は陰部に持っていく。中指で陰部を触るとびっしょりと濡れていた。それは決して鬼頭を受け入れようとして濡れたわけではなく、胡桃沢との行為のために身体が反応したにすぎない。それは鬼頭にも分かっていた。

その濡れた手を由香里の唇に擦り付けた。

「びしょびしょに濡れているぜ。自分のあそこの味はどうだ美味いか」

鬼頭の言動に由香里は顔を顰めた。我慢できなくなり、由香里の足を大きく開くと、自分の男根を右手で掴み由香里の陰部に押し込んだ。

「痛い」

今まで黙っていた由香里の顔が苦痛に歪んだ。このときをどれほど待ったことか。すべてを投げ出しても手に入れたと思ったものが、やっと自分のものになる。女体の中は想像していたより暖かかった。本能の赴くままにひたすら腰を動かし、あっという間に朽ち果てた。

精子が自分の中心から由香里の中へ入っていくのが心地好い。由香里の瞳から大粒の涙が零れ落ちた。口元が微かに動いている。注意して聞くと「お願い。やめて」と呟いていた。射精すると

一気に性欲が萎んでいき、先ほどまで元気だった男根も軟らかくなった。由香里の膺から男根を抜くと、本殿の床に落ちている由香里のパンティーを拾い、自分の男根をそのパンティーで拭いた。そのパールホワイトのパンティーを目にした途端、また男根が熱くなり勃起した。

再び由香里の足を広げ、自分のものを由香里の陰部に突き刺した。先ほどより激しく腰を動かした。左手を床につき右手で由香里の乳房を揉みながら腰を動かし続けた。その間由香里は小さな声で「やめて」と言っている。目からは涙が零れ落ち、手足は力なく投げ出され、糸の切れた操り人形は苦痛に顔を歪め、ただ時間が過ぎるのをじっと待っているようだった。それでも鬼頭はピストン運動を止めなかった。先ほどより時間は掛かったが、気持ちよさは少しも衰えなかった。射精すると直ぐ立ち上がり、今度は落ちていたブラジャーを拾い上げ男根を拭いた。男根には薄っすらと血が付いていた。

自分のトランクとズボンを穿くと、本殿の隅で蹲っている胡桃沢の方に身体を向けた。

「早く服を着ろ。帰るぞ」

「腹が痛くて動けない……………」

鬼頭は急いでポラロイドカメラと8mmを取ってくると、再び8mmを廻し仰向けになっている由香里と胡桃沢を交互に撮った。そしてポラロイドカメラでも写真を撮った。人形のように動かなかった由香里が、ストロボの光を感じたのか、赤ん坊のように身体を丸め、大きな声で泣き叫んだ。「お願い。やめて……………」それでも鬼頭は写真を撮り続けた。写真を撮り終わると、逃げるように神社を後にした。

8

胡桃沢は全裸だったが、少しも寒さを感じなかった。怒りと悔しさとで身体が熱くなっていた。鬼頭があのように胡桃沢の股間を蹴り上げ、自分だけ行為を済ませ、さっさと帰ってしまうとは思ってもよらなかった。この計画を鬼頭から持ち掛けられたとき、気は進まなかったものの、鬼頭の言うとおりにことが運んでいくものとばかり思っていた。自分は単なる当て馬で、うまく利用されたに過ぎなかったのだ。もしあの時点で鬼頭が来なければ、自分は間違いなく由香里といくところまでいっていたに違いない。由香里との行為を途中で止めさせられたから怒りを覚えたのではない。むしろ鬼頭の前で由香里を抱かなかったことは、良かったとさえ思える。他人を何の感情もなく道具のように扱う鬼頭が憎かった。胡桃沢が考えていた強姦とはあまりにも掛け離れていた。あれは鬼畜のなせる業だ。自分がかろうじて鬼畜にならずに済んだ。せめてそう思ったかった。

鬼頭が神社の階段を降りて行った後も、下腹部が痛くて身動きが取れなかった。それでも痛みを堪えどうにか立ち上がり自分の服を着た。そして自分の着てきた革ジャンを、由香里の身体にそっと掛けてやった。

「君も早く服を着たほうがいい」

胡桃沢は由香里のパンティーを取り、それを由香里に渡そうとしたが、手にねっとりとした感触が伝わり慌てて手から離れた。こうも人間とはおぞましいことができるのか。改めて自分の犯した過ちに後悔した。

「下着は汚れてもう使えないから、気持ち悪いかもしれないけど直接服を着たほうがいい」

胡桃沢は本殿の外にある白いコートを取ってくると、由香里の身体にそっと掛けてやった。由香

里は小刻みに身体を震わせていた。何て華奢な身体をしているのだろう。この歳の子として由香里は、身長もありスポーツをやっていたため、それほど華奢には見えないはずなのに、今はすごく弱い女性に感じた。そのとき何かが変わった。他人をこれほど愛おしく思えたことはない。こんな気持ちは初めてだった。

「身体大丈夫？僕がこんなところに誘ったばかりに、御免」

由香里は突然起き上がると、革ジャンとコートを跳ね除け胡桃沢に抱きついた。

「エーン……」

由香里は子供みたいに大声で泣き出した。胡桃沢は由香里を強く抱きしめ、自分も涙を流していた。由香里の悲しみと悔しさが、胡桃沢の身体にも伝わってきた。

「今日は君を守れなかったが、僕はこの先ずっと君の傍にいるよ」

これは本心だった。由香里を気の毒に思ったのは勿論だが、自分の中にとっても尊い気持ちが芽生えたような気がした。確かに直接強姦したのは鬼頭なのだが、その原因を作ったのは胡桃沢にある。由香里を傷付けてしまったのは自分のせいに違いない。

鬼頭のことは絶対許せない。しかし鬼頭を警察に突き出しても、由香里の心の傷は癒されないだろう。当然胡桃沢もただでは済むまい。そのとき由香里の好きなようにさせてやりたいという気持ちと、自分自身がどうなってしまうのかという不安が、頭の中で交錯していた。どうしたらいいのか分からなかった。取り敢えず由香里に服を着てもらおう。今更ながら自分の犯した愚かな行為に無償に腹が立った。自分は何をやっているのだ。もう二度とこのような思いをしたくない。そして迷った挙句、由香里にすべて告白することにした。

試験前風邪を引いてしまい、高貴が怖くてカンニングをしたこと。それを鬼頭に見られたこと。そのことで鬼頭から脅迫され、由香里をここに誘ったこと。由香里に対して恋愛感情はなかったが、今は由香里のことを愛しいと思っていること。それは単なる同情心ではないこと。由香里が警察に行って真実を言ってもかまわないことなど、嘘偽りなく真実を語った。そのことを話した御陰で気持ちが凄く楽になった。膿を出し切った傷口のように、痛みは残ったものの、これで治るという確信が持てたような気がする。

「僕は今日まで、これほど自分のことを素直に他人に語ったことはない。何でこんな気持ちになったか分からないが、今までの自分ではないような気さえする。勉強も嫌いではなかったけど、今日までは父の顔色を伺うために勉強していた。でもこれからは自分のために勉強しようと思う。鬼頭のことは絶対許せないけど、あいつは近づいて来る者を皆不幸にしてしまうような、不思議な力を持っているような気がしてならない。あいつは触れざる者、関わっちゃいけないんだ。反面教師じゃないけど、鬼頭を見ていると、自分のいけないところ、治さなければならないところが、見えてくるような気がする」

目から鱗が落ちるとは正にこのことだった。目の前に何か分からないが、道が開けたような気がした。これは胡桃沢の人生に於いて、とても大きな出来事になったことは間違いない。やがてそれが切っ掛けとなり、自分の歩む道が大きく変化していくことになるとは、このときの胡桃沢には未だ分かるはずもなかった。

「わたしは警察には行きません。今日のことはそう簡単に忘れることはできないけれど、警察

に行ってこのことを最初からすべて話すなんてことはとてもできない。病院にも行かなければならないでしょうし、屈辱的な思いをしたくない。辱めを受けるのはもう沢山。でもそんなことよりも胡桃沢君、貴方が傍にいてくれるのなら、わたしはそれだけで満足なの。心や身体に深い傷を受けたのは、わたしだけじゃないわ。貴方だって酷い目に遭ったのだから。ある意味ではわたし以上に辛いと思う。それなのにわたしを庇ってくれて。あの男に辱めを受けたのは、確かに悔しいし悲しいけど、それ以上に貴方の優しさが何よりも嬉しかった。今日のことは胸の奥に閉まって誰にも言わない。貴方を信じて今日のことは封印する」

この世の中には確かに天使と悪魔が共存している。そう思わずにはいられなかった。胡桃沢は自分の過ちを隠すため、他人の過ちの手助けをした。そのことによって一人の女性に傷を負わせた。自分が直接手を出さなくても、罪の深さは一緒のような気がする。そんな自分を由香里は許してくれた。胡桃沢には由香里が聖母マリアのように輝いて見えた。

休息

1

鬼頭は中学校卒業と同時に新聞配達の仕事辞めた。学校は同じ市内にある進学校の定時制に進んだ。同じ中学でこの定時制に進学したのは、鬼頭一人だけだった。学校の紹介で、以前雅夫が勤めていた砂型工場の関連会社である、金属のバリ取り工場に就職することができた。市の中心地に大手自動車メーカーの、エンジン部品及び排気系の部品を作っている森嶋産業という大きな工場がある。この工場は社員が三百人近くいて、市内にはこの関連会社の下請け工場が沢山あり、その従業員を含めると膨大な数になる。この町の基幹産業になっていた。以前はオートバイ中心のこのメーカーが、国内第二位の自動車メーカーに成長したのはごく最近のことである。

鬼頭が就職した会社は、主にエグゾースト・マニホールドや、過給機の金属バリを取る工場だった。以前雅夫はこの部品となる砂型工場で働いていた。森嶋産業ではその砂型にドロドロに溶かした鉄を流し部品を作る。そのはみ出たバリを取るのが鬼頭の仕事だった。雅夫は定職に就く真面目な男ではなく、この砂型工場に入る前も、坂城の鍛冶屋などで働いていた。砂型工場で保険の外交員女性といい仲になり、妻子を捨てどこかへ行ってしまった。

砂型工場の息子、昇が用水に落ちたことで、雅夫は鬼頭に暴力を振るった。そのことで雅夫と若林に対して復讐を誓った。しかし雅夫は女とどこか知らない町へ行ってしまった。それは鬼頭の手の届かない遠いところだった。

仕事はかなりきつかった。朝食事を済ませると、八時半までに工場に行く。工場のある場所は、鬼頭が通っていた中学校の直ぐ近くにある。工場に行くと灰色の作業着に着替え、帽子、ゴーグル、防塵マスクを被り作業を始めるのだが、始業前必ず社長が皆の前に立ち「今日も怪我の無いよう、作業一日頑張りましょう」と号令を掛ける。すると社員も一斉に「安全第一ゼロ災害」と号令を掛け、それぞれが各作業場に就く。

工場内の床はコンクリート打ちっぱなしだったが、何年もの間金属粉が蓄積され、それが錆びて茶色に変色し土間のようにになっていた。作業内容は単純で鑄造のはみ出たバリを取る。まず電動鑪で大きなバリを取り、仕上げは棒鑪で丁寧削る。すべての仕事は単純で覚えるのに三日とかからないが、身体が慣れるまでかなりきつかった。昼食に二百五十円の不味い弁当を頼むのだが、最初はその弁当が喉を通らなかった。

社員は三十歳半ばと思われるトラック運転手の他は、殆どが五十歳以上の小父さんで、その他に四十歳前後のパートの小母さんが三人いた。

金属粉は作業着を貫き下着を通り抜け直接肌まで達する。風呂に入るとき、下着を脱ぐと金属粉をすって下着まで重くなっていた。社長はうがいを頻繁にし、風呂は毎日長めに入れと言っていた。身体が作業に慣れるまで二ヶ月掛かった。梅雨に入った頃やっと昼食を残さず食べられるようになった。昼に埃っぽい工場内で弁当を食べていると、身体中に脂の臭いが染み付いた、歳のいった工員が気さくに鬼頭に声を掛けてきた。鬼頭はこの脂の臭いとアルコールの臭いが大嫌いだ。成人しても酒もタバコもやらなかった。なぜならそれは雅夫の臭いだったからだ。

「兄さん、歳は幾つになった？」

「十六歳です」

「若けえな。飯やっと思えるようになったかえ。最初はちよっくらきついかもしれねえな」
鬼頭の方を向きニタと笑うと、前歯が二本欠けていた。

最初に貰った給料袋の中身を見て愕然とした。十万円にも満たない額しか入っていなかった。旅行の積み立てとか引かれるものもあったが、それでも自分が思っているよりはるかに少なかった。一瞬何かの間違ひではと思ったほどだ。母がパートで貰ってくる給料よりはるかに少ない。入社したばかりで見習いということもあり、翌月を期待したが殆ど変わらなかった。中学を出て仕事に就くと、凄く安い賃金で扱き使われると聞いていたが、それを身を以って実感せざるをえなかった。一年も経つと身体も慣れ、それなりに給料も上がった。

普通の犯罪者なら安い賃金で扱き使われれば、頭にきて直ぐ辞めてしまうのだろうが、鬼頭は高校を卒業するまでこの工場で真面目に働いた。一年に一回の社員旅行も、他の社員と共に参加した。この四年間が鬼頭にとって一番平穩に過ぎた時期である。

この仕事に就く前新聞配達をしていたが、それは働いているという実感が湧かなかった。今まで使わなかった筋肉を使ったせいもあるが、この仕事は体力的にもきつく、安い賃金で働かされ、最初のころは学校でも殆ど居眠りをしていた。定時制高校は昼間仕事をしている者が殆どなので、居眠りをしているのは鬼頭だけではない。教師の方も心得たもので、居眠りをしている生徒に対し、無闇やたらに怒ることはなかった。

それほどきつく安い賃金にも拘らず、なぜ四年間続けたのか。単に他の仕事を探すのが面倒臭いということもあるが、社会での自分の地位、立場を良く理解していた。もう一つ鬼頭は苦痛を快楽に感じ取るマゾヒズム的なところがあつた。子供の頃から自分の身体にできた傷の瘡蓋を剥がす癖があつたのだ。

夏場ここら辺は夜になると、扇風機がなくても過ごせるくらい、昼間と夜の寒暖差が激しい。夜窓を開け網戸にしておけば、涼しい風が部屋の中を通り過ぎていく。山が近いこともあり窓の開け閉めに気をつけているつもりが、いつの間にか蚊がどこからか侵入してくる。起きているときは刺されないよう気をつけているのだが、夜寝ているとき、蚊取り線香を焚いても蚊に刺されてしまうことがある。そのときはその場所を血が滲み出るくらい爪を立て搔きまくる。痛みは我慢できても痒みには耐えられない。搔いたあと出血するのだが、数日経つと傷口が乾き瘡蓋になる。その瘡蓋を剥がすのが、何ともいいしれぬ快感だった。

休日は中学のときと変わらず映画を観て過ごした。ロードショーは殆ど見た。高校二年に進級したとき、新聞にケーブルテレビ局が開局するので、加入者を募集しますという広告が入っていた。鬼頭のいる市営住宅は六畳の和室が二間と、四畳程度のキッチンがついた簡素な住居だった。キッチンに面してない北側の部屋を、鬼頭は自分の個室として使っていた。

中学三年生のとき、新聞配達で貯めたお金で14型のテレビを買ったが、ここの場所は東に直ぐ山があり室外アンテナを建てても、国営放送は綺麗に映るが、それ以外の民放は映りがとても悪かった。ケーブルテレビは、地元局は勿論東京のすべての局が映るという触れ込みである。鬼頭は本屋でよく映画雑誌を立ち読みしたが、東京のテレビ局は毎日どこかのチャンネルで映画を上映していた。東京に対して憧れはなかったが、テレビのチャンネル数の多さだけは羨ましかった。

広告を見て早速ケーブルを引く契約をした。その御陰で毎日テレビで映画を観ることができた。

2

鬼頭が高校生のとき、長野の権堂に大型スーパーがオープンした。長野市は昔ながらの百貨店が二件と、数年前に大型スーパーができただけで、善光寺に近い権堂には大型店舗がなかった。権堂に新たにできた大型スーパー〈ファミリア〉は、品数も多く値段もリーズナブルなため、地元客の購買意欲を掻き立て、いつ行っても御客で賑わっていた。〈ファミリア〉は地上七階地下一階建てで、七階はレストラン街、地下は食品売り場とファーストフードのテナントが何件か入っていた。まだ長野市内にはファーストフードの店が少なかったため、昼時ともなると、それぞれの店の前に行列ができるほどだった。

鬼頭は権堂の映画館に映画を観に行くと、必ずこのスーパーの地下にあるファーストフードで食事を摂ることにしていた。定時制高校を卒業した三月の日曜日、権堂で映画を観た後遅い昼食を取ろうと〈ファミリア〉の地下に行った。ファーストフード〈ジェリコ〉の前に行くと、店員募集アルバイト可の貼り紙がしてあった。〈ファミリア〉の地下にはラーメン屋の〈大蔵〉お好み焼きとたこ焼きの〈みやちゃん〉スパゲティーやパンケーキなどを扱う〈ジェリコ〉がある。この〈ジェリコ〉は七階レストラン街にあるファミリーレストラン〈ジェリコ〉の系列で、このスーパーの中に入っている飲食店では、唯一全国チェーンを展開していた。スタッフは常時二名以上いて、土・日は四名以上で遣り繰りしている。平日でも忙しくスタッフが二人しかいないときは、上のレストランからスタッフが応援に来る。またその逆もあった。

この募集の貼り紙を見たことと、バリ取り工場の仕事も飽きたこともあり、四月になると同時にこの会社に入ることにした。ただ最初の六ヶ月はアルバイトとして働くことになった。会社はかなり大きく、募集の貼り紙を見たときは、新卒の募集は既に終わり研修の最中だった。

子供の頃から何かになりたいとか、どのような仕事に就きたいとか、そのような願望を一切持っていなかった。子供であれば少なからず野球選手になりたいとか、パイロットになりたいとか夢を持つものだが、自分の将来、未来を想像することができなかった。両親がどちらも無教養だったことも、将来に対する希望に影を落としている。家は収入が少なかったため食べていくのがやっとだった。子供の頃弟が亡くなってからは殆ど一人で遊んでいたが、そのときは本当に楽しかったのだろうか、今思い返してもよく分からない。雅夫が女を作って家を出て行く前、家族団欒でどこかへ出かけたという記憶がまったくなかった。

不思議なことにどこの家でもあるはずのアルバムがないのだ。鬼頭の記憶では、雅夫がカメラを持っているという記憶もなかった。学校で担任や他の教師が撮ってくれた写真は、アルバムに貼らず無造作に机の引き出しに仕舞ってある。この家にはアルバムが存在しなかった。家中どこを捜しても家族の歴史が見当たらない。中学に入りおもちゃのカメラやポラロイドカメラを買ったが、殆ど写真を撮らなかった。由香里を強姦したときの写真は、封筒に入れ鍵の掛かる机の引き出しに仕舞ってある。

鬼頭はあまり物に対して執着心がなかったが、高校三年生になって非常に興味を持った物がある。それはオートバイだ。その理由は単純だった。映画の『マッドマックス』を観たからだ。この映画を観たとき、自分の中にある何かに火が点いた。同じ時期テレビで『ジョン&パンチ』というアメリカのテレビドラマも、オートバイに対する興味を掻き立てた。

オートバイのエンジンが剥き出しになったその形状は、鬼頭のハートを捉えた。定時制高校でオートバイ通学している同級生にバイク屋を教えてください、そのバイク屋へ足を運んだ。鬼頭が希望するカワサキFX400は新車で買えば高いし、中古でもかなりの値段が付いていた。この頃鬼頭の通う定時制高校では、カワサキFX400とホンダのホークⅢが、圧倒的に人気が高かった。ホークⅢは新車でFX400よりかなり値段が安かったが、タンクとサイドカバーのデザインとSOHCのエンジンがどうも好きになれなかった。現在自動車エンジンもDOHCの方が多き時代とは違い、そのころ自動車DOHCのエンジンを積んでいるのはごく僅かだった。その点オートバイのDOHC搭載車は結構目に付いた。

人とコミュニケーションのとれない鬼頭が、無愛想な店主のいるバイク屋に足繁く通ったのは、単にいいオートバイが欲しかったからだ。FX400を購入するお金は、貯金を下ろせば買えない額ではなかったが、四十万円を超える金額にどうしても踏ん切りがつかなかった。何度か店に通っているうち店先に、一台の見慣れぬオートバイが停めてあった。スズキGS400E。雑誌では何度も見たことがあったが、実物を間近で見るとは初めてだった。全体のフォルムがスズキなのに『マッドマックス』や『ジョン&パンチ』で使用しているカワサキの大型バイクにどこことなく似ていた。エンジンもホンダのホークⅢとは違いメカニカルなDOHCだった。星型のキャストホイールも美しい。中古として出ているが程度はかなり良く、メーターを覗くと800kmそこそこしか走っていない。値段を見ると二十万円台の値段が付いていた。新車で買うより十万円近く安い。そのオートバイをじっと見ていると、店主が鬼頭のところまで来た。

「そのGS今日買ったばかりで殆ど新車に近い状態だ。まだ慣らし運転も終わってない。何か学校に見つかってどうしても乗れなくなったらしい」

この親父、無愛想だが一応営業言葉を掛けるんだと感心した。

「親父さん、これ下さい」

即決で購入を決めた。GS400Eは二気筒ながらツインカムエンジンは気持ちよく回り、バイブレーションも少なくオートバイの楽しさを教えてくれるには十分だった。学校にオートバイで通学していると、同じようにオートバイで通っている同級生が、オートバイを買ったなら聖の峠道を攻めると面白いと教えてくれた。日曜日に聖の峠道に行くと、何台もオートバイが走っていた。暴走族とはまったく違う人種で、いかにオートバイを早く走らせるかということだけを実践している連中で、暴力性は皆無だった。鬼頭はこの連中の仲間には入らなかったが、休みの日は足繁くこの峠道に通い、ライディングテクニックをマスターした。

峠に通い二年以上経った頃、この道路では比較的速度の遅いヘアピンカーブを、ハングオンしながらコーナーに進入していくと、反対車線の車がテールをスライドさせながらこちら側の車線に割り込んできた。咄嗟に体勢を立て直し何とか転倒を逃れたが、もう少しで大事故になるころだった。少し頭に血が上ったため、Uターンをして先ほどテールスライドさせ走って行った車の後を追ったが、車は遙か先を走っていて、その差はどんどん開いていくばかりだった。「早いな」このときから鬼頭の興味は、オートバイから自動車に移っていった。その後自動二輪の免許を取得した同じ自動車教習所に通い普通免許を取得した。

オートバイから車へと興味移っていくのは、ごく自然の成り行きだった。中学を卒業し最初に

就職した会社が、自動車の排気系部品を作っていたのもそれに起因する。

鬼頭は女性の裸体が何よりも美しいと感じ、自動車にも女性の裸体と共通した美しさがあることを発見した。中学のときにスーパーカーブームが世間を圧巻する。ランボルギーニ・カウンタックやフェラーリ512BBなどのスーパーカーが子供のハートを掴んだ。中学の同級生たちも、ミニカーやスーパーカー消しゴムのコレクションを持ってきて、皆に見せびらかせていた。しかしその頃は自動車に対し、それほど興味をそそられなかった。それなのにあのヘアピンカーブで、車をスライドさせながら走っていく姿を見て、車の魅力に取り付かれてしまった。

その後カー雑誌を見ていて分かったことだが、あのヘアピンカーブで車をスライドさせ走っていった車はカローラレビンだった。

十八号線沿いの一角に各メーカーのディーラーが軒を並べ、そこには沢山の中古車が展示してある。鬼頭はいつもオートバイで通勤していたが、自宅から近いマツダのディーラーに一台の黄色いRX-7が展示してあった。オートバイを停めて車を見ると、値段は六十九万円とあれほど欲しかったFX400と二十万円しか値段が違わない。仕事が休みの日そのディーラーに行き即決で購入を決めた。保険と税金やらで、車の本体価格の他に雑費が掛かったが、それでも貯金で何とか賄えた。

RX-7は当時としては珍しいリトラクタブルライトと、コンパクトな12Aロータリーエンジンをフロントミッドに置き、バランスのいい重量配分は和製スーパーカーそのものだった。僅か一トンの車重と百三十馬力（gross）のパワーで旋回性能も高かったが、それでも鬼頭は満足できず足回りだけを改造した。

チューニング雑誌でもRX-7の特集が組まれ、長野のタイヤショップに行き、モンローのショックとワタナベのホイールにピレリP6を履いた。インチアップせず扁平率の高いタイヤを履くと、タイヤの外形が変わってしまうということを鬼頭は知らなかったため、最初はアルミホイールを予定していなかったものの、店の主人が丁度サイズが合う中古のワタナベのホイールがあったため安く譲ってくれた。ピレリP7は当時絶大な人気があり、今でもその美しい均整のとれたトレッドパターンは語り継がれている。しかし国産に比べかなり値段が高く、鬼頭には高嶺の花だった。P7とデザインが似ていたP6は、若干値段が安かった。ロールが大きい教習所のローレルしか運転したことがなかった鬼頭にとって、足回りの固めたRX-7は異次元の体感だった。

鬼畜

1

池下恵は容姿には多少自身があった。地元の女子高を卒業し同じ系列の女子短大に進学した。兄が二人東京の大学に行っていたこともあり、本当は自分も東京の短大に行きたかったが、両親が厳しく仕方なく地元に残った。恵の通う短大は善光寺裏の戸隠に向かう街道途中にある。高校は短大に付属していたが、進学校でなかったため、クラスの三分の二は地元の短大か企業に就職していた。

恵の家は戦国武将の中でも最強と呼ばれた、武田信玄と上杉謙信が戦った川中島にある。駅からは少し距離があり、毎日駅まで自転車で通っていた。高校時代は女子高ということもあって、彼氏はいなかった。短大に進学しても状況が変わらず、彼氏はなかなかできなかった。

女子短大は授業が終る四時頃には、校門前の坂道を彼女たち目当てに、男どもが車で列を作る。その中に恵を待っている車は存在しなかった。校門を出るとそれぞれの女子大生は、一目散で自分を待っている彼氏の車に駆け寄り、車の中の男性に笑顔を見せると、自分の家の車のように気安く乗り込んでいく。

恵は彼女たちが車に乗り込んでいくのを横目で見ながら、バス停まで歩いて行った。次々と彼氏の車の中に消えていく彼女たちが正直羨ましかった。何でわたしを迎えに来てくれる彼がいないのか。彼氏がいらないのは恵にとってそれほどの痛手ではなかったものの、やはり他人が持っているのに自分だけないというのは、いささか悔しい気がしてならない。指輪やイヤリング同様あるに越したことはないので、彼氏もまたアクセサリーのように自分を引き立たせてくれるものに違いなかった。

恵は土・日と学校の講義が終了した後〈ファミリア〉地下のファーストフード店〈ジェリコ〉でアルバイトをしていた。ここは平日恵み以外に、自分と同じ歳くらいの男と四十過ぎの小母さんがいて、休日には高校生の男子が二人バイトで来ていた。この〈ジェリコ〉へアルバイトに来て、既に三ヶ月が経とうとしていたが、正社員と思われる若い男、鬼頭とはプライベートの話をしたことがなかった。その日はたまたま学校の講義が中止になったため、午前中からバイトに入った。昼時は客足が結構あったが、その後は殆どお客が来なかった。店内には鬼頭と恵、小母さんの佐藤がいたが、することがなく暇を持て余していた。正社員の鬼頭は掃除を言い付けたり、在庫整理など厄介な仕事を言い付けたりしてこなかったため、自ら進んで仕事をする気にもなれず、冷蔵庫の前でぼーとしていた。

鬼頭とは殆ど話しをしたことがなかったが、あまりの沈黙に耐えきれなくなり、恵の方から話を切り出した。

「鬼頭さんて車何乗っておられるんですか？」

恵にとって若い男は皆車に興味があると思っていた。アイスクリームのショーケース前に立っていた鬼頭は、恵の方に身体の向きを変え「RX-7」とぶっきらぼうに答えた。

「格好いいですね。リトラクタブルライトのスポーツカーでしょ」

恵がそのように言うと、いつも無愛想な鬼頭の顔が少し綻んだように感じた。平日客足が少な

いのは、この男が店にいるからかもしれない。愛想のない顔は、客商売には向いていないのではないか。

「池下さん詳しいですね」

「ええ、友達の彼氏が乗っているんです。車高が低くて外車みたいですね」

「めちやくちや燃費悪いけどね」

鬼頭は少し照れているようだった。恵の目から見て鬼頭は、仕事を淡々となし真面目だが、何かとても近寄り難い冷たい印象を受けた。顔も美男子とはいえないまでも、それほど女性に敬遠される顔立ちではない。しかしこうして話してみると、自分が想像していたより、気さくに話しに応じてくれたのは意外だった。

「休みの日とかは、ドライブに行かれるのですか？」

「たまに戸隠に蕎麦を食べに行ったりするぐらいで、そんなに遠くには行かないね。殆ど家の近くの山道を走るぐらいで……」

店が暇だったこともあり話しは結構盛り上がった。恵は鬼頭に女子短大の前には、講義が終ると車の行列ができ、彼女たちはその車でどこかへ行くこと。それを見て自分には彼氏がないので羨ましく思ったこと。鬼頭は車を買う前オートバイに乗っていたこと。ここに勤める前は自動車関係の部品工場で働いていたことなどを話した。恵はそれまで男の人と殆ど話をしたことがなかったが、鬼頭が気を遣ってくれたのか、優しく話しに応じてくれたため凄く好感が持てた。蛇のように冷たい目を持つ、この男の口から出る言葉が、意外と優しく、そのアンバランスがなぜか恵の心を擦った。喋りがあまり流暢でない鬼頭が、もしかしたらとても実直で真面目な男ではないかと思えた。鬼頭には何か分からないが、不思議な魅力がある。目を見ながら話していても、物凄く遠くを、物凄く深いところを見ているような気がした。それはまるでドラキュラに睨まれた少女のように、何も抵抗できないのではないかと感じさせる、不思議な力を持っているのではないかとさえ思えてならなかった。

「あのもし迷惑でなかったら、この後仕事が終りしだい、家まで送ってもらえませんか？」

恵は自分で言うおきながら、えらい大胆なことを口走ってしまったと少し後悔した。それは自分の意志で発した言葉ではなく、鬼頭に言わされたのではないかと思えるほど意外なものだった。それでも鬼頭は恵のいきなりの申し出に、少し戸惑っているようにも見えた。

「池下さんの家は確か川中島だったよね？丁度帰り道だからいいよ」

以外にも気安く恵みの申し出を受け入れてくれた。

「本当ですか。嬉しいです」

この日から二人は付き合い始めた。鬼頭は恵より年が三つ上で、土・日は鬼頭も恵も仕事があるため、二人が会うのは〈ファミリア〉が休日になる火曜日だった。この日は恵も大学の講義を午前中だけ出て、午後からは講義を休み鬼頭とデートを重ねた。

今まで恵は女子大生が、彼氏の車の中に消えていくのを横目で見ていたが、今は自分が男の車に乗っていくのを他の者に見せたかった。ただ恵の父は昔ながらの頑固者で、若い娘が男と付き合い合うのは以ての外という考えを持っていたため、夜遅くなる時は友人を使い家の者を欺いた。厳しすぎる故に娘を疑うことをしなかった。そのことが娘を不幸にした男を、なかなか見つけら

れないことになるとは、両親も思ってもみなかったであろう。鬼頭に送ってもらうのも駅までで、そこからはわざわざ自転車で帰っていた。

デートは野尻湖に行ったり、或るときは軽井沢の方まで足を延ばし、白根を抜け志賀高原を周り景色を見ながらドライブした。足回りを固めていたのでRX-7は決して乗り心地が良い車でなかったが、それでも恵みはまったく車に酔うことなく、鬼頭とのドライブを楽しんだ。鬼頭は沢山の映画を観ていたので、ドライブ中そのストーリーを訊いているうちに、恵自身もその映画を観たような錯覚に陥った。

若い男と女が付き合いだすと、当然の如く肉体関係へと発展していく。恵にとって鬼頭は初めての男だった。男の人は一度身体を許してしまうと、そればかりしたくなるのか、日増しにドライブの数は減りホテルに行く回数が増えていった。

2

鬼頭と恵が付き合い始め既に二年が過ぎようとしていた。恵は短大を卒業し長野市内の大型書店に就職した。恵が書店勤務だったこともあり、二人の休みがなかなか一緒にならず、仕事が終わり夜会う機会が多くなっていった。鬼頭も恵が学生時代だった頃に比べ、デートの回数がかなり減ったことに対し、それほど不満には感じていなかった。

更埴から長野に行く道で、千曲川を渡る手前、国道十八号線と国鉄の線路が交差する場所にラブホテル・ロワールがある。戸倉の温泉街入り口付近にあるラブホテルのけばけばしい建物に比べると、こちらの建物はシンプルで落ち着いた建物だった。鬼頭と恵はここを常連としていたが、この日は十八号線から農道に抜ける道に入り、ロワールの前まで行くと、まだ八時前にも拘らずロワールの前は、ホテルに入ろうとする車で渋滞していた。

鬼頭は助手席に恵を乗せホテルに行こうと考えたときから、すべての思考はセックスのことだけで頭が一杯になっていた。

「今日は物凄く混んでいるから、場所を変えようか・・・・・・・・」

「うん」

室内に僅かに入ってくるロータリーエンジンの、軽やかな排気音にかき消されるような小さな声だった。RX-7は狭い道で何回となく切り返し、Uターンすると再び十八号線に戻った。杭瀬下の交差点を右折し、千曲橋を渡り稲荷山を抜け山道に入っていく。

「どこへ行くの？」

恵は膝の上に載せてあるハンドバックから、ガムを取り出し包みを剥がすとそれを噛みだした。そして窓を開けガムの包み紙を車外へ投げ捨てた。

「今日はたぶんどこへ行っても混んでいるから聖に行くよ」

「え～また車の中ですか・・・・・・・・」

恵のガムを噛みながらの気だるそうな話し方に、返事もする気になれずアクセルを強く踏んだ。ギューンというロータリーエンジンの甲高い排気音とともに、RX-7は加速しワインディングロードのクリッピングポイントに入ってしまった。

稲荷山から聖に抜ける山道の斜面側は、棚田が何段も続き田植え前、田圃に映る月はとても美しく、（田毎の月）という景勝地になっている。ここのワインディングロードは、それこそオー

トバイからRX-7に乗り換えても、何回となく走りこんだ思い入れのある場所だった。たとえ夜間でも、どこにコーナーがあるのかすべて記憶している。コーナーによっては、テールをスライドさせる運転技術ドリフト走行も覚えた。冬の雪道ではスノータイヤを履き、わざとタイヤを滑らせ車のコントロールをマスターした。何度か車を側溝に落とし、通りかかりのトラックに引っ張り出してもらったこともある。聖湖畔にはホテルや店屋があるものの、スキーシーズン以外は開店休業の状態だった。この時間ともなると自動販売機の灯りの方が明るいくらいで、その場所を離れると辺りは一面闇が広がっていた。

RX-7は湖畔の脇道に入ると、ライトをハイビームにして未舗装の道を暫く走った。車高の低いRX-7は時折、マフラーを地面に擦りつけながらバンガローの敷地に入って行った。この場所は現在完全な廃墟と化し、昼間でも近づく者は暴走族や得体の知れない連中と決まっている。夜になると人は誰も来ず、人が来るとすれば鬼頭みたいに、女と何らかの如何わしい行為をするため、人目を避けて入り込んで来る者たちだけだった。鬼頭と恵も何回かここに来てカーセックスを楽しんだ。最初のうちは恵みも物珍しいこともあって喜んでしたが、最近は車の狭さもあり決していい顔はしない。鬼頭にしてみればセックスだけを楽しむのであれば、場所はホテルでも車の中でも一向に構わなかった。寧ろホテル代が浮くため車の方が、少ない給料の鬼頭には有り難いのが本音である。

鬼頭は今の会社に移って、それまでいた工場より手取りで八万円以上多く給料を貰った。引かれるのも多いが、通勤手当や住居手当など、諸手当などもしっかり計上されていた。今までの工場はかなり大雑把な給料明細だった。学が無いということはこのように扱き使われる運命なのかとも思ったが、それほど腹立たしさは覚えなかった。子供の頃から人の話はちゃんと聞くし、言われたことも素直に実行するので、社会に対しての反発心というものはあまり持っていない。

胡桃沢を強要し由香里を強姦した後、何人かの命を奪ってしまうのだが、それ以外の犯罪に手を染めることはなかった。犯罪者の中には自分の行った過ちを他人や社会のせいにして、自分を正当化しようとする輩が少なくない。鬼頭は犯罪者特有の、物ごとを自分の都合のいいように解釈し、自分の過ちを他人や社会に転化することはなかった。

鬼頭にとって犯した犯罪はあくまでも自分に責任があり、それは社会が悪いとか、自分が教育を受けていないからだという考えは受け入れられなかった。ただそのような考えがあっても、どこかに自分が、あの家に生まれなければという感情は、鬼頭の中で常に存在していたのも事実には違いない。

小学校のキャンプでここに来たとき、バンガローの他に炊事場や、バーベキュー場などがあったが、今ではすべて取り壊され、朽ち果てたバンガローだけが無残に残っている。以前子供たちが元気よく遊び回っていた形跡はどこにもなかった。

RX-7を雑草の生い茂った空き地に止め、室内灯を点けると、鬼頭は助手席にいる恵が着ていたブラウスのボタンを外し始めた。恵みは最初この場所ですることにより、多少不満もあったようだが、ことが始まると鬼頭のされるがままになっていた。いつも鬼頭がセックスを強要しても、恵はまったく抵抗せず比較的素直に受け容れてくれる。それはお互い愛し愛されているからだ、自分の都合のいいように解釈していた。

最初由香里を強姦したとき、相手の気持ちは一切考えず、自分の性欲を満たすことだけに専念

した。愛のないセックスは、強姦以外の何ものでもない。それはたとえ相手がいても、マスターベーションと何ら変わることがない。行為が済んでしまえば、そこに留まることすら苦痛になってくる。しかし今は違う。

助手席のリクライニングを倒すと、徐に恵の上に押し掛かり、ブラウスから露わになったブラジャーを外し乳房を弄った。そしてスカート下のパンティーを片手で起用に脱がせ、自分のズボンもトランクスと一緒に下ろすと足元に脱ぎ捨てた。前菜も疎かに自分のものを恵にぶち込むと、ただ闇雲に腰を動かしあつという間に朽ち果てた。先ほどまであれだけあった性欲が風船のように萎んでいく。

中学のとき、由香里を強姦したときから、恵と付き合い男と女の関係になるまで、女と関係を持ったことはなかった。何度か上山田温泉のストリップ劇場に足を運び、まな板ショーに参加しようと考えたが、胡桃沢の前でセックスできても人前ですることが憚れた。帰り道何度も強姦しようを試みたが、それもできなかった。上山田温泉にも、金を払えば下の処理をしてくれるところはいくらでもあるみたいだが、少年だった鬼頭には無理なことだった。

鬼頭が十八歳になった頃、ようやく家庭のビデオが普及し始め、鬼頭も迷わず二十万円以上するビデオデッキを購入した。録画する番組は決まって深夜のお色気番組だった。多恵がいない日中その録画したビデオを観て自慰に耽った。

自分で声を掛け、彼女を作ろうとは考えなかった。本来であれば鬼頭のような性格の男に、彼女ができることは稀だ。でも今回は恵の方からモーションを掛けてきた。よほどもてる男でない限り、女の方からモーションを掛けられ断る道理はない。それは鬼頭にしても例外ではなく、願ってもないチャンスに違いなかった。恵は鬼頭にとって初めて付き合った女であったため、男と女の関係に至るまでのプロセスがとても大切に感じ、それなりの努力は惜しまなかった。悪魔に魂を売った男が、唯一人間に近づこうとした瞬間でもある。しかしそれ以後の女に対しては、それまでのプロセスがとても面倒臭いことに感じ、プラトニックなことは尽く省略した。男にとって最初の女は、いつまでも尾を引くものなのかと、その後何人もの女を殺害する度に感じたものだ。

他に女を知らなかったということもあるが、鬼頭にとって恵がすべてだった。今まで家族にですら愛されたことのない鬼頭にとってみれば、自分を好きになってくれた恵は奇跡に近い。この何とも心地よい感覚がいつまでも続けばいいと願った。しかし鬼頭の決して長くない人生に於いて、この心地よい感覚はセックスでの射精の如く、ほんの一瞬で消えてなくなる運命だった。

その日はいつも着けるはずのものを着けず、気持ち良さのあまりそのまま射精してしまった。行為の最中着けねばという気持ちは働いたが、快楽に思考が負けてしまい、そのまま本能の赴くまま行動してしまった。射精をした後は冷静になれるのだが、ことが及んでしまうと本能が勝ってしまう。

「御免出ちゃった」

「御免じゃないでしょ。だから車の中でするのは嫌だと言ったのよ。今日は安全日じゃないんだから、子供ができちゃったらどうするの？」

意図的に行ったわけではなかったが、鬼頭は自分の心のどこかに、子供ができて構わない。そ

うなればこの女と一緒にになれるかもと、そのように考えたのかもしれない。車の中でするときは殆どの場合マイルーラを使っていた。マイルーラはコンドームよりコストが嵩み金銭的にきつい。この日はマイルーラを切らしていたため、本来ならコンドームを着けセックスするはずが、性欲に思考力が負けてしまい、コンドームを装着しないまま行為に及んだ。RX-7はセダンやバンと違い室内が特に狭く、一度行為を始めてしまうと、車の中で態勢を立て直すのが非常に困難である。恵はブラウスのボタンを掛け、脱ぎ捨てたパンティーとティッシュを手を取った。

「本当に御免。もし子供ができたら結婚しよう」

鬼頭がこの言葉を、自分の口から発するのは、とても勇気がいることだった。ともすればそのまま恵と結婚することになるかもしれない。相手はプロポーズと受け止めただろうか。そこまで自分は恵を愛していたのか。自分で言っておきながら少々恥ずかしくもあった。しかしそれは自分の一方的な考えで、恵の口から出た言葉は意外なものだった。

「何バカ言っているのよ。わたし貴方の子供なんて生みたくないし、まだ結婚なんてしたくないから」

陰部をティッシュで拭きながら口にしたその言葉は、恵の口から出た言葉とは思えない冷やかなものだった。恵の考えは鬼頭の考えとはかなり掛け離れていた。その後のことを想像するのが怖かった。付き合いだした頃のあの初々しさはどこへ行ってしまったのか。恵の口からもうこれ以上自分を傷付ける言葉を発して欲しくなかった。

〈そのとき頭の中に、大きな鷲がゆっくりと旋回しながら降りてきた〉

気がつくとき鬼頭は、助手席にいる恵の首を思い切り両手で絞めていた。オレンジ色の室内灯の中で、恵は持っていたパンティーを床に落とし、鬼頭の手の中長い爪を立てたが、血が滲んでも鬼頭の手は緩まなかった。「どうして？」恵の最後の言葉は鬼頭にはそのように聞こえた。鬼頭の手の中長い爪の力も段々と弱まり、口からは泡状の唾が蟹のようにぶくぶくと噴出した。時間にして一・二分のことなのだろうが、鬼頭にはとても長い時間に感じられた。つい先ほどまで一緒にセックスして喋っていたのに、今は人形のように動かなくなってしまった。

「お前が悪いんだ。あんなに愛していたのに……」

鬼頭は物言わぬ人形にひたすら自分の考えを主張した。恵のブラウスの前ボタンを引きちぎり、露わになった乳房を鷲掴みにした。温もりも軟らかさも先ほどと何ら変わらない。乳房を揉んでいると鬼頭の男根は再び勃起し始めた。それは生きていようと、死んでいようと、鬼頭の性欲は衰えることはなかった。失禁してアンモニア臭が鼻についたが、それでも構わず既に人形と化した恵の膣に、自分のものを挿入し何度も腰を動かした後再び射精した。今度恵は何も言わない。いや言えなかった。恵の膣から自分のものを抜くと、助手席のダッシュボード下に脱ぎ散らかした自分のズボンを取るため、ダッシュボード下に手を伸ばした。そのとき何かが手に当たりそれが車内の床に転げ落ちた。トランクとズボンを穿くと先ほど床に落ちた物が気になり、グローブボックスからペンライトを取り出し、灯りを点け床を照らした。床には赤い発炎筒が転がっていた。

室内灯を消し助手席のドアを開け恵を車外に押し出すと、ドスンという鈍い音が鬼頭の耳元まで届いた。発炎筒とペンライトを持ったまま車外に出て、恵が倒れている助手席側に回った。恵は草の上でうつ伏せに倒れていた。恵の髪の毛を掴み車から少し離れた所まで引き摺っていった

。死体が重いということを、このとき初めて知った。鬼頭はペンライトを口に銜えると、恵の身体を仰向けにして両足を大きく広げた。闇の中にペンライトで照らされ、恵の下腹部が露わになった。車から持ってきた発炎筒を着火させると、それを恵の膣に強く押し込んだ。(ジユ)という音と共に肉の焼ける嫌な臭いが鼻を衝く。発炎筒は鬼頭が想像していたより、すんなりと膣の中に入っていった。発炎筒の灯りは下腹部の皮膚を通し、まるで蛍の如く美しく光っている。それは今まで見たどんな花火よりも綺麗だった。ペンライトの灯りを消し発炎筒の火が消えるまで、じっとその光景を眺めていた。発炎筒の火が消え再びペンライトを点けると、子供の頃花火がすべて終わってしまい、家に帰らなければならない、あの虚しさと寂しさが鬼頭を襲った。

人の邪悪な精神はどこから来るのか。人は誰でも簡単に悪魔に魂を売ることができるのか。

鬼頭は車に戻り後部ハッチに入れてある、小型の携帯折りたたみ式スコップを取ってきた。この辺は冬になると雪が積もるので、車がスタックしたときのために、スコップは常時車に積んである。その携帯スコップで恵の墓穴を掘った。恵の遺体は五年後、白骨遺体として発見されるまでここで眠り続けた。

恵が殺害された翌日、家族から娘の捜索願が出された。捜索願が出されてから三ヶ月経った頃、鬼頭のところに刑事が二人やってきた。これは逮捕されたとき、留置場で目にした週刊誌で知ったのだが、恵は鬼頭の他に複数の男と付き合っていたようだ。家族も恵が誰と付き合っているのか、まったく知らなかったらしい。鬼頭も恵から、父が男性と付き合うことを禁じているので、車で家へ送るときは家の前まで行かず途中で降ろし、電話の遣り取りも恵の方からの一方通行だった。だから家の者はまったく鬼頭の存在を知らなかった。刑事が鬼頭のところに来たのは、単に恵が学生時代鬼頭の働いている会社で、アルバイトをしていたということだけだった。家族が鬼頭の存在を知らなかったことが、凶らずも鬼頭の逮捕が遅れる原因になったことは間違いない。

恵は鬼頭に対して「貴方の子供なんて生みたくない」と言った。それは貴方よりももっといい男がいるということだったのだ。それを獄中で知ったときは、少なからずショックを受けた。恵は一つの愛では我慢できない浮気性の女だったのか。松茸狩りと一緒に、最初山に入り松茸を見付けたときは嬉しくて仕方がない。しかし山を歩いているうちに、更に大きな松茸を見付け、もっと奥に行けば更に大きな松茸があるのではないかと思う。なかなか手に入らない物が手に入ったときの喜びは格別だが、それに慣らされてしまうと、いつしかその感激すら薄らいでいく。自分は最初に山に入ったとき見付けた松茸なのか。あの日ホテルが混んでいなくて、コンドームを着けセックスしていたら、いつものように恵は夜帰宅していたはずだ。そして恵と付き合っているうちに、他に男がいると分かったなら、おそらく自分の方から身を引いたに違いない。しかし思い返してみると、漠然とではあるものの、恵みの背後に男の影があるのを、どこかで気がついてたのかもしれない。それを認めたくないから、殺した後あのような残虐な行為に及んでしまったのか。

結局恵は亡くなってしまったため、本当に鬼頭のところを好きになってくれたのか分からないが、一時的にせよ鬼頭を気に掛けたのは事実には違いない。自分のような人間に好意を寄せてくれた女は、後にも先にも恵しかいない。その貴重な女を自らの手で断ち切ってしまった。天国から地獄にお釈迦様が出された蜘蛛の糸を、自分の強欲のために断ち切ったカンダタのように、せっかくのチャンスを自らの手で潰してしまった。

逮捕された後、自分の行いを後悔していないと言いつづけてきたが、実のところ恵と過ごした楽しい出来事が、思い出となり夢に出てくることがある。それは精神的にもとても辛いものだった。『ジョニーは戦場に行った』映画のように、過去の思い出はカラーで、現在は時間が止まった白黒の世界を彷徨っている。それはまるでブラックホールにでも落ちてしまったような不安定な感覚だった。

鬼頭のところに刑事が来たとき、正直もうだめだと思った。最初に発見された遺体が、恵でなかったことが幸いした。恵を埋めた場所は、バンガロー跡の人が誰も入らない空き地だった。しかし恵の後、女を殺害し埋めた場所は、湖畔の景色のいいところで、何年か後別荘が建つ予定になっていた。

恵を殺害してから六ヵ月後、また一人の女の未来が奪われた。彼女の名前は米谷理奈といい、長野市内の証券会社に勤めるOLだった。

それまで女に声を掛けることすらできなかったのに、恵を殺害してから今までの自分が嘘のように、女に気安く声を掛けることができるようになっていた。恵と付き合うまでは、自分を擁護する感情が常に働いていたが、今ではそのような気持ちはどこかに吹き飛んでしまった。女に声を掛ける目的は一つ、セックスしたいからに他ならない。

鬼頭のところに最初刑事が来たとき、逮捕されるのも時間の問題と考え、何れ捕まるのであれば、今のうちに十分楽しんでおかなければと思ったことも起因している。

篠ノ井駅前ではRX-7を止め車の中から通行人を物色していると、とても足の綺麗な女がRX-7の横を通り過ぎて行った。車高の低さもあって、車内から女を見ると先ず足に目がいく。ピンクのタイトスカートから伸びる二本の線は、鬼頭の性欲に火を点けるには十分な長さだった。車を徐行させRX-7を女の横に付けると、窓を開け徐に声を掛けた。

「ねえ。これからどこへいくの？」

女は立ち止まる気配も見せず、無視してバス停の方へ歩いて行った。その女を目で追い女が立ち止まったバス停の行き先を確認した。そこは信州新町行きのバス停だった。信州新町はここから車で四十分ほど山に入ったところにある。鬼頭はこのバスが一時間に一本しか出ていないことを知っていた。RX-7は徐行しながらバス停の前まで行き、そこで一旦車を止めた。鬼頭は再び車の中から女に声を掛けた。

「新町方面に行くなら乗りなよ」

女は自分の左手に嵌めた腕時計を確認すると、少し考えるような素振りをみせた。怪訝な顔を隠さず、車の中にいる鬼頭と目が合うと、ゆっくりRX-7の横に来た。

「貴方私をナンパしているの？」

一瞬この女は、鬼頭が声を掛けたことに腹を立てているのかと思った。

「ナンパと言ってしまうえばそれまでだけど、君があまりにも美しすぎるので、もし良かったら、ほんの少し貴重な時間を一緒に過ごせたらと思って」

人を殺めたことにより、まったく違う人間に変貌していた。今の鬼頭にとって失うものは何もない。そう考えるとどんな恥かしいこともできるような気がする。ジキルはハイドになるために薬を用いたが、鬼頭は女を一人殺しただけでハイドになることができた。

人はモラルという着物を着ている。その着物を脱ぎ捨ててしまえば、犬や猫のようにどこでも交尾することができるだろう。

「口が旨いのね。いいわ、どうせ家へ帰るだけだから、ドライブに付き合っただけでもいいわよ」

女は美しいと誉められた御陰かは分からないが、最初に声を掛けたときの猜疑心を持った表情ではなく、まんざらではないような顔付きになっていた。このときまで鬼頭は何人かの女に声を掛け、殆ど相手にされなかったものの、ごく希に肌を合わせる関係になったこともある。しかし

その女たちと再び会うことはなかった。

鬼頭は車から降り、素早く助手席に回ると、ホテルのベルボーイの如くドアを開けた。

「どうぞ」

女は少し驚いた様子だったが、それでもゆっくりと低い座席に腰を下ろし、細く長い足をダッシュボード下に投げ出した。タイトスカートから覗く内股が何とも艶かしい。

「ドアを閉めますよ」

女の手足の安全を確認すると助手席のドアを閉め、自分も運転席に乗り込んだ。運転席に座りスターターキーを差し込むと、ほのかなパフュームの香りが鼻から脳に抜けた。鬼頭は女が発するこの臭いが好きだった。この臭いを嗅ぐと非常にモチベーションが上がってくる。

「この車随分と車高低いのね。スピード凄く出るんでしょ？」

女は車内をぐるりと見回すと運転席の鬼頭を見た。

「所詮国産車だからスピードはたかが知れているけど、コーナリング性能はかなりのもんです。ちょっと体感してみます」

クラッチを繋ぎ、ギアをニュートラルの状態であクセルを少し踏み、スターターキーを回した。レシプロエンジンとは明らかに違う、電気モーターのような軽やかなロータリーエンジンの音が、車内にも飛び込んできた。女はシートベルトを締めた。鬼頭も女の手前、普段あまり締めないシートベルトを締めた。

「実は私、今教習所に通っているのですが、なかなか仮免まで行かなくて、下手なのかもしれないわね。すぐエンストしてしまうの」

不思議なもので女の態度が、先ほどまで少し高飛車に感じたが、この狭い空間に入った途端急にしおらしくなった。既に指導権は鬼頭の方にある。ゆっくりギアを繋いで車を発進させた。ローギアからセカンド、サードとギアをシフトアップしていくとき、シフトノブが短いため、もう少しで左手が女の太股に当たりそうになり、何ともいえない興奮を覚えた。

この世には男と女しか存在しない。それだからなのか、女という生き物が艶かしく美しいため、それをむちゃくちゃにしてやりたいという感情が常に働いていた。

国鉄の中央線を越えると、車は新町方面に向かって走って行った。

「君家はどっちなの？」

「信更赤田よ」

赤田は新町と篠ノ井の中間に位置していた。

「どうするこのまま家に帰る。それともドライブをちょっと楽しむ」

「それは貴方にまかせるわ。私も子供じゃないから」

「じゃ決まりだ。君車酔いとか大丈夫？」

「私の家はかなりの山道を走っていかなければ行けないところなの。だから車に酔ったことはないわ。でも何でそんなこと聞くの？」

横にいる女の視線を微かに感じた。

「せっかく乗ってもらったのだから、ワインディングロードでも走ろうと思って。聖に行く道なんだけどいいかな、それほど遅くはならないと思うけど」

「いいわよ」

今の若い女が果たしてスポーツタイプの車に乗り、車をドリフトさせながら走らせるのを、本当に喜ぶかどうかは疑問だったが、今の鬼頭が女を誘うには、この方法しか思いつかなかった。

車は稲荷山を通り抜け聖へ向かう山道に入っていく。普通より大きいタコメーターは、一気にレッドゾーンまで回った。ところどころで車をドリフトさせると、身体にGが掛かり女の「うっ」という呻き声が耳に飛び込んできた。RX-7はあっという間に聖湖に着いた。この湖は小さな湖で、十年前まで湖面が凍りスケートリンクが常設されていたが、最近は温暖化の影響か湖は凍らなくなった。

湖畔の空き地に車を止めるとエンジンを切った。

「気持ち悪くならなかった？」

「気持ち悪くはならなかったけど、随分荒い運転をするのね。富士急のジェットコースタを思い出しちゃった」

そうは言ったものの女は怒っているようには見えなかった。それどころか新しい遊具にでも乗ったように、多少興奮しているように感じられた。

「何か飲む？そこの自販機で何か買ってくるけど」

「そうねコーヒーがいいわ」

「分かった」

鬼頭は車を降り自動販売機の前まで歩いて行った。ポケットの中に手を突っ込むと、百円玉を二枚取り出し、缶コーヒーを二つ買って車に戻ってきた。一本を女に渡すと、自分の持っている缶コーヒーのプルタブを開け一気に喉へ流し込んだ。女も缶コーヒーを受け取るとプルタブを開けゆっくりとそれに口を付けた。辺りは次第に暗くなって、助手席にいる女の顔も判別しにくくなっている。スターターキーを回し再び車を発進させた。先ほどとは違い車をゆっくり走らせた。松本へ抜ける県道を少し走ると直ぐ脇道に入った。

「どこへ行くの？」

女は不安げな顔を鬼頭に向けた。

「大岡を抜け信更へ行こうと思うんだが……」

それは口からの出任せで、この道を行っても大岡に抜けるどころか、湖畔の反対側に出るだけだった。県道から外れ脇道を走っていると、舗装を施してあるものの道幅が急に狭くなった。道の両サイドは草が生い茂り対向車が来たら、草むらに車体を寄せなければ、すれ違いができないほどの道幅になっていた。辺りは日が落ちすっかり暗くなっている。リトラクタブルライトをアップさせライトを点灯させた。

「ねえ。この道で本当に大丈夫なの？」

「ちょっと狭いけど大丈夫だよ」

車内は既に暗くなっていたため、女の表情は窺うことができなかったが、この後に起こる自分の運命を知ったなら、尋常な精神状態ではいられなかったに違いない。

RX-7はそれほどの距離を走らないうちに、狭い道から少し広い空き地に出た。アクセルを強く踏み車を加速させた。右手で急ハンドルを切ったと同時に、左手でサイドブレーキを引きクラッ

チをつないだ。RX-7はタイヤの軋み音を鳴らし、スピンをしながら停止した。

「キャー」という女性特有の甲高い叫び声が車内に響く。鬼頭は徐に室内灯を点けた。

「何をするつもりなの？」

オレンジ色の室内灯に照らされた女の顔は、見る見る引き攣っていった。グローブボックスの蓋を開け、中から大型のダガーナイフを取り出した。

「服を脱げ」

ダガーナイフを女の目の前に突き付けると、先ほどまでとは違うどすをきかせた声で脅した。豹変した鬼頭を見て女の表情は凍りついた。見も知らない男の車にのこのこ乗ってくるお前が馬鹿なんだ。恨むなら自分の間抜けさを恨むがいい。

「お願いだから殺さないで」

女の声は震えすべてを悟った目をしていたが、自分が最も考えつかない結果になることは、このとき想像もしなかったであろう。震える手でゆっくりと、ブラウスのボタンを外していった。キーを抜くと運転席を出て助手席に回り込みドアを開けた。

「左足を外に出せ」

女は言われたとおり、左足を車の外に投げ出した。

「靴を脱げ」

女は上体を屈め左手を使い赤い皮製の靴を脱いだ。なぜこのようなことをさせられるのかまったく見当が付かなかったが、取り敢えず男の言うことに従ったほうが得策と判断したのだろう。薄いベージュのストッキングだけとなった足が露わになった。足の爪には色は分からないものの、白っぽいマネキュアが塗ってある。あまりにも美しい足を目の当たりにして、どうしても傷付けたい衝動に駆られた。右手に持っていたダガーナイフを徐に、女の足に向かって切りつけた。

「キャー」

女の悲鳴が暗闇に響いた。切りつけた足の小指から血が滴り落ちている。女は何で自分が、このような惨い仕打ちを受けるのか、まったく理解できなかったであろう。

「何をしている、早く服を脱げ」

鬼頭は我慢できなくなり、ブラジャーの胸の谷間にダガーナイフを挿し手前に引いた。ブラジャーがはち切れ美しい乳房が露わになった。ダガーナイフをベルトに挟み、両腕で車内にいる女の腕を掴み外に引きずり出した。女は思っていたより重かった。何の抵抗もしないまま鬼頭のするがままになっている。女を引き摺り雑草が生い茂った地べたに寝かせた。逃げられないように足の小指を切っていたため、女はその場から動くことができなかった。

「何でこんなことをするの？」

そのような悲痛な叫び声にも耳を貸さず、自分のズボンのバンドを外した。腰に挿してあったダガーナイフが地面に落ちた。鬼頭は靴を履いたまま、ズボンとトランクスを同時に脱ぐと、それを車の助手席に投げた。そして足元に落ちているダガーナイフを取ると、女の前まで行きスカートをウエストの部分から切り裂いた。スカートの下に穿いていたストッキングの下は、RX-7の室内灯から漏れる僅かな明かりでは、正確な色の判別はできないものの、白っぽいパンティーを穿いているように見えた。ストッキングを引き裂いた後、パンティーの一番細い部分に、ダガー

ナイフを刺しその部分を引き千切った。ゴムが引き千切れる音と同時に、女の下半身が露わになった。鬼頭の下腹部は、既にはちきれんばかりに勃起していた。破れたパンティーを引き千切り、足を大きく広げると、自分の男根を女の膣に突っ込んだ。

〈そのとき自分の頭の中に、また大きな鷲がゆっくり旋回しながら降りてきた〉

腰を振りながら左の乳房に、思い切りダガーナイフを突き刺した。

「ウギャー」女はうがいでもするような濁った奇声を発した。それは女がこの世に残した最後の言葉になってしまった。

ダガーナイフは砂丘の細かい砂に素足が吸い込まれるよう、何の抵抗もなく女の内側へ減り込んでいく。鬼頭はダガーナイフを突き刺したまま腰を動かし女の体内に射精した。膣から男根を抜くと女の腹の上に跨り、乳房に刺したダガーナイフを屠殺場で肉を解体するように、乳房を抉り取った。その肉の塊を左手で掴みその場に立ち上がると、それを自分の男根に擦り付けた。肉の塊は生暖かくとても気持ちがいい。ダガーナイフを投げ出し右手で男根を抜くとあっという間に射精した。再びダガーナイフを手を持ち、抉り取られた乳房にダガーナイフを刺し、肋骨を何本か押し折った。そしてそこに手を突っ込み、心臓と思われる臓器を体外に引き摺り出し、それにむしゃぶりついた。生暖かさはあったものの、不思議なことに味覚が飛んでしまったのか、味がまったくくしない。一口二口と肉を噛み切ると、心臓と思われる肉片を女性の胸元に落とす。手に付いたドロドロした血を、腹や尻に擦り付けると、益々興奮してくるのが自分でも分かった。

「ははは……俺は狂っている」手に付いた血を地べたに生えた雑草で拭き取ろうとしたが、車のエンジンオイルのように一旦手に付着すると、雑草で拭いたぐらいでは取れるものではない。仕方なく助手席に投げつけてあるズボンとトランクを取ると、靴を履いたままそれを穿いた。身体に擦りつけた血糊が、トランクやズボンに貼りついた。

何気なく見上げた空には、青白い月がらんと輝いていた。その月は手を伸ばせばそのまま掴めそうなくらい近く感じられた。自分は今夜狼になった。高校の教科書に『山月記』という物語が掲載されていたが、自分はこの女を殺しているとき、意識は既に人間ではなく狼に変貌していた。己の中に存在する暴力性が、自分の意志でコントロールできなくなっていた。月明かりの下で女を犯し殺した。そしてその血肉を食らった自分はまさしく狼なのだ。

車の中に置いてあるティッシュを取ると、血の付いたダガーナイフを綺麗に拭き取り、鞆に戻しグローブボックスに仕舞った。室内灯を消すとハッチバック後ろに常備してある携帯スコップを取り、女の横に墓穴を掘った。穴を掘っているとき、湖畔の対岸に目をやると何台かの車が、湖畔沿いの道路を走って行く。湖畔沿いを走っている車の運転手が、此方側に気がつくことはないだろうが、助手席の者が横を見て此方の灯りに気がつくかもしれない。しかしそれも今の鬼頭にとってたいした問題ではなかった。

恵の遺体がまだ発見されていないこと。そしてまだ鬼頭を重要参考人として警察の調べを受けていないことから、自分はこのまま捕まらないのではないかという錯覚に陥りそうな気がした。それでも何年かしてこの場所で、白骨死体が発見されることになるのだが。

恵のときはまったく予想外の出来事で、穴もそれほど深く掘れなかったことと、バンガローも廃墟となり、遺体ももう少し早く発見されてもおかしくなかったのだが、結果として最初に発見されたのは此方の方だった。此方の墓穴は計画性もあり、落ち着いてかなり深い穴を掘ったにも拘らず、リゾート開発の手により、いとも簡単に重機によって掘り起こされてしまった。

鬼頭は逮捕されたとき、取調官から何で女を沢山殺したのか理由を訊かれ、女の身体を切り刻みたかったからと自供した。高校のときに観た『ゲシュタポ・ナチ収容所』という映画があったが、この映画を観たときある種の興奮を覚えた。この収容所では旧関東軍、七三一部隊のよう

にあらゆる残虐な生体実験を行っていた。そしてときを同じくして上映されていたのが『スナッフ』という殺人映画だった。『ナチ収容所』はシリーズ化せられ、『スナッフ』も本物か偽物か物議を醸し出したが、これらの映画を観て何度となく興奮した。しかし本当の理由はそんな単純なことではなかった。

初めて殺した相手は弟だったが、あれは単に置き去りにしただけで、自分の中には人を殺したという意識は殆どない。それは自分が直接手を下していないということもあるかもしれないし、死ぬ瞬間を目撃していないということも起因している。何よりも幼かったため、罪の意識がなかった。恵の首を絞めているとき、結果として死んでしまったのだが、そのときは殺そうと思って首を絞めたわけではない。気がついたら動かなくなっていた。しかしその後行なった殺人は、快楽を求めての殺しであり、できることならビデオに撮って残しておきたかった。

取調官が鬼頭から聞かされた自供は、この捜査を担当した捜査員たちをも驚かせる内容だった。取調官に自供しただけで、五人の女の殺害を認めている。その殆どの女とは性行為の最中に殺害し、死姦まで行っていた。

最後には決まって内臓を抉り出したり、顔の皮を剥いだり、過去の犯罪でも例を見ない残虐性を強調した犯行だった。それでも死人の肉を食したことだけは誰にも言わなかった。いや一度自分の教誨師になった神父に、告白しようとしたことがある。そのときなぜ神父にそれを告白しようと思ったのか分からないが、結果として何も言えなかった。

道徳心も人間であることも捨てたはずなのに、その恥部は誰にも知られたくなかった。しかし他人から狂人と思われるのは一向に構わない。むしろ犯罪史上に名を残す、猟奇殺人者としての地位の方が魅力だった。女を殺害しているときは、自分が捕まることは想定していなかったが、それでもこのままで済むとは思っていなかった。

警察に留置されその後拘置所に移監になったが、それこそ色々な人が鬼頭の事件に興味を持ち、事件のことを面白おかしく書き、尚且つそれを差し入れてくれた。中には「頑張ってください」という女からのファンレターともとれる手紙まで来た。獄中に繋がれ自分のことを良くも悪くも、これだけ書かれることは決して悪い気はしない。鬼頭自身気づいていなかったかもしれないが、ごく平凡な人間が一夜にして有名になってしまう。それをより強調させるには、自分をより悪者に見せる必要があった。弁護士の要請で精神鑑定も行なわれたが、まったく異常がないという結果が出た。

最初に殺害した恵以外は、どの女も大学を卒業し、銀行や証券会社に勤めるOLだった。それらは逮捕後週刊誌などで知った。車の中から声を掛けると、どの女も最初っつけんどんな態度をとった。しかし一旦車に乗ってしまうと、急にしおらしくなる。そして犯行間際になり、女が自分の末路を知ったときの絶望的な眼差しが堪らなく好きだった。高学歴の女といえども、鬼頭に自分の身を委ねるしか術がないのだ。

鬼頭の潜在意識の中に、上流階級に対するコンプレックスがあったのは間違いない。もう一つ子供が砂場で一生懸命造り上げた砂の城を、意図も簡単に踏み潰すように、人の幸せを壊してしまいたい。そんな気持ちも少なからずあった。それは社会に対する反発ではなく、自分は違う世界の者だという考えを持ち、罪を犯すことを寧ろ楽しんでいるようだった。

沢藤真紀は電車で屋代駅に降り立つと、あまりの激しい雨にホームに呆然と立ち尽くしていた。今日に限って傘を持ってこなかったことを後悔した。真紀の家は信越線の屋代駅から車で五分ほど走った森という地区にあり、春になるとここら辺一帯は、杏の花で一面桃色の世界に変わる。古い藁葺き屋根の農家がまだ残っていて、杏の花と調和し何とも幻想的な雰囲気醸し出す場所だった。

真紀は地元の進学校を卒業すると東京の美大に進学した。大学では油絵を専攻し教職を取り、長野県の教員採用試験を受けたが合格には至らなかった。半分諦めかけていたところ高校時代の恩師から連絡を貰い、長野市内の私立女子高校が、美術の教師を募集しているので受けてみてはとアドバイスを受け、辛くも今勤務している女子高に採用されることになった。今年で五年になる。この女子高には美術教師が、真紀の外に定年間近の男性教師しかいなかったため、美術部の顧問も真紀が受け持つことになった。

真紀は学生時代それなりに男性と付き合い、それ相応の関係になったこともあったが、長野に帰郷し教職に就くと、真剣に付き合える男性は少なかった。学生時代は真紀も含め絵を専攻している者は、それで生活していけるかどうかは別として、何とか絵で生きていこうと考え我武者羅に絵を描き続ける。それでも絵で食べていける者はほんの僅かで、卒業すると殆どの者が、絵とはまったく関係ない仕事に就いていた。真紀はまだ美術教師としてやっていけたが、絵だけで生活していけるほど現実には甘くないということ、美大生は身をもって味わうことになる。それでも学生時代は皆が情熱を持っていた。共通した目標に向かっていけば、それだけで連帯感が生まれる。そんな中で男と女の関係になっていくのはごく自然の成り行きだった。それぞれ可能性は低いものの未来を追いかけている。その何ともいえないアンバランスが心地好かった。自分が社会人に成ってしまうと、今までの学生時代が嘘のように、夢から現実の世界に引き戻される。

社会人に成って男性と付き合ったことがなかったわけではないが、直ぐ結婚の話になりせっかく愛を育もうと思っていたところ、いきなり現実に引き戻されてしまい、何か分からない遣る瀬無さを感じずにはいられなくなった。学生時代の感覚がいまだに取り除けないのかもしれない。学生時代なら結婚してくれなんて絶対誰も口にしなかった。未来の話をするものの、誰もそこに到達できるとは思っていない。誰かの歌にあるように、社会に出たら長い髪を切って働かなければならないことは覚悟している。ただそれはまだ遠い先の出来事に思えた。そんな彼等と一緒に、肌を寄せ合うのはとても心地好い。揺れる車の中ではよく寝られるが、車が停止すると目が覚めてしまう。そんな感覚に似ていた。現実に生きている男は、なぜかつまらなく真紀の目には映った。

女子高、美術部の顧問をしていると、石膏デッサンなどに取り込む彼女たちが、嘗ての自分を見ているようで微笑ましかった。この中に、もしかしたら芸術家に成る者もいるかもしれない。私学の女子高ということもあって、髪の色を茶色に染めたり、ピアスをつけたりすることは校則で禁じられていたため、どの生徒も表面上は真面目にしていた。真紀はそのことがとても大切だと思う。大学生になればそれこそ何でも好きなことができる。しかし高校を卒業するまでそれら

のことは我慢する。そして目標を決め勉強することが、本来の高校生の姿ではないだろうか。高校時代苦労していればこそ、大学に入ってから自由を謳歌できるのだ。

教育実習に行った母校は男女共学だったため、性欲を持てあましていくそガキや、ポマードべったりの生意気なガキがいて嫌な思いをしたが、ここは女子高であるためガキは一人としていない。彼等にとって若い女性教育実習生は、マスターベーションのお数にしかならない。そのような輩を相手にするのは、非常にストレスが溜まることだった。そんな環境からすると女子高は凄く気が楽だ。稀に叩いてやりたい生意気な生徒もいなくはないが、それでも今の学校に十分満足している。

今日も部活を最後まで見届けてこんな時間になってしまった。もう既に日が傾き辺りが幾分暗くなり始めた。おまけに雨まで降っている。もう梅雨はとっくに終わった筈なのに。学校を出るとき雨が降っていたなら傘を借りていたのに。よりによって電車を降りる間際になって、雨が降り出すなんて何てついていないのか。これでは濡れてしまう。いっそのことタクシーで帰ろうかと思案しながら、改札口を抜け駅舎から出ようとすると、目の前に黄色の車が止まった。雨が降っている灰色の景色に、その車の黄色があまりにも鮮やかに真紀の目に飛び込んできた。助手席の窓が開くと、運転している男が此方を見て声を掛けてきた。

「良かったら乗っていかない。送っていくよ」普段であれば無視を決め込むところだが、雨が降っていたことと、鮮やかな車の黄色と、中に乗っている男の鋭い視線に魅入られ、まるで催眠術を掛けられたように車のドアを開けた。低い座席に腰を下ろすと、車内は思っていたより狭く、直ぐ隣に男の体温を感じることができた。男が目の前に青いハンカチを差し出した。

「これ良かったら使って下さい」

雨が激しかったため髪の毛や肩が濡れている。オフホワイトのブラウスが透け、白いブラジャーの紐が薄っすらと浮き出していた。

「ありがとう」

「雨っていやですね」

真紀は男からハンカチを受け取り濡れた髪の毛を拭いた。ハンカチを男に返しながら何気なく男の顔を見ると、歳は明らかに自分より若い、何かとても冷たい印象を受けた。真紀の中で男は大別して二つに分けることができる。えらが張って角張った顔をし、体格はがっしりして野生的で男らしい男と、顎の線が細く色白で女性的な男。この横にいる男はどちらかというと後者に近い感じがした。

私も生娘じゃない。この男の車に乗ったということは、どういうことか自分でも理解しているつもりだ。男が女を車でナンパする目的は、セックスをしたいからに他ならない。この見知らぬ男に抱かれるのは雨のせいなのか、それとも久しく男の体温を感じていないため、それを自分の身体が知らず知らずのうちに男を欲しているのか、自分でもよく分からなかった。

「家はどこですか？送って行きますよ」

どうしてもっとストレートに言えないのか。直接（君とセックスしたい。ホテルに行こう）と言ってくれた方が、かえって好感が持てたのに。

「森よ。私をナンパしておいて、そのまま家に送り届けて終わりってことはないでしょうね」

「え・・・・・・・・」

男は驚愕の表情を隠すことができず此方を見た。流石のナンパ師も此方から誘いを掛けると、一瞬たじろぐものなのか、男の様子は少々滑稽でもあった。

「何鳩が豆鉄砲食らった顔をしているのよ。貴方の行きたいところに行つていいのよ。そういえばこの車よく見掛けるけど、貴方ここら辺の人？」

真紀自身ペーパードライバーであまり車に詳しくなかったが、この車の形と色は特徴があり、何度か見掛けたことがある。

「ええ。更埴市内です」

「この車でよくナンパするの？」

真紀の質問は不躰ではあるものの、嫌味で聞いているのではなく単に興味があったのだ。

「そんなことはないですけど、貴女のように女性側から誘われるのは初めてですね。少しビックリしました」

別に誘ったつもりはないが。

「男の車に乗っておきながら、何でそんなことするという女の方がおかしいのよ。身も知らない男の車に乗ったのなら、ある程度覚悟をしておかなければいけないと思うわ。その気がなければ乗らなきゃいいんだから。貴方も私をただ家に送っていくのが目的じゃないんでしょ？」

「貴女にかかっちゃどんな男も形なしですね。確かに貴女は綺麗だし、だから貴女に声を掛けたんだけど」

車が走り出しシフトレバーを動かす左手が、女性の手のようにしなやかだった。この男はどんな人間なのだろう。学生時代も長野に帰省し男にナンパされたことはあったが、決してその誘いに乗ることはなかった。ナンパが悪いことだとは思わないが、ナンパをする男は真紀の目から見てとても軽薄に映った。自分をナンパした男でも、他の女をナンパした男でも断られると、何の躊躇いもなく次の相手を物色している。彼等にとって女なら誰でもいいのだろう。犬のような彼等は、雌と交尾をすることしか頭にない。少しでも多く女の股に、自分のものを入れることに生き甲斐を感じている。そしてその武勇伝を他人に自慢することが、男の魅力だと勘違いしている。この男もそのような雄犬と一緒に違いない。隣の男がどんないい男であろうと、一度きりの付き合いにしようと思った。男は小刻みにギアチェンジを繰り返し、駅前通から杭瀬下の交差点を右折し、十八号線を長野方面に向かった。

女子高に就職が決まり、その年の夏休みに信州大学で行なわれた教育セミナーで、席が隣になった公立中学の数学教師と親しくなり、暫く付き合いがあったことがある。相手の年は二十七歳で四つ真紀より年上だった。非常に真面目な男だったが関係を持った途端、結婚を申し込まれ一気に愛が覚めてしまった。彼は男と女がこのような関係になったからには、結婚しなければならないという古風な考えを持っていた。男と女の関係になるのはお互い初めてではないはずなのに、なぜそれほど結婚にこだわるのか、真紀にはどうしても理解できなかった。それから今日まで男と肌を合わせたことはない。どうしても男を欲しいと思えば、真紀の美貌があれば、この横にいる男のように、簡単についてくる者はいると思うのだが、男を単なる性欲の捌け口にしたくなかった。だから身体だけの付き合いは、一回で十分だと思う。

真紀は毎日電車で通勤していたが、千曲川の陸橋を渡る手前に、比較的新しいラブホテルが何

軒か建っていることを知っていた。多分この男はそのホテルの一つへ行くのだろうと思われた。十八号線に出て五分も走らないうちに、自分が思っていたホテルに着いた。すべて自分が想像していたように、ことが運んでいることになぜかおかしかった。真紀は東京にいたとき、何度かこのようなホテルに入ったことがある。しかし長野に帰ってきて男と付き合いだしたとき、彼と身体を重ねるのは、専ら彼が借りていた教員住宅だった。

ホテルの部屋に入ると男はソファに腰を下ろした。シックなデザインの室内は、東京で入ったそれよりも落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

「コーヒーでも飲みますか？」

気遣いなのか、それが男の手口なのか、分からなかったが男は優しくかった。

「コーヒーはいいわ。貴方シャワーを浴びてきたら」

男は少し痩せ型で、身長は百七十センチちょっとというところか、ビー玉のような目をして顎の線が細くあまり表情がない。それでも真紀にとって決して嫌いな顔ではなかった。男は服のままレストルームへ消えていった。

真紀はソファに腰を下ろし背もたれに身体を預けた。見ず知らずの男の車に乗り、ある種の緊張を強いられていた。その男がふと目の前からいなくなり、冷静になるとなぜ自分がここにいるのか不思議に思えた。（私は何でこんなところにいるのかしら）今の時代貞操観念なんてナンセンスだと感じる。今は結婚して子供を作り、家庭に入りたいとは思わなかったが、それでもなぜか罪悪感が付き纏った。

子供の頃から絵が大好きで、小学校三年生のときから市内にある絵画教室に通った。そこでは石膏の球体や三角錐、野菜や果物のデッサンの仕方をみっちり受け、中学校を卒業する頃には、ラオコンやヘルメスなどの石膏像を完璧に描けるようになっていた。小学校六年生のときは、友人の顔を描いて周りの者を驚愕させた。担任は全校生徒の中で、あまりにも突出して絵を描くのが上手だったため、子供らしからぬという理由で、作品展には一切選ばれなかった。真紀の母親が一度学校に、自分の娘が何で選ばれないのか文句を言いに行ったが、学校側は、それには取り合わなかった。

「お母さん真紀さんの絵は確かに上手ですが、習字などと違ってただ本物そっくりに描いたから選ばれるのではなく、子供らしい想像力のある絵を我々は選出しているのです」

それを訊いたら何も言い返せなかったと、母は悔しがっていた。

「学校の先生には認めてもらえなかったが、真紀の絵は誰が見ても上手に描けている。お父さんも学生時代建築士を目指しデッサンを散々描かされたから、真紀の絵がどのくらいの実力か学校の先生より分かるつもりだ。別に今学校の先生に認めてもらわなくてもいいじゃないか。真紀が将来絵の道に進みたいのなら頑張ってみ返してやれ」

父だけは真紀を認めてくれた。このことは真紀にとってかなり励みになった。真紀の父は屋代駅前に建築事務所を構える一級建築士だった。子供の頃から絵を描くのが好きな娘をみて、基礎から学ばせればかなりのものになると考え、早くから絵画教室に通わせた。御陰で私立ではあるが美大に進学することができた。

教師になってから何度か県展にも入選したが、自分の絵を他人がお金を出して買ってくれるまで

には至らなかった。

高校に入ってしまうと受験に関係しない教科は、生徒もあまり興味を持たなく、単なる時間潰しになりがちである。この学校は音楽か美術のいずれかを選択することになっていたため、音楽の方が生徒には人気が高く、美術を選択する生徒は全体の三割程度だった。授業内容は水彩画や鉛筆デッサンが主だったが、時折陶芸や彫刻も制作した。

美術は作文ほどではないものの、その者がどのような人物か、探る手掛りになる。教師をしていて、それはそれで面白かった。

部活は油絵が主だったが、美大を目指す生徒には、木炭による石膏デッサンを教えた。その中で毎年一人か二人美大に合格している。この仕事は真紀にとって、とても遣り甲斐のある仕事で、美術教師を目指し母校へ教育実習に来てくれた卒業生には、週末自宅に呼んで持て成した。そんなことをしていると、結婚という現実的なことを考えたくなくなってくる。その日その日がそれなりに充実していればそれでよかった。それなのに今日はいったいどうしてしまったのだろう。すっかり自己嫌悪に陥っていた。自らが男を求めたとは決して認めたくない。

ソファに腰掛けぼーとしていると、男がホテル備え付けの安っぽいガウンを着てレストルームから出てきた。髪の毛まで洗ったのかタオルで頭を拭いている。

「お先にシャワーを浴びさせてもらいました。どうぞ貴女もシャワーを浴びてきて下さい」

「御免なさい。せっかくホテルに入ったのに、どうも体調が優れなくて。今日はちょっと勘弁してもらえないかしら」

真紀が発した言葉に、男はびっくりして一瞬氷のような冷たい目を向けた。その眼光は今まで自分が知っているどの男よりも鋭いものだった。

「そうですか、ちょっと残念ですが仕方ないですね」

男は悪びれる風でもなく、濡れた頭をかきながら再びレストルームに戻って行った。少し時間を置き、真紀の座っているソファまで来たときは髪も乾いていた。

「じゃここを出しましょうか」

そのように言うとフロントに電話して、チェックアウトの手続きをとった。

ホテル代は真紀が払うと申し出たが、男は自分が払うと断って譲らなかった。真紀の方から誘っておいて、こちらから反故にしたにも拘わらず、男は表面上それほど腹を立てているようには見えなかった。ホテルを出た車は森方面に向かって走り出した。雨はいつの間にか止んでいた。

「森のどこら辺ですか？」

車内は気まずい雰囲気はあったものの、男は露骨にそれを態度に示すことはなく、それがかえって申し訳ないという気持ちにさせた。最初この車に乗ったときは、直ぐ隣にいる男に抱かれることを想像したのだが、ホテルに入ってソファに腰掛け寛いでいると、なぜか嫌悪感だけが湧いてくる。それはこの男に対しての嫌悪感ではなく、自分自身に対しての嫌悪感だった。このような軽率な行動を取ったことを深く後悔した。

「東高校前の道を、森方面に行ってもらえますか」

それに対して男は何の反応も示さなかった。

森は更埴市、東の一番奥まった場所にある。袋小路になっていて、ここを抜け他の町に行くことができない。ホテルから出て五分ほど走ったところで真紀は言った。

「そこを右に曲がって下さい」

しかし男は真紀の指示を無視して、そのまま真っ直ぐ車を走らせた。

「済みません。そこで車を停めて下さい」

こちら辺なら歩いてもしさほど距離がないと思い男に伝えたが、男はまるで真紀の存在を否定するかのように杏畑の方へ向かって車を走らせた。この道を少し走ると民家がなくなり畑ばかりになる。真紀の頭に一瞬不安が過った。男は表面上冷静を保っていたが、内心では腸が煮えくり返るほど頭にきていたのだと。先ほどホテルでの氷のような冷たい眼差しを思い出した。

「お願い停めて下さい」

男は真紀の言葉にまったく耳を傾けず、そのまま車を走らせた。こうなったら下手に騒ぎたてしないほうがいいと思い、口を挟むのを止めた。杏畑を抜け山の麓の細い道まで行くと車は停止した。

「先ほどのこと怒っているの？」

真紀が話し掛けても男は何も答えなかった。この男は先ほど自宅を市内と言っていたが、この辺りの道には明るいように見受けられた。ここまで来ると民家がまったくなく、今は杏の花が散ってしまったため、人が来ることは皆無だろう。なぜこんなところに来たのか。真紀はこの後起きるかもしれない、不条理な出来事を想像すると背筋が寒くなった。これほどまでに男を怒らせてしまうとは、あのとき素直に抱かれていればよかったのかもしれない。そう思うと酷く後悔した。真紀の不安をよそに、男は車のエンジンを掛けたまま真っ直ぐ前を見ている。

真紀は男の方に身体を向け、徐に男のズボンのバンドを外し、前チャックを下げ更にトランクスも下げた。男はされるがまま脱げ易いように腰を浮かせた。それでも男は前を向いたまま何も言わなかった。まだ軟らかい男根を片手で掴むとゆっくりと扱いた。男根はみるみる熱を帯び膨張していく。男の股間に顔を埋め、男根を口に含み舌を使って丁寧に舐めた。生き物のように脈打つ血管が真紀の手にダイレクトに伝わってくる。口で銜えながら手で扱っているうちに、生暖かいねっとりしたものが口内に広がった。お腹の上にあるハンドバックから、ポケットティッシュを取り出し、口の中の異物を吐き出した。なぜ自分がこのような行動を取ったのか、そのとき恐怖が全身を支配していた。私はこんなところでいったい何をしているのか。そう考えるとなぜか酷く悲しくなってきた。涙が頬を伝い胸元に落ちていった。

男はエンジンを切り室内灯を点けた。今までメーターパネルとカーコンポの灯りだけだった室内が急に明るくなった。男はトランクスを上げズボンを穿くと、助手席のグローブボックスから何かを取り出し、それを真紀の前に突き付けた。目を凝らして見るとそれはかなり大きなナイフだった。

「あれだけで済んだと思うなよ。あんたが今着ている服を全部脱げ」

男がこのような行動に出るとは思ってもみなかった。自分が今置かれている危機的状況はよく理解しているつもりだったが、なぜか不思議と先ほどまであった恐怖心が薄らいでいた。ナイフを目の前に突き付けられても、よもや自分がこの男に殺されるとは想像すらできなかった。

「それはお断りするわ。先ほどのことが貴方の男のプライドを傷つけたのなら謝るわ。御免なさい。でも私は暴力による強姦に屈するのは嫌なの。貴方がそのナイフで私を刺したければ刺せ

ばいいわ」

今日の前にナイフを突き付けられ怖いはずなのに、先ほどまで持っていた恐怖心は男のものを銜えた途端どこかへ吹き飛んでしまった。だから闇雲に男のいうなりにはなりたくなかった。まさかそのナイフを実際に使用するなんてことは有り得ない。

「ふふ～ん」

男は小ばかにしたように鼻で笑った。お前の命は今俺の手の中にあるのだとでも言いたげな顔だ。それでもこの男は私を殺すようなことはないだろう。

「目の前にナイフが突き付けられ、刺したければ刺せばいいとは本当にいい度胸だ。その度胸に免じて一ついいことを教えてやろう。俺は今まで女を二人殺している。あんたが三人目になることはほぼ間違いない。たとえホテルでセックスしていようと、そうでなかろうと、あんたを殺すことは、この車に乗ったときから既に決めていたことだ。でもあんたみたいに自分の方から誘ってきた女は初めてだった。びっくりしたよ。飛んで火にいる夏の虫とは、あんたのことを言うんだな」

目の前にいる男はまともじゃない。狂っている。今までナイフは単なる脅しに過ぎない。よもやそれを自分に刺すなんてことは考えも及ばなかった。しかし男の淡々とした話し方を聞き、先ほどまで感じなかった恐怖が全身を駆け巡った。無意識のうちに自分の下腹部から生暖かいものが流れ出ていた。それは足を伝わりパンプスにまで達していた。恐怖のあまり瞑っていた目を見開くとナイフの先端が滲んで見えた。（熱い）と思った瞬間何も見えなくなった。（何で、それを素直に受け入れるには私はまだ若すぎる）熱さとも痛さともとれる激痛に意識が遠のいていった。

〈自分の頭の中に、またあの大きな鷲がゆっくりと旋回しながら降りてきた〉

鬼頭は女の眼球にダガーナイフを刺していた。ダガーナイフにそれほど力を入れたつもりはなかったが、後頭部の頭蓋骨に達するまで抵抗なく減り込んでいった。自分でも気がつかないうちに力が入ってしまったのだろう。女が失禁して大切な車のシートを汚してしまったことに無性に腹が立った。本来なら車の外に連れ出し、セックスしてから殺害するつもりだったのに、小便のアンモニア臭が鼻につき、この女が許せなくなっていた。鬼頭はズボンのバンドを締めると一旦車外に出た。助手席に回りドアを開け、女の腕を引っ張り車外へ引きずり出した。草の上に仰向けに倒れている女の顔からナイフを抜くと、ブラウスの前ボタンを引き千切った。露わになったブラジャーのフロントホックを外すと、乳房が姿を見せたが、車の室内灯だけでは色や形までは確認するに至らなかった。

女の着ているブラウスを遺体から剥ぎ取ると、それを丸め車に戻り、助手席の濡れた部分を拭いた。再び女のところに戻り、スカートとパンティーを剥ぎ取り、自分の穿いていたズボンとトランクスを、靴を履いたまま器用に脱ぐとそれを運転席に投げた。物言わぬ女の身体に自分のモノを挿入し死姦した。地べたから膝に伝わる雨水の冷たさを我慢し、必死に腰を動かしたが、直ぐに男根が萎えてしまいそれ以上続ける気になれなかった。今日はなぜか性欲が満たされない。鬼頭はダガーナイフを手にとると、女の右目の眼球を抉り取り、それを口の中に放り込み奥歯で噛んだ。口内に妙な感触と味が広がり、思わず吐き出してしまった。その後ダガーナイフを腹部に突き刺し、陰部まで引き裂いた。しかし人間の身体が割り箸のように真っ二つになるわけもなく、肉の裂け目から腸が飛び出してくるだけだった。女の腹に手を突っ込み、腸を引きずり出したが、あまりにも長いので途中で断念した。その後乳首に吸いつき、それを歯で噛み切り咀嚼し飲み込んだ。

車に戻ってハンドバックを取り、中を開けるとパスケースが目にとまった。室内灯の僅かな明かりで確認すると、それは身分証明書だった。そこには長野成安女子短期大学付属高等学校職員証、教員、沢藤真紀と書かれてある。それは恵の卒業した高校でもあった。

足元を見ると白いスニーカーが、雨上がりの山土でドロドロになり、靴を履いたままズボンを穿けそうになかった。運転席に戻り靴を脱いで、椅子に座りながらトランクスとズボンを穿いた。靴を履き車の後ろに回り、リヤハッチを開け携帯スコップを手にとった。

女の横に大きな穴を掘って足で遺体を蹴り落とし、女の着ていた服とハンドバックを穴に放り投げその上に土を被せた。何か前回と違い物足りなさを感じる。空を見上げると真っ暗で星一つ見えなかった。

緑川明美は中央線の姨捨駅がある、山裾の道を一人で歩いていた。ときは既に午前零時を回り、車など一切通る気配がない。秋の夜空は雲一つなく星が空一面に輝いていたが、今の明美にそれを眺める心のゆとりはなかった。

「隆司のバカ」

明美は闇夜に向かって大声を張り上げた。半時前彼氏である村尾隆司と、大喧嘩をして車を降ろされた。降ろされた場所は更埴から松本へ抜ける幹線道路だったが、隆司を困らせようと思い直ぐ脇道に入ってしまった。山道でも幹線道路であれば、時間が遅くとも車が何台か通る。しかしこの道路は既に一時間近く歩いているにも拘らず、一向に車の通る気配はない。今日、いや日付が変わったから昨日になるのか、隆司と車で三重県の鈴鹿サーキットに、グループ5の自動車レースを観戦しに行った。今はその帰りだ。六時間かけやっと家の近くまで来て、あと少しというところで、隆司に車を降ろされてしまった。

レースが終わりサーキットの駐車場から車を出そうとしていたとき、バックしてきたアメ車にリヤフェンダーをぶつけられた。ドンという鈍い音がしたので、隆司はマニュアルギアをニュートラルに入れ、サイドブレーキを引き急いで車外に出た。

隆司の車は今年買ったばかりのスカイラインで、相手の車は古いアメ車だった。アメ車には四人の男が乗っていて、隆司が車から降りると左側の運転していた男も降りてきた。運転席から降りてきた男は二十五歳くらいで、金縁メタルの四十五度のサングラスを掛け、パンチパーマに口髭を生やし、派手なセーターを着て、誰が見てもその筋の人という出で立ちだった。

「兄ちゃん。えらいことしてくれたのう」

学生時代よく耳にした、関西方面の言葉が耳に飛び込んできた。明美は助手席からそれらを見ていて、何も揉めごとは起きなければいいと願った。わたしたちの乗っていた車は停止していた。駐車スペースいっぱいに停めていたアメ車が、よく後ろを確認せずバックしてきたので、わたしたちの車にぶつかったのではないだろうか。

本来なら相手の方が悪いのだから、相手が謝ってくるのが筋なのに、どうも普通の常識が通じるような相手ではないように感じた。パンチパーマの男はアメ車の後部まで行き、ほんの僅か凹んでいるバンパーを手で触り「兄ちゃん、これ高くつくで。どないしてくれんねん？」と案の定因縁をつけてきた。

「何言ってるんですか。あんたが僕の車にぶつけたんじゃないですか」

隆司は新車をぶつけられ少々興奮していた。

「何やて。こら、おどれわいに因縁つけるんか？」

パンチパーマの男はだぶだぶのズボンに雪駄を履き、足音をぺたぺたさせながら隆司のところまで歩いてきた。そして首を少し傾げ、隆司の顔の二十センチくらい前まで顔を近づけた。

「因縁なんてつけていません。ただ僕は停まっていた。それなのに何で僕が文句を言われるんですか？」

隆司は相手がまともに取り合う常識のある人間ではないということ、理解していないのか、

パンチパーマの男に食い下がった。高校、大学とラグビーをやっていて、今は長野市内にある自動車ディーラーに勤務している。身長は180cmに少し足りないものの、かなりガッチリした身体つきをしていた。パンチパーマの男より10cmほど目の位置が高かった。隆司は日頃から腕力には自身があるようなことを公言していた。しかしそれがいけなかった。

「おどれ今誰と喋ってるか、わかっどるんか」

パンチパーマの男はポケットに突っ込んだ手を出し隆司の胸倉を掴んだ。その間二台の車は駐車場の道を塞いでいたにも拘らず、誰一人文句を言わずゆっくりと車の横を擦り抜けて行った。隆司は反射的に両手でパンチパーマの男を突き飛ばした。パンチパーマの男はその場に尻餅をついて隆司を睨みつけている。

「おいこら。何さらすんじゃない」

パンチパーマの男は大声を張り上げその場に起き上がった。アメ車に乗っていた他の三人も車から降りてきた。三人のうち二人はパンチパーマをかけ、運転手と同じような格好をしていたが、一番年長と思われる線の細い男は、髪をオールバックにしてサングラスを掛け、薄いグレーのスーツを着ていた。ネクタイはしておらず、シルクと思われる黒い襟の大きなシャツを着こみ、スーツの襟にはどこかで見たことのある金色のバッジが付いていた。オールバックの男は隆司の前まで来ると、ポケットの中に突っ込んでいた両手を出し喋り始めた。

「兄さん、すまんかったのう。うちのアホが失礼なことして。ただ事故ちゅうのはどちらかが一方的に悪いちゅーもんやないんや。分かるか？」

オールバックの男の喋り方は、パンチパーマ男の喧嘩腰の喋り方に比べると、随分と穏やかな落ち着いた話し方だった。

「はい。それは分かります」

「そやろう。だからどっちがぶつけたか、ぶつけられたかなんちゅうのは、ほんまのところ分からんわけや。兄さんが、僕は停まっていたというても、わしには動いてるふうに見えたし、こいつが停まっていたというても、兄さんには動いているふうに見えたかもしれんさかいな」

オールバックの男はそう言うと、パンチパーマの運転手のところまで行き、拳を振り上げ力を込め顔面を殴った。線が細いと思っていた男のパンチは凄まじく、殴られた男は勢いよくそのまま後に引っ繰り返った。そしてさらにオールバックの男は倒れたパンチパーマの男の脇腹を靴の爪先で一発蹴った。その素早い動きは伊達にこの世界で飯を食ってきていないという証のようにも感じた。傍らで見ていた隆司の顔色が、みるみる変わっていくのが、車内にいる明美からもはっきりと確認することができた。他の二人は何ごともなかったように冷静にそれを傍観している。

「兄さん、このアホの無礼は謝る。ただうちらも大紋背負っている以上、喧嘩両成敗でこのまま、のこのこ家に帰るわけにはいかんや。カズ立たんかい」

オールバックの男はカズと呼ばれたその男に向かい怒鳴った。頬を押さえながらパンチパーマの男は素早く立ち上がった。

「すみません、兄貴」

オールバックの男はパンチパーマの男の頭を軽く叩いた。

「兄さん。わしの大事な車をぶつけたこいつには、けじめとして指一本落としてもらおう。兄さんにも指一本落としてもらいたいところだが、堅気の人に指一本というわけにもいかんやろうから、それに変わる何かをもらわなあかんのや」

オールバックの男は、ズボンのポケットから白いハンカチを出すと、パンチパーマの男にそれを渡した。

「カズ、口に血がついとる。拭いときや」

「すみません。兄貴」

パンチパーマの男は頭を下げると、差し出されたハンカチを両手で受け取った。

「いくら御支払いすればいいのですか？」

すっかりオールバックの男のペースになっていた。隆司はオールバックの男の言うとおりにしようと思ったのか、相手がヤクザということで諦めたのか、オールバックの男の言葉に従う素振りを見せた。

「指一本いうたら通常一千万貰いたいところだが、こいつは何せ半人前やさかい百万に負けときますわ。兄さん申し訳ないけど免許証見せてもらえまっか」

隆司は免許証を取られ、百万円を払うことを約束させられた。そんなことがあったため帰りの車の中は気まずい雰囲気だ。伊那の高速を降りたところから口論が激しくなった。

明美も最初隆司を気の毒に思い慰めていたが、隆司は不条理に金を取られることが頭にきて明美に当り散らした。

「そんなに悔しかったら警察に届けたら」

明美が言う。「僕だってチンピラを突き飛ばしているし、嘘八百並べられたら僕まで逮捕されかねない」狭い車の中でああでもない、こうでもないと言っているうちに喧嘩となり、誰もいない山中で降ろされてしまった。

明美は長野市内にある大手旅行会社に勤務するOLだった。京都市内の大学を卒業し四年が過ぎ、今年二十七歳になる。学生時代何度も海外旅行を経験し、就職するなら旅行会社と思い今の会社に就職した。この大手の旅行会社は長野や上田にも支店があり、帰郷を望む両親のためにもと思い、採用試験を受け見事入社することができた。今の彼氏、隆司とは学生時代に旅行したヨーロッパで知り合った。隆司は大阪の河内にある大学に通う学生だった。旅行中同じ長野出身ということで話が弾んだ。意気投合しバーに飲みに行ったり、自由行動には美術館や公園を一緒に散策したりした。このツアーはスペイン、イタリア、フランス、スイスとヨーロッパを北上するツアーで三十日と長い旅行だった。大学生三十人の大所帯で七割は東京の大学生で、二割が関西の大学生、残り一割がその他、地方の学生だった。どうしても東京と関西の学生グループに別れる傾向があり、明美と隆司も最初関西のグループと一緒に行動を共にしていた。イタリア、ローマに滞在中ナポリ・ポンペイに行くオプションツアーに参加したとき、アウトストラダを走るバスの中で隣の席に座っていた男が隆司だった。通常女子大生は殆ど友人とかグループで参加するのだが、明美には連れがいなかった。窓際に座りぼーと景色を眺めていた明美に、隆司が話し掛けてきた。

「イタリアの高速道路いうたら、フェラーリとか、ランボルギーニとか、ばんばん走ってると思うたら、フィアットや小さい車ばかりやん」

四回生だった隆司は既に関西方面の言葉に感化されていたが、二回生の明美は京都の言葉をまったく話していなかった。

「自分、実家東京？」隆司の質問に明美は「長野です」と答えた。

「ええ本当！長野いうても広いけど北信、南信？」と聞いてきたため「更埴です」と答えた。北信の人間はどちらかというと、東京の大学に進学することが多く、関西の大学に行く者はごく少数である。

「まじ、俺んち篠ノ井」

「うそ、やだ～」

明美がバスの中で突然大きな声を出したため、皆が明美に注目した。明美は恥ずかしさのあまり下を向いて、顔を上げることができなかった。それから二人は急接近しスイス、ルツツェルンの小さなホテルで結ばれた。カペル橋では「絶対またここに来ようね」と約束した。

二人は帰国しても付き合い続け、日曜日には隆司の趣味でもあるレース観戦に、鈴鹿までよく出掛けた。隆司は星野一義のファンで、当時F2時代は中島悟が圧倒的に速かったが、中島はF1にステップアップし、星野は国内レースに残った。明美が好きだったステファン・ヨハンソンはF1に行っても、あまりいい成績を残せなかったと聞いている。

二人は長野に戻ってもずっと付き合い続けた。長野に帰っても隆司のレース好きは冷めず、富士や鈴鹿に通った。隆司は車が好きで買ったばかりのスカイラインを、インパル使用にしてどこへ行くにも明美を横に乗せていた。隆司の勤めるカーディラーは土・日が稼ぎどきなので、日曜日に休みを取るのには難しかったが、隆司は人一倍頑張り屋だったため、営業成績も良く営業所長からも信頼されていたので、レースがある日は何とか休みを取らせてもらうことができた。

隆司は学生時代、大阪八尾に下宿していた。同じゼミに関東を拠点とする暴力団の幹部の息子もいたし、河内という場所柄的屋の知り合いもいたため、ヤクザのやり口は十分理解しているつもりだった。だから今回あのような罠にスッポリ嵌ってしまったことに、自分自身に腹を立てていたようだ。それは見ても気の毒に思えた。腕力に自身があっただけに、自分が暴力に屈したことに、情けない気持ちになったことは明美にもよく分かる。しかしだからといってその捌け口を、すべて明美に向けられたのではたまったものではない。まだ買ったばかりの新車をぶつけられ、理不尽にも免許証まで取られ、お金まで請求されたことは、隆司の人生に於いても最悪の事態に違いない。ただあそこまでされたのなら、警察に届ければそれなりに対応してくれたと思う。相手はヤクザなのだし、やっていることは間違いなく犯罪なのだから、何で警察に訴えないのかと詰問すると、隆司は逆切れして喧嘩となった。わたしは隆司のためと思ってアドバイスしたのに、それがかえって火に油を注ぐことになってしまった。聖までハンドルを握っていなければ、明美に掴みかかるのではないかと思えるほど激昂していた。こんな隆司は初めてだった。ここまで来れば女の足でも歩いて家まで帰れると思ったのか突然、車を降ろされてしまった。

車を降ろされたのは県道だったが、明美自身隆司との喧嘩で頭に血が上っていたのと、此方の方が家に帰る最短距離であったため、車を降ろされ直ぐに脇道に入った。隆司は必ずわたしを連れに戻ってくる。そう思いつつどこかで隆司を困らせてやろうという気持ちが働いたのは確かだ。わたしを探しに戻ってきて、県道沿いにわたしがいなければ、心配して彼方此方探してく

れると考えた。

真っ暗な道を絶望的な思いで歩いていると、後方からライトの光が明美の前方を照らし、車が近づいて来るのが分かった。もしかしたら隆司がわたしを探しに来てくれたと淡い期待を抱いたが、近づいて来る車のシルエットを確認すると、テールの長いスカイラインではなく、スカイラインより一回り小さいハッチバックタイプの車だった。その車が明美の横で停止した。助手席のパワーウィンドーが開くと、車内から男が徐に声を掛けてきた。

「こんな時間にどうしたの？」

「・・・・・・・・」

砂漠を何日も歩き続け、突然目の前にオアシスが現れたような感激だった。隆司を困らせようと思い脇道に入った。そのことがかえって泥濘に足を踏み入れ、もがいているうちにどんどん身体が埋没していくような状況になってしまった。そしてもう出られなくなったと諦めかけていたとき、突然目の前に救いの手が差し伸べられたような感覚だった。底なし沼からやっと出られるのかと思いホッとした。それと同時に涙が止めどもなく溢れてきた。車に乗っていた男は運転席から降りてくると、助手席のドアを開けてくれた。

「こんな時間に女の人一人で、こんな場所歩いているなんて危ないよ。家まで送ってやるから乗りな」

明美は何の躊躇いもなく車に乗り込んだ。そのときは何でこんな時間に、こんな場所を車が通ったのか気にも留めなかった。車の助手席に座ると、カーオーディオからエンリオモリコーネの映画音楽が流れていた。哀愁漂うメロディーに、一瞬隆司との楽しかった思い出が頭を掠めた。

「君の家どこなの？」

「鋳物師屋です」

「え本当、俺んち打沢だよ。じゃ同じ小中学校に通っていたんだ」

男は気安く話し掛けてきた。歩いていっても明美の家までそれほど時間が掛からない距離にある。冷静に考えればここはもう更埴市なのだから、ヨーロッパで出会った隆司のように、偶然にも隣町だったことと比較すれば、それほど驚くことでもなかったが、このときばかりはそれでも嬉しかった。

小学校のときこの辺まで遠足で来た記憶がある。安心してヘッドライトに照らされた前方を見ていると、車は明美の思惑とは違う方向へ進んでいた。明美は自分が下って来た道をそのまま行けば、八幡神社前の道に出ることは知っていた。

「どこへ行くのですか？」

明美の質問に男は何も答えず、不安は益々増幅していく。砂漠の中のオアシスだと思い飛び込んだ場所が、実は蟻地獄だったのかもしれないと悟ったとき、恐怖が全身を駆け巡った。

「停めて下さい」

明美が大声を上げたと同時に、車はタイヤの軋み音を鳴らし急停車した。明美は上体をダッシュボードに軽く打ちつけた。肘と胸が多少痛かったが、痛さよりも恐怖のほうが勝っていた。何でこの車に乗ってしまったのだろうと、後悔しても既に遅かった。男は室内灯を点けグローブボックスから何かを取り出すと、それを明美の目の前に突きつけた。それは大きなナイフだった。

「殺されたくなかったら、今着ている服を全部脱げ」

何でわたしがこんな目に遭わなければならないのか。昨日から不条理な出来事ばかり続いている。今まで生きてきて、こんな理不尽な思いを味わったのは初めてだった。

男の言うことを聞かなければわたしは殺される。そう考えると恥ずかしいという感情は打ち消され、恐怖が自分の行動を支配した。明美は震える手でボタンを一つ一つ外し、服を一枚ずつ脱いでいった。明美が最後の下着を外すと、男は突きつけていたナイフをどけ両手で明美の乳房を弄った。とても不快だったが、それを拒否することはできない。今の明美にはただ時間が過ぎるのを待つしか術がなかった。それは蜘蛛の巣にかかった蝶のように、どうもがいても逃れられないということに気づくと、あとは絶望だけが残った。

映画やドラマで強姦されるシーンを何度か見たが、それは映像の中の作りごとであり、本当であればもっと抵抗するのではないとか、色々想像を膨らませたが、所詮は人ごとである。しかし今実際その渦中にいると、恐怖のあまり何もできない自分がそこにいた。

男は片手で明美の乳房を弄りながら、ズボンとトランクスを脱いだ。見も知らぬ行き摺りの男に犯される。(隆司) 心の中で叫んだ。男はシートを倒すと明美の上に覆い被さり、乳房を愛撫し男根を自分の中に挿入してきた。「やめて〜」声にならない声が明美の口から漏れた。男は明美の声が聞こえないのか、それとも聞こえない振りをしているのか、ただひたすら腰を振り続けている。明美はすべて悪夢と思い目を瞑っていた。耳元に男の荒い息が降り掛かり、下半身に無理やり男のものを突っ込まれ痛かったが、目を閉じひたすら嵐が通り過ぎるのを待った。男はやがて絶頂に達すると、明美の体内に自分の体液を排出した。涙が目尻を伝わり耳の中に入った。男は自分の男根を明美の膣から抜くと、運転席側に戻りトランクスとズボンを穿いた。

「今から俺の見ている前で、オナニーをしてみろ」

死人に鞭を打つとはこの男のことをいうのではないか。明美は男のことを理解できたが、その言葉に従いたくなかった。

「おい俺の言っていることが、分からないのか」

明美は男の言葉を無視し、脱がされた服を着ようとして下着に手をやると、胸に激しい痛みを覚えた。恐る恐る痛みの元である自分の乳房を見ると、乳首の五cmくらい上から赤い血が流れていた。それを確認した途端、痛さと屈辱が全身を駆け巡った。

「痛い」

「おい。俺をなめるなよ。俺がやれと命令したことをやってもらえないなら、それなりの償いをしてもらうからな」

何が償いなのか、わたしがこの男に何をしたというのだ。力の強いものは、弱いものを支配して自分の思うようにしようとする。この男はいったい何を考えているのだろう。もう昨日になってしまったが、鈴鹿の駐車場での出来事は本当に理不尽なことだった。しかしそれにもまして今のわたしに起こっていることは、それ以上に理不尽なことに違いない。もしかしたらこの男はわたしを殺すのではないか、そう思ったと同時に、身体が勝手に動き出した。明美は目の前にあるナイフを払い除け、左手でドアを開けると裸のまま今来た道を走り出していた。このままではあの男に殺されてしまう。いいようのない恐怖を感じた瞬間、身体が生存を求め勝手に動き出していた。しかしどれほど走らないうちに、背中に今まで経験したことのない激しい痛みが走り、

明美の意識は少しずつ遠のいていった。「おかあさん・・・・・・・・」最後の言葉は明美自身にしか聞こえない小さな声だった。世の中には到底受け容れられない理不尽なことがある。しかしそれを確認したとき、明美の意識はこの世のものではなかった。

五年乗り続けた中古のRX-7も痛みが激しく、ダッシュボードからの軋み音も大きくなり、派手な黄色も霞み古さが目立ち始めた。見てくれだけならまだしも、この車は電気系が弱いのかポイントが頻繁に壊れる。休日十八号線を何気なく走っていると、日産の中古車ディーラーに、赤いハッチバックの車が展示してあり興味を引かれ中に入ってみた。値段がかなりリーズナブルだったためその場で契約した。三年落ちのガゼールはエンジンのパワーや足回り、スポーティーさの面ではRX-7に及ばない。ガゼールはシルビアとフロントグリル及び販売店が違うくらいで、その他は殆ど変わらなかった。この頃から白い車に人気が出始め、赤い車はスペシャリティーカーといえども値段が低かった。購入して直ぐ足回りをいじったが、RX-7のようにシャープな走りにはならなかった。それでも仕事を終え家に帰宅して、九時からのテレビのロードショーを観た後、聖の峠道を走るのは非常に楽しいものだった。その日も杭瀬下回りで帰らず、中地区回りで家に帰った。その道はいつも人が歩いていないはずなのに、今夜に限って人が歩いていた。こんな夜中に何でこんな場所に、それも若い女が歩いているのか疑問に思った。声を掛けると女は直ぐ車に乗ってきた。メーターパネルの明かりだけではハッキリした顔の表情は分からないものの、飛んで火にいる夏の虫の如く、偶然にしてはとてもいい女が自分の懐に飛び込んできた。

この頃は『山月記』の虎の如く、自分が人間であることの自覚を既になくしかけていた。人が人を殺すにはそれ相応の理由がある。鬼頭にとっての殺人は単に、快樂によるものの何ものでもない。古代ローマ帝国のコロシアムの観客のように、より残虐性を求めるようになっていた。普通人は常に人であろうと努力する。あるときは宗教の力を借り、あるときは友人に助けを求め、あるときは家族に力を借り、何とか人であり続けようとする。このとき既に鬼頭は見かけこそ人間だが、中身は違う生き物になっていた。普通の男であれば射精をしたと同時に、それまであった性欲も多少減退していくものだが、鬼頭の場合性欲が減退した後、何ともいえぬ残虐性が目覚めた。

女とセックスした後、オナニーを強要したところ女は突然逃げ出した。

〈自分の頭の中に、またあの大きな鷲がゆっくりと旋回しながら降りてきた〉

女は何も身に着けていなかったことと、走りに関して鬼頭はかなり自信を持っていたため、直ぐに追いついた。持っていたダガーナイフをそのまま女の背中に刺すと、その身体は紙のように道路に崩れ落ちた。鬼頭は倒れた女の脇を抱え、道路脇にある雑木林の中まで引き摺って行った。雑木林の中に女を置くと、スコップとペンライトを車まで取りに行き、女のいる場所まで戻ると既に息絶えていた。鬼頭はスコップを置き、女の背中からダガーナイフを抜くと、バンドを緩めズボンとトランクスを同時に下げた。女を仰向けにして、人形のように動かなくなった女の膣に自分の男根を挿入した。そして動かぬ死体に射精した。トランクスとズボンを穿くと、口にペンライトを銜えダガーナイフを器用に使い顔の皮膚を剥いだ。それは理科の時間行なった蛙の解剖と何ら変わらない。顔の皮を剥ぐと先ほどまで美しい顔であったはずの顔は、真っ赤な血みどろの塊に変貌していた。人間は表面がいくら綺麗でも、一皮向けば単なる肉の塊にすぎない。顔の下にある乳房を見てもさほど興奮してこなかった。性欲が減退してしまうと何か勿体ない気が

して、目の前の女の腹にダガーナイフを刺し、腸を引きずり出した。それでも最初の頃女を殺害したときに味わった、あの興奮は沸いてこなかった。そろそろこのゲームも飽きたのかもしれない。鬼頭は女を更に奥の雑木林の中まで引き摺って行き、持ってきたスコップで穴を掘ると、そこに女を埋めた。

発覚

1

島田幸雄は午前中にトラックで、ブルドーザーを聖湖畔まで運んでもらっていた。篠ノ井の自宅からこの聖湖まで、四十分程度の道程である。下から聖湖まで上がってくると多少涼しさを感じた。

聖湖畔のこの場所は長野市内の建設会社が、地主から安く土地を買い上げ、別荘を建てる予定になっていた。今日地鎮祭が終わった後、直ぐに地ならしの工事を始める予定だった。

この仕事を始めて二十年になる。山のどの部分を削ってどの部分を均せばいいか、設計図を一目見ただけで、頭の中に立体的な形ができあがった。大型建設機械がなければ今の土木事業は成り立たない。以前は大手建設会社の下請け会社にて、専ら道路工事等の公共事業を承っていた。今は独立してゴルフ場開発とか、住宅地の造成などを主に手掛けている。今日行なう作業は島田にとって最も簡単な部類の仕事内容だった。

地鎮祭が無事終了し、再度設計士と打ち合わせした後、早速ブルドーザーに乗り地面を削り始めた。ゴルフ場開発のように森林を切り倒して開発するのとは違い、この場所は元々平らな場所なので、それほど地面を削る必要がなく、建物を建てる場所だけ平らにするだけでよかった。湖に近い場所から地面を削り始めた。排土板を下げ子供たちが行なう雑巾掛けのように、端から順番に地面を均していくと、地面から何か見慣れないものが、むき出しているのが目に留まった。山を造成していると、ときには古タイヤや産業廃棄物など、色々な物が埋められていることがあるが、今日の前にあるものはそれらの人工物とは明らかに違っている。何か動物の骨のように見えた。もしやと思いブルドーザーを止め、排土板の前まで行き確認すると、それは自分が想像していた物と一致していた。それはどう見ても人骨だった。

2

島田から110番通報を受けた所轄警察署は直ぐに現場へ急行した。人骨は歯型から、三年前行方不明になった証券会社に勤める米谷理奈と判明した。しかし犯人逮捕に繋がる手掛かりは何一つ得られなかった。米谷理奈は家族が捜索願を出して、既に三年が経過していたため、死亡推定時期も三年前と予測できた。

ここ数年のうち更埴市や長野市で若い女性の捜索願が何件か出されていたが、発見された遺体は一体だけである。他の行方不明の女性が果たして殺害されているのか、どこかに監禁されているのか、県警のほうでも実情がまったく掴めなかった。

鬼頭が長野県警に逮捕されたのは、白骨化した遺体が発見されてから、一年半が過ぎた頃である。切っ掛けは長野市内に勤務している女性銀行員が夕方篠ノ井駅前、赤いガゼールの男にナンパされ車に乗るのを、偶然同じ銀行に勤務する男性行員が目撃していた。車が偶然男性行員が乗っていた車種と一緒にあったこと、車のナンバーの最初の部分が・・・だったことが記憶に残っていた。女性行員が翌日出勤しなかったこと、家族から捜索願が出されたということを他の行員仲間から聞かされ、もしかしたら昨日ナンパしていたガゼールの男ではないかと思い警察に通報した。

赤いガゼールとナンバーが・・・で始まっていたことで、長野ナンバーをすべて調べた結果、該当する者が鬼頭ともう一人女子大生しか確認できなかった。県警は鬼頭一人に絞り夜分、鬼頭の家へ赴き任意同行を求めようとしたが、本人はまだ仕事先から帰宅していなかった。捜査員は三時間ほど鬼頭の自宅前で待った。鬼頭が車で帰宅すると、捜査員は任意同行を求め更埴警察署に連行した。

取調官の調べに対して、鬼頭はあっさりと言方不明の女性行員の殺害を認めた。県警は一年半前の白骨遺体で発見された女性の殺害も視野に入れ捜査していたので、このことも追及すると、この女性の殺害も自分がやったと自供した。驚いたことに他に三人、若い女性を殺害したことまで自供した。この自供で県警の捜査員は色めき立った。

翌朝逮捕状が請求され、そのまま鬼頭は逮捕となった。女性行員の遺体は聖湖の手前にある、大池近くの林の中に埋めたと自供したため、鬼頭を現場検証に連れ出し場所を確認した上で、その場所を掘り起こすことになった。手錠を掛けられたまま鬼頭は、警察車両を降り捜査員に連行され、山の小道から少し雑木林の中に入った場所を暫くうろついた。

「多分この辺だと思うけど、埋めたときはもう暗くなっていたので、正確な場所は分からない」
まるで人ごとのように供述する鬼頭の態度に、捜査員は苛立ちを隠せなかった。スコップを持った捜査員たちは手分けして、鬼頭が指差した場所を掘り起こした。一時間もしないうちに一人の捜査員が「ここです」と大声を上げた。一斉にそこに捜査員が集まり、今度は慎重に手で掘り起こした。間もなく落ち葉も落ちる季節だったため、遺体はそれほど腐乱していなかった。遺体は顔の皮膚が綺麗に剥ぎ取られ眼球もなかった。証拠品として押収された車のグローブボックスから、刃渡り二十cmほどのダガーナイフが出てきた。このナイフは女性殺害の凶器とみられたため、本人に確認するとあっさりそれを認めた。

鬼頭は女性を五人殺害していたが、最初に殺害した三人はRX-7に乗せ殺害したと供述している。その車は古くなったため三年前に買い替え、後の二人は押収した車ガゼールで犯行に及んでいた。

この事件は昭和四十六年に群馬県で起きた、大久保清による連続婦女暴行殺人事件に酷似している。稀に見る凶悪犯罪はマスコミにも取り上げられ世間を震撼させた。

地獄に仏

その男が鬼頭のところに来たのは、八月も終わろうとしているとても暑い日だった。大都会の僅かな緑にしがみつき、懸命に鳴く蟬の声がより一層不快指数を高めた。鬼頭が定期入浴を終え居室に戻ると、面会連行の若い看守が鬼頭の居室前で待っていた。

「鬼頭面会だ」

若い看守は鬼頭にだけ聞こえる小さな声で告げた。

「誰ですか？」

一審二審と死刑判決を言い渡され上告中である鬼頭にとって、親族が面会に来ることはもはやない。面会に来る者といえば、事件に興味を持つマスコミや、野次馬的な考えを持ったくだらない輩と相場が決まっている。看守は手に持った面会表に目を落とした。

「里中陽一」

「里中。知らない人だ」

鬼頭にとってまったく記憶にない名前だった。死刑囚（本来は上告が棄却になり刑が確定して初めて死刑囚となる）にとって、ときとして見知らぬ人が尋ねてくることは、決して珍しいことではない。招かざる客。ふと頭を過ったのは死刑反対派やマスコミの姿だった。

「神父さんらしいぞ」

人を殺めた者は自分の犯した罪を悔やみ、宗教に救いを求める者も少なくない。自ら宗教家に手紙など書き救いを求める者もいれば、向こう側から救いの手を差し伸べてくれることもある。死に直面している者にとって、宗教家は唯一彼等がすがれる蜘蛛の糸だった。鬼頭自身宗教にはまったく興味がなく、まして神に自分の犯した罪を悔い改めるつもりなど毛頭なかった。しかしこのような所に閉じ込められ、話す相手といえば看守だけというような生活を長い間続けていると、たまには誰とでもいいから話をしたくなる。

「ちょっと部屋に戻り、身だしなみを整えてきます」

鬼頭が入浴から戻ってきた格好は、Tシャツとパンツ一枚だけの姿だった。僅か十五分の入浴時間を効率よくするには、部屋から下着のまま出た方が双方にとって都合がいい。居室に戻り薄手のスエットパンツを穿き、簡単に櫛で髪の毛を整えると、乾いたタオルを一枚持って居室から出てきた。

同じフロアーにある面会場は鬼頭がいる舎房と違って、冷房がよく効いてとても涼しく、風呂上りの汗ばんだ身体にはとても心地よく感じられた。

里中陽一は三十代後半で、七三に短く刈られた髪の毛とダークグレイのスーツを着て、颯爽と面会室に入ってきた。その端正な容姿は、神父というよりエリート銀行マンのような印象を受けた。

。

「初めまして、私はH市の聖マリア教会で神父をしている里中と申します。突然このようなかたちでお伺いしたことをお許し下さい」

里中は大きく頭を下げると、優しい眼差しで鬼頭を見詰めた。鬼頭は里中の目を見ながらパイプ椅子に腰掛けた。パイプ椅子は床にボルトで固定され、その場所から一切動かさないようにな

っている。

「俺に何の用ですか？」

鬼頭は警察に自供しただけでも五人の女性を殺害していた。猟奇殺人事件ということもあり、第一回公判はマスコミと野次馬で傍聴席が一杯になった。警戒心を隠さず真っ直ぐ相手を見据えると、相手も此方を鋭い視線で見返してきた。

「私は今まで、貴方のような罪を犯してしまった人たちに何人か御会いしました。その人たちは誰もが、自分の犯してしまった過ちを後悔していると言っています。多かれ少なかれ人は誰でも過ちを犯すものです。しかしその後自分自身がどう反省し、二度と過ちを繰り返さないようにすることが大切だと思うのです。貴方のことが書かれている書物を、色々読ませてもらいました。それで貴方がマスコミなどで言われているような、本当に冷血な人なのか私自身の目で確かめたくて、失礼ながらここに来てしまいました。確か週刊誌に書かれていたと思うのですが、人を殺めたことをまったく後悔していないという記事を読みまして、とても衝撃を受けました。今でもその気持ちは変わりませんか？」

様々な人が面会に来て、初対面とは思えぬ失礼な言動を鬼頭に浴びせていったが、今日も初対面だというのに、いきなり失礼な質問をしてきた。人を殺すことが良いことか悪いことか、そんなことは子供でも知っている。その人間にとって決して超えてはならない境界線を越えてしまった以上、今更どうすることもできない。お金や物を盗んだのなら弁償することもできるし、相手に怪我をさせたなら快復を待てばいい。しかし相手を殺してしまったらどんなに反省し謝罪したところで、死んだ者はもう決して帰ってこない。ここには千人以上の犯罪者がいるが、心から犯した過ちを後悔し反省している者が、はたしてどれだけいるのだろうか。

「初めて会ったというのに、随分失礼な質問をするんですね」

鬼頭は不快感を露骨に表した。殺人犯の中には自分の犯した過ちを棚に上げ、他人の失礼な質問に対して感情を剥き出しにし、激情する者も珍しくない。しかし鬼頭は如何なるときも来訪者の質問に対して怖いくらい冷静に答えていた。そんな鬼頭をマスコミは心が無い人、感情を捨ててきた人間、冷血と書きたてた。週刊誌の中には鬼畜を鬼頭（きちく）と読ませているものまであった。

「正直に言います。私はたとえどんな人であれ、自分の犯した過ちに対して、後悔していないということが信じられないのです。戦争のように名前も知らない。会ったこともない。何の恨みもない。自分が殺さなければ殺される。そんな兵士でも、ときが経ち平和な時代が訪れたとき、戦争とはいえ何の恨みもない人を、殺めてしまったことを後悔するはずです。独裁者といわれる人たちの中には、他人を殺してもまったく後悔しないという人もいるかもしれません。そのような人たちはもはや人間ではありません。サタンに魂を売り渡してしまったのでしょ。そんな人たちでも主は決してお見捨てになりません。救いの手を差し伸べてくれます。でも貴方はそのような人たちとは違います。私には貴方が自分の弱さを隠すため、単に強がりを行っていると思えないのですが」

フリーライターや雑誌の記者の中には、初対面なのに相手の気持ちをまったく考えず、たとえ犯罪者といえども、まるで自分が世間の代表者とでも言いたげに、不躰な質問をしてくる者も少

なくない。しかし里中みたいな宗教家から、このような言葉を投げかけられたのには鬼頭も少々困惑した。神父である男がなぜこのような質問を自分にしてくるのか、きっと何か考えがあるのだろう。里中の目はそのとき神父と思えないほど鋭いものだった。

「俺は今まで自分のしてきた行動を振り返って、後悔したことは一度もない。もし少しでも自分のしたことに対して後悔をしているのであれば、あんなに沢山の女を殺しはしなかった。警察に捕まらなければ、今でもまだ殺し続けていただろう」

付き添いの看守部長が、面会表に走らせていたペンを止め鬼頭の方を向いた。面会室はクーラーによって十分冷やされていたが、それ以上に一瞬冷たい空気が流れた。実際鬼頭は女を殺害しているとき、彼女たちを気の毒に思ったことも、殺された者の冥福を祈ったこともない。鬼頭にとっての殺人は、コンピューターで遊ぶゲームと何ら変わらない。唯一の違いといえばリセットの利かないことだった。

「私は決して預言者ではありませんが、いつか貴方は自分の罪を悔い改める日が来ると信じています。私には貴方が本当に、心のない人間に見えないのです」

この男の仕事が神父である以上、そのように言うのは仕方ないかもしれないが、今までまったく面識のない者が、突然やって来て何が分かるというのだ。親でさえ見捨てたのに、誰が自分を救ってくれるのか。いつものようにやはり宗教家には、反発を感じずにはいられなかった。

「それは神父という立場上、神に対して懺悔をしろということですか？」

鬼頭にとって神とは、宇宙人や幽霊以上に存在し得ないものなのだ。挑戦的な目を里中に向けた。

「本来人の善悪を判断できるのは神だけです。私は神父ですが、ただ単に宗教心を持たせるのが目的ではありません。すべての人が相手の気持ちを思いやれる優しい気持ちになることが、私が神に与えられた使命だと思っています」

鬼頭の視線とは違い、里中の目はとても穏やかになっていた。何の目的で自分のところに面会に来たのか、里中の真の目的が分からなかった。ただ鬼頭にしてみれば、丁度良い話し相手に他ならない。この男の目的がどうであれ、自分にとっては都合のいい暇つぶしの道具になることは間違いない。里中以前にも何人かのシスターや牧師が、面会に来たことはあったが、どの話も鱈のつまり、神である主イエス・キリストを信じれば必ず救われるというもので、どれも現実味のない話ばかりだった。坊主も神父も先ず初めに仏や神を信じろと言うが、鬼頭にとって実態のないものを信じるよりは、そこらへんにいる浮浪者を信じたほうが、まだ理に適っているようにさえ思える。里中も前任の宗教家と同じような目的で、自分に近づいて来たのだろうが、それでも何か他の者とは違った印象を受けた。他にも人殺しは沢山いるだろう。それなのになぜ自分を選んでここに来たのか。この男の真意はどこにあるのかまったく分からなかった。里中が何で自分のところに面会に来たのか、目的は何なのか訊こうとして思わず言葉を飲み込んだ。今この男にそのようなことを訊いたところで、本当のことを語ってくれるとは思えない。ならばこの男がどんな人間かを知ることのほうが面白いのではと判断した。色々頭の中で考え抜いた挙句、口から出た言葉は意外なものだった。

「神父さんはどうして神父になったのですか？」

相手は何か目的があって自分に近づいてきたのは間違いない。しかしただで情報をくれてやるほど自分は御人好しではない。里中同様鬼頭も負けずに不躰な質問を試みた。自分のような悪党を悔悛させたら、神父の成績が良くなるとでもいうのだろうか。鬼頭にとって神父の里中ではなく、個人としての里中に何か分からないものの惹かれるものがあった。

「私の家は元々仏教徒です。曹洞宗って御存知ですか？座禅を組むお寺です。子供の頃は母親に連れられ禅寺によく座禅を組みに行ったものです。そんなときもお寺の和尚様が、お釈迦様の話や、涅槃の話など色々してくれましたが、そのときの私は今の貴方のように宗教にはまったく興味ありませんでした。そんな私が教会に通い始めたのは、友人の死が切っ掛けです」

鬼頭の質問に対して里中は面倒くさげらず丁寧に答えてくれた。そして自分が何で神父になったのかを、詳しく話して聞かせた。本人が言うように祖先は仏教徒だが、両親がとくに強い信仰心を持っていたわけでもなく、どこにでもある普通の家庭で育ったということだった。そんな里中が教会に足繁く通ったのは、中学二年生のとき友人が白血病で、余命半年と宣告された時期であると語った。

「私は子供の頃電車がとても好きで、電車に乗るといつも一番前の席に座り、運転手の様子を見ていました。線路は続くよどこまでもという歌がありますが、あの二本のレールを見ているだけでわくわくしてくるのです。この線路を走って行けばどこまでも行ける。電車の運転手は私の憧れでした。私はある日友人と電車に乗りました。そしていつものように一番前の席にいき友人に、大人になったら電車の運転手になりたいと言いました。当時小学五年生の私は自分も好きなのだから、その友人も電車が好きなものと勝手に思い込んでいたのです。しかしその友人が口にした言葉は、当時の私をビックリさせるものでした。『もし電車を運転しているとき、人が飛び込んできたらどうする？電車を止めるときホームを過ぎてしまったらどうする？』とても小学生が口に出す言葉には思えなかったのです。それだけ私自身が幼かったのかもしれません。実はこの電車の話は暫くして、映画『鉄道員』の話をしてくれ、私もこの映画を観て彼の気持ちを少し理解しました。そんな彼が中学二年生の朝、ホームルームの時間、突然鼻血を出し倒れてしまったのです。急性骨髄性白血病でした。それまで知らなかったのですが、彼はクリスチャンでした。病室ベッドの枕元にロザリオが置いてありました。そのとき彼は初めて自分がイエス・キリストを信仰していることを私に告白してくれました。それまで私は彼が毎週日曜日、教会に通っていたことを全然知りませんでした。彼は死ぬ一ヶ月前私に『僕は死ぬことは全然怖くない。だけど僕の魂は、死んだ後どこへ逝くのか不安でしょうがないんだ。僕は人一倍ひねくれたものの考えをするから、きっとあまりいい世界には逝けないと思う』と私に打ち明けました。彼は死ぬのが怖くないと言っていましたが、本当は凄く怖かったのだと思います。彼の家は敬虔なクリスチャンで、母親によく素直にならないと神様の下へは逝けないと言われていたそうです」

「その友人は、自分が白血病だということを知っていたのですか？」

それまで決して他人に対して心を開いたことのない鬼頭だったが、この僅かな時間の間に、猜疑心を持った目で里中を見ていなかった。信頼しているとはいえないものの、少なくとも自分にとってマイナスになる人物とは思えなかった。

「知っていました。当時は本人に、癌の告知をする病院は殆どなかったと思います。しかしあの

病気はテレビドラマなどでも取り上げられ、彼もそれに気づき、母親にそのことを問い質したのではないのでしょうか？彼の母親が息子は強い信仰心を持っていて、すべて受け入れたと私に話してくれました。今から思い出してもすごいことだと思います。中学生の少年がすべてを受け入れたということは、そこに私は信仰の素晴らしさを感じました」

「そうなんですか……」

人の命を何人も奪った鬼頭でも、癌で死んでいく少年が不憫に思えた。しかしそれも一瞬のことだった。

「それまで私の生活では、人が死ぬということがなかったものですから、友人が後少ししか生きられないということは、とてもショックなことでした。この世に生を受けたものは必ず死にます。では人は死んだらどうなるのでしょうか？自分はどこから来てどこへ行くのでしょうか？自分とはいったい何んなんでしょう？今までそんなこと考えたことはありませんでした。信仰をもった彼には、私には見えない何か違うものが見えたのかもしれないと感じました。それから私は教会に通い始めたのです」

里中の饒舌な話に、鬼頭も思わず真剣な眼差しで訊いていた。

「それまで教会へ行ったことはなかったのですか？」

「教会へ行ったのはそれが初めてです。私はその友人がとても好きだったこともありますが、自分が神に祈ることで友人が救われるのなら、私も教会に通おうと思いました。私の家は仏教徒だったのですが、だからといって熱心に信仰していたかということ、お盆やお彼岸にお墓参りに行くくらいで、両親が毎日仏壇に手を合わせているわけでもなく、信仰には殆ど縁がない家だったのです。それまでキリスト教というのは、クリスマスしか知らなかったくらいですから」

そこまで話すと里中はにっこり微笑んだ。

「仏教徒だった両親が教会に通うことをよく許してくれましたね。反対されなかったんですか？」

「まったく反対しませんでした。私の親は何をするにも寛大です。教会の方も初めての私を快く迎えてくれました。なぜ教会に来たのか、まったく詮索しませんでした。日曜日になると教会には色々な人が来ます。私のような中学生もいれば、高校生、サラリーマンやお年寄りまで、本当に色々な人と出会いました。最初教会に行くと創世記の紙芝居を見せてくれます。アダムとイブから始まって、ノアの箱舟やアブラハム、十戒、私にとってはどれも夢物語だったのです。友人の病気が治るように祈ることはもちろんだったのですが、漫画の続きを見たいという子供心が勝っていたのかもしれない。それほど天地創造は面白かったのです。貴方は天地創造の本を読んだか、或は映画を観たことがありますか？」

「ないです」

里中の質問に迷わずないと答えたものの、本当は映画を観たことがあった。友人もいない。スポーツもやらない。そんな自分に趣味といたら唯一映画を観ることだった。中学のときはずっと、朝と夕方新聞配達をしていたので月二万円近く貰っていた。雨の日も、雪の日も、自転車を漕いで地方紙を配る。母子家庭で母に迷惑をかけたくなかったこともあるが、何よりも自由になるお金が手に入るということは、何にもまして喜びだった。冬には明け方星が流れる。今までやった仕事で、もしかしたら一番楽しかったかもしれない。その稼いだお金で、月に一・二回隣町の

上田市や長野市まで映画を観に行った。

鬼頭が映画にのめり込む切っ掛けとなったのは、小学校のときテレビでやっていた深夜映画『猿の惑星』である。学校で誰かが今夜テレビで面白い映画をやると言っていたのだ。それまで映画といったら市の体育館で観た『四谷怪談』と『ガメラ』しかなかった。学校から帰っても『猿の惑星』という言葉が耳について離れなかった。眠い目を擦りながら観た映画は、途中で眠いのを忘れるくらいのめり込んでいった。

天地創造は上田市に『オーメン』を観に行ったとき、予告編でリバイバルの『天地創造』が映された。当時パニック映画やオカルト映画の全盛期で、ノアの箱舟やバベルの塔の崩壊を観たとき、てっきりパニック映画と思い込み観に行った記憶がある。映画の内容は自分が好きな内容ではなかった。そして神の行為は納得できないものだった。バベルの塔の崩壊やアブラハムの試練にしても、宗教心のない鬼頭には、神の行いはエゴの何ものでもない。自分の子供であるイサクを、神のために捧げるとは何てひどい父親だ。父親の愛情をまったく知らない鬼頭でも、我が子と存在自体危ぶまれる神とを、天秤に掛けることは到底理解できるものではなかった。神も自分への忠誠心を試すなんて、あまりにも身勝手すぎる。その気持ちは今でも変わらない。

その後もアメリカ映画を色々観た。パニック映画やオカルト映画には、必ず牧師や神父が出てくる。だから西欧諸国ではキリスト教が、人々の生活でどのような位置を占めているか、何となく分かるような気がした。咄嗟に口に出てしまったとはいえ、それでもなぜか里中には映画を観たと素直に答えたくなかった。それは神父である里中に、自分がキリスト教に興味があると、思われなくなかったからなのかもしれない。

「そうですか。今日とても解りやすく書いた聖書を持ってきました。後で差し入れておきますのでぜひ読んでみて下さい。後、遠藤周作の『沈黙』と『イエスの生涯』も差し入れておきます。聖書は挿絵もあり、子供が読んでも解るようにやさしく書いてあります」

「ありがとうございます。ぜひ読ませてもらいます」

そう答えたものの他の本は兎も角、今まで聖書は何冊も差し入れてもらっている。信仰心のない鬼頭にとって物語として読むには、非常に味気ない書物だった。それでも里中のような宗教家や支援団体は本だけでなく、衣類やお金まで色々な物を差し入れしてくれるのでとても有り難かった。だからあえて聖書はいいですよと言えなかった。本なんて何冊あっても困るものでない。どうせ領置箱に入れておくことになる。そういえば最近、領置してある品物を少し減らしてくれと言われていた。それは身内の来ない鬼頭にとって、宅下げできないので捨ててくれと言っているようなものだ。せつかく差し入れてもらった物を捨てることはできない。そんなことを繰り返しているうちに、荷物は膨大な量に膨れ上がっていった。

「私も最初から難しい聖書を読まされていたなら、もう少し主への傾倒が遅くなっていたかもしれません。後で差し入れする聖書は、とても解りやすく書いてあります。是非目だけでも通して見て下さい」

「はい」

鬼頭が今まで差し入れてもらった聖書は、すべて解り難いものだった。信仰心のある者なら必死になってそれを理解しようと努めるだろうが、鬼頭にとっては時間潰しにすらならない、苦痛

を伴う書物でしかなかった。

「私はその後も何度となく教会に通い、暫くしてから神父様に、自分が何で教会に来たのかを打ち明けました。友人が病気になって入院していることと、白血病でもう助からないということも、神父様は友人の母親から訊いて知っていました。おそらく私がその友人であるということも知っていたと思います。神父様はトム、トムというのは友人のクリスチャン名で正しくはトーマスといます。『トムが神の下に召されるのは、決して不幸なことではありません。周りの人たちにとって、彼がいなくなることはとても辛く寂しいことです。しかし本人にとっては決して辛く悲しいことではありません』神父様はそう仰いましたが、当時の私には到底理解できるものではありませんでした。何で死ぬことが不幸でないのか。『主は虐げられた人や苦しんでいる人のために、すべての罪を背負い十字架に掛けられ死んでいったのですが、主もまた天に召されることは、決して不幸なことだとは思っていませんでした』と神父様は仰いました。私の友人は結局亡くなりました。私は神父様の胸を叩いて泣きました。『何で神様は不幸な人を救ってくれないのか』と。そのとき神父様は私に『トムは貴方がいたから決して不幸ではありませんよ。トムは貴方に感謝しています。人も動物も物も、この世のすべてのものには寿命というものがあるのです。それはそれぞれ短い長いはありますが、終わりは必ずくるのです。たとえば蟬なんかどうでしょう。幼虫の間は何年も土の中にいて、地上に出て成虫に成った途端あっという間に死んでしまいます。人間の目から見れば可哀相に思えるかもしれませんが。カマキリはどうでしょう。雄は雌と交尾しているとき、雌に頭から食べられてしまいます。それも人間から見れば凄く残酷で食べられた雄は可哀相だということになります。しかし蟬にしてもカマキリにしても、それは本当に不幸なことなののでしょうか。私たち人間は己の価値観でしか物ごとを見ないところがあります。たとえば今の日本は経済大国といわれ何でもあります。自動車に乗ったり、飛行機に乗って旅行したり、どこへでも行けます。でも世界はとても広いのです。アフリカでは今でもまったく文明と掛け離れた生活をしている人たちも沢山います。彼らは槍を持って未だに狩りをしたりして生活しています。自動車どころか靴さえ履いていないのです。ワクチンがないので病気になって死んでいく人も少なくありません。私たちから見れば彼等は可哀相に映るでしょう。でも彼等は私たち文明人の暮らしを羨ましいと思うのでしょうか？もしかしたら彼等から見れば、時間に追われ汚い空気を吸っている私たちの方が、気の毒に見えるかもしれないのです。私たち文明人といわれる人たちは、自分の価値観、視点でしか物ごとを見ない傾向があります。世の中の殆どの人が、今いるこの世がすべてと思っているかもしれません。しかし神の下はもっと素晴らしいところかもしれません。トムは決して不幸ではなかったと思いますよ』と仰いました。幼かった私は尚も神父様に食い下がりました。『神父様は死んでもいないのに、何で死んだ人のことが分かるのですか？どうして見てもいないのに死んでしまった後の世界が分かるのですか？誰か見てきた人がいたらここに連れて来て下さい』そのときの私は友人が死んだことがとてもショックだったのです。決して神父様を困らせようと思ったわけではありません。神父様は非常に穏やかな顔をして『貴方の言うように、誰も神の国のことは分かりません。あるいはそんな世界なんかいないのかもしれません。それは死んだ人しか分からない、誰も見たことがない世界でしょう。しかし誰も見たことがないからといって絶対には言い切れません。世の中には目で見ただけでは分からない不思議なことが沢山あります。自分の目で見た物ごとだけを信じるより、より良い世

界があると信じて生きていった方が、人生楽しいと思いませんか？』と神父様は仰いました。それでも私は神父様の言われたことに、すべて納得したわけではなかったのです」

里中はそこまで話すと目を宙に這わせ、昔のことを思い出しているようだった。

「神父さん、たとえば昔の人みたいに奴隷とかで生まれてきたら、生きていること事態地獄みたいなものじゃないですか。あの世がそんなに良いところなら、こんな生き地獄から抜け出すため、自らの命を絶ち、早くあちらの世界に行った方が楽なんじゃないんですか？」

キリスト教で自殺をしてはいけないことは知っていた。鬼頭は自分で質問をしておきながら、ひどく意地悪なことを言ってしまったと気づいた。

「それは絶対にしてはいけません。自らの命を絶つことは、キリスト教では許されないことなのです。人の命は自分だけのものではないのです。たとえこの世がどんなに辛くとも生きていこうとする努力が、神の下に召されたとき、はじめて価値があるのです。人の命の長さは、それぞれその人によって違いますが、自らの手によってそれを止めてしまうことは、決して主はお許しにならないでしょう」

先ほどまで穏やかだった里中の顔は、ほんの少し険しくなった。自分が死刑囚である以上死は直ぐそこまで来ている。人の命はどんな命でも尊い。気づかぬうちに里中の術中に嵌ってしまったのかと感じた。それは自分でも驚くくらい、里中の話にのめり込んでいたからに他ならない。

「あの済みません。そろそろ時間なのですが」

面会担当の看守部長が、里中に向かって小さく頭を下げた。面会時間は一人、一日一回十五分程度と決められている。日に何百人と面会人が来るのだから、一日十五分というのは仕方ないかもしれないが、それでも面会担当は気を遣い、一般面会としてはかなり長めに時間を取ってくれた。それでもそれはあまりにも短い時間だった。

目の前にある1cmにも満たないアクリル板をぶち破れば、その向こうには自由の世界が広がっている。しかしそれを実行したところで、自分自身が惨めになることは分かっていた。悪党は悪党なりに生き恥を晒すわけにはいかない。悪足掻きは最後に一度だけやればいいのか。

蓋を開けてみれば宗教の話なのだが、自分でも気づかぬうちに里中の話しに引き込まれていた。この面会の主導権は完全に里中にあつた。里中は面会時間が十五分ということを知っていたのか。殆ど自分のことだけ話して話は終ってしまった。あれでは鬼頭が自分のことを話すことはできない。里中も一回の面会だけで鬼頭を理解しようとは思っていないのだろう。自分をさらけだし相手の気持ちを引き出そうとしたに違いない。それには時間があまりにも短すぎた。

「あ！申し訳ありません。また面会に来てもいいですか？」

「ええまた来て下さい」

「ありがとうございます」

里中はパイプ椅子から立ち上がると、深く頭を下げて面会室から出て行った。鬼頭が面会所から自分の居室に戻ると、暫くしてから領置係がやって来た。差し入れがあるといい、食器孔から差し入れの伝票を入れてもらった。伝票には『沈黙』『イエスの生涯』『聖書』と書いてある。差し入れ人は里中になっていた。

神がいるのかいないのか、そんなことはどうでもいい。しかし里中にはもう一度会ってみたい

と思う。鬼頭が面会相手にもう一度会いたいと思ったのは、このときが初めてである。

友人

私が神学校を選んだのは、人はどこから来てどこへ行くのか、それが知りたかったからだ。私は友人の死によって、人は必ず死ぬということを学んだ。他人の死を間近で感じると、やがていつかは、私もその場所へ行くのだということを改めて思い知らされる。

生きることに對して物凄く執着する者とそうでない者。人間の生に対する執着心は、古代エジプトの時代から変ることがない。奴隷で鞭に打たれ身体は血まみれになり、毎日地獄のような辛い目に遭っても生きたいと願う者。芸術的な才能もあり、社会的地位もお金もあるのに、それでも自ら命にピリオドを打ってしまう者もいる。

どんなに生に執着しても、そうでなくても、死というものは誰にも必ず訪れる。死は唯一神があらゆる生物に与えた平等の贈り物なのだ。この神からのプレゼントは、決して拒むことはできない。これは生きているものにとって避けられないものなのだ。自分で考えても答えが導き出せない場合、誰かに答えを導き出して欲しい。

1

里中は中学校を卒業すると、カトリック系の男子高校、名古屋聖院大学付属高校に進学した。名古屋市中心部にあるその学校は、中学から大学まで地元では厳格な校風で名を馳せていた。中等部からエスカレーターで上がってくる者もいれば、高校から入ってくる者もいる。全国から学生が集まるため、地元の生徒以外は学校内の寮に入った。毎日聖書に関する授業があり、高校を卒業した者の中には、神学校に進学する者も少なくない。大学の進学率はかなり高く、東京の有名大学へも毎年何人もの生徒が合格していた。里中も東京から来たため、学内にある寮に入寮することになった。寮は二人部屋でドアを開けると、左右対称にベッドと机がそれぞれ置いてある。点呼は午後九時で消灯は午後十時だが、夜の自習は認められていた。ただ消灯後の同室者との会話は禁止されている。

この学校には、中学時代学校でいじめられ登校拒否になった者。サラ金などで両親が蒸発し親戚に引き取られたが、そこでも厄介払いされた者。家庭に複雑な理由があり、尚且つ学業が優秀な者たちが沢山入寮していた。そのような理由もあって心に傷のある者も少なくない。この学校のスローガンは『友愛』〔自分を愛し他人も愛しなさい〕というものだ。

里中はこの学校に入学するとき、多少は迷いがあったものの、神父になることを漠然と考えていた。神父になった今でも、自分の進むべき道を捉えたわけではないが、それでもその方向に歩いていこうという気持ちは持ち続けている。

本来神父とはキリスト教を布教するのが真の目的だが、単にキリスト教を伝道することだけが神父の仕事とは思えない。それはキリスト教では異端なのだが、その人が本当に救われるのであれば、キリスト教でも、仏教でも、イスラム教でも、たとえどんな宗教でも構わないとさえ思える。それはかつて高校時代級友が言っていた言葉でもある。しかしこのようなことを公の場で口にすれば、バチカンからの攻撃は免れない。それどころかこの世界から追放されるだろう。キリスト教はユダヤ教の一神論を引継ぎ他の神は認めない。カトリック教会はローマ教皇を頂点とした完全なる階級社会である。教会の権力は絶対だった。それでも里中にとって、それがたと

えローマ教皇といえども、主にとって代わるものではない。教皇は使徒ペテロの後継者として、全教会を統率するものであって、決して神に取って代わるものではないからだ。

私は純粋な気持ちからキリスト教を信仰することになり、すべてを主に託した。そしてこの世界に足を踏み入れた。しかし好むと好まざるとに拘わらず、本来神の下では平等であるはずが、教会はあまりにも巨大になりすぎて、本来の目的を見失ってしまったのではないか。これはキリスト教あるいはカトリックに限らず、すべての宗教にいえることだが、商業主義に走っているようにさえ思えてならない。

私が最も尊いと思っているイエス・キリストは、本当のところどんな人物だったのだろう。

里中の高校時代ルームメイトが中学のとき、神の存在を感じたと里中に話してくれた。彼はとてもハンサムな男で、宗教の道に進もうか随分悩んでいた。彼は中学のときカンニングしたところを同級生に見られ、そのことで同じクラスの女子生徒を強姦することを手伝わされた。そのとき自分の目の前で女子生徒が強姦されているところ見せられ、自分は睾丸を蹴られ何もできなかった。そのとき強姦されたのは自分のせいにも拘わらず、彼女にこの真相を告白したら、自分の過ちを許してくれたと言っていた。そのとき自分の中にある何かが変わり、彼女を一生守ろうと決意する。なぜなら彼女に神の存在を感じたからだ。彼は神父になりたかったみたいだが、迷った挙句医者を選んだ。彼は今ではその彼女と結婚して幸せに暮らしている。その彼というのが胡桃沢である。

胡桃沢は医学部を卒業すると、精神科医を選択した。本人曰く神父になることが自分にとっての目標だったが、彼自身が思うには、キリストだけが神といわれるのは、あまりにも偏った考えだという。胡桃沢は自分以上に高校時代聖書を勉強していた。最初胡桃沢が神父の道を諦め医学の道に進んだのは、彼女と添い遂げたかったからだと思っていたのだが、理由はそれだけではなかった。

「世界には色々な人種がいて、色々な宗教がある。その土地にしか根付かぬ宗教もあるが、世界中に布教したキリスト教のような宗教もある。確かにキリスト教は素晴らしい宗教だが、殆どの宗教はその土地独自のものだ。自分が信じている以外の宗教を否定するのは容易いが、それぞれ何を信じるか、個人に任せることが本来の宗教の在り方である。古代ローマ帝国のように、あらゆる宗教を受入れるのも一つの考え方だと思うよ。宗教による対立で、人々は殺し合い戦争にまで発展することを、主は喜ばれるだろうか。信仰は人が生きていくうえで、必要不可欠なものに違いない。しかしそれが必ずしもキリスト教でなければならないという道理はない。どのような宗教であれ、自分が今信じている神が、唯一の神であると信じることはごく自然なことだが、自分の信じていない宗教を否定すべきではないと思うよ」そう胡桃沢は言っていた。

高校三年生になると、胡桃沢は聖書を置き哲学や心理学の本を読むようになった。心理学の本を読んでいた胡桃沢が突然「僕が影響を受けたフロイトは、宗教は人間が作り出す幻想にすぎないと言っているが、そのことを君はどう思う？」と質問されたことがある。そのとき里中は「人というものは、現実にあるものだけに頼る傾向がある。しかし人にとって一番大切なのは愛なんだ。愛は幻想でも幻でもない。愛は人間の素直な感情の表れだと思うよ」と答えた。

「君の言うことにも一理あるね。それじゃあトーテムとタブーって聞いたことあるかい？」

いきなり難しい言葉を発したため、この男はいったい何を考えているのかと危惧したほどだ。

「いやない」

このときの胡桃沢は聖書を離れ、すっかり心理学の虜になっていた。

「これはフロイトの学説なんだが、原始時代の最初の父親殺しのことで、原始、群れの中でこの父親はすべての女性を独り占めしていた。しかし群れから追放されていた彼の息子たちが、大きくなると父親に嫉妬し、父親を殺してその肉を食べてしまう。しかしそれが間違いだったと気づいたのか、群れの女性とは性交しないようにし、祭りのときのみ動物を殺して食べ、このときの父殺しを忘れないよう戒めとした。このとき、父である神を殺した人類は原罪を背負った。だが民俗学者たちはこれを馬鹿げた仮説といって否定した。しかし僕はこれを読んだとき、強ち違っていないような気がした。力尽くという言葉があるが、生き物の世界は何が正しいのか悪いかという概念が存在しないので、力がある者だけがそれを行使できる。力のない者は力のある者に従わなければならない。宗教の発生が原始の父殺しだとすると、猿と人間の違いは宗教心を持つか持たないかの違いになってくる。猿が人間に進化する過程に於いて、人間はモラルという概念を持つことになる。それまではその群れのボスがすべての者を支配していた。女はすべてボスのもので、そこから産まれた子供はすべてボスの子供になる。今の父子の関係とは違い手下や奴隷みたいな存在だったのだろう。その中にやがて力のある子が父を殺してボスになる。そんなことを何回となく繰返しているうちに、あるとき知恵もあり力もあるボスが現れた。たとえばそのボスが『もう父殺しはやめよう。皆平等に妻を娶りそれぞれ家族を作ろう』と言い出したとする。このボスは非常に頭がよく、あるいは非常に臆病だったのかもしれない。自分がいつ兄弟たちに殺されるか不安だったのではないか？この群れは統率がとれ、やがて村としての機能も備わり、妬みと憎しみだけの父の存在が、尊敬できるものになっていく。群同士の衝突や侵略は無くならなかっただろうが、この群は統率がとれ他のどの群よりも力があつたし経済的に潤っていた。やがてそのボスの噂は広がり、それを真似する群も出てきた。そのボスは死んでも人々に尊敬され崇められる。あるいはこのとき記念碑みたいなものが立てられたかもしれない。それが人々に語り継がれて神のような存在になった。これはフロイトの学説を僕なりに解釈し、たてた想像に過ぎないのだが、面白いと思わないかい」

胡桃沢は熱く少々興奮気味に語ったが、キリストの教えに反しているようで、とても受け入れることはできなかった。人間の犯した原罪を背負ったのは、神の子であるイエス・キリスト以外考えられない。このときの胡桃沢は自分が知りえた新しい知識を他人に知って欲しかったのではないだろうか。

しかし私が神の存在を素直に受け入れられなかったのも、胡桃沢の存在が影響しているのは間違いない。それでも胡桃沢の心が神から離れていくのとは裏腹に、里中の気持ちは神の方に傾倒していった。神の存在を感じた胡桃沢は違う道に進み、神の存在を疑っていた里中が神父になっている。人の運命とは皮肉なものだ。人の悩みを聞いてその人を正しい方向に導いてやることは、神父も精神科医も似ているのだが、神父は主の教えを基に悩める人々の心を救うのに対し、精神科医は過去の臨床例を基に、カウンセリングや薬で心（脳）の不安や悩みを取り除く。里中自身、信仰によってすべての人が救われるとは思っていなかったが、精神科医が心にある悩みや不安を、カウンセリングや薬によって取り除くのは、一時凌ぎにしか思えなかった。心の深部にあ

る悩みは、薬などで簡単に取り除けるとは考えられない。

今でも時折思い出す。里中が教会へ通い始めた頃、神父様に神がいるのかいないのか質問したところ、神父様はその質問に親切に答えてくれた。

「神様がいるかいないかは、神様を信じることができるか、できないかということで、人はそれぞれ色々な環境で育ち色々な経験から、自分の進むべき道を模索するのです。船乗りが夜嵐の海で遭難しそうな中で、灯台の灯りを見つけたとき、それを神の思し召しと信じる者もいれば、それは単なる偶然と捉え運が良かっただけと思う者もいるでしょう。人は困難や苦境に立たされたとき、自分の力だけでそれを乗り越えることは難しいと思います。大なり小なり他の者の力を借り、初めて乗り越えられるのです。他人でも家族でも疑いの目を持って接するより、その人たちを信じることの方が、より大きな幸せを手にする可以做到と思いますよ」

神父様はそのように仰ると『レ・ミゼラブル』の本を里中の手に持たせた。

「私はこの中に出てくる、ミリエル司教のようになりたいと常々思っているのです」

そのときの神父様の顔は、今でも忘れることができない。

「主の教えで最も大切なことは信じることなのです。神を信じ他人も信じれば、他人も貴方を信じるでしょう。そうなれば争いごとは自ずと減ってくるはずですよ」

神父様が里中に教えたことだった。

私自身が神父の仕事に不安を感じ、誰かに悩みを聞いてもらいたい、そんなときだった。胡桃沢から連絡をもらったのは。是非会ってもらいたい人物がいるという。その人物こそ鬼頭正志だった。

胡桃沢幸一郎には聖マリア教会の面談室で会った。教会の面談室の壁には白い漆喰が縫ってあり、かなり古いマホガニーの椅子と机が備え付けてある。面談室は冷房設備がなく、二人の額には汗が滲み出ている。外では蝉が鳴き、より夏の暑さが不快に感じられた。

二人は椅子に腰掛けしばし見詰め合い、お互い高校時代のことを思い出していた。一人は医者になり、もう一人は神父になった。どちらも人を救うことに変わらないが、お互いこうしてまた会うとは思っていなかったようだ。時間は確実に過ぎていくと感ぜずにはいられなかった。

「本当に久しぶりだね。君が会ってもらいたい人というのはいったい誰なんだい？」

里中が胡桃沢に話しかけるその話し方は神父の話し方ではなく、すっかり友人どうしの話し方に戻っていた。

「会ってもらいたい人というのは、今関東拘置所に収監されていて、死刑の判決を受けた鬼頭正志という男なんだ。昔君に妻が同級生に強姦されると話したことを覚えているかい。僕はあのことがきっかけで、自分の生き方を180度変えることになった。妻と一緒にいることも誓った。その強姦をした男が鬼頭なんだ」

「え、本当かい！」

このときは本当に驚いた。私が罪を犯した者に会うということは、その人に神の救いの手を差し伸べるということだ。自分の妻を強姦した男を許すどころか、救おうという彼の気持ちが、神父であるはずの自分ですら理解に苦しんだ。確かに高校時代に思ったことがある。胡桃沢のほうが自分より神父に向いていると。だからといってこのようなことを、平然と言ってのける胡桃沢には流石に驚かされた。

胡桃沢は由香里さんが強姦されたことを、誰にも話さないと約束したにも拘らず、ルームメイトである私にそれを告白した。なぜ私に告白したのかと問うと、一人で胸に仕舞っておくには、あまりにも辛すぎると言った。彼はこのことで随分と悩んでいたのだろう。私があることを他人に語ることはなかったが、彼が私を信用してそのことを告白してくれたことは、神父を目指している当時の私には、とても嬉しいことに違いなかった。

鬼頭正志は何人もの女性を殺害して、里中も新聞やテレビのニュースで、何度も鬼頭の名を耳にした。女性を単に殺害するだけでなく、目を刳り貫いたり、顔の皮を剥いだり、乳房を抉ったり、普通では考えられない残虐な殺害方法をとっている。被害者の遺族にしてみたら、死刑は当然の結果と考えるだろう。しかしその鬼頭という男が、まさか自分の知っている友人の妻を、強姦した人物と一緒にだとは思ってもよらなかった。

死刑囚と面談するのは初めてだったが、知り合いの神父やシスターの中には、死刑囚と何年もの間、面会や手紙の遣り取りをしている者も少なくない。里中自身何度か罪を犯してしまった者の相談を受けたことがある。彼等の方から自分に救いを求めて来るのであれば、それに答える努力を惜しまないつもりだが、自らの意思で彼等の下に行くことはしなかった。

「僕は鬼頭があのようなことになってしまって、彼の母親や同級生に会って、彼が本当はどんな人物だったのかを訊き出したんだ」

「なぜ君はそこまで鬼頭という男にこだわるんだ。由香里さんに大変辛い思いをさせたんだろう。鬼頭という男は」

里中は口に出してしまってから、言っではならないことを、口走ってしまったような気まずさを感じ胡桃沢を見た。しかし胡桃沢はとくに嫌な顔もせず、鬼頭のことを淡々と語り始めた。

「変な言い方かも知れないが、今僕がこのような仕事をしているのも、由香里が僕の妻になったのも、すべて鬼頭の御陰なんだ。御陰というと少し語弊があるが、君にも話した中学三年のあの事故が、今の僕の出発点だと思っている。僕はそれまで勉強もできてスポーツも得意だったし、女性にも人気があった。自分で言うのもなんだが、他人から見れば本当に嫌な奴だと思われていたに違いない。君に会うまで真の友人もいなかった。あんなことがあった御陰で今までの自分の考えを改め、何でもいい人の役に立ちたいと真剣に考え、父の反対を押し切って名古屋にあるカトリックの高校に進学した。父は銀行員でその当時は、僕のこと銀行員にさせようとしていた。今では父も退職して、孫と遊ぶのを唯一の楽しみにしている。バブルが弾け、大学時代の学友が次々に職を変える中、自分の持っている価値観が本当は間違っていたのではないかと、僕が結婚したときにそっと話してくれた。銀行や証券会社が潰れていくなかで、父の銀行は地方銀行だったこともあり辛うじて、不良債権が少なかったため最悪の事態を免れた。父の大学の友人で都市銀行に勤務していた者の中には、自殺した者までいたという。昔の父の面影はなく僕はそんな父を見たとき、父もやはり人間なのだと思い安心した。それまでの父は頑固で、人の意見に耳を傾けるといふことをするような人物ではなかったから。最近の父を見ていて、こんなにも丸くなるなんて思ってもみなかったよ」

「君は父親が怖いと言っていたね」

「僕はあの事故まで父に対して、言い訳することすら許されなかった。しかしあの事故の後、自分の考えを率直に父に言えるようになった。そのときは家中の皆が驚いていた。一番驚いていたのは勿論父だ。志望校を父に説得するのはとても骨が折れたよ。それでもあの高校がかなりの進学校だったため、父は渋々首を縦にふったが、やはりカトリックの学校ということであまりいい顔はしなかった」

胡桃沢とは高校一年生のとき寮が同室だったこともあり、色々なことを語り合った。高校時代も胡桃沢から、父はとても厳しく自分がこの高校を選んだことに、難色を示していると言っていたことを思い出した。

「君は以前父の存在は絶対だった。君の家では父が神のような存在だと言っていたね。そんな強い人があのバブルで弱気になったのは想像がつくよ。私もバブルに踊らされた人たちの悩みを沢山聞いたからね。あのバブルまで銀行が潰れるなんて誰が想像しただろう。私たちの世代は、銀行は絶対潰れないものという、ある種の神話みたいなものがあったからね。まるでアラビアンナイトの千夜一夜物語みたいだと思ったものだよ」

都市銀行は弱点を補うため、合併を重ね名前まで捨て巨大化していった。経済の潤滑油であるはずの銀行が、自分がエンジンだと勘違いしたときバブルが弾けた。

「そう父は絶対だった。僕もそのままずっと父のいうなりに学校を選んで、銀行員になるのだと、それが自分の運命だと半分あきらめの気持ちだった。以前君は子供の頃電車の運転手になり

たかったと言ったことがあったね」

「ああ……」

そんなことも胡桃沢に話したのかと思い出し、とても懐かしかった。

「僕は子供の頃野球選手になりたいなあと考えたことはあったが、小さい頃から父が銀行員でなければ、人にあらずみたいなことを家でも公言していたため、必然的に、自分も父のように銀行員になるしかないんだと思っていた。いや、思っていたというより思わされていたのかもしれない。そんな僕の目の前にある霞が綺麗に取れ、物事がはっきり見えるようになったのは、あの事故が切っ掛けだったんだ。何が正しくて何が間違っているか、それは人に意見されるのではなく、自分の判断で決断しなければならないことを悟った。それは聖パウロが、目から鱗が落ちたような感覚に似ている」

先ほどから胡桃沢は、鬼頭が由香里さんを強姦したことを、事件とは言わず事故と言っている。里中はそこに胡桃沢の人間性を垣間見たような気がした。

「話を戻すと鬼頭のことを、昔の友人たちに訊いてどうしようと思ったんだい？」

「あのことが僕の人生で良い方に転んだと今は思っている。しかし彼はあることを切っ掛けに、あのような人間になってしまった」

胡桃沢は里中から目を逸らすと遠くを見詰め、何かを思い出したように再び語り始めた。胡桃沢が小学校三年生のとき、鬼頭は隣のクラスでどちらかという、とてもおとなしい児童だったらしい。そんな鬼頭が急に変わったのは、学校帰り男の子が川に落ちたことにより、担任の教師に叩かれたことが関係している。胡桃沢は里中に宮坂昇が鬼ごっこで川に落ちた出来事と、その後とった担任教師の行動を詳しく話してくれた。由香里さんは鬼頭の小学校時、同級生だったということだ。

「鬼頭はその若林という教師と、僕のバスケ部の友人でもある山岸によって、性格が捻じ曲げられてしまったんだ。僕は十数年ぶりに山岸に会い、どうして鬼頭を陥れるようなことを言ったのか訊いた。彼はあの当時のことを思い出し、担任の先生がとにかく怖かった。宮坂が川に落ちたのは間違いなく自分のせいだし、そのときは宮坂が川に落ちれば面白いと思った。それは子供なら誰しも考える悪戯心なのだろうが、しかしあんな簡単に落ちるとは思ってもみなかったようだ。僕もこの歳になって現場に行ってみたが、今はガードレールで確り安全対策が施してある。しかしその当時、道と川の間には何もなかったらしい。今だったら問題になることも、当時はそれこそ危ない場所や物は、世の中には沢山氾濫していたからね。山岸は自分のしたことが本当に悪かったと自覚していた。翌朝、下校が一緒だった生徒たちが、皆の前に立たされ担任に詰め寄られたとき、おとなしい鬼頭だったら、文句も言わずにすべて被ってくれるのではないか、そう考えて思わず鬼頭の名前を口にしてしまった。鬼頭があのような事件を引き起こす切っ掛けになったのは、山岸にも責任があるということを僕から聞かされ、涙ながらに済まないと言っていた。それまで鬼頭は本当におとなしい優しい子だったと母親も言っている。その二年後に鬼頭の弟が亡くなったのだが、家の中ではこのときから殆ど、鬼頭は母親と喋らなくなったということだ」

人という生き物は、直ぐ自分を中心に物事を考えてしまうところがある。若者がホームレスを見て汚いゴミのように感じ、殴り殺してしまうような事件が後を絶たない。しかし若者たちから

見れば、ホームレスは虫けら同様、何も考えていないように感じるかもしれないが、ホームレスは若者以上に人生に悩み、哲学的な考えを持っていたとしても不思議ではない。それが幼ければ余計自分の視点でしか、ものごとを捉えられないのは当然のことだろう。子供であれば、弱い者に罪を被せたいと思うのは、ごく自然の成り行きかもしれない。そうやって間違いを犯しながら、人は成長していくのだ。

「鬼頭は母親と現在面会とか、手紙の遣り取りはしていないのか？」

「そこなんだが、最初警察に逮捕されたとき、警察の留置場に母親は面会に行った。そのとき鬼頭から、えらい剣幕でもう二度と来るなど怒られたそうだ。その後直ぐ鬼頭から母親の下に手紙が届いた。その手紙を見せてもらったが、そこには『俺は鬼子です。もうあなたの子ではありません。二度と俺の前に姿を見せないで下さい。あなたが俺の前に姿を見せたら、俺は何をするか分かりません。俺のことは忘れて下さい』と書かれてあった。僕はこれを読んだとき、鬼頭が母親を心配してこんな手紙を書いたのだと感じた。鬼頭にとって母親は唯一の肉親であり心の砦なんだ。冷血といわれている鬼頭でさえ、母親だけは晒し者にされたくない、守りたいと感じていたはずだ。彼があのような人間になってしまったのは、あの当時彼の周りにいた皆に責任があると思う。本当は僕が彼に直接会いに行けばいいのだが、おそらく彼は僕には会ってはくれまい。たとえ会ったとしても僕の言うことに耳は貸さないだろうし、彼の今置かれている状況を考えると、僕が彼のところに面会に行った場合、嘗ての被害者である僕が、彼を蔑むために来たと感じるだろう。それでは彼の心を救うことはできなくなってしまう」

それほど広くない面談室に、胡桃沢の声は漆喰の壁に反響し、より大きく里中の耳に入ってきた。

「君の考えは何となく分かったような気がする。君という人間を良く知っているし、人を殺めてしまった男を、救ってやりたいという気持ちに嘘はないことは分かる。けどあ那时的の本当の被害者である由香里さんは、そのことをどう思っているんだい。由香里さんには話したのか？」

俳優にでもなれそうな胡桃沢が、他の女性には見向きもせず、由香里さん一筋なのは里中も知っている。神を信じ己のすべてを信仰に捧げた里中でさえ、自らの人生を変えてしまう女性に、出会えた胡桃沢を羨ましく思えた。

「彼女は勿論賛成している。彼女の気持ちを踏みにじってまで、君にこんなことを頼みはしないよ」

里中は額に手を当て俯いた。

「うーん。難しいと思うな。私の知り合いの神父にも、死刑囚に面会した者もいるし、その人から拘置所の教誨師をやっていたという人の話も聞いたことがあるが、彼らに共通して言えることは、人を殺めてしまった者は、その恐怖から神や仏に縋るのだが、殆どの場合心から神仏を信じてはいない。神父である私が言うのは実に残念なことなのだが、彼等にとって我々は単なる便利屋でしかないようなのだ。これはあるシスターが私にオフレコでそっと教えてくれたのだが、彼等は他人を殺めても決して自分だけは死にたくないと、生き続けて罪を償いたい。そういう考えの人たちが殆どだそうだ。官の方でも死に対する恐怖を払拭し、心情の安定を図るのが、本来の目的らしい。それでも我々の仕事は、彼等を救うのが使命なのだが。君は鬼頭という男が、神

に対して懺悔すると本当に思うのかい？」

正直なところ鬼頭みたいな男に会って、神の教えを伝えることができるのか、まったく自信がなかった。中学のとき、神父様に進められて読んだ『レ・ミゼラブル』の主人公ジャンバルジャンは、ミリエル司教が信じたように真人間になっていく。しかし現実には物語のようにすんなりということが運ぶとは思えない。私はあの話を読んだとき、自分はミリエル司教にはなれないだろうと素直に感じた。

「里中、まるで時限爆弾でも渡されたような顔をしているな。でもこんなことを頼めるのは君しかいないんだ」

胡桃沢の顔は笑っているように見えたが、目は真剣だった。

「私に何をさせたいんだ？」

「僕も彼が神に対して懺悔するなんて思っちゃいない。ただいずれ死刑になるにしても、人を何人も殺めておいて、自分のしてきたことに対して、まったく反省していないどころか、後悔もしていない。それはあまりにも人として悲しすぎる。そう思わないかい。僕が彼の人生に関わってしまった以上、彼に対して何かをしなければならない義務があるような気がする。それは宿命なんだと思う」

胡桃沢の声は少し震えていた。持ってきた黒革の鞆から五・六冊の雑誌を取り出し、古い黒光りしたマホガニーの机にそれを置いた。

「ここに鬼頭のことを書かれた雑誌を何冊か持ってきたんだが、鬼頭は雑誌記者のインタビューに対し、自分は人を殺してもまったく後悔していないと語っている。被害者に対して申し訳ないと思わないのかの記者の質問に対しても、そんなこと少しも思ったことはないと言い放った。僕が知っている昔の彼なら、それは強がりでも何でもなくそれが彼の本心だと思う。しかしそれでは殺された人たちも、彼のお母さんも、あまりに可哀相だ。あんな鬼頭でも良心の呵責というものが必ずあると信じたい。いや信じている」

そういう胡桃沢の顔は険しく、机の上に載せた拳は強く握り締められ血管が浮き出ていた。高校時代あまり感情的になるところを見たことがなかっただけに、鬼頭のことに対してよほどの思いがあったに違いない。胡桃沢の決意はこのマホガニーの机より固いはずである。かつて寝食を共にした友人の頼みであれば、聞かざるを得ないだろう。

「君がそこまで言うのなら、努力してみるよ。人が人を信じようとする力は、どんな武器よりも、はるかに強いと私は思う。君の話聞いて私も少し鬼頭という男に興味を持った。君は笑うかもしれないが、これも主が私に与えた使命なのかもしれない。君の名前は出さないほうがいいんだね」

胡桃沢と話をしていると、決して神父同士では口にしてはいけないことも、安心して言葉に出してしまう。

「そうしてもらえると助かる。くどいようだが鬼頭を救えるのは君しかいないんだ」

「分かった。任せてくれ。君には時々連絡を入れるよ」

「頼む」

胡桃沢が持ってきた話は厄介ごとに違いない。どのような人間であれ間違いは必ず犯すものである。ただその過ちを認識し、二度と同じ過ちを繰り返さないという気持ちにならない限り人は成

長しない。しかし過ちを過ちと認識していない者に、果たしてそれを認識させることができるものなのか疑問に感じた。それは自分の人生を掛けたものになるかもしれない。それほどまでに困難なことに思えてならなかった。何千人の布教活動をするより、たった一人の人間を救うほうがより価値があるのではないか。

二人の額からは汗が噴出していたが、それを拭くことすら忘れ話し込んでいた。胡桃沢はその場に立ち上がると、大きく頭を下げ面談室を後にした。里中も立ち上がり胡桃沢の後に続いた。その日はとても暑い一日だった。

帰省

1

そのニュースを目にしたのは、胡桃沢が勤務している大学病院の食堂で、昼食を摂っているときだった。定食のマーボ豆腐をレンゲですくって御飯にかけてたとき、テレビから『昨夜長野県更埴市にて、連続婦女暴行殺人事件で捜査中の長野県警が、同市に住んでいる鬼頭正志容疑者、二十九歳を死体遺棄及び殺人容疑で逮捕しました』というニュースが耳に飛び込んできた。そのとき自分の背筋に冷たい戦慄がはしるのを感じた。

自分が生まれ育った付近の聖湖の湖畔で、女性と思われる白骨死体が発見されたのが、今から一年六月ほど前だろうか。犯人は捕まらずもはや迷宮入りかと思われ、週刊誌やテレビなどでは殆ど取り上げられなくなったところだった。

そんな皆が事件を忘れかけたとき犯人が捕まった。ニュースのアナウンサーは、犯人の名前を鬼頭正志と告げた。そして長野県更埴市と。自分の生き方を180度変えた男、どんなに時間が経とうと、その名前を頭から払拭することはできなかった。鬼頭の名前を耳にした途端飯が喉を通らなくなった。マーボ豆腐を口の中に入れても、砂を噛むようで味がしないばかりか、胃が食物を受け付けず口から吐き出してしまう。目の前で食事を摂っている若い看護師が、怪訝な顔で胡桃沢を見ていた。胡桃沢はお茶を一口含むと立ち上がり、定食のお盆を持って食器返却口に返した。

「ありがとうございました」

洗い場の小母さんが殆ど手を付けていない食器を目にして、不思議そうに胡桃沢を見ている。(君は本当に悪魔に魂を売ってしまったのかい。いったい何が君をそのような冷血な人間に変えてしまったのか?)

家に帰る足取りが重かった。大学病院のある西武新宿線下井草から、自宅のある東伏見まで僅かな距離なのだが、今日だけは素直に家に帰りたくない心境だった。由香里の顔を見るのが辛かった。由香里は命こそ奪われなかったが、鬼頭の最初の犠牲者に違いない。そんな彼女に鬼頭が連続婦女暴行殺人の容疑者として、逮捕されたことを知ったらどんな気持ちだろう。

あの小島神社の一件後、鬼頭から電話があった。

「おい、あの後一発決めたか？」

何の感情もない鬼頭の声は、金属と金属が擦れあう音のように、ただ耳障りなだけだった。

「彼女はあのことは忘れると言っている。だから彼女のことはそっとしておいてくれ」

鬼頭に由香里をこれ以上汚されるわけにはいかない。

「随分と強気なことを言うじゃないか。鵜飼いの鵜が魚に惚れたのか」

鬼頭の口から発せられる言葉の一つ一つが、胡桃沢の神経を逆撫でた。

「鬼頭、君がこれ以上彼女に構うようなら、僕は若林先生のことを警察に言う」

胡桃沢の言葉に対し、一瞬だが間があった。

「何だい若林先生って？」

あの冷血でいつも落ち着いている鬼頭が、電話の向こうで明らかに動揺しているように感じら

れた。

「今年の夏、君が若林先生の風呂場に蝮を投げ込んだとき。彼女の身に何かあったらそのことを僕は警察に言う」

「お前馬鹿か。若林のことなんか俺は関係ない。言いたければ警察でも何でも言えればいいだろう」

「君が僕らにつきまとうようなことがない限り、そのことは僕の胸に仕舞っておくよ。僕も君に倣って切り札は、ちゃんと取っておかなくちゃね」

それは明らかにはったりだった。若林の一件は鬼頭が関わっているかどうかなんて、本当のところ分からない。それでも由香里を守るためなら、鬼頭と刺し違えてもかまわなかった。このような気持ちを言葉に出して言えるようになったのも、すべてあの小島神社の一件があったからに他ならない。その後鬼頭は由香里にも、胡桃沢にも、何も言ってこなかった。

由香里は隣町の高校に進学し、胡桃沢は名古屋のカトリック系高校に進学した。由香里との仲はより親密になり、高校時代は電話や手紙で遣り取りして、夏休みや冬休みは長野に帰省しデートを重ねた。そして大学は同じ東京を選び二人同時に上京した。

神父になろうと思ったとき、神父は結婚できないということを知り、自分と由香里の関係を危惧したこともあったが、自分にとっての神は由香里だと思ふことにした。あのとき鬼頭が小島神社から出て行った後、そこには確かに天使が舞い降りた。人は生きていくうえで何度か、涙が出るほど感動する場面に遭遇することがある。殆どの場合それは一過性のもので、時間が経つにつれその感動は薄められていく。しかし胡桃沢はそのとき受けた感動が身体から出ていくことはなかった。由香里のためならすべてを投げ出してもかまわない。妻となった由香里に対する気持ちは今でも変わらない。

自宅のマンションは駅から歩いて三分の距離にある。マンションのエレベーターを降りて、自分の部屋の前に行くと、玄関扉横のテンキーに暗証番号を押した。ガチャという鍵が解除される音を聞いて玄関扉を開けた。このマンションはエントランスホールに入る錠は、掌をかざすだけで入居者を認識するバイオメトリクス（生態認証）方式の先進セキュリティを採用しており、自分の部屋の錠はテンキーになっていて、一切鍵を持ち歩かなくていい構造になっていた。全戸の玄関ドアと窓に防犯センサーが設置され、玄関はカラーモニターハンズフリーインターホンで来訪者を認識する。二十四時間オンライン遠隔警備及び、毎日六時から二十三時まで管理員が駐在しており、セキュリティには万全を期していた。

大理石敷きの、マンションにしては広めの玄関で靴を脱いでいると、奥のリビングから「お帰りなさい」という由香里の声が聞こえた。胡桃沢は黒い牛革製の薄い鞆をリビング手前の寝室に置き、奥のリビングに向かった。廊下とリビング境目にあるステンドグラスの立った引き戸を開けると、そこにはピンクのスウェットトレーナーを着た由香里が立っていた。

「お風呂入っていますよ」

胡桃沢は家に帰宅すると先ず風呂に入る。そしてドライヤーで髪を乾かした後、350ccの缶ビールを飲みながら、軽い食事を摂ることを習慣としていた。よほどのことがない限り7時前には家に着く。胡桃沢がリビングに入ったときは、6時のニュースは既に天気予報になっていた

。今までテレビを見ていたということは、当然鬼頭の事件も目にしているはずだ。由香里自身からそのことを口にするのは躊躇われるだろうし、事件が事件なだけにこの関連のニュースは今後何度となく出てくるだろう。嫌なことは先に済まわせてしまおうと思い、自分の方から鬼頭のことを切り出した。

いつものようにスーツを脱ぎ、それを由香里に渡しながら話し始めた。

「ニュースを見たか？」

「はい」

「鬼頭のことやっていたら。僕も病院でテレビを見て本当にびっくりしたよ」

「あの人はああいう運命の下に生まれついたのかもしれないわ。考えてみれば可哀相な子ね」

由香里の思いがけない言葉に、少なからず驚いた。女子が同級生をあの子と呼ぶのは決して珍しいことではないものの、自分の妻が鬼頭をあの子と呼ぶのには違和感を覚えた。

あのことがなければ、自分たち夫婦はお互いまったく違う人生を歩むはずだった。しかし鬼頭の出現で二人は重なり合い、今こうして共に人生を歩んでいる。

「私は、中学は勿論小学校のときも同じクラスだったの。彼は小学校三年生まで、誰が見てもとてもおとなしい子だった。保育園も一緒だったからよく覚えているんだけど、同じ歳の男の子、それもとてもやんちゃな子が、砂やどんぐりの実を彼に投げつけても、彼は決して怒ったことはなかったわ。いつも相手が飽きて止めるまでじっと待っている。自分からトラブルを起こすことがないおとなしい子だったのよ」

胡桃沢はそこまで由香里の話を訊き、自分の中学時代を思い出していた。あのカンニングを鬼頭に見られるまで、同じクラスに鬼頭という男子がいたことすら記憶に残っていなかった。鬼頭という名字は学校でもおそらく一人だったと思うが、鬼頭の記憶はクラスマッチのリレーで、三人を牛蒡抜きに走ったことと、水島に恐喝され、返り討ちにした記憶しか残っていない。それがあの中学三年の冬から、胡桃沢のすべてを支配してしまうほどの人物になっていた。なぜそんなおとなしい男の子が、あのような残忍な人間に変わってしまったのか。一体鬼頭に何があったのか。

「なぜそんなおとなしかった子が、あんなことをする人間になったんだ？」

「私にもそれは分からない。ただ私が小学校三年生のとき、学校帰り男の子が川に落ちるということがあったのよ」

その話は以前、中学の部活で一緒だった山岸から訊いたことがある。山岸はそれほど悪い奴に感じなかったが、山岸も自分可愛さで、自分の都合のいいように話した可能性があった。

「山岸が、鬼頭のせいだと言ったのだろう」

「そのことを知っていたの？」

由香里は少し驚いた顔をした。胡桃沢は部活のとき、山岸から訊いたことを掻い摘んで話した。「確かに山岸君にも原因があると思うし、担任の若林先生はもっと酷いと感じた。まったく濡れ衣なのに彼を思い切り叩いたのだから。しかし彼があのような性格になったのは多分……」

そこまで言い掛けて由香里は言葉を飲み込んだ。

「多分何だい。君たちのクラスで何があったのか？」

「若林先生が川に落ちた男の子と、帰りが同じ班だった子供たちを教壇の前に立たせて、目隠し鬼ごっこをやるうと言ったのは誰だ？と問い質したのよ。そしたらその班の子供たちは皆下を向いた。誰が言ったかなんて今思えばどうでもいいことでしょう。小学校三年の子が、自分ですと名乗りを上げるほうがおかしいわ。多分皆怖かったのね。若林先生が。だから山岸君はその怖さに耐えかねて、一番気の弱そうな鬼頭君を売ったのよ」

それはまるでスターリンやヒットラーの恐怖政治みたいだと胡桃沢は感じた。密告制度の恐怖のあまり、自分の親や兄弟までも密告してしまう。そこまでさせる担任の若林とはどんな人物だったのだろう。隣のクラスのことなのにまったく知らなかった。胡桃沢のクラス担任は中年の女性教師で、とても優しく記憶がある。若林は蝮を投げ込まれても仕方ない男だったのか。このとき、蝮を投げこんだ犯人は、鬼頭意外考えられなくなっていた。

「しかし本当に悪いのは山岸君や若林先生じゃないの。本当に悪いのはあのクラス全員なのよ。あのときおそらく誰一人として、彼が自分から率先し鬼ごっこをやるうなんて言うはずがないということは知っていた。それほどおとなしい引っ込み思案の子だったから。それなのに誰一人彼に助け舟を出す言葉を掛けてやれなかった。私たちは沈みかけた船に乗っている彼を助けることができたのに、沈んでいくのをただじっと見ていただけなの。それで彼は沈んでいったきり二度と浮かんでこなかった。誰か一人でも鬼頭君じゃないと思います。たとえば今の彼はなかったのかもしれない。彼はあのときから明らかに人間が変わったわ。あのクラスの皆がモンスターを創ってしまったのよ」

由香里は珍しく感情的になっていた。そしてその眼差しは今まで見たことがないほど真剣なものだった。鬼頭があのようになってしまったのは、まるで自分のせいだともいうように。

今でもはっきり覚えている。硝子球のような凹んだ目と、表情のない顔が胡桃沢の脳裏から離れなかった。

「確かに子供のときの出来事は、その人のその後の人生に大きく影響する。鬼頭も辛い思いをしたんだな。僕は中学三年のあのとき、彼は触れざる者のように感じた。あの頃ヒットした映画オーメンのダミアンみたいに」

胡桃沢はすっかり鬼頭の話しに取りつかれてしまった。

「貴方、取り敢えずお風呂に入ってきたら」

気がつく时下着のままリビングに立っていた。

浴槽に浸かっている、鬼頭のあの冷たい硝子球のような目が頭から離れない。由香里は小学校のとき、鬼頭を助けてやれず後悔していると言っていた。それが中学三年生のあの小島神社のことで、鬼頭を心底憎むことができなかったのだろうか。鬼頭に対して何かしら後ろめたい気持ちを彼女は持ってしまったのか。床に入って目を瞑っても、鬼頭のことを頭から離れずなかなか寝つけなかった。

鬼頭が逮捕され連日ワイドショーは鬼頭の事件一色だった。鬼頭が生まれ育った更埴市は、テレビ関係者でごった返していた。春になると杏の花が里一面に咲く森の杏以外、目立った観光資源もないこの小さな田舎町は、オウム事件で一躍有名になった上九一色村のように、全国的に有名になった。

報道によれば鬼頭は逮捕されると、否認することなく自己の犯罪を淡々と自供したという。まだ発見されていない遺体も含め、五人の女性を殺害していた。その殺害方法は極めて残虐で世間を震撼させた。それも暫くすると新しい事件に人々の目がいってしまい、殆どマスコミにも取り上げられなくなった。人々の記憶がだんだん薄らいでいく中で相反し、胡桃沢の中で鬼頭が存在がどんどん増幅していった。

鬼頭が勾留中である更埴警察署の留置場から起訴され、長野拘置支所に移監されると公判が始まり、再びマスコミでも取り上げられるようになった。

胡桃沢は気がつくど、長野行きの新幹線に乗っていた。新幹線ができて長野は近くなったものの、電車を乗りつがなければならぬことを考えると、以前特急列車一本で戸倉まで来られたころの方が、実家に帰省するにはかえって利便性がよかった。長野県はとても広く胡桃沢が育った場所は北信と呼ばれ、県の北に位置している。県庁所在地に隣接した町で、産業も観光も際立ったものがなかった。

東京に上京しても、年一回行なわれる中学の同窓会は必ず出席していた。しかし由香里は中学の同窓会には一切参加しなかった。年賀状の遣り取りもあったため、同窓生と会うのは比較的容易なことだった。

軽井沢で新幹線を降り、在来線に乗り換え小諸で電車を降りた。鬼頭の母多恵は事件後小諸に移り住んで、現在病院の掃除夫をしているという。マスコミの前に引きずり出され、ただ頭を下げる年老いた多恵の姿は見ている方が辛かった。

中学校時代バスケ部の後輩に葛西という男がいた。葛西は地元に残り父親の鉄工所を継いで、今でも胡桃沢と年賀状の遣り取りをしている。バスケ部時代に自分を慕ってくれ、自分も彼を可愛がった。その葛西に頼んで現在、鬼頭の母多恵が住んでいる場所を調べてもらった。事件以来多恵はマスコミに追い回され、逃げるように小諸に移り住んだということだ。

今日会うにあたり、前もって手紙を出し、その後多恵の自宅に電話がないため、病院に電話を掛けた。差出人の住所を今住んでいる東京ではなく、更埴市にした。それは東京にしたらマスコミか何か、警戒心を抱かせてしまうと思ったからだ。幸いなことに胡桃沢のことを多恵は憶えてくれていた。どういう経緯で知ったのか分からないが、胡桃沢が名古屋のカトリック系の高校に入学し、その後東京の大学、医学部に進学したことまで知っていた。

自分が精神科医で嘗て同級生であった鬼頭を、精神的に救ってやりたいという自分の気持ちは、電話だけの遣り取りでしか分からないものの、多恵は自分の気持ちを理解してくれたように感じられた。それは或いは自分の自惚れかもしれない。報道関係者から無責任な言葉を浴びせられ、知り合いからも蔑んだ目で見られあの町を追われた。その中で唯一彼女を理解しようという人

物が現れたのだ。鬼頭の深い心の闇がどこから来ているのか、彼の母に会って子供時代話を聞くことが、最も手っ取り早い方法に思えた。

子供の頃、両親と姉と四人で、よくこの小諸に車で遊びに来たことがある。小諸には懐古園という場所があり、ちょっとした遊具もある。昼食事には、駅前にある中華料理屋で、食事を摂るのが通例になっていた。胡桃沢はその中華料理屋の餃子が大好きだった。他にも色々食べたが、餃子のことしか記憶に残っていない。おそらく中華料理は高貴が好きだったのだろう。小諸の支店にいたとき、この中華料理屋の味に魅了され、足繁く通ったのかもしれない。胡桃沢も中華料理が好きだった。しかし駅前にその中華料理屋は既になかった。

駅前でタクシーを拾い、運転手に多恵が居住しているアパートの住所を告げると、場所が近いのか露骨に嫌な顔をされた。

タクシーを降りると目指すアパートは目の前にあった。薄いピンクのモルタル塗りの壁は、所々に亀裂が入りパテで補修した跡が痛々しい。半世紀は経っているのではないかと思われるほど古い建物だった。多恵はそこの一階三号室に居住していた。

鬼頭に脅迫され由香里を強姦したあの日、小島神社のある東山から町を見下したとき、胡桃沢が「君の家はこの近くにあるのかい？」と訊いたら「ああ、直ぐそこだよ」と指した市営住宅よりもこのアパートは更に小さく、半分以上は空き部屋のようなようだった。多恵が住んでいるはずの一階三号室は何の表札も出ていなかった。蹴飛ばせば簡単に壊れそうなベニヤ合板の玄関ドアを軽くノックした。「胡桃沢です」声を掛けると、奥に人が立ち上がる気配がした。「はい」という声が出て暫くするとドアが開けられた。そこにはとてもやつれ年老いた女性が立っていた。悪魔のような鬼頭にも母親がいた。息子に精力をすべて吸い取られ、そこにあるのは魂のないミイラのような抜け殻だった。顔に刻まれた深い皺は、楽しいとき顔が綻んでできる笑い皺と違い、苦悩の末追い詰められてできた皺に違いない。世の中すべての不幸を一人で背負ったような悲しい顔をしていた。本当の鬼頭を知る鍵はここにしかない。

「よく来てくれました。汚いところですけど、どうぞお上がりになって下さい」

中に入りドアを閉めると狭い玄関で靴を脱ぎ板の間に上がった。黴臭い臭いが鼻につく。玄関の直ぐ横は御勝手になっていて、今では殆ど見られなくなった石の研ぎ出しの流し台があった。板の間の御勝手は広さが二畳くらいに感じた。こんな狭いキッチンで何を作るのだろう。自分が恵まれた環境で育ったからなのか、何かとても気の毒に思えた。小学校、中学校と自分より貧しい家を見るのが嫌で、友人の家にあまり遊びに行った記憶がない。なぜか自分が恵まれて育ったことが、後ろめたいように感じたからだ。御勝手の奥に三畳の部屋があり、そのまた奥が南に面した六畳の部屋になっていた。六畳の部屋には小さな箆笥と炬燵が置いてあり、テレビは見当たらなかった。昔からテレビを観なかったのか、それとも自分の息子があのような事件を起こしたため、娯楽を一切排除したのか分からないが、兎に角何もない殺風景な部屋だった。箆笥の上には仏壇があり、貧弱な箆笥とは似つかわしくない、小さいながらも立派な仏壇だった。

「どうぞ汚いところですけど、そこに座って下さい」

多恵は何度となく汚いところですけどと口にしながら、古くて何もないだけで掃除は行き届いており、塵一つ見当たらなかった。

「はい」

胡桃沢は炬燵布団の中に足を入れ、胡坐を組むように座った。炬燵は暖かく懐かしい臭いがした。畳は黄ばんで所々すりきれ糸が見えている。四月になろうとしているにも拘わらず、少しも暖かくなる兆しがない。長野県でも佐久や軽井沢の冬はとても寒さが厳しい。小諸も佐久や軽井沢よりは気温が高いものの、春が来るのが遅い場所である。多恵はお茶と野沢菜を御盆に載せ持ってきた。

「野沢菜漬けと梅漬けだけは毎年漬けるんですよ。何もなくてもこれだけでお数になるものだから」

多恵はそっと御盆のお茶と野沢菜漬けを、炬燵のテーブルの上に置いた。北信はどこの家でも野沢菜だけは漬ける。野沢菜は色々な使い方があり、炒めておやきやおにぎりの中に入れたり、細かく刻んでお茶漬けにしたり、味噌で炒めたり、それこそ使い方は幾らでもある。それぞれ家によって漬け方がまったく異なり、食べ比べるとその違いに驚かされる。胡桃沢の実家でも父が好物だったため、母が毎年野沢菜を漬けていた。

爪楊枝で黄緑色の野沢菜を刺し口に運ぶと、しょっぱさと辛さが口の中に広がり、パリッという独特の音と共に懐かしさが体中に伝わった。長野では味噌と漬物はおふくろの味といって、胡桃沢もふと自分の母を思い出した。ぱりぱり音をたて野沢菜漬けを食べていると、多恵は炬燵を挟んで胡桃沢の向かいに正座した。

「鷹の爪が入っているんですか？」

黄緑色の中に鮮やかな赤が目に残った。鷹の爪は細かく刻まれている。

「はい。よくお分かりですね」

「うちの母も必ず入れるんですよ」

「お母様元気でいらっしゃいますか？」

「ええ。何とか元気でやっているみたいです」

多恵とは電話では結構話せたのだが、いざ目の前に本人がいると、どう話を切り出せばいいか非常に気を使ってしまう。最初電話をしたとき、小諸駅前にある喫茶店で会いましょうと多恵は申し出たが、周りの目もあるしできれば多恵の自宅の方がいいですといい、このアパートにしてもらった。中途半端に広い空間よりも、少し密閉された空間の方が安心して話ができるし、何よりも周りを気にしなくてすむ。そう考えたからだ。

「だいぶしつこくマスコミにつけ回されましたか？」

「正志があのようなことをしてしまったから仕方ありません」

「お母さんも本当に辛かったですね」

由香里から訊いたクラスの中で起こった出来事を詳しく話した。多恵は鬼頭が明らかに変わったのは、宮坂昇が川に落ちた頃だと言った。しかし本当のところ鬼頭はただの傍観者で、被害に遭ったのはむしろ鬼頭の方だということを、多恵はまったく知らなかった。

「そんなことがあったのですか。あの子はまったく言い訳をしないものですから。正志が変わったのは、宮坂さんのお子さんが川に落ちて、それで学校の先生や主人に叱られ、逆恨みしたのだとばかり思っていました。わたしだけでもあの子のことを信じてやればよかったのですね。わたしは主人に正志のことでいつも気を遣っていました。実は正志は主人の実の子供ではありません

。お恥ずかしい話ですが、わたしが中学を卒業し、集団就職で紡績工場のある四日市に出ました。当時あの辺の海もそれほど汚れていなくて、わたしたちも海でよく遊びました。そこでわたしはヨットを持っているお金持ちに声を掛けられ、のこのことそのヨットに乗ってしまったのです。今でいうナンパですね。その男はヨットを持っているくらいだから、かなりの御曹司でわたしは暫く彼と付き合いました。そのときわたしは彼と結婚できるものとばかり思っていたのですが、彼の方は所詮遊びだったのです。そんな中で子供ができてしまい、彼に打明けると彼は真っ青な顔になり『僕は君とは結婚できない』と言うのです。馬鹿なわたしはそのときようやく気づきました。彼のような御曹司が、わたしのような女工なんかと結婚するわけがないと。わたしは田舎の母に相談すると、直ぐ長野に呼び戻されました。母も父も子供を下ろしなさいと迫ったのですが、わたしは断固拒否しました。すったもんだしているうちに、わたしのお腹がどんどん大きくなり、近所でも色々な噂が立つようになりました。そんなとき父がどこからか男を連れてきたのです」

そこで多恵はお茶を一口飲んで下を向いた。

「それが鬼頭君の義理のお父さんだったのですか？」

胡桃沢の周りでは、そのような話を聞いたことがなかったが大体想像はついた。

「それが主人だったのです。父が連れてきた男は満州からの引揚者で、戦争で両親が亡くなり親戚を盥回しにされ、結局最後は孤児院に引き取られていったそうです。主人はよくこんなことを言っていました。俺は納豆が嫌いで、それでも孤児院では、納豆が嫌いだからといって残すことはできず、その納豆を職員に見られないようにそっとポケットに突っ込み、後でそれを便所に行って捨てるそうです。そのときはポケットがべたべたになり、それが見つかって殴られるそうです。それでもやはり嫌いなものは食べられなく、同じことを繰り返すらしいのですが。主人は満州から引き上げるとき、死体に沸いた蛆虫がそれを思い出させ、どうしても納豆だけは口にできなかつたようです。その後坂城の鍛冶屋に丁稚に出され相当苦勞したみたいです。そんな最中父が娘を貰ってくれたら支度金を用意するというので、主人はわたしのところに来たのです。わたしの家もそれほど裕福ではありません。主人も安い金で自分を売ったものだと思います。お腹の出たわたしと栄養不足で痩せた主人と身内だけで、簡単な祝言を挙げたのですが、主人もわたしも少しも嬉しそうな顔をしていなかったと思います。背に腹はかえられないとでもいうのでしょうか。そのときわたしはもうどうなってもいいとさえ思っていました。父に言いくるめられたのか、今では確かめようがありませんが、主人は戸籍上自分の子として出生届けを出してくれました。そして名前も自分のまさを採って正志とつけました。考えてみればあの子は誰からも望まれず、この世に生を受けたのかもしれない。以前テレビでモーツァルトを聴くと、胎教に良いということをやっていましたが、正志がお腹にいるとき、わたしはお前さえいなければと言っていました。下ろすこともできたのに、わたしは生もうと決意したにも拘らず、自分のお腹の子が大きくなるにしたがって嫌悪感さえ覚えました。産気づいてお産婆さんに来てもらったときも、もうどうでもいいと思いただ横になって産む努力をしなかったのです。そしたらお産婆さんが『多恵ちゃん、お母さんになるんでしょ。頑張らないと赤ちゃん死んじゃうよ』と怒られる始末です。このままこの子と死んでしまいたいと思っていたことが、お産婆さんには分かったの

かもしれません。正志が生まれて暫くすると、今度は主人との間に、正志の弟、忠志が生まれました。私も主人に気を遣ったせいもあり、どうしても正志より忠志の方を可愛がってしまい、正志も幼いながらにそれを感じ取っていたと思います。それでも正志は弟の忠志を可愛がってくれたのですが、その忠志も雪山の事故で亡くなりました。正志は相当ショックだったと思います。正志はその後わたしとも殆ど口を利かなくなりました。宮坂さんのお子さんが川に落ちたのは、学校の先生の言うとおりに、てっきり正志に原因があると思い主人に報告しました。宮坂さんのお子さんは主人が勤めていた工場の社長さんの息子さんだったため、正志は主人にこれでもかというくらいに殴られました。その後主人に庭に立たされ、夜遅くわたしが正志を家の中に入れてやりました。身体が冷えていたのは勿論ですが、心まで冷え切ってしまったのか、何か思い詰めたような、或いは何かを決意したような沈痛な顔をしていました。もともと感情を表に出すタイプの子ではなかったのですが、あれ以来まったく笑わなくなりました。あのときですね。正志の心が壊れてしまったのは」

多恵は下を向き肩に力を入れ、嗚咽を堪えていた。多恵の深い皺に涙がゆっくり伝わっていくのが胡桃沢の目に留まった。多恵は立ち上がり小さな筆筒の引き出しから、一つの封筒を取り出し、それを胡桃沢に渡した。それは鬼頭が留置場から出した手紙だった。その後も多恵は喋り続けた。何年もの間、人と話をしたことがないみたいに。

多恵は今自分の人生を振り返って楽しかったことは、殆どないと言っている。それは自分が正志に愛情を注がなかったその報いかもしれないとも言った。精神科医の立場からすると、彼女は精神科医のカウンセリングを受ける必要があるくらい、心がぼろぼろに衰弱していた。胡桃沢の目から見ても、すべてに於いて諦念、諦めの極地に達しているような感じだった。

目の前にいる老女は、自分が創り出してしまったモンスターが、自分の手から離れ手に負えなくなってしまう、うろたえるフランケンシュタイン博士のように、何もすることができなかった。モンスターを創り出してしまった老女は自ら姨捨山に登り、生ける屍となって残りの人生を過ぎさなくてはならないのか。それを彼女の運命と断定してしまうにはあまりにも悲しすぎる。どんな悪人でも親にとって子供は愛おしい。仮に世の中すべての人が敵に回っても、守り抜きたいと思うのが母親だろう。多恵の苦闘は痛いほど伝わってきた。

胡桃沢の頭に姨捨山のことが過ったとき、小学校の道德の時間、この物語が教科書に掲載されていたことを思い出した。この物語を最初に読んだとき怖くて仕方なかった。いくら領主の命とはいえ、自分の母親を山に捨てに行くなんて、何て残酷なことだろうと思った。幼い胡桃沢の頭の中で、色々な空想が広がっていった。置き去りにされた老婆が、狼に食べられる姿や、何も食べるものがなく、骨と皮になって死んでいく老婆の姿が頭に浮かんで消え、恐怖が自分を支配した。それをいくら振り払っても、それから逃れることはできなかった。

地元の人はこの山を冠着山と呼んでいる。なぜ姨捨山と呼ばないのだろう。

胡桃沢が通っていた小学校の校歌に、この山の名前が出てくる。厳しい高貴に叱られ自分の部屋に戻り窓を開けると、いつも姨捨山が目飛び込んでくる。親指のような形の山を眺めていると憂鬱になる。今でもあの山を見ると中学時の忌わしい出来事が蘇ってくる。子供の頃、その一風変わった形の山を眺めていると、大人になったら絶対この町を出ようと決意した。自分の生まれたこの町が嫌いだった。

この哀れな老女を救う方法は、鬼頭自身が己の過ちを悔い改めるしかない。しかしどうすればいいのか、胡桃沢にそれができるのかまったく分からなかった。自分の前にできた霞を取り除かない限り、自分自身が前に進めないような気がした。

山岸と連絡を取るのとは比較的容易だった。山岸は高校を卒業すると、更埴の市役所に就職した。鬼頭のことはニュースを見て知っていた。山岸に限らず鬼頭の事件を知らない人間を捜す方が難しいだろうが、彼にとっては触れられたくない過去であるはずなのに、胡桃沢の真意を話すと快く会うことに承諾してくれた。

小諸から在来線で下り屋代駅で降りた。山岸とは駅前にある〈プチポルテ〉という喫茶店で待ち合わせをした。屋代駅は胡桃沢が高校や大学時代まだ駅舎が古い木造だったが、今は近代的な建物に変わり、駅前通りも大きく様変わりしている。

〈プチポルテ〉は駅前通りから一步入った住宅街にあった。この喫茶店は胡桃沢が小学校の頃からこの場所にあり、高校の夏休みや冬休みに帰省すると、よくこの喫茶店で由香里と待ち合わせをした。

店内は相変わらず薄暗く、マスターはあの頃と比べるとだいぶ歳を取っていた。胡桃沢は懐かしきもあり、マスターに（久しぶりです）と挨拶をしようと思ったがそうしなかった。何人もの客が訪れる中で、此方が覚えていても向こうが必ずしも覚えていてくれるとは限らない。変な気を使わせては悪いと思ったのだ。

胡桃沢が椅子に座り、コーヒーを注文したと同時ぐらいに、山岸が店内に入ってきた。ドアに取り付けてあるカウベルのカランという音で戸口に目をやると、黒のジャケットにジーパンという出で立ちで、中学以来久しぶりに会ったにも拘らず、以前とはかなり様子が変わっていた。それでも店内に入ってきたときは山岸と直に分かった。

「やあ、久しぶり」

胡桃沢は席を立つと、かるく手を上げた。店内は狭いながらに客がいて、カウンター席以外は席が略埋まっていた。山岸は胡桃沢を見つけると、ゆっくり歩いて胡桃沢の向かいに座った。山岸もコーヒーを注文すると、ウェイトレスが二つ一緒にコーヒーを持ってきた。

「今日は突然呼び出してしまっていて悪かったね。先ほど鬼頭のお母さんに、小諸で会ってきたよ」

胡桃沢は小さめのコーヒーカップを手に取り、何も入れずに一口飲んだ。

「鬼頭のお母さんは小諸にいるのか。何度かテレビで見たけど、とても辛そうだった。今まではああいうことがあっても、所詮他人ごとだと思って気にも留めなかったけど、今回胡桃沢に言われるまでもなく、あの子供のときのことはずっと、自分の心の中に引っ掛かっていたんだ。こんなことを言うとおかしいと思うかもしれないが、精神科医の君が鬼頭の手になってくれて、鬼頭が少しでも人間性を取り戻したらどんないいか……」

山岸の瞳には薄っすらと涙が滲んでいた。鬼頭が通った後は、それこそハリケーンでも通り過ぎたように、それぞれの人の心に大きな傷を残していく。

山岸は大人になっていた。彼は小学校三年生のとき、自分のとった行動がどれほど、一人の少年の心に傷を負わせたかよく理解していた。山岸自身の心にも傷を残し、それはこの先永遠に癒されることはないだろう。

「僕は殆ど記憶がないんだが、若林先生ってそんなに怖い先生だったのかい？」

胡桃沢は自分が一番疑問に思っていることを口にした。

「あのときは本当に怖かった。うちの甥っ子は小学校六年生になるが、その子は今学校が楽しくて仕方ないと言っている。先生が友達みたいでとても優しいらしい。僕たちの時代じゃ考えられない。先生は尊い敬う者と教えられ、とても怖いという印象しか持っていなかった。今だから言えることだけど、あの先生は子供たちに対して、愛情というものがなかったのではないかとさえ思えてならない。今じゃ生徒に暴力を振るっただけで首になりかねないが、あの当時の先生はどの先生も生徒を叩いていた。それでも愛情があれば子供たちも納得するだろうが、あの先生は単に子供に恐怖心を植えつけるだけだった。だからといって僕のしたことが赦されることでないことは分かっている。宮坂は僕のつまらない悪戯で川に落ちた。それは間違いなく僕のせいだ。あのとき宮坂が川に落ちれば面白いと思った。しかしあんなにも簡単に川に落ちてしまい、自分がとった行動が怖くなった。あの後家に帰り母に話して夜宮坂のところに謝りに行った。今考えれば本当に謝らなければならない相手は、鬼頭だったのかもしれない。僕は若林に叩かれるのが怖くて、一番気の弱そうな鬼頭の名前を口に出してしまった。本当に済まないと思っている」

山岸の瞳は完全に濡れていた。鬼頭の過去を浮き彫りにするために、山岸には随分辛い思いをさせてしまった。この男の一言がモンスターを作り出す切っ掛けになったかは定かでないものの、山岸という人間によって、鬼頭自身何かしらの影響を受けたのは間違いないだろう。山岸とはその後昔のバスケ部の仲間の話や、更埴市が隣町の戸倉上山田と合併するかもしれないという話をして別れた。

喫茶店を出ると外はもう薄暗くなっていた。今日、もう一人宮坂昇と会う約束をしている。いつになるか分からなかったため、宮坂の家に直接伺うことにしていた。駅前まで戻りタクシーを拾った。

「寂蒔の宮坂工業に行ってください」

運転手にそう告げると、何も返事をせずタクシーは目的地に向かった。今日タクシーの運転手は、はずれの日みたいだ。

鬼頭もかつて住んでいた寂蒔は、屋代駅と戸倉駅の丁度中間に位置し、宮坂の自宅にある宮坂工業は国道十八号線沿いにあった。工場の前でタクシーを降りると、工場の裏にある住居に回った。辺りは既に薄暗くなっていたため、定かでないが三階建ての建物はまだ新しいように見える。

門扉横にあるインターホンを押すと、「どちら様ですか？」という女性の声がした。

「胡桃沢です」インターホンに顔を近づけ応答した。

「門を入れて階段を上がってください」

言われたとおり門扉を手で押し開け建物の外階段を上がると、二階にある玄関の前にスウェットトレーナー姿の宮坂が立っていた。宮坂とはクラスも一緒になったこともなく、まったくといっていいほど話したことすらない。中学のときは成績の上位を宮坂と競い合った。胡桃沢は宮坂を目の前にして、自分でもなぜ宮坂に連絡を取り、今日会う約束をしたのかよく分からなかった。宮坂に訊ける話は由香里から訊けることと殆ど変わらないだろう。宮坂自身よりも、彼の父親の話を知りたかったのかもしれない。

「今晚は、家まで押しかけてしまって申し訳ありません」

「どうぞ上がって下さい」

玄関の扉を開けると、そこにはかなり広い空間が広がっていた。吹き抜けになった三階の天井からは、洒落た形のシャンデリアが下がっている。外観の形状は薄暗くはつきり判らなかったが、素人目にもかなりお金が掛かっているような印象を受けた。玄関で靴を脱ぎ接客用のスリッパに履き替えると、宮坂の後をついて行った。玄関から一番近い扉を開けると、そこは二十畳以上あるのではないかと思われる応接間があった。おそらく多恵の住まいはこの応接間にすべて納まってしまおうであろう。

最初に訪ねた多恵のアパートは、六畳と三畳だけの狭い住まいだった。それに比べればここは豪華で大きな家だ。子供のときよくやった陣地取りゲームのように、大きい陣地を取った者はどんどん陣地が大きくなり、小さい陣地の者はやがて大きな陣地の者にすべてを取られてしまう。そのようなことに考えを巡らせていると、ふと学生時代旅行したエジプトのことが頭を掠めた。

胡桃沢は大学時代どうしてもピラミッドが見たくて、エジプトに旅行したことがある。飛行機でカイロに着くと、先ずカイロ市内にある博物館でツタンカーメンのマスクを見学した。その後バスに乗りギザに向かう。わずかな距離を走ると、町並みの屋根の上に大きな三角形の造形物が蜃気楼のように浮かんでくる。ここに来るまでピラミッドは、砂漠のど真ん中にあると思っていたため、町からあまりにも近い距離にピラミッドがあったので、少々拍子抜けしたのを今でも憶えている。自分のイメージの中では、砂漠を何時間も車で走ったところに、ピラミッドはあると思っていた。それでも間近で見るピラミッドは威厳があり壮大だった。ツタンカーメンのマスクにしても、ギザのピラミッドにしても、見ていると魂が吸い取られるのではないかと思えるほどの感動を強いられる。

このツアーは最初、ホリデーインに宿泊する予定だったが、二日前に厨房から小火が出て、急遽ピラミッドからかなり離れた安いホテルに変えられた。添乗員からここら辺は、あまり治安が良くないので外出は控えるように注意を受けていた。しかし好奇心の強い胡桃沢たち学生数人は、ここら辺を散策することにした。ホテルを出て少し歩くと、七・八人の小さな子供たちが彼等に近づいてきた。身にまとっている服はみすぼらしく汚れていて、日本の子供たちが着ている服とは明らかに違っている。子供たちの半分は裸足だった。一つ一つの建物の大きさは小さく、地震が来れば直ぐにも崩壊しそうな造りだった。野良犬が歩き回り砂漠が近いせいか、町全体が誇りっぽい。そこはまさしくスラムだった。そんな中であつても子供たちの目は皆輝いている。日本の子供たちの目より生き生きしていた。日本の子供たちは将来のことを心配して塾に通わされる。夕方電車に乗るとこれから塾に行くのか、帰ってきたのか、定かでないものの、子供たちの顔は明らかに疲れていた。

日本人は明日のために頑張って勉強し働く。今辛くても未来に希望が持てれば我慢できる。将来沢山お金を貰える仕事に就きたいから。いずれは車や家が欲しいから、そのための努力は惜しまない。教育にはとことんお金をかける。それはすべて将来のためである。しかしここにいる子供たちは将来のことを考えているのだろうか。胡桃沢の目には今を精一杯生きてるように映った。

もう過ぎ去ってしまった過去のことを悔やんだり、未来や将来のことを心配したり不安に思うよりも、今、今日を大切に生きることが重要なのだという、ブッタの教えが頭を掠めた。明日は戦争かクーデターが起こるかもしれない。お父さんやお母さんも明日になればいないかもしれない。それでも彼等はその日その日を一生懸命生きている。

戦後日本の子供たちが進駐軍のジープに「ギブミーチョコレート」と言っついていくように、エジプトの子供たちも胡桃沢たちの後をどこまでもついてきた。キャメルカラーの世界にあって、子供たちだけがバラ色に輝いて見えた。なぜかその子供たちと鬼頭の母親が重なったのだ。片やその日その日を一杯生きている子供たちと、片やもうすっかり生きる気力を無くしてしまった老女が何で重なったのか、胡桃沢自身にも分からなかった。

宮坂の家と多恵のアパートを比較して、どちらが人として生きていく上で重要なのか、そんなどうでもいいことを考えている自分が不思議でならなかった。鬼頭は貧しい故にあのような人間になってしまったのか、人格形成されていく上で、環境は大いに影響することは間違いないが、それだけが原因とは考えられない。何か他にも原因があるような気がした。

「どうぞ、座って下さい」

促された椅子はクリーム色で総革張りの豪華なソファだった。大きなサイドボードには、舶来物の酒がずらりと並んでいる。宮坂はサイドボード上にあるコードレスホンを手に取り「コーヒーでいいですか？」と胡桃沢に確認した。「済みません。いただきます」胡桃沢が返答すると、宮坂はコードレスホンに向かい「コーヒー二つ持ってきてくれ」と言いそれを元に戻すと胡桃沢の向いに座った。

「胡桃沢君とはこうして面と向かって話すのは初めてですね。貴方のお父様には在職中色々お世話になりました」

「え……」胡桃沢は声を詰まらせた。

「私は信大を卒業すると、地元の七十三銀行に就職しました。そのとき胡桃沢君のお父様は、屋代支店の支店長をなされていました。そこで私は銀行員のいろはを教わりました。その頃お父様は君が銀行員ではなく、医者を選んだとって本当に嬉しそうでした。私が銀行に就職したときは、世の中はバブルになる前でしたが、やがてそれが弾け七十三銀行も少なからずその影響を受けました」

こんこんとノックをする音がすると、宮坂の妻と思しき女性が、お盆にコーヒーカップを載せ運んできた。「どうぞゆっくりして行って下さい」コーヒーカップとソーサーを大理石のテーブルに置くと、女性は直ぐに応接間を出て行った。部屋にはコーヒーのほろ苦い香りが広がった。

胡桃沢が医者になったことを、他人に嬉しそうに話していたことは知らなかった。そんな高貴を想像することができなかった。

「父と同じ銀行にいたんですか。全然知りませんでした」

高貴から胡桃沢の同学年の男子が、同じ支店にいることは全然聞いていなかった。目の前にいるこの男が、高貴と同じ職場にいたことに驚きを覚えた。ただ高貴の性格からして、そのようなことがたとえ分かっても、まず口には出さなかったに違いない。

「今父の工場も景気が悪くなり、父と叔父だけで細々とやっています。父も歳ですし、叔父の子

供も自立したので、近々工場を閉めようと思っています。隣の資材置き場は二年前に潰してコンビニにしました。そこは今弟がやっていますが、収入はそちらのほうが工場より多いくらいです。父もここら辺で楽にしてやらないと。ところで胡桃沢君のお父様はお元気ですか？」

屋代駅から十八号線を走っているとコンビニがやたらと目についた。工場の今後の経営に関して、銀行員である宮坂が言うのだから厳しいのは間違いないだろう。それよりも宮坂は果たして、厳しかった頃の高貴を知っているのだろうか。

「父は元気です。今は孫と遊ぶのが唯一の楽しみみたいです」

「お父様はあの銀行ではかなりの切れ者で、敵も多かったと思います。仕事ができる人というのは、とかく敵を作りやすいのかもしれませんが。バブルが弾けてからは、ああいう方は少なくなりました」

宮坂は人を見る目が確かなように感じた。普通初対面の者に、会社での家族の本当の姿は語らないものだ。あれほど自分勝手な高貴だったのだから、おそらく銀行でも相当ワンマンだったに違いない。高貴の下で新入社員の宮坂は、さぞかし苦労したことだろう。

この後宮坂は自分がなぜ銀行員になったのかを話してくれた。中小企業の社長を父に持つ宮坂の家には、絶えず銀行員が出入りしていた。そのとき宮坂の父は銀行員に頭を何回も下げた。そして銀行員が帰った後は、決まって気が抜けたようにがっくりと椅子に腰を下ろす。その憔悴しきった父を見るのが辛かった。それなら自分が銀行員になって、父に安心して仕事に専念してもらいたいと思った。しかし自分が銀行員になって、父以上に他人に対して何回も頭を下げなければならぬことになった。それは宮坂にとって少々誤算だったようだ。

「鬼頭のことなんだけど妻に訊くと、とてもおとなしい子だったと言っていたけど、本当のところどうだったんだろう」

宮坂にも電話で前もって、胡桃沢が精神科医をやっていて、何とか鬼頭の更生に役立てないものかと説明しておいた。ただどうして鬼頭を救わねばならないのか、鬼頭と由香里と胡桃沢の関係はどんなことがあっても話すわけにいかず、そんなことになぜ胡桃沢が首を突っ込むのか、頭の良い宮坂なら不自然に思うに違いない。それで胡桃沢は、鬼頭的人格は精神科医として貴重なデータも取れるし、彼の今後には必ず役に立つということを説明した。たとえとして永山則夫を取り上げた。永山則夫のように貧しいから学問を学べず、それ故に犯罪に走ってしまう。家庭環境が悪いと犯罪に走りやすい。そのようなことを胡桃沢自身真剣に考えていたわけではなかったが、宮坂を納得させるために、一つのモデルケースとしては有効だと考えた。

予め宮坂の父親にも、鬼頭の父や家庭のことを訊いてもらうように頼んでおいた。

「鬼頭はとてもおとなしい子だったと思う。というよりも彼とは一緒のクラスだったというだけで、殆ど記憶がないというのが正直なところなのだが。彼はこの直ぐ近くの市営住宅に住んでいた。今ではそこも取り壊され違う建物が建っている。以前あの辺は古い市営住宅が何軒もあって、私も子供のときはその子供たちとよく遊んだが、その中に彼はいなかった。父の工場は小さいながらも、働いている人たちとは、家族ぐるみのお付き合いをさせてもらって、よく旅行にも行ったけど、彼が来たことは一度もなかったように記憶している。私自身は彼が担任の若林先生に叩かれるところを、直接見ていないので何とも言えないが、あれから彼が急に変わったとは私自身は感じていない。ただあの後暫くして彼の父親が、女を作ってどこかへ行ってしまったため、彼の家族もその市営住宅を引払い、違うところに引っ越して行った。彼の父親はうちの工場に十年くらいいたみたいだけど、仕事は真面目でよく働いてくれたと父は言っていたよ。しかし同僚と楽しく話している姿は殆どなかったらしい。満州からの引揚者で、かなり苦労したみたいで、保険外交の女性と蒸発したのは、真面目すぎた男がちょっと甘い蜜を舐めたため、その虜になってしまったんじゃないかと、父は昔のことを思い出して語ってくれた。私が川に落ちた翌日鬼頭を連れて私の父に謝りに来たけど、私が父に鬼頭は帰りが一緒だっただけで、彼にはまったく責任がないと説明した。父も鬼頭の父親にそのことを話したと言っていたけど……」

「今日最初に鬼頭のお母さんに会ってきたのだが、お母さんは君が川に落ちたことは、自分の息子がすべて悪いと思っていたようだ。原因は山岸にあったことすら知らなかったと言っていたよ」

鬼頭の父は事実を知っても、何も手を打とうとしなかった。彼にとっては子供の気持ちよりも、自分の会社での立場のほうが大切だったのだろう。それなのに女のためにあっさり仕事を捨ててしまう。そんな中途半端な男が鬼頭の父親だったのかと思うと、何か遣る瀬無い気持ちになった。

「鬼頭の父親は、鬼頭にも、鬼頭の母親にも、何も説明しなかったんだね。私も君から電話を貰って、あのことが彼の人生を大きく変えたことを聞かされ凄く驚いた。山岸も直ぐに謝りに来てくれたし、私自身あれは子供の単なる悪ふざけだったと思い、大して気にも留めなかったが、君の話を聞いてそこまで拗れていたなんて思ってもみなかったよ。若林先生は確かに厳しい先生だったが、そんなに酷い先生には見えなかった。私がもしあの日休まず学校に行っていたら、今の鬼頭は存在しなかっただろうか？」

人の歴史にもしは存在しない。しかしもし宮坂があの日学校に登校していたらどうなっていたのだろう。胡桃沢は銀行員として宮坂のように働いていたのか。

「君が言うようにあの一件がなかったら、それぞれの人生がまったく違った方向に向かっていたかもしれない。でも鬼頭の心の中には、少なからずあのような事件を起こしてしまう要因はあったと思う」

胡桃沢は目の前にあるカップを手に取り、コーヒーを一口口に含んだ。少し冷めていたが何と

もいえない香が口から鼻に貫けた。もしやこれは「とても美味しいコーヒーだね。もしかしてブルーマウンテン？」

「よく分ったね。僕は昔からコーヒーが好きで、やっぱりコーヒーはブルーマウンテンが一番だと思うよ」

宮坂は胡桃沢がコーヒーの味に気がついてくれて嬉しそうだった。もう少し早く気がつけば、あの高級な味を満喫することができたのにとすると、少々もったいないことをしたと後悔した。

二人とも子供のときは話したことすらなかったのに、鬼頭という媒体を通して昔を思い出している。一週間前の病院での出来事は思い出せなくても、子供の頃遊んだ記憶は今でも鮮明に思い出することができる。ただ胡桃沢にとって子供時代の思い出は、振り返っても決して楽しかったように思えなかった。それは高貴が自分を支配していたからに他ならない。

「胡桃沢君から電話をもらって、子供の頃のことを色々思い出していると、ふとある映画のことを思い出したんだ。君はスタンド・バイ・ミーという映画を観たことがあるかい？」

「ああ。とてもいい映画だったね」

このスタンド・バイ・ミーの映画で、主人公ゴードイの親友だったクリスが、弁護士になり刺殺されたことを新聞で知る。ゴードイが少年時代を振り返り、その中でクリスが、ミルク代を盗んだのは自分だとゴードイに告白するシーンがある。クリスはそれが悪いことだと気づきそっと返しておいたら、何と担任の教師がそれを着服しクリスに罪を擦りつけた。少年のクリスが涙ながらに語るシーンが、理不尽にも担任教師に殴られ、おそらく悔しかったであろう鬼頭の少年時代と重なり胸が痛くなった。

「あの映画を観て思ったんだけど、子供のときの思い出というものはいつまでも覚えている。用水で魚を捕ったことや、どんど焼きで餅を焼いて食べたこと。雪の日かまくらを作ったこと。雪が手袋に染みてきて、冷たかった感触までしっかり覚えている。また友人と喧嘩して泣いて悔しかったこと。つまらないことでもはっきり憶えている。そのときはそんなに楽しいと思ってやっているわけではないのに。大人になって思い返してみると懐かしさも伴って、子供のときは本当に楽しかったと思えてしまう。なぜなんだろう？」

宮坂が胡桃沢の思っていたことを口にしたため、胡桃沢自身少々驚いた。宮坂の言うことは尤もだ。大人になるにつれ楽しいと思える時間が少なくなっていく。ただ宮坂がなぜこのような質問を胡桃沢にしてきたのか、その真意は定かではないものの、彼にとっては子供のときが本当に楽しかったのだろう。裏を返せば今の仕事がとても大変なのかもしれない。鬼頭に関してあまり情報は得られなかった。だからとってはいさよならという訳にもいかず、少し宮坂の話に付き合うことにした。

「子供のときは、その場そのときが楽しければそれでいい。悪く言えば目先のことしか見えていない。どんな不可能と思える夢でも持つことができる。しかし大人になれば生活していかなければならないし、家族ができれば、それを守っていかなければならない。子供のときと違って、現実の世界で生きていかなければならない。それから時間というものは、すべての者へ平等に与えられているとは限らない。子どものとき一年がとても長く感じなかったかい。人間は成長するにしたがって時間を感じる感覚が短くなる。又楽しいときは時間が短く感じるし、苦しいときや辛い

ときは時間が長く感じられる。同じ一時間でも環境や場所によって感じ方がそれぞれ違う。アイシュタインの相対性理論も同じような考えだと思うよ」

時間の感覚は、代謝が関係していると考えられる。大人と子供の時間の感じ方が違うのは、代謝の違いからきているのではなかろうか。

「私が子供頃は直ぐその東山に探検に行ったり、農業用水で魚を捕まえたり、飛んだり跳ねたりして、その日その日がそれなりに充実していたけど、今の子供は家に帰ればゲームばかりしてあまり外で遊ばないもんな。それも黙っていれば、二時間でも、三時間でも、平気でゲームをやっている。勉強をしなさいというと、三十分も机に座ってられない。それらを目の当たりにすると、確かに楽しいときの時間が進むのは、早いんだなと改めて感じる。君はどうか知らないけど勉強にしても、塾なんか行かなくても、学校でちゃんと授業を聞いていけば、そんなに闇雲に勉強しなくても、ある程度はその内容が記憶に残っていた。それなのに最近、私も一日に何件も営業に回るけど、なかなかお客様の顔を覚えられない。しかし子供のときに見たもの感じたことは、今でもはっきり思い出すことができる。自慢じゃないけど昔見ていたマンガの主題歌は今でも殆ど歌えるよ。それだけ子供の感情は豊かでデリケートだということだろうか。そんな子供のときに受けた心の傷は、大人になっても取り除くことができないのかもしれないね」

小さな子供にとって大人や友達の何気ない言動が、その子の心を大きく傷付けることがある。山岸が何気なく水面に投げた石が、波紋となって広がっていく。最初はほんの小さな波紋だったが、やがて大きな波となってあらゆるものを飲み込んでしまう。

今日の一日は胡桃沢にとって、とても有意義な一日だった。しかし肝心なことは本人に会わなければ、彼の気持ちを動かすことはできない。鬼頭が胡桃沢に会っても素直に心を開いてくれるとは思えないし、寧ろ胡桃沢の姿を見たら、鬼頭は完全に心を閉ざしてしまっただろう。どうしたらいいのか。鬼頭の心は墨のように黒く、裁判所の裁判官の法衣のように、何ものにも染まらなると主張しているようにさえ感じ取れる。そんな闇に閉ざされた心に光を与えるのは不可能に思えた。

胡桃沢は宮坂の家を出ると、自分の実家のある場所まで歩くことにした。そこには宮坂との話にも上った高貴がいる。今は独裁者のようなふてぶてしさはなく、穏やかな年寄りになっていた。

高貴は胡桃沢を銀行員にさせたいと考えていた。しかし胡桃沢は高貴の意向に従わず、カトリック系の学校へ進んだ。高校時代は神父になろうと思い聖書を真剣に勉強した。しかしキリスト教は、本来自分が目指すものとは掛け離れているのではないかと悩み始める。そんな最中手塚治虫の『きりひと讃歌』と『奇子』を読み何か分からないものの、考えさせられるものがあった。手塚漫画は人の心の問題を扱ったものが多い。小学校低学年だったと思うが、夏休み昼中テレビで『どろろ』というマンガが放映されていた。高貴がいれば絶対見せてもらえない番組だった。胡桃沢はこのマンガを観て幼いながらに、人間の中にある業というものを学んだ。この『どろろ』の物語は何年経っても頭から離れなかった。後に高校に入って『ファースト』を読んで『どろろ』の物語と重なった。また友人の家で『ブラックジャック』や『ザ・クレーター』の手塚漫画を読ませてもらい、そこには心に訴える何かがあった。しかし高貴の手前自分の家では、漫画を読むことは許されなかった。高貴にとってマンガは、低俗な者が見るものという認識しか持っていない。高貴の下から離れ、名古屋に出て読みたかった手塚漫画を古本屋で買って思い切り読

んだ。それは漫画という枠にとらわれず、哲学書にも匹敵するほど内容が濃いものだった。そんな中で『ブッタ』を読んだ。その物語は胡桃沢がキリスト教から離れる、大きな要因となることが描かれていた。漫画の中でブッタは「人間の心の中にこそ神がいる」と言っている。それこそ胡桃沢の探し求めていた答えだった。それはキリスト教とは明らかに異なる考え方で、胡桃沢が由香里の中に神を感じたことも、どちらかというとい仏教の教えにより近いものに思えた。キリスト教をあれほど勉強した胡桃沢が、日本のマンガを読んでキリスト教と決別してしまう。しかしそれはただのマンガではなかった。そこには人生の指針になることが書かれていた。

実家まで少し距離もあり多少寒かったが、その寒さを忘れてしまうくらい鬼頭のこと頭が一杯だった。更埴の杏はまだ蕾すらなく、信濃の春はまだだいぶ先のように感じられた。

教誨師

1

里中は二週間に一回のペースで鬼頭と面会した。当初胡桃沢に頼まれたものの鬼頭に会うのは正直気が重かった。神を信じる者を救うのが神父の仕事だが、そうでない者を救うのもまた神父の仕事である。しかし信じていない者を信じさせることが、どれほど大変か里中自身、身に沁みて理解しているつもりだった。それに加え鬼頭は神を信じるとか信じないとかそれ以前の問題で、人としての心をどこかに置き忘れてきたような人物だった。人であれば当然持っているはずの、自分の犯した過ちを認め、罪を悔い改めるという概念を持ち合わせていない。所謂改悛の情がないので、それを自らの行いを反省させ、清い心で神の下へ送り出してあげなければならない。それこそが神父の本来の仕事なのだが、それは人類が始めて月に立ったことより困難な作業に思えてならなかった。

胡桃沢から鬼頭のことを色々訊いて最初に面会したとき、汚い言葉や罵声を浴びせられることを覚悟していた。私が神父である以上、どんな罵声や嘲笑にでも耐え忍ぶ心構えは常に持っている。ある意味で非常に身構えていたが、実際の鬼頭は犯した罪に反して、非常に落ち着いた穏やかな人物だった。それはある意味で掴みどころがないというか、何を考えているのか分からないということになるのだが。ハリネズミのように全身を武装し、自分の考えを相手に悟られないようにしているのではないかとすら感じられた。それも何回となく面会を重ねていくうちに、パズルのピースを一つ一つ嵌めていくように、徐々に鬼頭という人間の本質が見えてきた。

半年以上鬼頭と交友してはっきりしたことが一つある。鬼頭は母親の愛情に飢えていた。これはあくまで推測に過ぎないのだが。子供の頃弟に母親を取られてしまったと思い込んだ。それは兄弟のいるものなら誰しも感じるものだが、胡桃沢に訊いた鬼頭の母親の話では、自分の子供に対して殆ど母親の愛情を注がなかったと。それが即ち鬼頭の人格形成に大きく影響したのではないか。そして父親の存在。そう胡桃沢は分析した。自分には最初から父親はいないものと認識していたに違いない。逆に弟は父親と母親の愛情を命一杯受け、そのギャップが他人に対して心を閉ざし、憎しみだけを募らせていく結果となったのではないだろうか。

鬼頭が殺害しているのはいずれも女性ばかりで、女性に母親の存在を求めたのではないか。それを受け入れてもらえず殺害してしまった。今の若い女性にしてみれば、マザーコンプレックスを持つ男は、尤も受け入れにくい存在に違いない。社会で女性の立場は確立され、自立し強くなっていく一方、男性は情けないほど軟弱になっている。母性愛を女性に求めたにも拘らず、今の女性は自分の思い描いていた女性像とかなり掛け離れていた。それが女性への憎しみに変わっていったとは考えられないだろうか。

鬼頭は執念深く途轍もなく悪党だが、とても頭のいい男だと胡桃沢は分析したが、私も本人と面会してそれは感じる。先輩の神父の中には、犯罪者は得てして自分のことだけを話し、人の話に耳を貸さないという傾向があると教えてくれた。しかし鬼頭に関しては里中の話を冷静に聞き、尚且つ自分のことも他人ごとのように淡々と語る。非常に沢山の本も読んでいるし、映画も好きでキリスト教のこともよく理解しているようだ。中途半端に信仰心を持つより、宗教は自分

にとって本当に必要なのかと、鬼頭なりに分析しているよう見受けられた。

ある日の面会時、鬼頭から刑が確定すると、親族しか面会ができなくなるため（平成十八年五月監獄法が改正され、新たに刑事施設及び受刑者の処遇等に関する法律が施行されたため、親族以外でも面会や手紙のやり取りができるようになった）里中に自分の教誨師になって欲しいと告げられた。本来教誨師は仏教なりキリスト教なり、その宗教を信仰している者に対して行われるものだが、鬼頭は自分以外の何者も信じていない。それでも鬼頭は里中を必要としてくれている。それは胡桃沢との約束が果たされていない現在、こちらからすれば願ってもないチャンスに他ならなかった。

鬼頭の申し出を受け、その後直ぐ拘置所の職員と話し、指導統括の宮尾看守長という人物に面接した。指導課は受刑者のレクリエーションや、習字、絵画などクラブ活動の講師の外部への要請、宗教教誨などの実施に伴う牧師や僧侶の手配、仮釈放における保護司や他の行政機関の窓口、刑務作業の作業依頼など、拘置所の業務の中でも部外者との対応が多く、常に忙しいポジションである。関東拘置所では既に教誨師は決まっただけで、急に里中が申し出ても、すんなり教誨師になれるというものではないらしい。「ただ鬼頭の場合社会的にも影響の大きい事件なだけに、本人の心情安定をはかる上でも、里中みたいな神父との交友は必要ですね」と宮尾は言ってくれた。多少時間は掛かるかもしれないが、宮尾の方から所長の方に上申ししてくれるという。そして現在関東拘置所の教誨師である飯干神父の方に、一言口添えして欲しいと頼まれた。

里中に教誨師として認可が通ったと、聖マリア教会に連絡が入ったのは、申請してから三ヶ月後のことだった。専属の教誨師になれば、一般面会のように一日十五分ということではなく、かなり長い時間、アクリル板を通してではなく直接鬼頭と話すことができる。通常教誨師である以上、神に祈りを捧げ聖書の話をするのだが、それは最初の十分程度でその後は殆ど世間話に講じていた。鬼頭の方でも教誨師の立場を良く心得ていて、信仰心がなくても神に祈るポーズだけはとってくれた。

里中には自分が教誨師になったことで、鬼頭にも一途の光が射したように思えた。なぜなら、人と話をしたいという欲求がある以上、人は人であることを心のどこかで願うものなのだ。悪魔に魂を売り渡してしまった者ならば、神の僕などと話そうとするはずがない。

鬼頭からその話を訊いたのは、教誨師になって一年以上が過ぎたときだった。関東拘置所は七階に仏教の教誨室、八階にキリスト教の教誨室があつて、鬼頭は八階の舎房に収容されていたため、居室から教誨室まではほんの僅かな距離を歩くだけですんだ。鬼頭は宮尾に連行され教誨室に入ってきた。八畳ほどの部屋には祭壇もあり、十字架が壁に掲げられている。行刑施設にあり、ここだけが異質な空間を保っていた。立会はずっと宮尾がついていた。最初祭壇に向かい祈りを捧げ聖書を読んで聞かせる。その後いつものように雑談が始まった。小さな机を挟んで椅子に座ると鬼頭は徐に話し始めた。

「神父さん俺が最初に女を殺す切っ掛けとなったのは、女に振られたからなんです。これは警察の自供でも言っていないし、取調官にはただ女を切り刻みたかったと述べていたので、今はじめて他人に話します」

鬼頭のその言葉に里中は非常に興味をそそられた。たとえ聖人君子であっても、いつ如何なる

ときも、感情を抑え大らかでいられる訳ではない。妬みや嫉妬、嫌悪感など、口には出せないことも、根底に持っているものである。そのようなものをすべて無くしてしまえば、もはやその者は人間ではないだろう。里中の根底にも野次馬的な考えが存在していた。

「俺は最初に殺した女が、好きだったんです」

今日まで鬼頭とは何十回と面会を重ねてきたが、鬼頭の口から人を好きだったと、告白されたのは初めてだった。どんな人間であれ人を好きになることは間違いない。ただそれが鬼頭の口から発せられたことは今までにない驚きだった。

「その女は恵というんですけどね。このときは俺も仕事を真面目にしている、いつかはこの女と所帯を持とうと考えていた時期でした。結構いい仲になったんですが、俺が思っているのとは裏腹に、恵の方は俺のことを、単なる都合のいい友達ぐらいにしか思っていなかったようです」

「どうして恵さんの気持ちが分かったのですか？」

鬼頭がこのようなことを私に話してくれたことは凄く嬉しかったが、その反面ひどく違和感を覚えた。今までの鬼頭だったら、自分の心中を他人に見せたりはしない。ここに来て明らかに鬼頭にも心の変化が表れてきている。そう思わずにいられなかった。

「これは俺が捕まってから分かったんですが、どうも恵には複数の男がいたみたいです。恵と付き合っているとき、彼氏は自分だけとっていました。それでも恵は本当に可愛い女でした。俺もそのときは彼女といるときが一番楽しかった。俺は今まで他人と一緒にいて楽しいと思ったのは、この女が最初で最後だと思っています。その後何人かの女とセックスしたけど、その女たちには何の感情も湧いてこなかった」

里中には鬼頭が事件の真相を語る上で、少し照れているような感じを受けた。いつも他人に対して、自分が強い人間と見られていたい男にしては珍しい情況だった。それは鬼頭が里中に初めて見せた、人間らしい感情だったに違いない。鬼頭の穏やかな表情を鏡で、本人に見せてあげたかった。（君の顔はこんな穏やかな顔をしているのだよ）と。

「それは本当に素晴らしいことだと思います。人を愛することに理由なんて要りません。でもそんなに好きだった女性を、何で殺めてしまったのですか？」

それは里中でなくても誰でも思うことだ。恵を殺害した理由は、どの雑誌を読んでも書かれていなかった。

「神父さんそこなんだよ、重要なところは。俺がこのように死刑囚になったのは、他でもないこの女の御陰なんだ。神父さんは自分が罪を犯したことを、他人のせいにしてはいけないと仰るかもしれないが、俺も恵と出会うまでは、何も問題を起こさず普通に生活していた。今の若いフリーターより、よほど真面目に働いていたと思う。俺は働くことに対しては何の躊躇いも苦痛もなかった。中学のときから新聞配達をやっていたが、自分の食い扱いは自分で稼ぐのは当然だと思っている。こう見えても人殺し意外は、盗人も薬もやったことがないんですよ。小学校、中学校、高校と校則も破ったことがないくらいですから」

この世に殺人より重い罪があるとでもいうのか。鬼頭が中学時代由香里さんを強姦し、そのことで胡桃沢の人生が大きく変わってしまったことを、里中が知っていたなんて知る由もなかったであろう。

鬼頭と最初に会ったときから一貫して変わらない思いがある。マスコミや胡桃沢から聞かされて

いた印象とは違い、随分と穏やかな男だという印象を受けた。今の鬼頭を見ている限り、本当にこの男が女性を何人も殺害した凶暴な殺人鬼には見えなかった。ただ自分の周りにバリヤーを張り、ある一線を越えられないように、構えているところはあったが。

「恵さんは貴方にとって、とても大切な人だったのですね」

「確かに俺は恵に夢中だった。俺にとっては初めての女だった。でもね神父さん、自分がいくら好きになっても、相手が必ず自分を好きになってくれるとは限らないですよ」

「恵さんは貴方に何か言われたのですか？」

「俺は恵とセックスしたとき、偶然避妊具を着けずにやってしまったため、恵は文句を言ってきた。それで彼女に御免と謝ったんだ。そして俺も男だし彼女のことが好きだったから、もし子供ができれば結婚しようと言った。そしたら恵は何て言ったと思います？」

その後彼女が言った言葉は大体想像がついた。昔ならいざ知らず、最近の女性は結婚することが人生の目的とは考えていないだろう。たとえ男と別れてもそれなりに生きていける。別れた後も未練たっぷりに後を追うのは、寧ろ男の方ではないだろうか。その言葉が大いに鬼頭を傷付けたことは想像に難くない。それでも里中は正直に自分の考えを言えなかった。

「分かりません」

「恵は貴方なんかとは結婚したくない。貴方の子供なんて生みたくなかったんだ。俺は気がついたら恵の首を絞めていた。それ以来俺にとって女は、憎しみの対象以外の何者でもなかった」

そのとき鬼頭の眼光は、今まで目にしたことがないほど鋭いものだった。

人は鬼頭に限らず自分の過ちを他に転化したがる傾向がある。

「恵さんの言葉はきつかったかもしれませんが、今はまだ若いしやりたいこともあるので、直ぐには結婚できないと言いたかったのかもしれないよ」

「それは違うよ神父さん。車の中は暗くてあいつの表情は読み取れなかったが、明らかに自分ももっといい男と結婚できるのに、何であんたなんかと結婚しなきゃいけないの、とでも言いたそうな感じだった。俺は学も無ければ金も無いけど、そこら辺の馬鹿な犯罪者とは違う。自分が社会で今どの位置にいるのかということは、子供のときから分かっていた。凄く勉強ができればまた違った道が開けたかもしれないが、自分の社会での位置というのは、努力してもどうにもならないこともあると思う。それに対して俺は社会が悪いなんて少しも思っちゃいない。金もそれほど欲しいと思わないし、金を持っている奴はそれなりに努力している。俺がもし女だったら、俺みたいな社会の低下層の人間と一緒にしろなんて絶対に思わない。恵は短大に行っていたけど、自分が短大まで行ったなら相手の男はせめて大学を出ていなければと思うのが当然でしょう。後から冷静になって考えれば気づくことだが、そのときは俺もすっかりその気になってしまって、思わず普段言わないことを口に出してしまった」

「でもそれは恵さんが亡くなってしまったため、貴方の考えているとおりののか分かりませんよ。人を好きになり家庭を持つことと、学歴はまったく関係ないことです。確かに以前三高なんていわれた時代もありましたが、バブルが崩壊して日本人が皆、お金よりもっと大切なものがあるのではないかと感じたはずですよ」

里中は自分が神父だからなのか、それとも神父という使命がなくてもそのように考えたのか、人が生きていく上でお金は確かに必要に違いないが、それでも食べていけるだけの少しのお金があればいいと思っている。学歴にしても勉強が好きであれば、上の学校へ行って勉強すればいいし、そうでなければ働いたほうが本人のためでもあり、社会のためでもある。

今の時代たとえ学校に行かなくても、ある程度は知識を身につけることができる。では信仰はどうだろう。何が自分にあった宗教か、自由に選択することができる。日本で生まれれば、他人から信仰を強要されることはまずない。

江戸時代幕府からキリストンであるが故に弾圧を受け、彼等たちは隠れるように洞窟に十字架を掲げひたすら神を信じ祈った。ヨーロッパでは教会はどれもその当時の最高の技術を駆使し立派な建物が建っている。しかし本当に神を信仰するのであれば、たとえ洞窟でも、馬小屋でも、一向に構わないのではないだろうか。大きな立派な教会で神に祈るのと洞窟で神に祈るのとで、どれほどの違いがあるというのか。カトリックの神父である自分は寧ろ、プロテスタントの教えの方が、キリストの教えにより近いように感じてしまう。

人に階層を作ったのは人であって、神の前ではどんな人であれ皆平等に扱われる。人は誰でも母親から生まれ出たときは、裸で何一つ身に着けていない。しかしほんの少し時間が経つと産衣を着せられる。その産衣もシルクで肌触りのよい物から、粗末なものまで色々である。このとき既に子供にも格差が生じている。この世は確かに生まれた場所と環境で、その子の運命というものが、ある程度決定されてしまうのも事実には違いない。その後本人の努力により、上に上ることも下に落ちていくこともできるが、それでも親の存在はその子の人生に大きく影響する。目の前にいるこの男が、自分自身を卑下するようになったのはいつ頃のことなのか。貧しいものとそうでない者、劣等感が鬼頭の犯罪の引き金になったのではないだろうか。以前胡桃沢と話をしたとき「金持ちは精神病になりにくい」と彼は言った。それはどんな意味なのだろう。「金持ち喧嘩せず」の言葉どうり、経済力があれば犯罪に手を染めることも少なくなるということか。

「神父さん恵と付き合いだした切っ掛けは、彼女の方からモーションを掛けてきたんです。あのときは本当に嬉しかった」

鬼頭目はいつもと明らかに違っていた。今までの氷のような冷たい眼差しではなく、非常に穏やかな目をしていて。なぜ急に今まで誰にも語らなかつた心の闇を、他人に語りだしたのは分からなかつたが、小さな前進であることは間違いない。

「貴方も、もう少し待って見たらよかったです。そうすれば恵さんに対する貴方の気持ちも、理解してもらえたと思います。貴方には綺麗ごとと聞こえるかもしれませんが、愛情は決してお金や地位や名誉で買えるものではありません。愛しい人を思う気持ちはどんなにお金を積まれても、変わるものではない筈です」

気休めに聞こえたかもしれないが、これだけは鬼頭に伝えたかつた。

「神父さん十二使徒の一人ユダは、銀貨三十枚でイエスを祭司長たちに売り渡しましたよね。それはやはりお金のためだったのですか？」

鬼頭は聖書を読んでいなければ解らないことを、時折口にするようになっていた。里中が確認するまでもなく鬼頭は聖書を読んでいるようで、それは本当に嬉しいことだった。

「私が思うにユダは、お金が欲しいから主イエス・キリストを裏切つたのではなく、主を試し

たかったんだと思います。主の力がどのくらいなのか、主は本当に神なのか、主を信じられなくなってきたのかもかもしれません。いやむしろ主を信じたかったから、あのようなことをしたのではないのでしょうか。こう考えてみて下さい。もしユダがいなければキリスト教は、これほど人々に浸透しなかったかも知れません。主はすべて分かっていたのだと思います。そしてユダは少しでも主を疑った自分を恥、自ら命を絶ったのです。ユダの苦しみはある意味でイエス以上だったかも知れません。ユダは十二使徒の中で一番イエスを理解していた。いや理解しようとしていたといった方がいいでしょう。だから何もしないイエスが歯痒かった。許せなかったのだと思います。私たちはユダだけがイエスを裏切ったと思いがちですが、厳密に言えばペテロたちもイエスを裏切っていたのです。主は愛を感じ取って欲しかったにも拘らず、ペテロをはじめその当時の人々は、イスラエルを救ってくれる救世主を望んでいました。それは心ではなく現実的なものであったため、何もしようとしないうイエスが信じられなくなったのでしょうか。しかしペテロたちもイエスの死で、人が生きていく上で、本当は何が一番大切かを理解したはずです。人は過ちや失敗を繰り返し初めて成長できるのです」

「すべてイエス・キリストが、自分が有名になるために仕組んだというのですか？」

「すべてはその人の運命なのです。主は単に自分を信じて欲しかっただけだと思います。それは今私たちが思っているような奇跡を起こす神ではなく、もっと精神的なものかも知れません。ユダはおそらく主が神である証拠を、何かの形で知ったのではないのでしょうか」

「キリスト教がこれだけ世界に普及したということは、キリストにはそれだけ人を惹きつける、カリスマがあっただろうということは俺でも分かります。ただキリストが起こしたとされる奇跡は眉唾物で、後世の人がイエス・キリストをより偉大にするために、作り上げた偶像のような気がするのですが。たとえば受胎告知ですが、天使がマリアに貴女のお腹に神の子が宿りましたなんて言って、処女のままイエスを産むことになるけど、そんなことは生物学的にあり得ないことでしょう。俺にはマリアはどこかで強姦でもされたか、或いは許婚がいながら、違う男とエッチをしたとしか考えられない。俺がヨセフなら絶対マリアを許さなかったと思いますが」

何と罰当たりなことを言うのだろうと思いつつ、自分も嘗て子供のとき神父様に科学で説明できないことを、何でどうしてと詰問したことがある。時間が経過し科学が発達すればするほど、宗教には必ず矛盾するところが浮き出てくる。宗教はたとえ絵空ごとのように解釈されても、人がよりよき道へ進むための道標なのだ。世の中にはDNA遺伝子を二つ持っている人も現実にいるし、科学だけでは到底説明できないことが沢山存在する。主イエス・キリストがこの世に誕生されたことも、宇宙に地球が誕生したように、奇跡に他ならないのではないだろうか。

「貴方は私が最初に聖書と一緒に差し入れた、『イエスの生涯』という本を読みましたか？」

「いえ途中で読むのをやめました」

鬼頭がどこまで読んでいたかは不明だが、この本の中に私たちは、イエスが実際に奇跡を行なったか否かという通俗的な疑問よりも、人々がイエスに愛ではなく、奇跡しか求めなかったという悲しい結末を想像させると書かれている。そしてその望みが叶えられなかったとき、人々はイエスに対して激しく怒った。人は得てして目に見えるものしか信用しない。病気の者を治したり、死んだ人を生き返らせたり、しかしそれは本当の奇跡ではない。どの時代でも人と変わった病

気にかかる、差別を受け隔離されたり、住んでいる場所から追放されたり、人間的扱いを受けない。そんな病気の人たちもイエスに出会った瞬間、愛を感じ心の苦しみから解放され、生きていて良かったと思えたとき、それこそ病気が完治されたときよりも、もっとその人には奇跡に感じたに違いない。死んだ人も肉体的に死んでも人々の思い出となって生き続ければ、それは生き返った以上に、虐げられた人たちには大切なことだったのではないだろうか。人は誰からも見向きもされず、必要ないと思われたとき、自分が生きている証を見失ってしまう。しかしイエスのような者が現れ、自分の存在を認めてもらったとき、どれほど嬉しかったことか想像に難くない。人は自分の存在を忘れられていくのが一番辛く悲しいのだ。私はこの『イエスの生涯』を読んでイエスを固定概念で捉えず、百人いれば百人の捉え方があり、それぞれのキリスト像があってもいいのではないかとすら感じ、著者の洞察力に感激したことを今でもはっきり憶えている。

「主イエス・キリストが行なった奇跡は、現代人の私たちにとっては奇跡ではないかもしれませんが。私は主イエス・キリストはそれだけ人を惹きつける魅力があったのだと思います。花を見たら殆どの方が美しいと思うように、イエス・キリストもまた人の心に訴える何かを持っていたのではないのでしょうか。主イエス・キリストを一度でも見た人は、生涯忘れることができない。そんな存在になるのです」

主の教えは愛すること、信じることがすべてなのだが、これはいくら鬼頭に説明しても理解してもらえなかった。しかし私は誰からも悪魔のように恐れられている、目の前にいるこの男でも、人の愛を求めていたのだと感じられたとき、人は神が創りしものということ、改めて認識することができたのである。鬼頭自身自分でも気がつかないうちに、心の不安を誰かに、払拭して欲しいと願っているように里中には感じた。キリスト教に限らず信仰は敬い信じることから始まる。鬼頭には神を信じろとは言わないまでも、他人を信じる心を持って欲しかった。

「神父さん。自分の血が他の者の血と、違うという相談を受けたことはありますか？」

「自分の血が他人と違うという相談を受けたことはありませんが、自分が自分でないようになったという相談なら受けたことはありますよ」

射るような鬼頭の視線を受け止め、彼が何を言いたいのか理解しようと努めた。

「それは悪霊みたいなものが、自分の中に入り込んだというようなことですか。エクソシストみたいに」

「エクソシストは映画の中の話です。しかし昔から日本でも狐つきみたいに、まったく違う人格に変わってしまい、どうにもならないということは稀にあるみたいです」

実際カトリック教会の中には、悪魔払いの修行を行った司祭もいるし、アメリカなどでは悪魔が自分に取りついたため人を殺してしまったとか、自分は悪魔の命令に従っただけとか、言う者まで存在すると耳にしたことがあるが、非科学的なことを否定する鬼頭が、そのようなことを口にするとはいとも思わなかった。

「神父さん、俺はこれまで弁護士のと要請もあり、何度か精神鑑定も行ったが、その結果はすべて異常なしということだった。今こうして普通に神父さんと話しているけど、そんなに気が狂っているようには見えませんか。自分で言うのも何ですが、精神状態はいたって正常だと思っています。しかし女とセックスをしているとき、自分が自分でなくなっていくような感覚になった

んです。それはジキルがハイドに変わったように、まるで獣にでもなってしまったような。ただそれは自分でコントロールしようと思えばできるのですが」

この男の本質というものを理解していたわけではないが、少なくとも今まで会話を重ねてきた中で、少しとして異常者を思わせる言動は見受けられなかった。

「貴方はそのとき、相手に対して悪いことをしていると思わなかったのですか？」

このことが鬼頭との会話での確信部分でもある。鬼頭が自分の罪を認め悔い改めたとき、初めて胡桃沢との約束が果せるのだ。

「それが悪いことだということは認識しているのですが、相手に対して悪いとか、申し訳ないという気持ちは全然湧いてきませんでした」

「それは社会では悪いと認識されているが、自分の中にある社会観念では、悪いと感じていないということですか？」

鬼頭は少し考える素振りを見せた。

「ちょっと違うような気がするんですが。世の中には癌やウイルスに掛かって死んでいく人がいますよね。自分たちみたいな人殺しは、ウイルスや癌細胞と一緒になんですよ。それはウイルスや癌細胞として生まれてしまった、いわば宿命みたいなものですね」

少々投げやりな言動にめずらしく憤りを覚えた。こんな気持ちになったということは、少しずつ鬼頭が、人間としての感情を取り戻しているのではという、期待があったからに他ならない。

「それは貴方の勝手な解釈です。人間はウイルスや癌細胞のような存在ではありません。人には必ず心があるのです。現に貴方は今私と話していますね。それは少しでも相手の気持ちを理解しようと努めているからです。自分だけが生き残ればいいウイルスとは明らかに違うのです」

この後鬼頭は珍しく反論してこなかった。考えてみれば、私が胡桃沢に出会わなければ、神父の道を諦めていたかもしれない。それは胡桃沢があれほど信じていたキリスト教を捨て、医学の道に進んだことにより、ならば自分はもう一度信仰の道に進んでみようと思直したことも起因する。胡桃沢が鬼頭によってあの名古屋の高校に進んだのなら、私は胡桃沢との出会いによって神父の道に進んだ。その意味に於いては鬼頭も少なからず、私の人生にも関わっているのではないかと思わざるを得なかった。

里中は今日まで女性と付き合ったことがなかった。小中学校のときはそれなりに好きな女の子はいたが、それはあくまでプラトニックなものだった。しかしセックスは一度だけしたことがある。名古屋の高校を卒業し神学校に進学が決まっていたものの、自分がその道でやっていけるのか自信が持てなかった。そんなとき女性を抱いた。高校一年のときにマスターベーションも覚えた。最初にそれを覚えたとき罪の意識に苛まれ、図書館に行って医学書や精神医学の本を調べた。そのとき神父になろうと考えていたのにも拘らず、何で聖書を読まず医学書を紐解いたのか。神の教えでは許されなくても、衣食住と同じく人間が生きていくうえで、必要不可欠なことなのだと納得したかった。医学書であれば私が求めている答えが返ってくると分かっていた。それに聖書、或いはカトリック教会が唱えていることが、一から十まですべて正しいとはどうしても思えない。魔女狩りなどのように、神の名に於いて間違った行いをしてきたことも過去には沢山ある。だから教会の教えはすべて正しいとは決して思えなかった。教会がどのようなところであれ、主に対する信仰心は持ち続けている。既にこのときから主の教えと、教会とを分けて考えるようになっていた。

私がこれから神父になろうと思ったとき、どうしても女性というものを知っておきたかった。そしてそれが最初で最後と決めていた。彼女のいない里中にとって、女性を抱こうとしたらお金でする方法しか思いつかなかった。売春が神の教えに背こうと、背かなかろうと、そんなことはそのときの里中にとってたいした問題ではなかった。私の中にセックスを知らずして女性を、そして人間を理解することができるのか、その好奇心のほうが勝っていた。そのことによって私が神父になれないとは少しも考えなかった。決して神を冒瀆したわけではない。神に人生のすべてを捧げても、自分の信念を持ち続けたい。それ故に女性との性交渉はどうしても通らなければならない門である。性に対する興味は普通の若者が持つ好奇心とは大きく異なっていた。それはどちらかといえば、科学者が科学を探究することに近いものである。

卒業式の後、東京の自宅に戻った里中はこつこつ貯めたお金を握り締め、駅の売店でその日の雑誌を買い吉原に向かった。

ソープ嬢に「お客さん学生さん？」と訊かれ「はい」と素直に答えた。里中はこういう人たちに対して軽蔑はしていなかったものの、自分とは違う世界に住む人たちと考えていた。しかし実際話してみると気さくで人が良さそうに感じた。僅か十八歳の私があるような世界があるとは知りつつ、踏み込んではいない世界に入ってしまったのだと実感せざるを得なかった。女性の身体の中に自分のものを入れ体液を射出すると、それは私が今まで思い描いていたものとは遥かに掛け離れていた。そのとき里中はもう一度それを行ないたいとは思わなかった。店を出たとき罪の意識ではなく、何か虚しい、あるいは悲しい気持ちになり瞳が濡れた。何で人はお金を払ってまで、こんな悲しい気持ちにならなければならないのか。鬼頭が性の虜になり犯罪までしたことを、性に対し何の希望も持てなかった里中には、到底理解できるものではなかったであろう。

それでも鬼頭との会話は、里中にとってもとても有意義なものだった。それはカタツムリがゆっくり前へ進むように、少しずつではあるが、確実に目標へ近づいていることは間違いない。

偽り

由香里にとって中学のあの出来事は、今思い出しても鳥肌が立つ。わたしはあのときまで芸能界に強い憧れを抱いていた。でも何度チャレンジしても芸能界はわたしを受け入れてくれなかった。あの頃何であんなに芸能界に憧れを持っていたのだろう。歌がそれほど好きだった訳でも、踊りが得意だった訳でもないのに。子供の頃から「可愛いね綺麗だね、由香里ちゃんならきつと女優さんになれるわよ」そう言われつづけ、本人もすっかりその気になってしまった。確かに長野の田舎ではそれなりに綺麗だったのだろ。しかしオーディションのため上京すると、わたしくらいの女の子は履いて捨てるほどいたのが現実だった。ハーフやクォーターの子なんかは、わたしなどよりも顔が小さく遥かに綺麗だった。

あの中学の出来事は、ある意味わたしの中にある幻想を、払拭してくれたのかもしれない。鬼頭に強姦されたことは、わたしの心に途轍もない深い傷を残した。鬼頭は幼少の頃からとても不思議な少年だった。子供というのは楽しいときは笑い、悲しいときは泣き、頭にきたときは怒るものなのに、鬼頭が泣いたり怒ったりしたところを見たことがない。いや一度だけ宮坂昇が川に落ちて山岸に濡れ衣を着せられたとき、怒ったのが最初で最後だったような気がする。水島に恐喝されたときも怖いくらい落ち着いていた。

鬼頭のことは好きでも嫌いでもなかったが、絶えずわたしの心のどこかに引っ掛かっていた。鬼頭のとる行動がなぜか気になった。それはある種、幽霊みたいな実体のない存在だった。真白な服にできた小さな染みのように、気にしなければそれで済むはずなのに、気にしだしたら気になって仕方がない。そんな存在になっていた。

胡桃沢は鬼頭が殺人罪で逮捕されるまで、中学のあの忌まわしい出来事を、わたしの前で口にしないように努めてくれた。あの中学の出来事があつた後、涙ながらにずっとわたしの傍にいると誓ったが、あのときのわたしは自分に起こった出来事があまりにもショックで、どうしたらいいのか判断がつかなかった。それまで順調に歩んできた人生が、いきなり大きな落とし穴に突き落とされたようなものだ。どうしたらいいのかまったく先が見えなかった。

胡桃沢があのようなことを言っても、それを頭から信じることはできない。パニックになっていた頭が、時間が経過し落ち着きを取り戻すと同時に、あれほどまで恋い焦がれていた胡桃沢が、わたしにとってとても許しがたい存在に変わっていた。自分の過ちを誤魔化すために、わたしを強姦する手助けをした。わたしはこのとき一生掛かってもこの男に、償いをさせようと心に決めた。

理由はどうであれ、わたしを強姦しようとした男を、そう簡単に許せるわけがない。胡桃沢の意志でわたしを抱きたいと思ったのなら未だしも、自分の行った不正行為を隠蔽するために、わたしを強姦する手助けをしたなんて、絶対許すことはできない。あのとき胡桃沢は由香里のことが本当は好きではなかったと告白した。それはわたしにとって、とても屈辱的なことだった。わたしは少なからずそれまで、胡桃沢に対して憧れを抱いていた。だから手紙を貰ったときは本当に嬉しく天にも昇る思いだった。それが実は胡桃沢にとって由香里は視界にすら入らない存在だったのだ。鬼頭に強姦されたのは確かにショックだったし、今でも決して許すことはできない。

でも少なからず鬼頭は由香里に対して憧れを抱いていた。わたしのことが好きだったのだ。しかし胡桃沢は違う。わたしに対しての好意は、哀れみと罪の意識から芽生えたものに違いない。これは由香里のプライドを痛く傷付けた。わたしは胡桃沢が他の女に靡かないように、何としても阻止しなければならない。彼には他の女の身体に触れてほしくなかった。彼を独占したい。それは決して愛情からではなく、復讐のためである。

あのとき胡桃沢はわたしの中に神がいると言ったがとんでもない。わたしの中には悪魔が潜んでいる。その悪魔は胡桃沢には見えないのだ。

胡桃沢はわたしの悪意にも気づかず、ただひたすら尽くしてくれた。それでも神父になりたいと言い、名古屋の高校に進学してしまったときは流石にショックだった。わたしの傍にずっといると言っておきながら神父になってしまったら、わたしと離れ離れになってしまうではないか。わたしは将来彼と結婚できるかどうかは別にして、彼に一生掛けて償ってもらわなければならないと考えていた。胡桃沢がわたしの中に神を見たなどと、馬鹿なことを言って、神学の道に進んでしまうことに不安と憤りを感じた。わたしは最初あの中学の出来事が、胡桃沢の精神状態をおかしくさせてしまったのかとさえ思えたのだ。どうして自分に復讐しようとしている女が神なのか、最初のうちは彼の真意がまったく理解できなかった。強姦されたわたしが、気が触れるのなら未だしも、一緒にいたそれも計画の片棒を担いだ男が何で、罪の意識からなのか不思議でならなかった。

胡桃沢が高校三年生のとき、今度は何を思ったのか医者になりたいと言い出した。わたしはこれを聞いたとき少し嬉しかった。なぜならこの男にしがみついている限り、生活水準を下げずにすむ。パトロンのように感じたからだ。

男性に対してトラウマがあったのも事実だが、胡桃沢に抱いてもらいたいという気持ちもあった。でももし彼がわたしを抱こうとしたら、心は受け入れても身体が受けつけてくれるか自信がなかった。しかしそんなわたしの心配をよそに、胡桃沢はわたしに一切手を触れなかった。

胡桃沢が精神科医になると言ったときは本当に驚いた。わたしは胡桃沢自身が精神科医に通うべきだと今でも思っている。わたしの本心を知らずに、わたしと付き合い続けている。胡桃沢が或るときは滑稽に見え、或るときは気の毒に思えた。研修医から大学病院の精神科助手として勤務し始めたとき、彼から正式にプロポーズされた。そのときわたしは胡桃沢に復讐しようと思って付き纏ってきたが、そのような考えを持ち続けるのなら、結婚してしまえば、わたしの今まで行ってきたことが、すべて意味を成さなくなってしまう。もしかしたら胡桃沢は、わたしの考えをすべて見抜いていて、精神科医になったのではないか。それはわたしの歪んだ心を治すために、精神科医になったのではないかとさえ思えてならなかった。

今までわたしは胡桃沢に復讐しようと思って付き纏ってきたはずなのに、彼自信はわたしのこの捻くれた性格を危惧したのか。すべて分かっていたのか。わたしは何か生き方自体を間違えていたのかもしれない。そのようにさえ思えてきた。プロポーズをされたが直ぐにそれを受けることはできなかった。彼は今までわたしに尽してくれた。罪滅ぼしも多少はあっただろうが切っ掛けはどうであれ、わたしを心から愛してくれた事実には偽りはないと感じる。しかし胡桃沢は何年経とうと私にとっては加害者なのだ。

結婚した今だから分かることだが、胡桃沢の性格は父親の存在が多分に影響している。胡桃沢の母に伺い、幼い頃から父親の存在に押し潰されそうだったことは、僅かながらも理解できた。あのとき胡桃沢が風邪を引き、そのためカンニングをしてでも、テストで良い点数を取らなければならなかったこと。それをあろうことか鬼頭に見られ、わたしの強姦を手伝わされたこと。それは胡桃沢に心の弱さがあったからに他ならない。それでも世の中にあれほど男が溢れている中で、胡桃沢ほど完璧な人物に出会ったことがなかった。

わたしは最初胡桃沢の容姿だけに憧れていた。しかし彼と実際に付き合ってみて、あのような純真な心を持った人間が、この世の中にいることに驚きを覚えた。わたし自身の心が捻くれていたにも拘らず、胡桃沢のわたしに対する献身と愛情は、わたしの周りにはいる誰よりも深いと感じることができた。悩みに悩んだ末、結局申し出を受けることにした。

驚くことに胡桃沢は結婚しても由香里を抱こうとしなかった。このことにわたしは酷く傷付いた。わたしが行なってきた胡桃沢に対する復讐心が、このような形で竹箆返しとして戻ってきたのだろうか。胡桃沢が由香里を抱かなかったことは、ある意味に於いて鬼頭に強姦されたことよりショックだった。自分の復讐心がいつの間にか、恋心に代わったのではないかとすら思って結婚までしたのに、このような仕打ちをするなんて。

結婚して一ヶ月経った頃、思いあまって胡桃沢に問いただした。すると胡桃沢はあの中学の一件以来、自分は不能になってしまったと告白した。でも本当は彼が嘘をついているのをわたしは知っている。彼は決して不能なんかじゃない。『狭き門』の著者アンドレ・ジッドのように、妻は神聖なる者で、如何わしい行為を行ってはならないと信じているに違いない。わたしは大学時代仏文学を専攻していた。胡桃沢が自分のことを不能と言ったとき、このことを思い出したのだ。わたしは従兄妹からジッドの妻になったマドレーヌのように処女ではないけれど、彼が死ぬまでわたしを抱かないなんて想像するだけで恐ろしかった。もし胡桃沢の言うように、わたしの中に神が存在するのであれば、それはわたしの根底にある悪意に対する償いなのかもしれない。わたしは純真な胡桃沢の気持ちを弄んだため、これからそれを償っていかなければならないのか。

すべて鬼頭のせいでわたしの人生の歯車が狂ってしまった。わたしは自分の過ちに気がつくのに二十年以上の歳月を要した。でもわたしの心の悩みは誰にも相談することができない。それはやはりわたしの罪なのか。胡桃沢は鬼頭を助けたいと言い、鬼頭の母親や昔の友人に会いに行った。鬼頭には鬼畜のまま死んでほしい。今更罪の意識など感じてほしくなどない。自分の人生をむちゃくちゃにした男を、なぜ救おうとするのか。到底理解することはできなかった。

わたし自身、今の結婚生活にもう我慢の限界を感じている。今では決して胡桃沢のことが嫌いではない。心から愛していることに嘘偽りはない。しかし女の幸せはやはり、好きな男の子供を産むことではないだろうか。わたしはそのようなことを考えているうちに、自分の精神状態がおかしくなってしまうのではと感じるようになっていた。鬼頭を救う前に自分の妻であるわたしを救ってほしい。一度乗ってしまったら目的地に着くまで降りられない飛行機のように、今更自分だけ降りるわけにいかないのはわたし自身分かっている。

貴方が本当に救わなければならないのは人殺しの鬼畜ではなく、貴方の目の前にいる妻なのよ。それでもそれを口に出して言える勇気は、今の由香里にはなかった。

姉

あれを見てしまったのは、確か高校一年の夏休みだったと思う。それを見なければ胡桃沢の女性に対するイメージは、現在とはまったく異なるものになっていたに違いない。高校に進学した最初の夏休み、久しぶりに長野に帰省した。休みといえども生活リズムを崩したくなかったため、六時半には起床し自宅のある杭瀬下から、千曲川の河川敷までかるく走ることにした。

中学時代はバスケットに打ち込んだが、高校に進学してからは、精神力を鍛えるため剣道部に入部した。夏休みの初めは設楽の山奥で合宿していたが、剣道部の部長が後半一年生は、実家に帰れと言われたので素直に長野へ帰省した。名古屋の夏の暑さは、長野とは比べようもないくらい暑く、夜になると比較的涼しくなる長野と違い、名古屋の夜は熱帯夜だった。寝苦しい夜を名古屋で過ごすより、涼しい長野で身体を休めたほうが、勉強もはかどるに違いない。そう考えると長野に帰されたことは寧ろ喜ばしいことだった。

更埴市は東と西に山が聳え、市の中心に千曲川が流れている。胡桃沢の家は国道十八号線と千曲川のちょうど中間に位置し、屋代駅からは徒歩で十五分ほどの場所にあった。由香里の家とは歩いて五分と掛からず、暇をみては図書館や喫茶店でデートを重ねた。家の周りには田園も広がり、名古屋の高校がある場所に比べると随分のどかな場所だった。姉の典子は昨年市内の進学校に進学していた。胡桃沢の通っている高校でアルバイトは、経済的理由がない限り禁止されている。午前中は朝のランニング以外すべて勉強に費やし、午後の空いた時間に由香里とデートをしたり、警察署の道場へ剣道の練習に通ったりして、時間を有意義に過ごした。

夏休みも終わりに近づいた頃、その日は珍しく日が落ちて気温が下がらず、就寝時間になってもなかなか寝つけなかった。ベッドに横になりながら本を読んでいると、午前0時近くになっていた。喉が渴いたため麦茶を飲みにキッチンに向かった。胡桃沢と典子の自室は二階にあり、キッチンは一階にあった。キッチンの直ぐ横は居間で、その横が和室で両親の寝室になっている。

胡桃沢は寮に入るまで、夜間の生活音に対してそれほど神経を使ったことはなかったが、今年の春から寮で生活し、相手に迷惑にならないように行動する術を覚えた。寮生活ではまず相手の気持ちになって考えることを教えられる。自分が相手にしてもらって嬉しいこと、またその逆も然り。常に相手の気持ちを思いやるのが、この学校の校風でもあった。

キッチンに行くにも足音を立てないように静かに歩く。階段を下り父母が寝ている和室の前を通り掛ったとき、和室から女の喘ぎ声が耳に飛び込んできた。最初それが人の声と判別がつくまでかなりの時間を要した。しかし実際には二・三秒のことだったかもしれない。胡桃沢としては認めたくない人の声、母みどりの喘ぎ声だった。家もだいぶ古くなっていたため、襖と襖が重なる部分に隙間が生じていた。真正面からだと隙間は見えないが、斜めから見ると外の外灯が網戸を透かし中の様子がハッキリ窺えた。いつもは雨戸を閉め寝ているはずが、今日はいつになく蒸し暑かったため、雨戸も、窓も、障子も、網戸以外すべて開けはなれたままになっていた。

胡桃沢の家はここら辺でもかなり敷地が広く、庭には池も設えてあり、日本庭園風に造られていた。

みどりは全裸になり股を広げ、その股の間に高貴の顔があった。最初胡桃沢の乏しい性の知識では、何を行なっているのか分からなかったが、じっと目を凝らして見ると高貴はみどりの陰部を舐めていた。そしてみどりは身体を振じらせ喘ぎ声を上げている。息を止めそれに見とれていると、今度は高貴が下になりみどりが高貴の男根を銜えだした。

胡桃沢は自分でも気がつかないうちに、短パンの中に手を入れ自分の股間を弄っていた。

みどりが高貴の男根から口を離すと、高貴を跨ぎ男根を持ち自分の陰部にそれを挿入した。そのときみどりは、胡桃沢の頭の中では女でしかなく、自分がその子宮から出てきたことは想像すらできなかつた。そんな性の幻想の中を漂っていると、背中を軽く叩く者がいた。ビククリして後ろを振り向くと、そこには姉の典子らしき女性が立っていた。典子らしきというのは暗くて表情までは分からなかったからだ。冷静に考えればこの家の住人は四人しかいないのだから、そこに立っているのは典子に間違いはないはずだが。典子に肩を叩かれたとき、胡桃沢は自分の男根を握っていたが、咄嗟のことに短パンから手を抜くのが僅かに遅れた。おそらく典子の目に入ったのではないかと思われる。典子は胡桃沢に手招きすると、踵を返し階段を上がって行った。胡桃沢も動揺を抑え後を追った。典子は自分の部屋の前まで行き胡桃沢の腕を取ると、無言のまま自分の部屋に引き入れた。部屋のドアを閉め蛍光灯を豆球から大灯に切り替えた。霞んで見えていた典子の姿がはっきりと目に映り、幻想の中を彷徨っていた感覚がいきなり、現実の世界へ引き摺り戻されたような不快な感じになった。

「幸ちゃんベッドに座って」

典子は高圧的に言うと自分の勉強机の椅子に腰掛けた。胡桃沢は典子のベッドに腰掛けたものの、この後典子が何を言い出すのか、不安でまともに顔を直視することができなかつた。

「幸ちゃん、あの獣みたいな行為を見るのは、もしかして初めてだった？」

典子はなぜそのようなことを訊いてくるのか、胡桃沢には到底理解できず、質問に何も答えることができなかった。

「わたしは中学一年のときにあれを見たの。そのときのわたしの気持ち分かる？小学校の性教育で知識はあったものの、男と女があのように陰部を舐め合うなんて信じられなかつた。あれを見た御陰で暫く男の人の顔をまともに見られなかつたわ」

胡桃沢は別の意味で、両親があのような行為をしているのを覗き見て気持ちが沈んだ。高貴はそれまで家族に対して神の如く君臨していたのに、獣のようにみどりの陰部を舐めていた。それより何より敬愛していたみどりが、あのような喘ぎ声を出していたのはかなりのショックだった。それでも両親が男と女である以上セックス以外に性を楽しむため、そのようなことをすることは何となく分かるような気もする。ただみどりのあの姿を見て勃起し尚且つ、マスターベーションまでしようと思っていたところを、典子に見られてしまった。それは後戻りできない迷路に入ってしまったような感覚で、どうしてもその不安を自分の力だけでは払拭することができなかった。典子はどの時点から胡桃沢を見ていたのか分からなかったが、このとき典子に対して、この世からいなくなって欲しいとさえ思えた。

信仰の道に進もうとした胡桃沢が、このように考えたことは後で思い返しても、とても恐ろしいことに違いない。実の母がセックスする姿を見て、興奮する自分はまともではない。

小学校四年生までみどりとは一緒に風呂に入っていた。それが五年生になったとき、みどりの裸体を見て勃起してしまった。それからは決してみどりと一緒に風呂に入ることはできなくなった。この年頃の子供であれば遅かれ早かれ徐々に、親とは一緒に風呂に入らなくなるものだが、まさかみどりは息子が自分の裸体を見て、勃起し恥ずかしくて一緒に風呂に入れなんて夢にも思わなかっただろう。胡桃沢は自分自身おかしいと思いながら、どうすることもできなかった。しかしそんなことは既に過去のことと忘れかけていた。先ほど両親のセックスを目の当たりにして自分を見失ってしまった。拳銃の果て典子にそれを見られてしまうなんて、これ以上最悪なことはない。胡桃沢にとって鬼頭にカンニングを見られたときと匹敵するくらい、気持ちが動揺する出来事だった。典子は胡桃沢がどこまでみどりに対して、好意を寄せていることを知っているのだろうか。

高貴とそっくりの典子の目は、いつも一段高いところから胡桃沢を見下していた。典子は胡桃沢の知る限り、胡桃沢にはあれほど厳しかった高貴に、怒られているところを見たことがない。みどりのハッキリした顔立ちに比べ、典子の顔はどこにでもいる普通の女性の顔だった。女性を容姿だけで選ぶのなら、決して男性は典子に声を掛けたりしないだろう。それほど地味な顔の女性だった。

「父と母といえども、母はまだ若いし男と女なのだから、セックスするなどは言わないわ。でもせめてそういうことは、子供の目の触れない場所でして欲しい。わたしも幸ちゃんと一緒にラジオの番組欄が見たいため、居間に新聞を見に一階に下りたの。そのとき突然母のあの声が耳に飛び込んできたわ。何をしているのかと思ひ隙間からそっと覗くと、父が母の股を舐めていた。それからはわたしの頭の中にあの光景が焼き付いてしまい、男の人を見ると皆あんな如何わしいことをするのかと思うと、男の人とあまり話しができなくなってしまった。だから幸ちゃんにはわたしと同じ思いをさせたくなかったの」

胡桃沢は精神科医になった今、過去の症例で両親のセックスを見た故に、それがトラウマになり、その後異性との関係がうまくいかなかったという症例は、まったく報告されていないわけではないが、それだけが原因で異性との関係が阻害されるとは考えにくい。ただ幼年期において性的行為を目撃したことにより、サディズム的になるという精神分析報告があるが、それすら眉唾物に思える。胡桃沢の同級生には市営住宅居住者が多く、部屋数も少ないので両親と寝ている子も少なくない。それらの者が、幼年期夜目が覚めると両親がセックスしていたということは耳にしたことがあった。しかしその者たちがサディズムになったとは考えにくい。胡桃沢が女性に対してというより、妻の由香里に対して性生活を堪能できなかったのは、両親のそれを見たからではない。その後放った典子の一言である。

「わたしがあれほど心配してあげたのに、幸ちゃんはお父さんとお母さんのふしだらな行為を見て、自分のおちんちんを触っていた。わたしは幸ちゃんを信じていたのに、あんなことをするなんて」

胡桃沢はまともに典子の顔を見ることができなかった。もしかしたら典子は最初から、胡桃沢の行為を見ていたのかもしれない。

「姉さん・・・・・・・・」

そこまで言ったものの後続く言葉が出てこなかった。

「幸ちゃんには裏切られたって感じ。わたし幸ちゃんが最初地元の高校に進学しないで、名古屋にあるカトリックの学校に行くと言い出したとき、本当にビックリした。なぜ急に神学校みたいなところへ行くのか理解できなかった。だってあれほど父に対して従順だった幸ちゃんが、父の言うことを聞き入れず、自分の考えを貫いたんだから。幸ちゃんが僕は神父になりたいんだと言ったときは、わたしだけじゃなく家中が驚いたわ。わたしはこのときこの家で、唯一心の綺麗なのは幸ちゃんだけと思った。わたしは幸ちゃんの姉でありながら幸ちゃんを尊敬していたの」

胡桃沢はやっとの思いで典子の顔を見ると、瞳は薄っすらと濡れていた。このときはまったく気づかなかったが、今精神科医になって分かったことは、典子は胡桃沢のことが好きだったということだ。胡桃沢が母であるみどりのことが好きだったように、典子は弟である胡桃沢を、姉弟以上の感情を抱いていたに違いない。それは日本の社会制度では許されることではないものの、一番身近な人を好きになることは、人として決して不自然なことではない。だから典子はあのようなことを口走ったのだ。

「わたしは幸ちゃんが、あんなことをするなんて今でも受け容れたくない」

典子にそのようなことを言われても返す言葉がなかった。典子に対して憎しみが湧いてきた。典子はいつだって胡桃沢を見下している。それなのに何であんなことを言うのか、そのときの胡桃沢にはまったく理解できなかった。そんなことを言う典子だから男の人と付き合うなんて絶対ないと思っていた。それがどうだろう。大学を卒業し教員になったと思ったら、一年足らずで結婚してしまった。それもできちゃった結婚で、セックスは如何わしい獣の行為みたいなことを言っていたにも拘らず、典子の言葉をかりれば、男とふしだらな行為をして子供まで作った。胡桃沢はあそのとき典子に見られた御陰で、今でも由香里との関係を築けないでいるのに。ただあれほど憎かった典子だが、典子の子供は女の子で目がパッチリして可愛かった。どちらかといえば典子よりもみどりに似ている。

由香里を典子の家に連れて行くと、本当に辛そうな顔をする。胡桃沢自身が心の病を抱えているのに精神科医になった。医者は他人の病気は治せても、自分の病気には無頓着なものだ。

フロイトの心理学はある意味に於いて、キリスト教とは相反する考え方である。どちらかというところセックスをタブー視する宗教に対し、人間の本质はセックスにあるというフロイトの心理学は、高校時代の胡桃沢には衝撃的なことだった。同性愛者でもない自分が、妻である由香里と関係を築けないでいるのは、ある種の精神的疾患であることは間違いない。いつも背後に典子の視線を感じ、どうしても女性との関係に踏み込めない。

先日久し振りに里中と電話で話したが、どうやら鬼頭の方は少しずつではあるが、人間性を取り戻してきているという。その後直ぐ鬼頭の母親に手紙を書き、鬼頭の近況を知らせた。それは今の胡桃沢にとって唯一の希望だった。

この辺で自分自身の病も、治さなければならない時期にきているのかもしれない。由香里は胡桃沢との関係を危惧し始めている。由香里自身も今の生活に限界を感じているようだ。このままでは二人の関係は壊れてしまう。もう一度由香里にすべてを話し、僕たちの子供を作らなければならないだろう。いつまでも典子を恨んで自分の殻に閉じこもってもいられまい。今でも由香里を愛していることに嘘偽りはないのだから。彼女はきっと分かってくれるはずだ。由香里はいつで

も僕のマドンナなのだから。

刑務官

(刑務官は職業の名称で、看守は刑務官の階級の呼び名である。警察官の巡査と一緒に、下から看守、主任看守、看守部長、副看守長、看守長、矯正副長、矯正長、矯正監となっている)

関東拘置所は西武新宿線沼袋駅を降りて五分も歩かない場所、旧中野刑務所跡に建てられた。地上十二階地下四階の日本で最初の高層行刑施設である。上空から見ると建物は田の字の形になっていて、口の部分は三階まであり、管理棟と呼ばれ庶務課、会計課、用度課など事務所で占められている。中の+の部分は収容棟となっており+北の部分は面会所、入浴場、運動場が各階に設置してあり、+中心部にあるエレベーターホールには十五台のエレベーターが常時稼動し、そのうち二台は一般面会用のエレベーターになっていた。この拘置所は従来の行刑施設のような外堀がなく、収容棟を囲むように建っている管理棟が外堀の役目をはたしていた。

拘置所の横にはちょっとした団地に匹敵する官舎地区があり、拘置所の職員だけでなく霞ヶ関にある法務省の役人も一緒に居住していた。その中で拘置所の建物に一番近い位置に独身者だけが入る独身寮がある。独身寮といっても、以前の法務省の独身寮とは違い、風呂やトイレ、キッチンが共同ではなく、最先端のワンルームマンションのような造りになっていた。

草加竜司はそこに居住していた。群馬の山奥から上京し早十三年になる。高校時代はひたすら剣道に打ち込んだ。そんなことから剣道部の部長から、進学しないなら刑務官採用試験を受けてみないかと言われ、まったくどのような仕事かも分からず、言われるがままに前橋の刑務所に採用試験を受けに行った。一次試験の合否はその日のうちに発表され、翌日に面接試験が実施された。質問された内容は「剣道は好きかね？」というごく簡単なものだった。その年の師走に新たに改築して間もない関東拘置所から電話があり、直ぐ上京しもう一度そこで面接を行なった。そこでの質問は「刑務官の試験を受けた理由。どんな刑務官になりたいか？剣道をやっていたみたいだが、それをどのように仕事に生かすか？」というものだった。前橋で受けた面接とはまったく異なり、自分で何を答えたか憶えていないほど緊張した。

年が明けると関東拘置所から採用の通知が届いた。その日のうちに高校の剣道部部長に報告すると非常に喜んでくれたが、何で自分がこの採用試験を受けたのか、十三年経った今でもよく分からない。なぜ剣道部の部長は警察官ではなく、刑務官の試験を勧めたのだろう。学力がない自分では、警察官の採用試験は受からないと思ったのだろうか。

高校を卒業し直ぐこの世界に飛び込み、最初は本当に大変だった。勉強するのが嫌いだったから上の学校に進まなかったのに、最初研修所に入って三ヶ月間勉強させられた。六法を片手に頭の中がパニックになる日が何日も続いた。二週間に一回行なわれるテストでは、いつも追試要員だった。研修所で同室だった者は大学卒業者だったため、試験勉強などまったくせず、毎日飲み歩いても追試要員にはならなかった。同じ仕事をしていくにも拘らず、スタートからこのように学力の差が生じるとは、この先どうなるのか不安が過ぎた。

高校時代は部活に励んでいたため、アルバイトすらしたことがなかった。そのため初めて就いた仕事がこの仕事であり、どうやっていけばいいのか見当もつかない。中野は新宿にも近く群馬とは比べ物にならないくらい都会だが、最初の一年は中野を出ることすらできなかった。このまま

自分は大都会に、埋没していくのではないかと危惧したこともある。

この拘置所に採用され配置係長（刑務所や拘置所は工場や舎房があり、そこには必ず担当職員がいる。出廷や面会にも職員がいて、それらの職員の配置場所を割り当てる係長）につき中を案内された。関東拘置所は新しい建物なのに舎房に入ると、あらゆる人間の体臭が入り混じった嫌な臭いが鼻につく。病院に行くと消毒の臭いがするように、行刑施設も独特の饅えた臭いがした。

舎房廊下の中央には衝立があり、対面同士が見えない造りになっている。舎房を歩いているとあらゆる人種が収容されていることに驚く。アラブ系らしき髭面の男は居室内をぐるぐると徘徊し、東南アジア系の者は巡回している自分たちを目で追っている。また白人と思われる者は、布団を敷いて横臥している。草加はこのとき子供の頃連れて行ってもらった動物園を思い出した。

この拘置所で仕事をするようになり最初、溝に足を浸してしまったような不快な感覚に襲われた。自分は何か間違ったところに来てしまったのではないか。引き返すなら早いほうがいい。朝制服を着て官舎を出るたびに同じことを考える。そんなことを繰り返しているうちに十年以上の歳月が過ぎていた。そんな中で十年以上夜勤をやって、最近ようやく警備隊の運動、入浴担当になったところである。石の上にも三年という諺があるが、この仕事は三年経ってもまだ何か満たされない不安が付き纏った。半が乾きのズボンを穿いているような、不快感が常に自分の思考を鈍らせていた。それは十三年経った今でも変わることはない。

ここに収容されている者は（冤罪は除いて）社会で何かしらの罪を犯してきた、魑魅魍魎の集まりである。今まで何人もの被収容者を目にしてきたが、一ついえることは彼等はここに来るべきして来たということだ。ゴキブリが餌に誘われ、ゴキブリホイホイに入っていくように、収まるべくして収まったとしか言いようがない。この仕事に就くまで、いかなる理由があろうと裁判所から、有罪の宣告を受けたなら、それに従い刑に服するのが人としての義務だと思っていた。しかしここにいる殆どの者はあらゆる手段を講じ、自分の立場をより優位に持っていこうとするエゴの塊に他ならない。世の中には極悪人という輩がいるということも、このとき初めて知った。

被収容者の身分帳（本人の犯罪歴が書かれているもの）に目を通して見ると、少年時代から犯罪を繰り返している者が少なくない。おそらく少年たちの社会はとても小さな社会で、当然似た者同士が集まってくるのだろう。学校は色々な決まりごとがあり、それに従いたくない者にとって、その決まりは自分たちの自由を奪う怪物に見えるのかもしれない。最初その怪物に抵抗するのだが、敵わないと気づくとその場所を避けるようになる。しかし自分が大人になって社会に出るとその怪物は更に大きく、自分が戦っても絶対に勝てる相手ではないと悟ったとき、それが恐怖となって自分を押し潰そうとする。それ故に同じ悩みや不安を抱えたもの同士が集まり、社会に対する不満が一番手っ取り早く、自分を表現できる暴力や犯罪という形になって現れるのではないだろうか。若い被収容者を見て草加は勝手に想像した。草加は中学、高校とあまり成績が良いほうでなかったため、彼等がそのような人生の濁流に流されていくのが、何となく分かるような気がした。

どんな仕事もそれなりに危険が伴い神経を使うものである。この仕事も常に危険と背中合わせだった。それは同じ公安職である警察官より、更に危険を伴う職種ではないだろうか。

近年犯罪者といえども人権が尊重され、権利意識がとても強くなってきた。時代は確実に悪人に対して寛大になってきている。草加が拜命した頃と現在とでは、被収容者と職員の接する態度も大きく様変わりしてきた。言葉一つとっても神経を遣わなければならない。相手が犯罪者といえども、一流ホテル並みの対応が要求されるのが今の刑務官の現状だ。

犯罪は凶悪化し、犯罪数も増え低年齢下していく中で、犯罪者の人権だけは保護され、行刑施設はとても居心地のいい場所に変貌しつつある。それとは反対に、職員の仕事は過酷さを増していく。本末転倒なことに国の上の人は誰も気がつかないのか。気がつかない振りをしているのか。草加は不信感とともに怒りを覚えた。昔から頭は良くなかったが、子供の頃から正義感だけは人一倍強かった。だから最初この仕事に就いたとき、天職を得たとさえ思えた。しかし最近は何共の便利屋に成り下がった自分たちの立場が情けない。なぜこんな屑共に媚を売るような仕事をしなければならないのか。こいつらは社会からはみ出た滓だ。人を殺したり、人の物を盗んだり、他人の人権や命まで奪った者に、人権がどうのこうのという資格があるのだろうか。

もともとこのような施設に収監されている者は、社会的モラルが欠如している。薬にしても、日用品にしても、ただと分かれば、使わなければ損といわんばかりに要求してくる。

自分たち刑務官や少年院の法務教官は矯正職員と呼ばれるが、人が人を矯正させるなんてことはどだい無理なことで、一度溝に落ちた者はどう足掻いても、その溝臭い臭いを身体から払拭することはできないのだ。それは彼等自身が一番良く自覚しているに違いない。裁判の量刑に刑務官裁量があれば、すべての犯罪者は間違いなく量刑が重くなる。真の姿を知っているのは、検事でも、弁護士でも、まして裁判官でもない。犯罪者の真の姿を知っているのは刑務官だけである。

刑務所や拘置所の行刑施設には高い塀がある。しかし施設の中に入り、自分たち刑務官と犯罪者の間にも見えない高い塀があった。これは絶対超えられない、超えてはならない塀だった。

それでも草加は溝のような所に十年以上もいると、いつしかそこが溝だったことすら忘れてしまう。最初溝に足を浸けたとき、靴から溝水が靴下にしみ込んでくる感覚がとても不快に感じた。それでも覚悟を決めパンツまで浸かり時間が経過するとともに、ここが溝で自分が溝の中に浸かっていることすら分からなくなってくる。草加は何年もこの溝に浸かっているうちに、自分自身が溝鼠になっていくのではないかと、錯覚することさえあった。

全国に刑務所、拘置所合わせて二百箇所近く行刑施設がある。その上少年院、鑑別所合わせると三百箇所近い矯正施設が日本には存在する。その中であって関東拘置所を含む七箇所の行刑施設で、毎年何人か死刑が執行されていた。その執行官が国家公務員である刑務官だということはあまり広く知られていない。刑務官の仕事で何が一番変わっているか、それは国家の命によって殺人を行なうことだ。死刑執行人になることである。関東拘置所には何人もの死刑確定者が収監されており、死刑執行は拘置所警備隊の職務だった。

明日死刑執行という日に、警備隊の職員が処遇部長に呼ばれた。処遇部長室に入り机の前に二列横隊で整列した。どの顔も表面上は緊張しているように見える。

「明日法務大臣の命により鬼頭正志の刑を執行する。各自気持ちを引き締め職務遂行に当たってくれたまえ」

草加にとって初めての死刑執行だった。警備隊になれば必然的に、死刑執行に立ち会わなけれ

ばならない。それはここに拝命したときから、先輩たちから聞いて覚悟はしていた。

「明日は身だしなみを整え綺麗な服装で出勤するように」

その後警備主任のところへ赴き、明日の打ち合わせを行なった。言葉を悪く言えば国家が合法的に行なう殺人であるにも拘らず、草加にとってまったく気負いも躊躇いもなかった。殺される者は鬼畜であり、社会でそれなりの悪行をかさねた者だ。しかしその者たちと何年もときを共有しているうちに、自分たちも人でなしに成り下がっているのではないかと、ふと感じることがある。

被収容者の中には自分の行ってきたことを棚に上げ、官のあらゆる行為に不平を述べる好訴性収容者という者がいる。とくに死刑確定者はもう後がないだけに、その傾向が著しく強い。自分の置かれている立場を優位にしようと、あらゆる手段を高じ官に対して要求してくる。何か気に入らなければ、所長面接・苦情の申し出（法務大臣宛に官から不当な扱いを受けたと訴えること）と自分の要求を通そうとする。その中であって鬼頭は、苦情の申し出は勿論所長面接すらしたことがなかった。膨大な量の精神安定剤や睡眠薬を服用しているわけでもなく、収容状況はいたって安定していた。警備主任の田所は職員に指示を与えた。

「鬼頭はごねたり暴れたりしないだろう。収容状況も安定しているし何も問題ない。刑場の点検だけはしっかりやっておくように」

細々したことは警備隊の先輩から聞かされていた。死刑確定者に汚物などをつけられるかもしれないので、官服は捨ててもいい古い物にした方がいいとか、靴紐は解けないようにガムテープを貼っておけとか、兎に角自分たちは死刑執行マシンの一部品に過ぎないのだと思うこと。あんな屑共に感情移入するだけ馬鹿らしい。何度か経験を重ねるうちに慣れると教えてくれた。それは何の慰めにもならなかったが、自分が執行官として気持ちを引き締めなければならないことは自覚できた。

以前夜勤班長が警備隊にいるとき、執行のあった日焼却炉に行き、その日着ていた官服を燃やしたということを耳にしたことがある。被収容者から見れば我々は、国家の名を借りた冷たい役人にしか映らないかもしれない。しかし刑務官も悩み考える一人の人間なのだ。

翌朝登庁すると警備隊でない職員から、手で首に横へ線を引く仕草をし「今日これだろう」と言われ草加は素直に頷いた。ここではそれに参加するかしないかは別として、一年に一回行なわれる運動会みたいなものだ。社会では大きな問題として取り上げられることであっても、ここでは運動会や卒業式のように、確実に行なわれる行事の一つに過ぎない。

朝の整列後、警備隊は会議室に集合し、本日の執行の段取りを確認した。所長をはじめ処遇部長も主席もいつもと違いピリピリしている。リラックスしているのは寧ろ末端の草加以外の警備隊員だった。この日は所長も検察庁から来る検事に、粗相があってはならないと気を使い、総務部長はマスコミ対策に神経をすり減らし、幹部職員に至っては、すごろくの罰ゲームみたいに、できることなら避けて通りたい場所が拘置所だった。

刑務官にとって相手が人殺しであれ、窃盗であれ、その罪名により被収容者に偏った処遇を行うことはない。刑期が長い短いはあるものの、一律に被告は被告、受刑者は受刑者なのだ。たとえそれが無期であっても、刑務官にとって被収容者という位置づけは、変わることはない。しか

し死刑確定者は刑務官にとっても特別な存在だった。ここを出て行くときは間違いなく、彼等は遺体となって出て行く。それも我々の手によって。

上告が棄却され刑が確定すると親族しか面会、信書の遣り取りができないため（現在は法が改正されている）死刑囚の中には支援者の養子になるケースが非常に多い。本当の肉親は世間体を気にして、音信不通になってしまうことが少なくない。鬼頭にもマスコミや支援団体が何人も面会に来ていたが、刑が確定するとそれらの者とは連絡が取れなくなった。ただ一人神父が鬼頭の教誨師として、宗教教誨に参加することが許されていた。今日も朝早く教誨師が呼ばれ指導課で待機しているはずだ。

ここ関東拘置所には、現在鬼頭を含め二十八人の死刑確定者が収監されていた。その他第一審で死刑宣告を受けた者は三十人を優に超える。どの死刑確定者にもそれぞれ癖があるのだが、鬼頭だけはなぜか不思議なくらい癖がない被収容者だった。少なくとも草加の目にはそのように映った。自分の立場をよく理解しているのか、もうすべて諦めているのか、あるいは宗教に目覚めたのか、草加の知るところではないが、少なくとも初めての死刑執行が鬼頭というのは、少々違和感を覚えざるをえなかった。死刑確定者に少しでも憎しみが持てれば、吊るす方としても迷いなく執行できるし、憎まれ口を叩かれれば叩かれるほど、よしやってやろうという気にもなる。しかし鬼頭に対してまったくそのような憎らしさが湧いてこなかった。昨日執行の告知を受けたとき、死刑執行に対する違和感でなく、相手が鬼頭ということで、自分の中に何かしらの戸惑いが生じたのは間違いない。

人が人を裁き、それを国家の命によって命を絶つ。草加にとって相手が鬼頭でなければ、精神的にも肉体的にも何の迷いもなかった。単純に上司の命令に従う、それが公務員というものだ。

一審で無期と宣告され二審で死刑になる者。またその逆も然り。彼等が奈落の底に突き落とされたときの表情、また血の池地獄から蜘蛛の糸で助けられたときの様子を見ている限り、学者やジャーナリストがどうコメントしようと、間違いなく死刑制度による抑止効果は存在する。草加が知る限り死刑を恐れない者は一人としていなかった。

人というのはどんな奇麗ごとをならべても自分の身内、大切な人の命が奪われたなら、殆どの者が相手も同じ運命になってほしいと望むものだ。古代バビロニアのハンムラビ法典のように目には目を、歯には歯をとというのが本来、人間の感情ではないだろうか。凶悪な犯罪者に対する仇は、国家の命を受けた自分たち刑務官が行うのだが、それはともすれば加害者の家族から恨まれ、支援団体からは人でなしと詰られる。こんなに報われない仕事があるだろうか。処遇部を出て鬼頭のいる八階まで行く僅かの間に、色々なことが頭を過り、見えざる手が自分の身体を押しさえつけているような感覚に陥った。

鬼頭は八階の四十五室に収容されていた。何度となく八階の入浴場や運動場に鬼頭を連行したが、明日からはもうその必要がなくなる。草加にとってデビューとなる執行相手が鬼頭というのは、どう考えても気持ちいいものではなかった。

廊下を歩く自分の足が、リノリユムの床に吸い寄せられるように足が重かった。処遇部のある二階からエレベーターで昇り、八階で降りると先ず担当台へ向かった。担当台とは舎房担当が立つ場所で、床より三十センチほど高くなっている。八階の舎房担当は四十歳の松井看守部長である。そのとき松井は担当台で願箋処理をしている最中だった。

草加は「500番只今より執行します」と松井にだけ聞こえる小さな声で報告した。松井は草加の顔を見ず小さく頷いた。松井はこの八階の担当になって、もう五年以上になるベテラン刑務官で、過去に何人もの死刑囚をここから送り出している。好訴性収容者と呼ばれる者でも、松井に対しては一目置いているのか、直接不平不満は言ってこなかった。

刑務所の工場担当は懲役受刑者に対して、絶対的な権力を持っている。それは工場担当に嫌われたら、懲役受刑者は仮釈が貰えないと考えているからだ。工場で問題を起こすと昼夜独居に移される。そのような問題を起こす懲役を工場担当は誰も兵隊（工場で働く懲役受刑者）として使いたくない。そうなると出所するまで狭い独居部屋で袋貼りをすることになる。それは肉体的にも精神的にも苦痛を伴う。そのような理由から刑務所の受刑者は敢えて工場担当に嫌われるようになりスクを犯さず、工場担当に好かれるように努力する。しかし拘置所の舎房担当となると事情がことなる。刑務所と拘置所の違いは、刑が確定し受刑者として作業しているか、被告人で公判中かという違いがある。被収容者の間では赤落ち（昔懲役になると赤い服を着せられることから刑が確定することを赤落ちという）と呼ばれ覚悟を決め懲役に行く。それまでは接見禁止が付いていない限り、面会や手紙の遣り取りができ、中で購入できるものであれば、菓子でもアイスクリームでも好きなだけ食べることが可能だが、裁判所で判決の言い渡しを受け控訴期間が過ぎ、裁判所から刑の執行指揮書が来ると、衣類はすべて官衣となり、親族以外は面会も手紙の遣り取りもできなくなる。（現在は法が改正されている）刑事被告人は舎房担当には、刑務所の工場担当に対するように媚を売る必要がない。刑が確定し移送されれば、再びその者と会うことはない。ある程度我が儘を聞き入れてくれるのが拘置所の舎房担当である。その中であって松井は押しが強く、駄目なものは駄目と我が儘を受け付けない拘置所では珍しい存在だった。

刑務所に於いて収容する側の刑務官が、中の被収容者に逆恨みされ、出所後報復を受けることは決して珍しいことではない。職員の官舎や自家用車に実弾を撃ち込まれるのは勿論、大きな施設長になると官舎に棺桶を送りつけられる者や、娘を誘拐されシャブ漬けにされた挙げ句、全身刺青だらけにされ開放されたなんていう、都市伝説みたいな話まである。

刑務官という仕事は犯罪者に恨まれたり、蔑まれたりすれど、決して感謝されたり喜ばれたりすることは殆どない。それでも辞めないでこの仕事を続けているのは、少なからず犯罪を憎む気持ちがあったからだ。行刑施設は公安職にあって、国を守る最後の砦なのだ。日本の行刑施設がアメリカや他の国の施設と比べ、どれほど収容状況が安定しているか、それは日本の刑務官が日々努力しているからに他ならない。

草加は警備隊先輩格の山沢と三島の後に続いて鬼頭の居室に向かった。直ぐ前を歩いている三島は、後ろから見ても耳が変形しているのが分かるくらい、左右の大きさが違っている。柔道をやっている三島が、剣道をやっている山沢や自分よりも勇ましく見えた。

以前の古い拘置所の建物のように、面会所に行くにもかなりの距離を歩かされ、運動場に行くにも歩かされ、入浴場に行くにも歩かされるということがなくなり、すべての階に面会所、運動場、入浴場があり、医務などよほどのことがない限り、収容されている同じフロアから移動することはなかった。

警備隊の二人はゆっくりとしっかりした足取りで、鬼頭の居室前まで赴いた。しかし草加はい

つも歩いている床の感触が、今日はコールタールの上を歩いているようで、足元が覚束ない。先頭を歩いていた山沢が腰に装着してある鍵袋から本錠（居室扉を開ける鍵、通行鍵とは別になっている）を取り出し、鍵穴に挿しゆっくりと回した。ガチャというロックの外れる音がして扉を開けると、鬼頭は胡坐をかいて居室中央に座っていた。

「とうとうお出迎えですか？」鬼頭が此方を凝視し皮肉を込め訊いてきたが、表情はいつもと変わらなかった。

「まあいい。出て来い」山沢は執行を覚られないようにしたつもりだったが、相手は既に何かを感じとっているように見受けられた。

鬼頭は立ち上がり草履を持つと居室入り口へ歩いて来た。そして静かに草履を床に置くと、突然右手を山沢の首に持っていった。すると山沢の首から血が噴水のように噴出した。目の前でいったい何が起こったのか一瞬理解できなかった。山沢はノックアウトされたボクサーがリングのマットに沈むように、前のめりにゆっくりと倒れていった。後ろにいた三島が鬼頭の前に歩み寄り、左手で鬼頭の右袖を取り、右手で胸倉を掴むと、大外狩りで鬼頭を床に叩きつけた。草加は慌てて一番近くの非常ベルを押した。一・二分で十人以上の刑務官が一斉に八階に上がって来た。

心

1

もしも天国というものがあるのなら、そこに逝けるのはどのような人なのか。何を基準にし、そこに逝ける者と逝けない者とが分かれるのか。善悪は何によって判断されるのか。それを判断するのは神なのか。そしてその神はキリストなのか。他の神ではだめなのか。キリストの存在自体を知らない者にとっては、たとえ善人であっても天国に逝けないのか。それはあまりにも不公平に思えてならない。

幼い頃から夢も希望もこの手で掴もうとしなかった。またそんなものは欲しいとすら思えなかった。自分の中にあるものは、どす黒く淀んだ闇が支配しているだけだ。

人は誰でもいつかは死ぬ。それは間違いなく自分のところにやって来る。ある者はそれは神様が決めること、ある者は運命と言うかもしれない。鬼頭の命の灯も間もなく消えようとしていた。看守に頭から袋を被され両足をロープで縛られていたため、自分で思うように身体を動かすことができない。このときはもう死を覚悟していた。非常ベルで駆けつけた看守に彼方此方蹴られたため、節々が痛かった。

自分の勝手な都合で切りつけられたあの看守は死んだのだろうか。あれは死刑を回避したくてとった行動ではない。最後まで極悪人でいたかったからだ。そうとはいえ気の毒なことをした。なぜかそのとき初めて、他人に対して申し訳ないという気持ちが芽生えた。

「ちょっと待ってくれ。教誨師の里中神父を呼んでくれ」

何でだろう。何でこんな気持ちになったのだろう。決して生に対する執着心から出た言葉ではない。自分としては、虫けらは虫けららしく死のうと思ったのに。

「先輩どうします？」

右腕を抱えていた看守が左腕を抱えている看守に伺った。

「首席に内線で鬼頭が、教誨師に会いたいと言っていますと伝えて下さい」

左側の看守は鬼頭の真後ろにいる副看守長に伝えた。副看守長は内線電話を取ると、刑場控え室の首席を呼び出し、鬼頭が最後に教誨師に会いたいと言っていることを伝えた。

直ぐに新しい足音が耳に飛び込んできた。目隠しをされていたため良く分からなかったが、先ほど所長が出て行った扉から入ってきた者は、里中の足音に間違いのないような気がする。足音はゆっくりと自分の前に近づいてきた。

「済みませんが、頭の被りを取ってもらえませんか」

副看守長は鬼頭の頭に被せてある布袋を取った。目の前にいるのはやはり里中だった。里中はポケットから白いハンカチを取り出し、鬼頭の顔を拭いた。

「・・・・・・・・」

鬼頭は何かを伝えようと試みたが、言葉が音になって出てこない。

「どうしました。ゆっくりでいいですよ」

目の前の里中が神々しく感じられた。他人の目がこれほど温かく感じられたのは、初めてのよ

に対して自分の行った過ちを、後悔したことがないと言いつづけてきたが、最後にこれだけは言っておかなければ後悔するような気がした。

「神父さん。今初めて自分の犯してきた過ちに気がつきました。何で急にこのような気持ちになったのか分かりませんが、本当に被害者の方には申し訳ないと思っています。自分の命があと少しでこの世から消えてなくなると思った瞬間、突然理由も分からず殺されていく人たちの無念が、理解できたような気がしたのです。今まで自分以外のものは、そこら辺にいるゴキブリや蠅のように、踏み潰しても一向に構わないと考えていました。本当は自分自身が虫けらなのに。どんな残酷な惨い殺しかたをしても、何も感じませんでした。それは自分が殺す側であって、決して殺される側にはならなかったからです。ですから他人に対して、痛みというものを持ち合わせていなかったのだと思います。ところが先ほど看守の人に投げられ、床に頭を強く打ちつけられ、久しぶりに身体の痛みを思い出しました。あれは確か小学校三年生のとき、理不尽な理由で父に思い切り殴られました。そのときの痛みと悔しさを、投げられたことで今やっと思い出したのです。痛くて悔しかったこと、それを自分は今まで他人に対して、何の躊躇いも感じずやってきたことは、人として恥ずべき行為なのだと急に感じるようになったのです。神父さんに出会えたことを心から感謝しています。神父さん母に伝えて下さい。母さんには今まで辛い思いをさせてしまって、本当に申し訳ないと反省しています。この世で犯した罪を、あの世で償ってきますと。お願いします」

どんな人の命も尊い。それを分かるまで何十年という月日を要した。鬼頭の瞳から止めどもなく涙が溢れ出ている。

「分かりました。必ずお伝えします。貴方が最後になって、このような気持ちになってくれて、私は本当に嬉しいです。私はこの日が来ることをずっと信じていました」

里中はとても優しい眼差しを投げかけ、鬼頭の頭を優しく撫でた。

「貴方ともこれでお別れですね。しかしこれで貴方の人生が終わったわけではありません。天におられる私たちの父よ、御名が聖とされますように。御国が来ますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行なわれますように。私たちの日ごとのパンを、今日もお与えください。私たちの罪をお赦してください。私たちも人を赦します。私たちを誘惑に陥らせず、悪からお救いください。アーメン」

里中は目の前で十字をきって神に祈りを捧げた。

身体が中心が痛かった。こんな経験は初めてだった。今までの自分はいったい何だったのだろう。目の前にいる里中がまったく違う人物に見えた。穴があいたら入りたい。エデンの園でアダムとイブが善悪を知る木の実を食べたときのように、自分の姿を人前に晒しているのが恥ずかしかった。自分の行ってきたことが、反社会的な行為だったことはよく分かっている。自分に殺される女は、殺されて当然なのだと考えていた。自傷行為でもしない限り、他人の痛みを自分の痛みとして感じることはできない。映画やドラマの中の拷問シーンを好んで見たが、自分が女を殺害しているときも、映画の中に自分がいるような錯覚があり、相手に痛みがあることをまったく意識していなかった。

神々しい里中の顔を直視することができない。鬼頭は目を瞑り、頭を下げた。里中も頭を軽く

下げると、今来た扉からゆっくりと出て行った。

副看守長は再び鬼頭の頭に布袋を被せようとした。

「主任袋は被せないで下さい。色々にご迷惑をお掛けしました。申し訳ありません」

鬼頭は大きく頭を下げると、自ら踏み板の方に歩いて行こうとしたが、足の自由が利かず自ら歩くことはできなかった。看守に引き摺られるように鬼頭は前に進んだ。

「お願いします」そう言うと鬼頭は踏み板の上に立ち、ロープに首が掛かりやすいように顎を前に突き出した。主任と呼ばれた副看守長が、天井から滑車を伝わりぶら下がった絞首刑ロープを鬼頭の首に掛け、首が抜けないようにしっかりと閉めた。鬼頭の両腕を支えていた看守二人が、顎を引き目で確認しあうと、副看守長が床板の抜ける動作スイッチ前にいる三人の看守に手で合図した。副看守長の腕が上から下へ降りるのを確認したスイッチ前の看守は、三人同時にスイッチを強く押した。ドカンという大きな音とともに、鬼頭の乗った床板が抜け、鬼頭の身体がその穴に吸い込まれるように落ちていく。滑車から伝わるロープの軋む音とともに、鬼頭の身体がコマのようにぐるぐると回った。

ほんの一瞬痛さと苦しさを感じたが、あとは何かひどく懐かしい思い出が、脳内を駆け巡っていく。途轍もなく深い穴に落ちていくような感覚が暫く続いた。遠退いていく意識とともに、懐かしい母の胎内にでも戻ったような心地よい感覚になっていった。

2

その日里中は昼食の後、執務室で来信の整理をしていると、執務机の上にある電話が突然鳴りだした。電話の内容は関東拘置所からのもので、明朝鬼頭正志の死刑執行が行なわれるという知らせだった。やっと少しずつ鬼頭の心が氷解しかけていた矢先のことだった。

このまま死刑が執行されてしまえば、胡桃沢との約束が果たせなくなってしまう。それよりも自分自身がこのままでは納得できない。あの日初めて鬼頭に会った日から、今日まで明らかに心の変化がみられた。それもいい方向に。それは決して自惚れなんかではない。もう少しだけ時間があればと思わずにいられなかった。

鬼頭に最後に会ったのは、今から丁度一週間前である。十日に一回のペースで宗教教誨を実施していた。その日鬼頭は殺生について質問してきた。

「神父さんは、ゴキブリや蠅などを殺したことがありますか？」

このときも鬼頭の真意はまったく分からなかったが、偽りなく真実を述べた。

「ありますよ」

それに対して鬼頭は意外なことを口にした。

「命あるものを殺生してはいけないのではないですか？」

自分は何人もの罪もない人を殺しておきながら、なぜこのようなことを質問してくるのか。いつも鬼頭は人を食ったような質問をしてくる。

「本来殺生は仏教の十悪の一つで、無益な殺生はしてはならないという教えがあるのです。神父の中にも無駄な殺生はしないという方もおられるようですが、しかし現実には沢山のバラの木が植えられていますが、それらに虫が湧いた場合、私は迷わずそれらを駆除します。肉はあまり食べませんが、魚は大好きでよく食べます。仏教のことは詳しくありませんが、人に限らず生物は生きていく上で、他の生物を犠牲にしなければならないこともあるでしょう」

そのときの鬼頭は、既に私の揚げ足を取ることはなかった。

「神父さんも子供のころ食べたと思いますが、俺が子供の頃給食でよく鯨の肉が出たんです。俺はこの肉が大好きでした。家が貧しかったこともあり、豚肉は食べたことはあるのですが、牛肉は殆ど口にすることがなかったんです。だから給食に出る鯨の肉は楽しみの一つだったんですよ。それがアメリカのせいで鯨が食べられなくなった。可哀相だという理由で。お隣の国には犬料理だってあるっていうじゃないですか。俺から言わせれば、鯨が可哀相なら牛や豚だって同じように可哀相だと思うのですが」

このとき鬼頭は私に何を伝えたかったのだろう。

「以前貴方と最初に面会したとき、子供の頃私が神父様から聞かされたカマキリと蟬の話をしましたね。理不尽な言い方をすれば、牛や豚は人間に食べられるために生まれてきたところがあります。しかし鯨にしても、魚にしても、この世に生を享けたとき、まさか人間に食べられるとは思っていなかったでしょう。生き物にはそれぞれ運命というものがあると思うのです。魚にしても牛や豚にしても、それを食べなくても私たちは生きていけます。しかしイヌイットの人たち

のように、野菜などが手に入らない場所では、肉を食べなければ死んでしまいます。動物には気の毒ですが、それらの犠牲があつて私たちは生きていけるのです。捕鯨を反対するのは絶滅の危機を回避することと、以前アメリカなどは油をとるだけで食用にはしていなかったからです」

鯨やイルカなどの海洋哺乳類は知能が高いため、アメリカ人は特に人間の友人のように感じている。

「神父さん俺実は食べては……」

そこまで言い掛けて鬼頭は言葉を飲み込んだ。そのとき私は目の前にいる男が、今までにない重大なことを私に告白したかったのではないかと感じた。しかしその後鬼頭は話を逸らし、まったく違うことを喋り始めた。

これは私の推測に過ぎないのだが {食べてはならないものを食べてしまった。それは人……} と言いたかったのではないか。本当にそんなことがあるのだろうか。私はあまりの恐ろしさに、その後のことを鬼頭に追及することができなかった。心のどこかで、話を逸らしてくれたことに、ホットしている自分がそこにいた。

高校時代胡桃沢が私に話した（トーテムとタブー）が頭を過ったが、そのことを私は無理矢理頭から排除した。

その後鬼頭が話した内容を、私はまったく覚えていない。私は教会に帰ると直ぐ主に懺悔した。これが鬼頭に会った最後である。あのとき鬼頭は私に何を告白しようとしたのか。私は神父として大きな間違いを犯したような罪悪感を引きずり、今日という日に向かえた。

当日朝早く目が覚めると主に祈りを捧げ、軽い朝食を摂ると、中央線に乗り中野に向かった。その間胡桃沢に何て説明すればいいのか、そればかり考えていた。七時前にも拘らず電車の中は、通勤や通学の人たちでごった返している。中野駅を降り二十分ほど歩くと、目的の関東拘置所に着いた。タイル張りの建物は、行刑施設の高い塀が無いので、どこから見ても拘置所には見えない。おそらくこの表門を潜るのも、今日で最後になるだろう。表門担当の看守に内線で指導課に連絡を取ってもらおうと、二分足らずで指導統括の宮尾が表門まで迎えに来てくれた。そのまま二階にある所長室に通されると、所長は執務机に座り何かの書類に目を通していているところだった。里中の入室に気がつくや、所長は立ち上がり部屋の入り口まで歩み寄ってきた。

「今日は朝早くからありがとうございます。鬼頭の執行は何も問題がなければ、九時半ごろには執行できると思います。どうぞ」

里中は所長に勧められたソファにゆっくりと腰を下ろした。宮尾と所長も里中の向かいに座ると、宮尾が今日の執行の流れを詳しく説明した。途中女性の職員がお茶を持ってきた。里中は初めての経験ということもあり、緊張のあまり出されたお茶を一気に喉に流し込んだ。一通り説明を受けた後、来客用の応接室に移り宮尾と世間話をした。宮尾の話ではこれから検事がみえるので、所長はその対応で大変なのだそうだ。応接室で暫く雑談した後、死刑執行場前にある教誨室へ向かった。教誨室で宮尾と二人鬼頭を待っていると、教誨室の内線電話が鳴った。宮尾は受話器を取るとみるみる顔が蒼ざめていった。

「鬼頭が警備隊員に金属片みたいな物で切りつけたそうです」

宮尾は受話器を持ったまま放心状態だった。最後の最後で里中は絶望的な思いに陥った。

「職員の怪我の具合はどうなのですか？」

里中は鬼頭のことにも気にはなつたが、怪我をさせられた相手のことがもつと気になった。何で彼はまたこの期に及んで罪を重ねなければならないのか。今まで鬼頭と会ってきたことは何だったのか。私の気持ちは一切鬼頭に伝わらなかったのか。所詮あの男には心というものが無いのかもしれない。

「刺された警備隊員は出血が酷く、医務室に運ばれ緊急手術を行うそうです」

里中はこの施設には常時医者がいて、手術室も完備されていると以前説明を受けたことを思い出した。

「里中先生鬼頭はここには来ないと思います。刑場待機室へ移りましょう」

里中は来るか来ないかは分からないが、取り敢えずここで待ちたいと申し出ると、宮尾から今日のような状態では、最後のお祈りをするのは無理だと説得され、渋々刑場待機室へ移ることにした。刑場待機室は前面がガラス張りになっていて、水族館でペンギンでも見るような造りになっている。前面ガラスの向こうに鬼頭が吊るされることを考えると、ここにいること事態とても辛いことに感じた。狭い室内には既に沢山の人が椅子に座り、前面のガラスをじっと睨んでいる。里中が空いている場所に座ると、何人もの床を踏む足音が里中の耳に飛び込んできた。その足音が頭上で止まり暫くすると所長が沈痛な顔で入ってきた。里中が聖書に手を置き、祈りを捧げていると、内線電話が狭い室内にけたたましく鳴り響いた。官服を着た男が受話器を取り耳に当てている。

「里中先生、鬼頭が先生に会いたいと言っています」

このとき里中は一つの希望の光が、自分の前に照らされたように感じた。先ほど所長が入って来たドアから里中は急いで出て行った。刑場に上がるとそこは、今まで感じたことのない空気の重さが部屋全体を支配していた。鬼頭は頭から白い布を被され、そこに呆然と立ち尽くしている。付き添いの看守に被りを取ってもらおうと、血だらけになった顔がそこにあった。ハンカチを出し、顔を拭いてあげたが返り血は落ちなかった。

鬼頭の口から出た言葉は驚くべき内容だった。鬼頭からこの反省の言葉を聞くまで、何年掛かっただろう。思い出が走馬灯のように頭を過った。やっとここまで来たのか。

憎しみはどこから来てどこへ行くのだろう。汝敵を愛しなさい。胡桃沢の行為は主の教えそのものだった。この今の状況を胡桃沢に見せてあげたかった。最後の最後に私の一つの大きな目標が達成された。

(主よ。私は今日ほどあなたに感謝したいと思つたことはありません。私は中学のときに信仰の道に進み、今日まであなたを信じてきました。ときにはあなたを疑つたこともあります。しかし私は今日改めて信仰の素晴らしさを実感することができました)

今日は何て素晴らしい日なのだろう。最初胡桃沢にこの話を持ってこられたとき、正直気が重かった。それが最初鬼頭に面会したとき、自分の先入観がいかに間違いだったかと思ひ知らされる。何回か鬼頭と面会を重ねるうちに、自分の中に思いもよらない新たな気持ちが芽生えていった。鬼頭は最後になって人として神の下へ召された。一つの大きな仕事を成し遂げた達成感がそこにはあった。

暫くして身体の痛みと寒さで目が覚めた。気がつくところかの洞窟の前で倒れていた。いったいここはどこなのだろう。自分は何でこんなところにいるのだろう。自分の考えが纏まるまでかなりの時間を要した。自分は確かに死刑になったはずだ。とするとここはあの世ということになる。自分のしてきたことを考えると、ここは地獄なのだろうか。鬼頭はキャラクターの着ぐるみに袖を通すように、自分の四肢に神経を這わせゆっくりと起き上がった。

倒れていた場所は洞窟の入り口で、上半身は洞窟の中に入っていたが、下半身は洞窟の外にはみ出し、薄っすらと雪が積もっていた。起き上がると身体の雪を振り落とし、自分の着ていたスキーウェアを見て愕然とした。それは昔弟の忠志を雪山に置き去りにしたとき、着ていたスキーウェアだった。そんなことがあり得るだろうか。自分の身体を手で触ってみた。それは四十歳を過ぎた大人の身体ではなく小学生、子供の身体だった。今ある自分の思考では考えもつかない不思議な出来事が起きている。今までのことは夢だったのか。いやそんなことはない。頭の中に三十年の記憶がはつきり残っている。ではいったい今の自分は何なのだ。

自分の想像を遥かに超えた出来事が、今ここで起きていることは間違いないが、それを素直に受け入れるにはまだ少々時間が必要だった。神様、自分は今こそ神様に縋りたいと思ったことはない。もし人生をやり直しできるのなら、自分は人のために役に立つ人間に必ずなる。そう思った途端今までの記憶が少しずつ薄らいでいくような気がした。

そうだこうしてはいられない。弟の忠志を助けなければ。遥か昔の記憶を引きずり出し、鬼頭は今自分が来たかもしれない道を引き返して行った。吹雪の中、雪に足を取られ時折躓き倒れたりしながら、忠志と逸れたと思われる場所を必死になって探した。そのときは何で自分がここにいるのかということより、忠志を助けたいという思いのほうがより強かった。

「忠志。忠志どこにいるんだ？」どのくらい探しただろうか、息が切れ切れになりぐったりと雪の上に膝をつき、頭を力なく落とすと、何かが目を掠めた。自分の十メートルくらい先にある木の根元の雪が不自然に盛り上がっている。鬼頭は立ち上がりその場所まで走った。そして全身で雪を掻き分けると、そこには忠志がうつ伏せに倒れていた。鬼頭は忠志を抱き上げ、頬を軽く叩いたが、忠志は何の反応も示さなかった。

「忠志お願いだ。目を覚ましてくれ。兄ちゃんを許してくれ」

鬼頭は大声で叫んだが、それでも忠志は何の反応も示さなかった。その間雪は益々強く降り、あっという間に忠志の顔を覆ってしまう。でもまだ諦めない。鬼頭は忠志を背負うと、もう一度洞窟に向かい歩き出した。背中には確かに生命ある人間の重みが伝わってくる。やっとの思いで洞窟に辿り着くと洞窟の奥に入り、忠志の着ていた服をすべて脱がせ自らも裸になった。そして小さな忠志の身体を包み込むように抱きしめた。忠志の身体にはまだ人の温もりがあった。

「忠志起きてくれ。神様俺の命をやるから忠志を助けてくれ」

過去の記憶が薄らいでいく中で、ふと考えを巡らせた。今まで自分は神に縋ったことがあっただろうか。その気持ちが自分自身不思議でならなかった。

鬼頭は必死で何かに訴えた。それは神なのか、それ以外の何かなのか、自分でも分からない。

ただ忠志を死なせたくない思いを誰でもいい、分かってほしかった。

それは奇跡に違いない。神様が忠志を救ってくれたのか、鬼頭の願いを叶えてくれたのか、鬼頭の目の前で忠志の瞼が開いた。

「お兄ちゃん寒いよ。お腹空いた」

「忠志！」

鬼頭はぼろぼろと涙を流しながら泣いた。忠志に自分の着ていたスキーウェアを着せてあげた。スキーウェアの裏地はまったくといっていいほど濡れていなかったが、忠志の着ていた服はちゃんちゃんこから下着まですべて湿っていた。自分も先ほど脱いだ下着と毛糸の股引を穿きセーターを着た。

鬼頭はふと思い出し、予め石垣の隙間に隠してあるはずの缶詰を探したが、それはどこにも見当たらなかった。このときまで忠志を救うことだけを考えていたのだが、洞窟で倒れていたときから、それほど時間が経っていないにも拘らず、色々な記憶が所々欠落しているように感じた。缶詰を探し終わったときには、自分が極悪人であったことすら記憶になかった。確かここに缶詰を隠したはずなのに、何でないのだろう。何かが少しずつ変化している。

「お兄ちゃん、お腹減った」

鬼頭は我が儘な弟の言葉でふっと思い出した。確か家を出るときポケットにチョコレートを入れたはずだ。忠志に着せたスキーウェアのポケットに手を突っ込むと、そこには板チョコがあった。

「忠志これを食べろ」そう言うとチョコレートを忠志に渡した。「ありがとう」忠志はそれを受け取り、それを半分に折って、半分を鬼頭に差し出した。「お兄ちゃん半分」我が儘だと思っていた弟が思わず差し出した優しさに胸が痛かった。

「俺は腹が減っていない。お前が全部食べろ」

その言葉を発した途端、何か途轍もない眠気に襲われた。全身の力が抜けその場にゆっくりと倒れた。

4

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、朝だよ」

凄く遠くから聞こえる忠志の声で目が覚めた。忠志は鬼頭のスキーウェアを着て、自分はセーターに股引という格好だった。どうしてこのような格好をしているのかよく分からなかった。何でここにいるのかどうしても思い出せない。微かに忠志を裸で抱いて暖めた記憶があるが、後のことはまったく覚えていなかった。

鬼頭の身体も心もすべて昔に戻っていた。今までの出来事が現実にあったことなのか、夢だったのか、それすら考えることができなくなっていた。洞窟の中まで日差しが差し込み眩しかった。鬼頭は忠志を連れ洞窟の外に出た。昨日までの吹雪が嘘のように、今日は青空が広がり、雪に日差しが反射してキラキラ輝いている。

「お兄ちゃん、姨捨山が見えるよ。この前先生が姨捨山の話をしてくれたんだ。自分を産んでくれたお母さんを山に捨てに行けなんて、何て酷い殿様なんだろう。僕は殺されたって母ちゃんを

山に捨てになんて行かないよ。だって母ちゃん大好きだもん」

そう言った忠志の目はとても澄んだ綺麗な目をしていて、鬼頭がその目を見詰める「兄ちゃんも同じくらい好きだよ」と忠志が少々照れながら言った。

忠志は目を丸くし満面の笑みを浮かべている。まるで天使みたいな笑顔だ。

眼前には更埴の町が広がっている。市の中心に千曲川が流れ、向かいには真白に雪化粧をした姨捨山が聳えている。以前この場所でまったく同じ光景を見たような気がするが、気のせいだろうか。空には鷲がゆっくりと旋回しながら、西の山へ飛んでいくのが見えた。

「忠志、神様っていると思うか？」

「うん。いると思う」

「何でそう思う？」

「僕は昨日雪の中で、神様に会ったような気がするんだ。何か凄く温かいものに包まれたような感じがした。何か母ちゃんみたいで気持ちよかった。兄ちゃんは神様っていると思う？」

鬼頭はほんの少し考えた後口を開いた。

「神様は絶対いるよ。僕たちが助かったのは神様の御陰なんだ」

「そうだね兄ちゃん」

神様は絶対いると思う。なぜなら僕がここにいるのは、きっと神様の御陰なのだ。何でか分からないがそんな感じがした。

「忠志、兄ちゃんの背中に乗れ。山を下りるぞ」

「兄ちゃん、そんな格好で寒くない」

「心配するな。家に帰ったら母ちゃんに、温かいお風呂入れてもらおう」

鬼頭の背中には挽げかけたコウモリのような黒い翼が生えていた。一方忠志の背中には小さな純白の翼が生え朝日を浴び輝いていた。

(了)

〈参考文献〉イエスの生涯 遠藤周作（新潮文庫）

フロイトを読む 解釈学試論 久米博訳（新曜社）

フロイトとユング 上山安敏著（岩波書店）

人はなぜ憎むのか ラッシュ・w・ドーリア Jr 桃井緑美子訳（河出書房新社）

手塚治虫の漫画

井上陽水 限りない欲望

ホームページ「永井俊哉ドットコム」

<http://www.nagaitosiya.com/totem-und-tobu.html>

